

直木賞受賞作

第2回(昭和10年下半年)受賞

吉野朝太平記

鷺尾雨工

第二卷 昭和10年11月・春秋社刊、松柏館発売

底本

昭和33年4月25日 東都書房刊『吉野朝太平記 第二巻』第一刷

入力日

平成19年4月12日

入力責任

Webサイト「直木賞のすべて」

URL <http://homepage1.nifty.com/naokiaward/>

Email pelebo@nifty.com

目次

洛西小倉山	2	山峡の秋に馬肥やしつゝ	65
六条河原から清涼寺へ	6	当月当日	73
無体な返報がえし	11	田楽異変	79
穴生へ御動座	21	ある日の正儀	87
吉野炎上	29	尊氏の新邸囲まるゝこと	92
擬勢擬装	38	直義入道 南朝へ降る	99
音無川畔の逆襲	43	師直の心理	107
さみだれ雲	49	殺意暗剣	115
聞き合わんとする姿勢	58	驕威の末路、鷺林寺門前	122

らくせいおぐらやま
洛西小倉山

—

「小倉山峰のもみぢ葉心あらば今ひとたびの御幸またなん」と、貞信公が詠じた。「小倉山麓の寺の入相にあらぬ音ながらまがふ雁がね」とよんだのは俊成だし、「小倉山麓の里に木の葉散れば梢にはるゝ月をみるかな」と、歌ったのは西行法師だ。

その小倉山であった。

中腹の厭離庵の、ぼろぼろに朽ちた縁に、紅雀のような格好に押し並んで、べちやべちや喋舌っているのは、一条堀川の足利直冬邸の侍女もだつた。

老女の枳殻は、渋茶をすゝつて、さも渋そうに顔をしかめたが、

「おゝ美味し！」

と、つぶやいた。

尼が、

「濃すぎましたか？」

と、きくと、庭に立っていた舜髓が、おお声に笑つて、老女枳殻へ、

「疲れのなおる妙薬じゃ。元気を出して、てっぺんまで登ろうではござらぬか」

と、去つた。枳殻は、あわてたように手をふつた。

「もうもう結構！ 腰が板みたいでございます」

「ほう、見かけによらぬ弱いお腰じゃの」

「まあ、厭らし！ 山坂は馴れませぬものを——」

「はゝゝ山というほどの山でもござらぬに、たいそうらしい。敷妙ど

のさえ、おのぼりじゃ」

「おほゝゝ敷妙さまこそ、お達者でいらつしやいます。なにぶん

にも、館さまのお躰が、おきびしゅうございますよ！」

「ほい、これは御挨拶だのう」

珍らしく和やかな天気で、うららかな空からそゞく陽光には、まるで桜花でもふくらみそうな温みがあった。一昨日までのひどい寒さをおもうと、まったく無気味なほどの激変だったが、それだけに遊山日和としては申分なかつた。

「でも、これから上の方に、何かあるのでございますか？」

「時雨亭という、こわれかけた亭が一つあるきりでござるが、そこもやはり定家卿の別荘跡で、眺めのよろしいことは、お話しがお辞儀をいたす」

「でも、餘寒もすぎぬきのう今日では、花が咲いておるではなし、紅葉が色づいておるでもなし。風流心のない私どもが参つたとて——のうそなたたち」

と、老女は、腰元どもを顧みた。

「ほんにさようでございますなあ」

と、一人が答えると、もう一人が、

「定家卿なら、さきほどお墓へおまいりいたしましたゆえ、またの御別荘の跡とやらまでは、拝まざともでございます。のう千鳥どの」

「そうともそうとも。早苗どのの申すとおりでございます。それにさつき承わつたところでは、この厭離庵とやらもやつぱり、昔は定家卿の御別荘で、小倉百人一首は、こゝで撰まれたということとでございますもの、私どもはもう、こゝだけで堪能いたしました」

と、一人が云つた。舜髓が、

「はゝゝ揃つてお尻の重いことじゃ」

と、笑つて、

「そんなら精々どつちりと、お腰をすえて、待つてござれ。たゞし縁

板だけは、ゆがめないようにの」

「いっになく下がかりの冗口をきいて、庭から出て行つた。」

庵の尼が、

「お気朗らかな御僧じゃ」

と、つぶやいた。

「お部屋様の兄御でございませう」

と、老女が云った。

「いずれの所化でおわすかのう？」

「天竜寺の僧でございませう。舜髓と申されますが、若い器量よしの手代をつれて、お部屋様と御一緒に登ってゆかれましたのが、堺の大商人で、唐土屋伽羅作という方で、あれも、お部屋様の兄御でございませう」

「そんなら御兄弟三人が、お睦まじく旧跡めぐりの御遊山、というわけじゃ、結構なことでございませうの」

「きょうは朝から方々のお寺めぐり、お墓めぐりで、よい加減のところまでは、物珍らしくも思いましたけれど、足のひらに豆が出来ますとお供は辛うございませう。でもまあ久方ぶりで、のんびりとすがすがしい気持ちになりました。去年の秋から急に世の中が物騒になり、戦ははじまるし矢たら無しように火事があり、空ではお星さまが諍いなさるかして、今にも京へ敵の軍勢が攻めのぼって、市中が焼野の原にもなりそうな話ばかり——毎日おびえておりましたが、ありがたいことには四条繩手とやらで、楠どの御兄弟が戦死なされて、味方は大勝利——もうもうなんの心配もなく、枕を高く睡れるとのこと、ほとと安堵のおもいをいたしましたのが一昨日でございませう。こうして物見遊山に出かけてまいるなど、ほんに夢のようでございませうぞや」

庵の尼は、うなずきながら聞いていたが、

「戦さは、厭わしい厭わしい！」

と、独り語らした。そして、

「楠の御二代目も——討死なされた！」

味気なげに、そう呟やいて眼をとじた。

「南無阿弥陀仏」

山頂に近い時雨亭へむかつて、舜髓は登っていった。

「露霜の小倉の里に家居してほさでも袖の朽ちぬべきかな」「忍ばれん物とはなしに小倉山軒端の松に馴れて久しき」と、定家卿の詠んだ歌を、口ずさみながら登って行った。古井戸、柳の水は、その昔、歌の聖の定家卿が筆硯のために汲んだ井戸の址で、またの名を硯の水とも呼ばれていた。舜髓はその井戸をひとめぐりして、それから一度、下の厭離庵の方をながめてから、小径を、竹林の茂みへ入った。やがて竹がつきると、老松の巨きな幹がわだかまった。小倉山は、隠掠山とも書かれたくらい、樹木が、奥暗いまで生え茂っていた。落葉する木々が梢をむきだしている冬ながら、亭の四辺はかなり濃い陰影になっていた。

「兄者——」

と、声大きく舜髓が呼んだ。

風や雨に曝れ荒らびた亭のなかから、唐土屋伽羅作が現われた。そして、

「どうじゃ——紅葉のない紅葉山も、わるくはないのう」

と、云いながら手招きした。

舜髓は、近づいて、

「いかゞ？」

訊ねると、眉根を寄せて、

「難かしい！」

と、伽羅作が答えた。

三

舜髓と、その兄の伽羅作とは、六本杉の怪異の作者だった。怪異を作りだした立作者はむろん虎夜叉正義だが、それをたすけて、なくて

は叶わぬ助をつとめた脇作者は、この兄弟であった。

大塔宮のおん崇りが、仁和寺の六本杉の上に、天狗評議をひらかせ、御外戚峯の僧正の霊が、副將軍直義の北の方の腹から男子となつて産まれ出るし、一方では忠円僧正が高師直、師泰に、また知教上人は上杉、畠山にのりうつて乱をおこすことになった、という作爲は、むしろ作者の予期以上にも反響をもたらして、その凶々しい木魂が京都を、まっさおに震撼させたのであつた。

で、いま、この兄弟は、なにか第二の怪異でも作ろうとしているのだろうか？

きのうの夕がた、唐土屋伽羅作は、鱸太郎と呼ばれる年若な手代をつれて、反橋の直冬邸に現われた。四条畷合戦の大勝利を、祝うために、しこたま祝儀物をととのえて伺候したという形だつた。

屋敷の家老、横溝平馬は、

「堺から、お早々と、それはそれは！」

重たそうな金銀づつみを、進物台に見つけるがいなや、眼尻の皺に相好をくずしたが、じきにわざわざ洪面をこしらえて、

「狒々館の大將が、あので、かいお鼻を、どんなに高々と、太々と、うごめかしたり、脹らましたりされるかと思つと、癩で、癩で、我慢ならん！ えつ我慢がならん！ めでたくも、嬉しくもないつ！」

「ひつひつ！」

いち早く笑いだしたのは、丹那市之進で、

「我慢がならんなら、泣くなり喚くなり、遊ばせだ」

例によつて酒氣満々。

「なにを！」

「えひつ六条河原で、さらし首のお通夜でもなさるかな？」

「おのれ、また喰らつておる！」

「御念にや及ぶ。あなたは不芽出度くも、こなたは芽出度いのだ。こう、平馬殿つ！ 勝つたからこそ御勝手な熱も吹けようが、これが敗けて

御覧じろ、今ごろは、跳ねても吠えても追いつかん」

「馬鹿を申せ。五万の兵が負けてたまるか」

「馬鹿をおっしゃい。相手は楠だ。その首とれば師直様々——正行どの、首を持つて、明日は一人凱旋なさるといふ。足利万歳、高万歳——われ等も万歳、酒も万歳——内輪喧嘩は中休み、万歳薬ウだ、オヤハオヤ！ ヨイとこ、どっこい、オヤはおや！」

と、手拍子、足拍子で踊りだしたので平馬はあつけにとられたし、侍たちはどつと笑いはやした。で、夜は、直冬から許しが出て、遠侍では、唐土屋持参の祝儀樽の鏡をぬいた。いかに師直は憎くとも、めでたいことに偽はなかつたから、にぎやかな戦勝祝い。舜髓も天竜寺からやって来て、夜がふけたので、伽羅作と一緒に屋敷に泊まつた。そして今朝は、伽羅作が、洛外の旧跡めぐりをしたいと云い出して、案内役は舜髓。

お部屋の数妙も、二人の兄と共に、出かけることになった。都の西の郊外は初めてだといふし、特別な上天気でもあつたし、そこに何らの不自然さはなかつたのであつた。

四

定家卿山荘の遺蹟、時雨亭の中では、数妙が、悲しそうにすゝり泣いていた。

そばに、唐土屋の手代が、きりりと締まった凛々しい美貌を、さも困つたらしく曇らせながら腕ぐみをしていた。

いくたび建て直されたものか解らぬが、その都度、小さく、粗末になつて、今は雨露の洩るにまかせた蕞爾たる無住の小舎だつた。木目の曝れ高まつた板の間に、けばけばしい唐衣の袖をはわせて、数妙は、二人の兄が入つてきても、突つぶした顔をもたげずにいた。伽羅作と舜髓は、手代の鱸太郎よりも下座にすわつた。こんな破れ小舎で、下座も上座もないようなものだが、しかし訝しなことは、それだけでは

なく、舜髓が、

「困りましたのう、お身さまが手をお焼きのようでは——」

と、云つたし、主人である唐土屋までが、

ともかくも、いま一度、あなたから、因果をふくめて頂きたい」

と、頭をさげた。

これでは明らかに、手代艦太郎などというのは、人を偽る仮の名であることがわかる。

「いや、二度でも三度でも申す」

「どうぞ納得の参りますように——」

と、伽羅作の頭が、ふたゝび下がった。

「敷妙どのゝ頭が、縦に動くまでは、いくたびでも申そう」

そのとき、敷妙が、涙にぬらした艶やかな顔をあげて、

「梶丸どの——」

と、呼んだ。

梶丸！ 唐土屋の手代に変装して、京都へ入り込んだのは、虎夜叉

正儀の股肱の近賢、尾鷲梶丸だったのである。

だが——いふならば神出鬼没！

ほとんど端睨を許さぬ行動だ。

なぜかなら、正行戦死の詳報が、東条の城にとゞいた六日の朝、

和泉槇尾山なる興良親王と准后親房卿のもとへ、その悲しむべき報

らせを運んで、もはや危急のせまった吉野の行宮を遷し奉らんがため

に、さながら疾風のごとく駒をやる虎夜叉に扈從して、自分も馬を走

らせた梶丸だったし、虎夜叉が槇尾城の客殿で、親房卿と語っている間、

入側の外の廊にうずくまっていたのも、梶丸だったのである。

それが、翌くる七日の夕がたには、堺の唐土屋と共に、その手代艦

太郎として、足利直冬の堀川邸にあらわれたのだ。そして——

梶丸は、今、

「御得心か？」

と、敷妙の顔を見返した。

「いゝえ」

首は、横に振られた。

「いゝえ、では済まぬ。済みますまい！」

「でも——」

「でも——厭と、いわるゝか？」

「わたしの身に叶うことならば——」

「叶うことだ。ぴったりと適うことでもござるぞ！」

「まあ！ ぴったりと適うなどと——そりや酷、梶丸どの！ あんまりでございます」

「いやいや、酷いことや出来ぬことを、ついぞ一度もおつしやつた

めしない殿でござる」

わきから舜髓が、

「のう敷妙。覚悟のほぞを固めに固めて、直冬の愛妾になつておる身

ではないか！」

と、言葉を添えた。

と、言葉を添えた。

五

敷妙は、うらみ侘ぶるといふ目つきで、

「もうそれだけで精いっぱいじゃ！」

と、舜髓へ、投げ返すように云つた。だが舜髓も、すぐに応じた。

「なんのなんの！ 忠義のために操をすて、朝敵の寵女になつてか

ら、すでに一年半もすぎた。おのが淫らからというではなし、それが

大きなお役に立つならば、この上にも肉体を汚したとて、五十歩、百

歩じゃ」

伽羅作が、手をうって、

「そうだ！ 五十歩、百歩だ」

梶丸も、

「確かに！」

そう云った時、敷妙は、金糸銀糸のまばゆいような浮線綾の胸を、白い手でおさえつゝ、きつとなつて、

「梶丸どの、女心を知らぬ。兵法武芸はお達者でも、まだ恋知らずの若衆では、遣瀬ないわたしの悩みが、どうまあ汲めよう！ 東条の殿のお言葉とあれば、出来まするかぎりは、なんでもとやこう申しませう。二つを二つとも叶いませぬとは、お答えいたしませぬぞえ。一つの方は——正行の殿のお首の方は——いかようにも働くつもりでありますし、まあこの方ならば、どうやら成就のめども見えますけれど、も一つの方は——そりや御難題でございます、御無理でございます」と、そう云いきると梶丸は、

「敷妙どの！」

鋭い声音で、

「御難題とは、なに事ぞつ！」

と、叫んだ。

舜髓は、起ちあがつて、亭の外へ出た。見張るためだった。伽羅作もまた、外に気をくぼりながら、だが、妹の面持ちを、はげしく眺めた。

梶丸は、一層するどく、

「おん身にも似合わぬ返辞を、よくも聞かせた！ ああさようか、然らばで——この梶丸が立ち戻つて、復命できると思わるゝか？ 弱年ながら殿のお見立こうむつて、お使者にまいったそれがしでございます！」

「もし！ 死ねとおっしゃるなら、飲んで死にもいたしませうが、こればかりは御難題——」

「えゝつ殿の御苦衷が、おん身に解せぬとは情けない。一身一家のかりそめな、喜憂利害のみにかゝわるなら、いやもよかろう、叶わぬでもよい。恋の辛さに負けようと、女心を立てようと、そりや何とでも御勝手なれど、ことがらは恐れおゝくも吉野なる、朝廷の御安泰か否

かの岐れ路にもかゝわる！ き、なにが無理か？ なにが無体か？」

「おゝ！」

と、敷妙は苦しげに呻いた。

梶丸も、こゝ懸命のせつない汗を、じつとり額ににじませながら、「おん兄上お二人と、二千の将兵を失つても、なお自若として立たせらるゝ我が殿の、世にも悲壮なお心を——これき、敷妙どの、おん身は——おん身は——」

声がるえ、言葉が出詰まると、たちまち涙が、はらはらと濡れ落ちた。「なんと感じるのだ？ 感じないのか？」

と、たゞみかけられて、敷妙は、こらえきれずに、わっと泣き倒れた。伽羅作も、鼻をつまらせて云った。

「一天万乗の、大君のおん為めじや、忍んでくれ！」

六条河原から清涼寺へ

—

「押すな、押すな、あ痛、たゝ、つゝ足も、足も——足も体のうちだあ！」

「あゝ痛いっ！ 痛いというたら、踏まんどいてくれ！」

「あぶない、つぶれるつぶれる！」

「あれもう、小さいのが居るわいなあ！」

「痛いよう！」

「細少いのをつれて来るのが間違いだ、失せろ失せろ！」

「あゝ苦し！ 去のうにも動けぬわいのう！」

「こう、頭が高い、あたまが邪魔だぞう！」

「ちゞまれちゞまれ！」

「造りつけたい！」

「烏帽子をぬげやい！」

「頭巾をとれっ！」

「押すなど申すに、反吐が出るぞお！」

「き、き、穢ねえ奴だ、やりきれん、逃げ退けえ！」

群集は、老若男女をこきませて、広い河原を狭くしていた。

「首は、どこだ？ おれには見えんがな」

「そりや見えぬはずでござんす、また首は、一つも来ておらぬわいな」

「おう、待たせるではないか？ いやに勿体をつけずとも、見せるものなら早ようみせてくれい！」

「あれま、聞こえるぞえ。お侍衆が、こちら睨んでるわいの」

「勿体ぶるわけじゃよ、楠さま御兄弟のお首じゃ。我りや昔からの

ことを知つとるが、新田左中将さまのお首がこゝで晒された時など

も、小半日待たされたぞや。重みからいうたら、こりや、それよりか

重いお首じゃ。お取んなされた師直さまのお手柄は、とんでもなく素

晴らしいわけだが、吉野の宮方は、なんぼうお力落しであろうぞ。楠

さまも、御二代つゞいて討死なされるとは、よくよく御運のお悪いこ

とじゃ。正行の殿も、父御様にも劣らぬお傑い方だという噂だったが

のう。崇り目に逢いぐせがついては叶わん。そこへいくほかないよう

なことばかりする。人間というものは訝しなものじゃわ。運の神様に

一度かばわれたとなると、なかなか容易なことでは墮ち目が来ないて。

我りやこの目で見たことだが、ちょうどこの辺で戦があつた。そなた

達は頑是のうて、覚えもあるまいけれど、その時は、將軍さまのお命

が危なかつた。それから湊川では、副將軍さまが、命拾いを遊ばしたし、

こんどは今度で師直さまが、ほんのもう少しで娑婆とお別れになると

ころだったという。でも、いずれも様が、お首にはおなんなさらんわい」

六条河原は、もう人で埋まつた。

だが、長講堂の御影堂のわきから、東へ走ってゆく者が、踵で膝を

蹴られたし、七条烏丸の辻などは、動きのとれぬくらい雑沓したし、

川東では五条坂どおりも、八坂の塔から建仁寺どおりも、今熊野から

三十三間堂の通りも、みんな河原へ河原へといそぐ民衆で褥めき立つ

ていた。

「源秀どのゝ首は、どんなに凄いだらう？」

「首になつても、喰いついた本宮太郎左衛門の喉から離れなかつたそ

うじゃ」

「その本宮とかいう士は、睨まれた眼こわきに、狂い死に死んだとい

うぞよ！」

二

河原へ運ばれてきた首の数は、五十ほどだった。

四条畷、茶ノ木堤、野々宮の森、佐良々、野崎の原頭から、京都へ

送られた首はおびたゞしい数であつたが、それが皆な曝されるわけ

はなかつた。五十級は、名ある将士の首級だけ——。

でも、ずらりと並んだ梟首台は、まだその上に生首が架けられては

いないにも拘わらず、物々しく陰惨に眺められた。台に平行して、竹

矢来がいわれ、台の上には、かなり大きな木の札が、立て並べられた。

木札には、楠正行之首、楠正時之首、和田高家之首、和田源秀之首と

いうように、首の数だけ書かれてあつた。

きのうの温かさは何処へ行つたか、空は、どんより曇つて、一月九

日の午前の陽は、ほんの微かに賀茂川の水に、砂に、礫に、そして

五条橋から七条橋の間の河原にぎつしりつまつた群集のうえに洩れた。

つめたい風が、だんだん強まつて来た。首は、やはりそれぞれ名札の

ついた首桶に入つていて、防腐剤も塗られてあつたし、まだ寒中でも

あつたから、それほどひどく腐敗してはいなかつた。けれども蓋をと

つてみると、さすがにむつと——屍臭が、はげしく鼻をつんざいた。

郎従の一人が、正行の首を桶から、とり出そうとした時——

ちやうど河原院の築地のあたりで、

「わーあつ！」

と、群集がわめき声をはりあげた。五条橋の西袂の観衆も、それに呼応でもするように、どっとおめいた。役人の士はじめ、首桶の蓋をとつた郎従どもは、一度にあつと驚ろいて、河原院の方をながめた。

「待てえ——待てえ！」

声もろともに、騎馬の士が、一騎、二騎、三騎——。

徒歩の郎従が、馬側を走りつゝ——

市民の群れが、二つに割れると、まっすぐに河原へ乗り下りた先頭の士が、

「やめい、やめい、梟首の儀は無用なるぞう！」

と、大きく、高く喚わつた。

「わーあつ！」

無数の観衆が、どよめき立つた。

「やあやあ無用とは奇怪千万——かくいう榎村儀左衛門、奉行いたす梟首を、とめだてなすは何者だつ！」

「おう我こそは、足利宮内大輔家の家老、横溝平馬矩近なり。無用々々、堅く無用ぞ！」

「ちえゝ烏漕がまし、直冬家の臣に、なんの権限これあつて、いらざる妨げいたすのか、返辞によつては容赦はせぬぞつ！」

「やあ口幅広し儀左衛門、敵とはいい条、南山の名将、楠どのお首を、兇賊とえらばぬ取扱いはもつてのほかだ！」

「わーあつ！」

群集は、雷のように鳴りわめいた。おゝかたは歓呼の声だつた。

建武中興の業、破れてこゝに十三年、京は、足利の膝元ではあつたが、しかしな楠の令名は、ふかく市民の脳裡に刻まれていたのであつた。

「だまれ横溝つ、楠は、持明院の帝にたいし奉つては逆賊じゃ。朝敵の首を曝すがもつての外か？ 天下の執事師直殿の命により、この榎

村が奉行ぞ。退れ、退れ、退られい！」

三

榎村儀左衛門は、威たけだかに呶鳴つたが、横溝平馬はからからと笑つた。

「片腹痛い！ 退れとは何んだ？」

そう云いざまに、馬からひらりと降りた時、榎村はつかつかと進みよつて、

「退れとは去せろということだ。わざと馬から下りたのは、刀の錆になりたいたい気か？」

柄を握つて睨みつけると、

「白痴々々、都の飯を食みながら、平馬の剣を知らぬのか？」

「なにををつ？」

「はゝゝお手前の御朋輩、熊髭みたいな評判倒れの剣とは剣がちがう」

ふだんは、だらしないほど物柔らかな平馬だったが、腕には自信があるだけに、いざとなつたら強かつた。

「おのれ、武州様の御威光も怖れずに！ それ各々つ！」

ばらばらつと配下が、平馬をお取り籠めようとすると、すでに下馬して郎従を集合させていた平馬の部下も、負けるものかという意気込みで走り出た。だが、

「待て、逸まるなつ！」

と、平馬が制して、榎村へ、

「さあ尋常に、楠どのお首をこなたへ渡さばよし、いやとあらば目に物見しようぞ。大御所下御所両公の、お指図によつて参つた拙者を、直冬家の使者と侮らば、後悔ほぞを噛むとも及ぶまい。さあ如何に如何に？」

と、喚わつた。

「なに、御両公のお指図だど？ え、偽りを申すな、申すな！ 榎村は、騙られはせんぞ。下御所のみならいざ知らず、わが殿の御執行を將軍家がお支え遊ばすわけがない。ちえ面倒だ——者どもかゝれつ！」

儀左衛門が、そう叫んだ時だった、ふたゝび群集が大波のように動揺して馬をとばせて馳せつけた饗庭命鶴丸と、その従者とが河原へ現われた。

命鶴丸は、將軍尊氏秘蔵の近習だったから、群集は、

「命鶴どのう！」

「命鶴どのう！」

と、叫んだ。

儀左衛門は、ぎくりとした。尊氏の命令をもちたらしめたことを、疑う餘地がなかったからである。命鶴丸は、足利譜代の重臣である饗庭家にうまれて、幼いころから並ずぐれて剛巧だったので、尊氏は自分の側近く侍らせてその非凡を愛した。政治をすて、軍事を顧みなくなつて、ほとんど総ての侍臣を遠ざけてしまった尊氏にとつては、唯一の近侍はこの命鶴であった。まるで形に影がともなうように、尊氏のおるところには必ず命鶴がいた。命鶴の顔色によつて、およそ尊氏の気持ちが見わかつたし、命鶴の行動から判断すれば、たいがいは尊氏の意志が見つもれた。浮世と断つたかのように日は送つても、尊氏は將軍源氏の長者に相違ないのだから、二十歳にも達しない命鶴ながら、年齢不相応な、そして身分にはるか過ぎた権柄がおのずと附くことになつた。で、その命鶴丸に出現されては榎村儀左衛門も、

(駄目だ！)

と、思ったが、たまらなく業が煮えた。

(「たい誰れが命鶴なんぞを、引つ張り出したのだ？」)

將軍の寵豎は、馬からおりた。

またも市民が、歓呼の声をあげた。

四

一条今出川の師直館では、朝から戦勝を祝う宴がひらかれていた。

宏壮な宸殿には、堂上公卿や朝臣たちが招かれて、善美をつくした饗応に、今や、うちくつろいでいた。うたがいがもなく、これは前例のない催しだったろう。なぜかという、昇殿はゆるされていてもやつと四位の一武臣にすぎない師直の招宴に、やんごとなき雲上びとが列席したのだから、けだし未曾有だ。師直の驕慢と、押しの大さは、この一事でも充分想像されようが、しかも師直は、会釈と挨拶をすますが否や、さつさと宸殿から対の屋へ引つ込んでしまった。

「葱の枯れつ葉みるような、公家どもの、相手が勤まるか」

ほんの我まゝからだった。宸殿では、窮屈で、酒もうまくないからだった。いかに磊落、無作法でも、衣冠束帯の堂上人を前に飾つては、そうそうは行儀も乱せない。当人は平気でも、先方が困る。わざわざ招んでおいて、迷惑な想いをさせては、饗応の趣旨にもとる。むしろ座をはずす方が、自他ともに助かる。と、勝手な理窟をつけて、東対に引き上げたのだ。そして、

「五郎、そなたは葱の枯れつ葉の血筋だ。宸殿へ出て、わしの代理せい」

と、云つた。

愛子、武蔵五郎丸師夏は、早熟な顔を微笑ませて、

「畏まりました。だが父上、葱の枯れつ葉はお酷うございます」

そばから、師夏の母二条御前が、

「実にものう！」

と、みやびやかに額をひそめた。

(どうも品ばかりよくて、年増になつても肝腎な味わいが出てこぬわい)

師直はそう思って、その物足りなさの償いを探すような眼つきで、下座に侍っている七八人もの側女たちを、ひとわたり見廻したが、ち

えっ——舌打ちして、

(咲き損ねたり、臺が立ったり——)

どこかに、ぞつとするほどの美女はいないものか、と考えた。

宸殿では、上座から十人目くらいに、文章博士、日野行氏がいた。

「築山は、宇都の峠をかたどり、泉水は難波の葦を移したという、この林泉の結構さは、洛中でも随一でござりませうな」

隣席の宰相中将忠季が、うなずいた。

「將軍も、副將軍も、あつてないような形でござりますのう」

「まことに。十万の大軍に総帥して、南方討伐の偉功をあぐれば、名はこれ無くとも、内実は立派な征夷大將軍でござりますゆえ、幕府はひつきよう師直殿の幕府じゃわ」

「楠左衛門督の首うちとられしは——」

と、宰相中将は声を低めて、

「いわば女警討ちじゃ。——再度の出馬で吉野へ攻入り、弁内侍を、こたびこそ奪いとりうおつもりかも知れませぬぞ」

と、さゝやいた。日野三位が、

「かも知れませぬな」

と、鸚鵡返して、にやりとしつゝ、

「鹿路平で、矢板將監が斬られたと聞きました折は、この行氏、実を申せば、生きてある空もないかに思われましたが、さいわい格別の崇りものうて——」

そう云いかけた時、武蔵五郎丸が父に代わつて宸殿に現われた。

五

樫村儀左衛門は、重ねて言い直した。

「は。正行殿のお首のみならず、正時殿のお首以下四十九級、ことごとく奪われましてござります」

「馬鹿っ！」

師直は、酒杯を叩きつけるように、高坏において、

「奪われた奪われたと、ぬけぬけと、五十級の首のすべてを、な、何者に奪られたと申すのだ？」

豪胆無双な高執事も、あまりにも意外な報告に、愕然となつていら

だつた。

「は。宮内大輔直冬さま御家老。横溝平馬どのに——」

儀左衛門は、とつづくに観念をきめていたから、自棄落着きにおちつ

いて答えた。

「なに、横溝平馬に——」

頭脳も活潑な師直には、たちまち事件の輪廓だけは、ほど推測でき

た。と、同時に、直冬への憤怒が、猛然と爆發した。

「おのれ小童、どうするか見ろ！」

そう叫んだが、すぐ声を、ぐいとふだん並みに落として、

「儀左。肋骨は二三本足りなそうでも、平馬は武芸の達人だということ

とだな？」

「さようでござりまする」

「痴者め。無抵抗で奪わたのかと訊いておるのじゃ」

「殿。——直冬様のうしろ楯、下御所は、それがしとてあえて懼れませぬ。もし、下御所の御要求ゆえその首渡せとあらば、不肖儀左めも、刀の目釘の折れるまで——いゝえ先日の源秀もどきに、相手の喉に喰らいついても鬨つたでござりませうが、——殿。——大御所さまの御許から命鶴どのが、馳せ参られましてはもはや詮なしとあきら

め、たゞ尋常に、相渡しましてござりまする」

「命鶴に刃向うは、大御所への敵対と考えてか——？」

「それがしも殿の御指令を仰ぐだけの猶予は乞いましたなれど、命鶴どのはいつかな容さず——また一つには、なまじ際どいはずみに殿のお耳にいらば、かえつて將軍家との御関係において、おん為め悪しかりなんとも存じましたゆえ、かく申す儀左めが腹を一つ、切つて事を

済ますにしかずと——」

「待て。悪い覚悟だ。腹切るとは、無用だ。断じて、罷りならぬぞ」
師直はまず、かたく制してから、

「首を、湊川の合戦後になろうて、河内へ送り返そうためか——直冬は？」

と、訊した

「いえ、洛西小倉山のふもとの、清涼寺に葬るためとござりました。かしこの住職、堯算老師は、楠どのが幼少時代に師と頼まれた河内観心寺の、滝覚坊と深交があつたとやら——その因縁による、と申すことで——」

と、儀左衛門が答えた。

「さようか。だが、送ろうと葬ろうと、わしの鼻を、したゝかに明かしたことに変わりはない。儀左、そちが腹など切つて見い、わしの負い目がかさむだけじゃ」

「殿——」

「よい。案ずるなよ。——杯を取らそう」

「はあ」

切腹の覚悟であつただけに、嬉し涙がこぼれた。

師直は、空間をぎゅうつと睨んで、

「直冬め、まともから楯つくとは、身のほど忘れた夏の虫、火焰の熱さを思い知らそうぞ」

そう云つたかとおもうと直ぐ、につこりと無気味に相形をくずした。

儀左衛門が、杯を返そうとした。

「榎村、近う」

「はあ」

「耳をかせ」

師直はなにごとかを榎村儀左にさゝやいた。儀左は、がぜんと眼をまるくしながら、

「えっ？ おう！ は」

驚いたりうなずいたりして、聞き終わった。

「どうじゃ？」

「御妙案！」

「むふふふ」

「して、時日と御手段とは？」

「それはまだ、決めてはおらん。だが——うふふふ」

物騒な、残虐性をおびた笑いが、濃い髭のしたの厚ぼったい唇から、こゝろよげに洩れるのだった。

無体な返報がえし

—

「押せて来そうかつ？」

と、士が叫んだ。

その懸念を打消すように手をふりつゝ、物見が馳せもどつて来た。

「繰り出すような、模様は見えぬか？」

「心配なしっ！」

村雲の反橋だもとの直冬邸には、上杉、畠山両家の兵が集まっていた。

三条坊門の下御所からも、武装した郎党が来ていた。今にも戦がはじ

まりそうな門前の景色だった。

そんなふうには警戒を厳重にして、師直屋敷からの来襲にそなえさせたのは、副將軍直義だった。反師直派の巨頭である上杉重能と畠山直宗は、みずからこの館まで出かけて来るほど形勢を、よいならずと考えた。だが、事件の発頭人ともいふべき直冬だけは、最初から、

しごく樂觀気分で、一向にあわてるような様子がないばかりか、青い顔をしてわいわい騒がれてははなはだ迷惑だと感じたし、そう口に出して言いもした。直冬は、清涼寺へ送る首にさえ、さほどたくさんな護衛は不要だと思つた。むろん、その護衛に武装させる心組などはなかつたのだが、そんなことで叔父の副將軍と諍うにも及ぶまいと考へて、その言う通りになつたまでだ。

横溝平馬をはじめ重立つた家来はたいい、清涼寺へ行つたので、丹那市之進が、門前の警戒兵と屋敷の内部を連絡する役目だつた。

「物見っ！ 彼邸にしても、ちいっとやそつとの兵ぐらひは、出入りしておるだらう？」

「ところが、妙でござる。変でござる。たゞ、お公家方のお供衆だけが、あそこの門から顔を出して、あんまり市巷の人間どもが騒ぐので、眼をきよるきよる、何だ、何だと、たずねておるような始末で——どうにも勝手が違ひ申すぞ」

「おかしいな。青侍衆が、何だ何だときくようでは——堂上方はまだ彼邸で召上がつてると見える。はての。追手が、嵯峨野へ裏門からでも押し出しはしなかつたか？」

「いえいえ、どの門からも、追手らしい者はたゞの一人も——」

「出なかつた、とするといさゝか拍子ぬけだ。ちえ張合ひのないことだ！」

怖じ気封じに茶碗酒を、がぶがぶ煽つた後の市之進は、鼻息が猛しかった。

午後になつても、物見の報告は、依然——師直屋敷に異状なし。

殿上人への饗宴はおわつたが、邸内の酒もりは、いよいよ酣というのであつた。

やがて、横溝平馬が清涼寺から、とどこおりなく埋葬をすまして帰つて来た。

「寺の西門から西、一町ばかりの丘の上に、正行殿のお首を葬り、導

師はすなわち堯算上人——衆僧の誹経もおごそかでござりました。正時殿のお首は、やゝ離れし場所に、それから和田殿以下の首級は、その丘の裾の、竹林のなかに、これまた懇ろに埋めまして、ただいま帰着——」

と、平馬が復命した。

それこれするうちに、暮れやすい曇り空が、ついに、ざあーと雨をおとしながら暮れて行つた。

もはやどう考えても、今出川の高邸から楠の首を、取戻しに来る心配はなかつたので、上杉、畠山の警戒兵は、雨に濡れつゝ暗い街路を、彼等の屋敷へと引き揚げた。

重能と、直宗とは、

「いゝ気味でござる。横道ものも、音が出なかつた。わはゝゝゝ！」

笑いながら、反橋の直冬邸を辞した。

その夜、愛妾敷妙は、

「殿——。ふと思いついたまゝ申し上げたことが因で、今日はとんだお人さわがせをいたしたような、形に相成りまして、まことに心ぐるしゅうございましたぞえ」

と、云つた。

直冬が、かぶりをふつた。

「なんの！ 理由もなく騒いだのだ。わしは昨夜、そなたに言われたので、はつと気づいた。その点、恩に着なければならんのじや。天下の名将、楠正成の、嫡男にしてかつ南山武臣の今の棟梁を、そのお首を、獄門にかけては後世末代のものわらいになりはせぬかと、そなたが言うてくれなかつたなら、今朝のような手順には、おそらく運べなかつたであらう。われながら恥かしい話だが、師直にくしの怨念から、あぶなく倫常の礼節を誤るところだつた。それというのも去年の暮、師直が河内へ出陣する折の、傍若無人を憤るあまりに、実は昨日の凱旋なぞは、まったく他所ごととしか思われず、なんとでも勝手にしろと

いう気持ばかりが、先に立つたでの。——敷妙、お蔭であつたぞよ」

「あれ、そのように仰しやつていたゞいては——」

「いや本当に、ありがたかつた。父上尊氏の讃めお言葉を、わしは生れて初めて貰うことが出来たのだ。——人の子として、これが喜ばずにおられようか！ わしは、不幸で生みの母と一緒に住むことを、妨げられた。この直冬は、親の慈愛に饑えていたのだ。——敷妙。わしは、嬉しいぞ！」

「殿——。そのお喜びはお道理でございませう！」

「だが、喜びは、それだけでない。それ、そのように美しいばかりか、賢しきは男まさりのそなたを——こうして、いとむことが出来るといふ嬉しさ！ この嬉しさは天地陰陽の理にかのうて、ほとんど何物にもかえがたいような熱烈さを持つ。のう敷妙——」

やわらかな肩に、直冬の手がおかれた。

のぞきこむと、うるわしい双眸が、泪の露でうるんでいた。

「直冬は、そなたなしには、生きてゆけぬ！」

「——まあ、勿体のうございませう！」

「あゝなんとという可愛い声だろう！ そなたを得てから、わしの人生観は変わったのだ。——敷妙！ 敷妙！」

「わたくしは、幸福者でございませう！」

たちまち啜り泣きが、直冬の耳へは、微妙な音楽のように聞えてきた。

「おゝ嬉し泣きに、泣いてくれるか！」

それは陶酔の声音であつた。

雨の夜は、やゝ更けて、奥まつた閨には、銀燭がしずかにまたゝいた。

二

敷妙が、直冬の腕にいだかれつゝ流した泪は、そもいかなる泪ぞ？

彼女は都の西郊、小倉山の時雨亭で、楠虎夜又正儀の密旨をもたらして何ごとかを強いた梶丸にむかつて泣きながら答えたことには、死

ぬよりもはるかに辛いとあつた。兄の伽羅作および舞髓から、かけまくもあやに畏き大君のおん為めに、苦肉のはかりごとをめぐらす虎夜又の殿のお言いつけにそむく気か、と詰られもしたし、また、忍びかねるでもあるうが忍んでくれ、と諄々、説きすかされもした彼女だつた。自分はしあわせものだと思つた言葉が、うたがいのもなく真つ赤ないつわりなら、流した泪はたゞたぶらかしの空涙であつたらうか？

敷妙は、もちろん、たばかるために直冬に身をまかせている女だつた。虎夜又の密計に参画したごく少数な人間のひとりなのだ。虎夜又は、彼女の美貌と才智とを利用して、かねての計画をいまや実行にうつそうとしていたのであつたし、敷妙もまた、心も身も捧げきつた虎夜又のためならば、たといどんなことであろうと厭わぬ——かならず仕遂げよう、と覚悟をきめたその決心のかたさには、たしかに婦女の感情を超越したものがあつた。けれども、木石でない彼女にとつては、それが死ぬるよりも辛いことであるかぎり、やはり悲しまずにはいらなかつた。

泪は、悲しみに堪えかねた涙——彼女自身の痛ましさを歎く涙であつた。

だが、敷妙としては不覚の泪に、かえつて彼女の予期しなかつた効果ともなつた。と、いうのは、この夜くらい彼女をいとしいと感じたことは、これまでの直冬の愛の経験にかつて一度もなかつたからだ。直冬の、彼女への愛情は、いわば沸騰点に達した。熱愛はまさしく煮えたち、たぎつたのである。

その翌くる日——

きのうの雲は、夜の間に、空から綺麗にぬぐわれて、うらゝかな陽が、紺碧に春めかしい柔か味をそえさせて輝く晴れやかさは、一昨日にもまさる日和だつた。

「お帰館の時刻は——？」

と、たずねる敷妙へ、直冬は、

「たぶん夕景に相成ろう」

そう答えると、

「あの——わたくしは、今日もう一日、お暇をいたゞいて、兄たちと一緒に出かけたいと存じまするが——」

やゝ言いにくそうに云うので、直冬は微笑した。

「幾日でも出かけるがいい。きょうはどの方面の見物かの？ 八瀬、大原から寂光院——鞍馬山へでも登るか。それとも叡山か？」

「見残してまいりました天竜寺から、高雄、梅尾をまわりまして、帰りがけに上賀茂の社へお詣りいたしたいなどと、堺の兄は申しております」

「あゝさようか。そんなら叡山の方面は、明日がよかろう。唐土屋も、こんどはゆっくりと逗留して、存分に観てゆくことじや。伏見稻荷、醍醐の三宝院、宇治の平等院というように、廻ればずいぶんと名所も多いぞよ。すこしも遠慮はいらぬからと、そなたからそう申せ」

「お有難うございしまする」
敷妙は、三条坊門の副將軍邸へゆく直冬を送りだすと、すぐ供仕度

をさせた。
前々日、仁和寺、妙心寺、つれづれ草の雙びの岡から、大覚寺、清涼寺、二尊院、小倉山とまわった時とまったく同様な一行の顔ぶれだった。敷妙は、肩輿に乗った。艦太郎の梶丸をつれた態の伽羅作と、舜髓とは、輿のまえに立った。老女の枳殻と、千鳥、早苗などの腰元どもが輿側を歩いた。

附近の市民が、目ざとく見つけて、

「あれあれ、反橋屋形のお側室が、また今日も何処ぞへお出かけじや」「ほんまにな。えろうお器量よしだという評判だが、わしはついぞまだその美しいお顔を見たことがない。あの簾をあげんかいの」

「わしも見たことはないけれど、弁財天か、吉祥天女の、生まれ変わ

りみたいだというぞ」
「なんでも、噂によると、直冬さまが野方図もないお逆上ようで、朝昼晩のけじめなしに、のべたらにお傍へくつつけてお置きになるから、なんぼなんでも、あれではどうも見てはおれぬほどだし、側の迷惑はともかくも、御本人様のお為めにもお躰にも、よくはあるまいということだが、寿命なんぞは縮まっても大事な、かまわんと、そうおっしゃるので手のつけようがない」

「見てきたようなことを云うの」

「本当のことだもの、気もめるではないか」

「ふ。よけいな苦労だ。此方とらの知ったことかい！」

などと、話し合う者もあつた。

輿は、一条通りの街路を、西へ進んで行った。

ちようどその時、どこの郎従か三人ほど、なにか至急な用でもあるのだから、後方から駆けてきて、輿のわきを走りすぎた。そして今出川の方へ疾走して行ったが、やがて高師直邸の表の唐門前まで達しると、いっさんにその門内へと駆け込むのだった。

と、門内の広場に、牀几をすえて掛けていた櫻村儀左衛門が、

「やあ——どんな動静じや」

そう喚わると、いま馳せ戻った郎従の一人が、

「は。あんまりな誂えむきで、ちと気味が悪いほどの気味合いでござりますぞ」

と、答えた。

「なに、気味が悪いほどの気味だと？」

「は。目ざす妙じるしが、むこうから出かけて参りました」

「え？」

思わず叫んで、儀左衛門は突っ立って、

「そ、それは真か？」

「正真正銘、もうすぐそこを通りまする」

「ほう、そりや又なんという思う壺だ！ 天の助けかな。だが——な

「かの間違いではないか？ 人違いではないか」

「どう仕りまして」

「たしかか？」

「擬いなし」

「うまずぎて、眉唾だぞよ」

「樫村どの。それほどお疑りなら、御自分で街路へ出て御覧なされ

——論より証拠じゃ！」

「これこれふくれつ面はよせ。むこうの屋敷へ乱入ということにでもなつて見い、五人十人の斬り死ぐらいますものか。命冥加と考えたら、念を入れても損は立つまい」

「儀左衛門どの、もう参りまするぞ！」

「一体どこへ行くのだ？」

「どこへ行こうと、そんな事よりか、供は小人数でござる。さあ、お支度なされませ」

「合点だ。——それ、者ども！」

「樫村儀左衛門は、広場にたむろしていた三四十名の郎従へ、声をかけた。

三

郎従はみんな武装していた。

儀左衛門みずからも、小具足を着けていた。ふだん着は、偵察から戻った三名だけだ。

「はい、坊主と町人で。輿舁のほかは女ばかりでござります」

「なかなか暇どるの」

「もう見える時分で——」

「いずれへか曲りはせぬか？ 見て参れ」

物見の三名が、唐門の口へ走り出た。

「どうじゃ、参るか？」

「お築地のはずれで、どう致したことやら、とまっております」

「なに、とまっておる？ 訝しいな」

儀左衛門と、士が二人、門口へ出て行つた。

師直邸の築地わきまで来たとき、だしぬけに輿のなかから、悲鳴に

似た叫びごえがきこえたので、輿舁の若党らは驚ろいて足をとめた

し、老女の枳殻は、顔いろをかえて、簾へ走りよつたし、伽羅作も舜

髓も臙太郎も、愕然となつたさまで、輿へくびすを返しつゝ、敷妙の

名を呼んだ。けれども答えはたゞ、くるしそうな呻きの声のみだった。

老女は、簾から首を突っ込んで、

「もし、どうなされました、もし……」

と、たずねたが、

「苦しい……た、た、た、あゝ痛い……」

鳩落をおさえてもがき喘いでいる敷妙の顔は、まるで蒼い顔料で染

めたかのように真つ青であった。そのものすごい青さに、老女枳殻の

心は顛倒した。おしつづつた眼尻が、きりきりつと釣りあがり、口が、

への字にゆがみ、朱唇がぶるぶる痙攣して、歯がみの音が軋るのだった。

枳殻は、わななく声で、

「も、も、もろころし屋どの……舜髓どのっ！」

と、喚いた。伽羅作が、

「敷妙、敷妙どのっ！」

老女を押し退けるようにして、内部をのぞくと、

「葉……葉……」

「おゝ、どこぞ……痛みは、痛みは？」

「こゝ……こゝ……」

敷妙は、さながら二つの拳でえぐるように、胃の腑のあたりと、下腹を圧していた。

伽羅作の肩ごしに顔をさし出した舜髓が、

「なにかの中毒ではござらぬか？ それとも癩かな？」

と、云ったとき、ふたゝび烈しい呻吟と痙攣とが起った。そして急病人は、しきりに薬、薬、と呼びつゞけた。

「困ったのう！」

「困りましたなあ！ 薬というても——」

「日ごろはしごくお達者ゆえ、御持薬などの用意はなし——」

と、いう老女へ、舜髓が、

「生憎と、この近くにお医者の家はなし。お屋敷へ人を走らしても、ひまどるし——これはまた何という悪い場所じや、高殿館の側でござるわい！」

「でもこうなつては気ざらいや、選り好みなど出来ませぬ。どれ、わたくしが一走り……」

高であるが、鬼であるが、かまうものか！ 医者と薬！ 薬と医者！

そう思いつゝ駆けだす枳殻のあとから、伽羅作と臙太郎がつゞいて、師直邸の表門めがけて走つて行つた。

「ほい。どこまで都合よく出来ておるのだ！」

そう呟やいたのは、唐門の下で、ようすを眺めていた榎村儀左衛門だった。

四

「もし、お救下下さいませ。急病人でござりまする」

枳殻が、あえぎながら叫ぶと、

「癩の発作やら、食へ中毒やら、お築地ぎわでにわか発病——まことに難渋いたします。恐縮ながらお屋敷の、御典薬さまに、お菓の御調合ねがわれますれば、この上もない仕合わせにござりまするが——」

と、伽羅作が云つた。

「それはそれは。いずれのお方かは存せぬが、さぞお困りであろう。

路はたでは、お医者の手当もとよくまい。見らるゝとおり広やかなる当屋敷のことゆえ、いざ御遠慮のう——輿を早く、手おくれに相成らぬよう、いそいで昇き込まれよ」

「まあ御親切さまに！」

老女は、儀左衛門へ会釈した。

「では、伽羅作どの」

唐土屋はうなずいて、

「臙太郎。お輿をこれへ」

と、云つた。

臙太郎はすぐ輿の方へ走つた。

輿が、門内へ昇きこまれた。

「遠慮は御無用」

急病人は、輿のまゝ遠侍へ運ばれた。附添つて入つたのは、老女と唐土屋主徒だけで、ほかはみな、広い上框の下の土間で待たされた。しばらくたつと、伽羅作と臙太郎とがなから戻つてきた。

「いかゞ？」

訊いたのは、舜髓だった。

「仰々しいほど御丁寧じや」

そう伽羅作が答えると、

「いや、御容態が気にかゝる」

「御容態か。ずいぶん、重いということだぞ。そしてどうやら此方の御身分が知れておるらしいぞよ」

「お顔見知りの者が、ござつたという訳かの？」

「いずれその辺じやろう」

臙太郎が、わきから、

「枳殻どのさえ、お傍へは行けないほどに輿まつたお部屋での、御療治らしいござりまする」

と、いった。その眼が舜髓の眼とあつて、うなずきかわした。

やがて邸内が、だんだんに騒めきだして、廊下には走りつゝ行き来る足音がやかましく、庭や空地へ、なにか運ぶような気配がしたり、せわしげに喚わりあう声がかきこえたりした。

伽羅作は、艦太郎の耳へ、

「何事でござろう？」

と、さゝやいた。ちようどそのとき、邸の正面広場で、

ぼうーつ。

法螺貝がひびいた。

「出陣——」

と、艦太郎がさゝやきかえした。

「はて——？」

伽羅作の瞳が、疑問を投げると、

「いや——」

艦太郎の瞳は、その疑問をうち消して、当然の出陣であろうことを暗示した。法螺貝は三度鳴った。舜髓が、

「艦太郎。——！」

と、呼んだ。

「河内へ、再度の御出馬では、ござりませぬかな」

と、艦太郎は、物ごとがごく順調な、満足すべき状態で進行していることを、告げるような表情で答えた。でも舜髓は、まだまだ安堵するには早すぎる、といったような面持ちで、首をかしげながら、

「それで——な——それならばよいがのう」

そう呟いたとき、老女の枳殻が、廊下から遠侍へ戻ってきた。青い顔で、

「唐土屋どの」

不安そうな声であった。

「どうした訳やら、おそばへ通してくれませぬぞや。しいて頼めば、劍もほろゝの挨拶じゃ」

五

夜がふけてゆくにつれて、直冬の心のいらだちは募るばかり——。

「平馬つ、まだか市之進は？」

「は。まだ戻りませぬ」

「どこを探しておるのだ？」

「は。たゞ北の郊外とばかり——無我夢中で駆け巡っておることゝ思われます」

「西の方へも、もう一度、人をやってくれ」

「参っております」

日が暮れても、敷妙が戻らなかったのだ。遊山の一行が、だれ一人、帰って来なかったのだ。市之進ほか騎馬が数名、郎従が十五六人で天童寺から高雄、梅尾、上賀茂の方面をあらこちら探してはみたものゝ、行方は皆目わからなかった。それらしい一行の姿を、眼にとめた者さえが、いなかった。市之進は、そこで搜索を洛北へむけた、というこただけが判っているのみだった。西の郊外でなければ北の郊外かとも思われたが、大原の寂光院あたりに夜更けまでうろついておる筈がないと、そう考えて来れば、安からぬ心の陰影は、だんだんと色が濃くなり増さるだけであった。

「平馬——」

「殿——」

「たゞごとではないの」

「たゞごとではござりませぬな」

家臣郎従は、捜査のためにほとんど出はらったので、屋形うちにはひっそりしていた、その静けさがなんとなく颯風の子兆をはらむ不穏な寂莫のようにも感じられた。たゞごとでないことだけは明らかでも、さてどうしたのかさっぱり見当がつかなかった。明敏な直冬ではあるが、いとしくて堪らぬ敷妙の失踪だけに、氣持の惑乱が冷静な考えか

たを、ひどく妨げるのだった。とてもじつとしてはいられなかったから、屋形中を歩き廻った。そして僅かばかり居残った人たちへ、いつになく自制の失われた音声でどなった、かと思ふと、一つところに放心したように佇んだりした。時間はずんずん経過して、やがて夜半も丑三つへかゝった。方々を探しめぐんだ家来たちが、ぼつぼつ帰つて来た。いちばん望みを繋いでいた市之進もむなしく戻った。で、もはや、明朝をまつて探しなおす外なかった。誰れも彼れも頭をひねるきりで、摩訶不思議な神かくしに逢つたようなものだ、などと、云うぐらゐが関の山だった。

「皆が、御苦勞であつたぞ。とにかく、一睡りいたせ」

直冬は、それでも家来をいたわる言葉は忘れなかった。

自分も、気を落ちつけて、夜の明けけるまでは眠もうと思つた。けれども、睡れるどころか物の一刻も臥褥にはおれなかった。

(空聞！)

敷妙なき聞は、たえがたかつたのである。

初めて彼女を愛した一昨年のおとしのかた、たゞの一夜といえども孤独では過ぎなかつた直冬であつた。むろん、かりそめの不在なら、淋しくて物足りない程度にすぎまいが、これは一体なんとした事か？ そう考えると、いたゞまれなかつたのだ。

(師直！)

居間の茵にすわつたとき、直冬がそう心のなかで叫んだのは、ふとある考えが閃めいたからだつた。それは、丹那市之進が去年の夏ごろ、横溝平馬に告げた話からの連想であつた。

「莫迦な！」

舌打ちをして呟きながらも、いまの訝しな連想を、吟味してみずにはいられなかつた。

市之進の話というのは——「いわゆる狒々館の白羽の矢番いが、こんどはこのお屋敷の、敷妙さまへ向けられている」と、平馬に語つた

ことだ。市之進の乳兄妹が、如月という名で、師直邸に住み込んで、わし者の役目をつとめていたために知れた情報だつた。吉野の弁内侍をうばい損ねた業腹いせを、とんでもない場所へ持ちこむのだと、その市之進が告げたのは、ちようど六本杉の怪異のあつた日だったので、平馬もよほどあとになつてやつと想い出したくらい気にも留めていなかったのであるが、ある時、なにかの序でに直冬の耳に入れた。——それが今、ゆくりなくいやな連想を産むことになつたわけだ。しかし、考えてみると、いかに狂暴な師直でも、まさか敷妙を強奪も出来まいに！ と、直冬は、自分のあられもない想像の痴愚を嘲もうとした。

「馬鹿っ！」

ふたゞび自嘲の呟きが洩れたのである。

六

(おれは今日——いや、もう昨日だ——午後、三条坊門の叔父の邸で師直が、河内の戦線へ再出馬したことを聞いた。麾下の兵に出陣をうながす法螺の音も、かすかに聞えたし、今出川を發したその行軍の模様は、叔父の家来や上杉の郎党がみてもどつたのだ。南伐八万の軍を統帥するために京を發つた師直と、敷妙の行方とを、結びつけることは、なんとしても不合理だ。敷妙の輿は朝のうちに洛内を西へはなれた。師直とその麾下は、午すぎでから南へ下つた。だから途上で相會うことさえがあり得ない)

直冬はそんなふう考えた。

だが、また師直が戦地へ、女を輿にのせてつれて行つたという、下御所の一家臣のはなしが意識の表にぼつりと泛びだした。

「ちえゝ！」

払いのけようとしたが、あべこべに執拗く絡みついてくる。

(もしその輿の女が、敷妙なら——？ その女が敷妙であるためには——？)

彼女が奪われたとしたなら、唐土屋と舜髓とはどうなったであろう？
侍女どもは？

直冬は、師直の屋敷に如月のいることを思った。もし異変が起つたとすれば、市之進へなんらかのしらせがあるはずだった。すると悲観の材料も、かなり薄弱ではあつた。しかし敷妙の失踪は厳然たる事実だった。

悶々と、直冬は夜をあかした。そして今日は搜索隊を、叡山方面と、伏見、宇治の方面へ出すことにした。家人が大かた出かけてしまった後は、昨夜同様、邸内は森閑とわびしく憂色につままれた。念のため洛中へも人を出したが、戻ってきて、敷妙一行が一条の街路を西へ行くのを眺めた市民はいくらもあるけれど、今出川からさきの街々には、そうした目撃者は一人もない。ということ報告した。で、この報告を根拠にして考えると、一行はちょうど今出川の高邸の築地がつづいている範囲で失踪したことになる。もし今日も洛外で行方がしれぬなら、どうあつても疑いを高邸にかけなければならぬ。と、平馬が結論したのは、もはや正午に近いころだった。その推理を、直冬も正しいとは思つたが、

「わしは、そうは、考えたくないでの」

と、云つた。

「ほかに、考え方がござりましょうか？」

と、平馬が詰問した。

「そう云われると——無いには無いけれど」

「横道乱倫の返報がえし、とそう見なければなりませんぞ」

「楠どの、首級の意趣返しか？」

「さよう——そのこと！」

と、平馬が答えて、直冬が、

「だが、のう——」

云いかけた時、がぜん色めく騒音が、侍溜りの方からきこえた。

「や！」

「お、あの物音は！」

平馬はたちまち廊へ走り出た。

と、遠侍から近習がひとり、土気色に顔色をかえて駆けこんで来た。

「大変でござる！ 大変でござる！」

「お、敷妙どのが？ 敷妙どのが？」

「師直に——師直に——」

と、近習はあえぎ入つた。

七

わあーつ、と枳殻は泣きふした。

舜髓も、こぼるゝ涙をおさえて、

「沙門の身ながら、無念に堪えかねまする」

という、伽羅作は、

「お申訳もなき次第にて、生きてお目にかゝれぬと存じながらも、

まず一通り言上いたして後に御成敗をこうむるなり、腹を裂くなり

……」

声もわなわなと云い続けようとするのを、

「これ、唐土屋！ そちに何の咎あろうぞ、成敗とか切腹とか滅相も

ないことを、申すでない」

直冬は、そうさえぎつてから、しばらく悲痛な沈黙におちた。平馬が、

「禍津日にお遭いなのだ！」

と、太息をついたが、すぐにまたも、ぎりぎりど歯ぎしりしつゝ、

南の方の宙をにらんで、

「えゝつ堪忍ならぬ、ならん！ おのれ師直っ！」

と、哮りたつた。

「平馬、落着け。——いちはやく高がしわざと目星をつけたのはそな

たではないか」

直冬の白皙なこめかみには、静脈が青くふくれて見えたが、すでに心馬の手綱はがっちり引きしぼられて、憤怒のためにあわや狂わしく逸ろうとした感情は、かたく抑えつけられていた。

「この伽羅作めの軽卒から、場所もあるうに師直屋敷へ、医者よ、薬——ととびこんだのが、なによりも悪うござりました」

「いえいえそれこそこの枳殻の落度でござりまする。高であろうと、鬼であろうと、気ざらいや選りごのみなどする場合でない、わたくしが申したのでござりまする。決して決して唐土屋どのお悪いのではございませぬ」

「いやいや、あと先の思慮をなくしました手前の落度でござりまする」

「いえいえ」

「いやいや」

「これこれ、悪いのは、凶事の魔神のいたずらだ。こつねんと、敷妙に、癩を病ませた偶然にこそ咎はあろうが、そなた等に落度はないぞ」

直冬は、たがいに責めを負おうとする唐土屋と枳殻へ、そう云って寂しく微笑した。その仄えみをもとめて、平馬はやゝほつとした。だが直冬の頬をはった微笑は、単純なほゝえみではなかった。諦めたのではなかったし、みずから嘲けり憐れんだのもなかった。むろん愛憎を客観した悟入でもなかった。またもちろん、師直への恐怖からむしろ自分の破滅をまぬかれ得た僥倖をよろこぶ微笑でもなかった。だが然し、いくぶんずつは、そのいずれでもあるような微笑だった。

それはいわば、直冬の、複雑な性格の表現だったのである。

「この枳殻。師直のたくらみを、如月がそなたへ告げずに、すぐ市之進まで報らせてくれさえしたら、どうにか術もあつたかも知れぬが、そなたへの密告を気取られて監禁されたことも、分別が足りなかったというより、やはり偶然の咎じや」

直冬はそう云った。

そして、伽羅作、舜髓、枳殻の三人から聞いたことを綜合して、昨

日からの災難の内容を、しずかに頭のなかでまとめてみるのだった。

まず——

（首の意恨をはらすために、敷妙を奪おうともくろんだやさきに、敷妙の外出が知れた。そして急病という偶然が、師直の味方をした）

と。——それから、

（療治にかこつけて敷妙を、供から引き離した時は、すでに出陣の命令が師直から出ていた。恐らく癩は間もなく治つたであろうが、師直は目的を果したからには一刻も早く京都を去るのが伶俐だと感じた。そこで法螺貝を鳴らして再度の出馬の麾下の兵を集めた）

と。——又さらに、

（出陣にのぞんで、敷妙の自由をなんらかの手段で——縛って、含ませた綿に猿轡か、あるいは痺れぐすりを使ったかもしれないが——うまく拘束して、輿にのせ、行軍の伍列に加えて運んで行った。のこされた伽羅作、臚太郎、舜髓、枳殻以下の女ども、ぜんぶ嚴重に監禁されて、今出川の屋敷で一夜を過ぎかねばならなかったのだ）

八

その夜、伽羅作は、
「館さま。——敷妙どのは、もう生きてはおらぬであろうと思われまするが——」

と、云った。

直冬の面ざしが啾々と曇った。

あかるい灯かげで、じいっとその顔をながめたのは、伽羅作のうしろ下座にすわっている臚太郎だった。

臚太郎——すなわち梶丸にとつては、直冬の現在の心持ちを正確に読みとらなくてはならぬという大切な任務が、まだ一つ残っていた。正行の首級を師直から直冬に奪わせ、その代わりに愛妾敷妙を直冬から師直に奪わせるという大仕事を、じつにすばらしくみごとに成しと

げたのであったが、しかしこゝで直冬の心のなかをたしかめ損ねては、せつかく仏ぼんつくつて眼を入れぬようなことになる。

「うむ、死んで操みさおを守ってくれたかも知れぬ。だが——悲しさに堪たえ、苦しみを忍んで、この直冬の奪うばいかえしの手がとゞくのを、待つていてくれるかも知れぬ。わしは、どうぞそうあつてほしいと念じておる。否いや、そうあるだろうと俺わしは、望みをつないでいる。いやいや、きつとそうするに違ちがいがないと、俺わしは信まじたい」

直冬は、きよう午後、監禁かんきんから釈放しやくほうされて戻った人たちを、いたわり労ねらう言葉を残して、叔父直義たかしを訪ねた。いうまでもなく師直の暴行を告げに行ったのだ。けれども智慧を叔父から借りるつもりはなかつた。自分のとるべき態度と手段とは、すでに心に決めておいて下御しもご所しよをおとずれたのであつた。叔父直義は愕然がくぜんとして、すぐさま上杉や畠山などの大名たちを召集したが、対策たいさくについては意見がまちまちで、評議は夜まで長びいた。しかし結局一致したのは、師直へのはげしい憤激ふんげきだけだつた。直冬は、とにかく敷妙の安否あんひがわかつてからだ、そう思つて三条坊門の叔父の屋形から帰ると、伽羅作がらさくを自分の居間へ呼び入れて、もの憂うさと、うら悲しい寂しさを、いくらかでも紛まぎらかすための酒の相手をさせているのだつた。

「のう伽羅作。——舜髓。わしの口から言つてはちと気がさすけれど、彼女の愛情の濃まやかさは、言葉では尽くせぬでの——わしに捧げてくれる真情まじこころの熱烈さは、どんなものをも灼やき熔とかすだろう。と同時に又、わしからいかに可愛く想われておるかを知りつくしている彼女あれのことだから、決して軽卒に自分の身を殺すようなはやり方は、せぬぞよ。美しい点ですぐれてると同じほども聡明な彼女あれの頭で、貞操みよおにだけ殉じて死ぬると、たとい汚された肉体でも惜しみ長らえるのと、どちらがこの直冬を悦よろこばせるか、それを考えあやまるとは思えぬ」

聴きいていた蘆太郎あしたろうは、内心ひそかに、ほくそ笑つた。伽羅作は弟の舜髓とあわせた視線しせんを、すぐ直冬へうつして、

「では、もし敷妙どのゝ一命に、恙つがござりませぬば、館やかたさまには——？」

そう云つたとき、舜髓も、

「お情け恋こしいの一念から、自害もせず長らえますならば——？」
「どうするか？ いかなる手段で奪とり返すか？ 言葉には出さぬが、二人は眼でたずねた。

穴生あなうへ御動座ごどうざ

—

「あれ勿ち体たいもないではございませぬか。やんごとない玉葉のおん身で——あれあれ寮の御馬みうまに召させられましたぞえ」

と、勾当内侍こうとうないしが云つた。

畏おそくも、主上しゅじやうには、もはや宸殿しんでんの御苑ぎょえんのそとへ渡御とぎよあそばすのである。

「そんなら勾当内侍さま——」

と、弁内侍べんないしが促した。

内侍司ないしのつかさ——すなわち温明殿の女官のうちで顔を泣きぬらしていないのは、たゞひとり弁内侍ばかりだつた。この上臈じやうろうの涙は、すでに涸かれ、つきていた。わいて流るべき泪の泉のみなもとは、去年の夏のはじめ、楠正行への切なる恋に破れたときに、あまりにも夥おびしくしぼられたうえに、この正月は新春の松の内もすぎぬのに四糸しよなわたの、悲しい敗戦を聞いたために、すっかりと涸からび渴かわいてしまったのであつた。優婉ゆうわん無む双さうとうたわれた花のかんばせも、いたましく瘦やつれさびて、いわば生ける屍しかばねにも似た弁内侍は、

「それ、掌侍しょうじがた！ 早はやう！」

と、声をかけた。

二人の掌侍は、泪をぬぐうて、左右から勾当の内侍を扶けるようにして階段をおりた。

中門垣の方で、誰れかど、

「弁内侍どの！」

と、喚わるのが聞えた。

内侍は、それに応えるかわりに、

「御鏡は、主上の渡御におかれては相成りませぬぞ」

自分の上司である勾当内侍へ、うしろから注意の言葉をおくった。

三種の神器の随一、八咫の神鏡を安置する賢所の第一藤が、勾当

内侍と呼ばれ、そしてその第二藤が、弁内侍と呼ばれるのであった。

——賢所づきの郎吏たちが、扈從した。温明殿の上童と稚児がつづいた。

まことに恐懼にたえぬ御動座にちがひなかった。——行方は重なる

山々の雲をわけなくてはならなかった。とても鳳輦の通うべくもない

崖をよじ、谷をくだらなければならぬ峻険、羊腸、つゞら折りの悪路、

難行だったのである。——冷泉右府が、

「あゝ、今となつては愚痴のようではござりますが、この吉野からは

落ちとうなかつた！」

と、うれわしげに吐息した。

おなじい想いの花山院内府だった。

「穴生には、起き臥しのかのう棲みかど、はたしてござりましようか、

のう？」

洞院左兵衛督が、

「十五年の昔、金剛山に楠正成、籠城つかまつった折に、大塔宮護良の親王は、かしの阿氏川入道の城に御座ござりまして、幕府これを

知れども、攻むるに術がなかつたと申しまするゆえ——」

と、まだ云いおわらぬうちに、

「笑止や洞院の卿！」

さも不興らしい顔つきで、たしなめたのは二条左府で、

「虎夜叉正儀の口吻、そのまゝの受売りは聞きぐるしうござるぞ」

そういわれると、洞院卿はあわてた態度で、

「なかなかさような儀では、毛頭——口真似などとは思ひもよらず。

身どもの申すは、かし穴生の地は、それほど天険には相違なくとも、

城はかならずや渺たる小城にすぎまいという意味にござりまする。ほ

かに仏閣、神社のきこえし堂宇の存するではなし——まことまこと心

細い限りなればこそ、先日も言葉つくして北畠の准后へ、このたびの

御遷幸の非を鳴らしましたる次第は、左府公にも聞し召されたではご

ざりませぬか」

と、弁疏につとめた。

僻南の山間とはいつても吉野は、すでに住みなれた行在所だった。

藏王堂、如意輪寺、それは修験道の巨刹だった。公卿の屋形に朝臣の

屋敷がつゞきあつたし、諸寮の司や八省の輔たちのすまいには、従官

の家家が連接したし、女院、女御、内親王、宮々の御所などが、皇居

をめぐつて薨をならべ、垣をつらね、築地をととのえた。いうまでも

なくすべての規模は、しごくさゝやかではあつたけれど、それでもい

くぶんかはかりそめながらも都らしい景色を、そなえかけていたのだ。

ところが今や、そうした吉野を見すて、さらに遙か山ぶかい、ど

んなにか棲み憂いであろう穴生をさして、あやうい路の岩根をあるき、

おそろしい溪川の瀬をわたらなければならぬと思うと、供奉の人々は、

心弱い上臈や婦女ならずとも、袖が涙でしめるのであつた。

二

金峯の中腹までは輦輿も登れるであろうが、それからむこうは馬に
からも頼れるのみだし、その先となれば所詮は徒歩よりほかないと
いうことなので、月卿雲客はいずれも乗りなれない馬で、行けるとこ
ろまで行くこと以外に供奉の様式はなかつた。

洞院左兵衛督の兄、左大将実世が、

「せめて、このくらの路がつゞきますなら、のう」

と、右大将教忠をかえりみた。

教忠は、二条左府の令弟だった。

吉野公卿の錚々——この左右両大将も、いまは悄然と意気なえつゝ、主上と神器のおん函簿のうしろについて進むのだった。

「金峯の向うがわは、名にしおう大天井ガ嶽の深い峽谷、天ノ川の断崖絶壁は、さぞかし身の毛がよだつようでござりませぬ」

「まったく、至尊の渡御あらせらるべき場所ではござりませぬ。女院、女御におかせられても、いかばかり御心いたむであろう。恐れおゝい極みでござりまする」

「たゞいまの、勝手神の神前で御製を、承わらば、わがみ独善主義の北畠准后とて、恐懼して、慙愧の汗にそびらをひたすことでござりましように」

左大将は、准后親房卿への反感を、ぶちまけるように云った。

憑むかひなきにつけても誓ひてし勝手神の名こそをしけれ

それは、行宮を捨てさせ給うた至尊が、勝手宮祠の神前をよぎらせられた時の御製であった。

勝手神は、吉野山八神の一柱で、劫初、天孫降臨の直後、後ろ見のために降つた鬘受命を、祭神としていたのだ。

「神も仏も、あつて甲斐ない憂き世でござりますのう。末法の濁世じや！」

と、左大将実世卿がつぶやいた。

教忠右大将も、慚然として、

「宸殿の柱や、廊の鏡板に、やつこのことで光沢が出かゝり、林泉、池亭の姿にも、せつかく趣きが添いかかりましたのに、それを見すて、天ノ川の奥へのがるとは、いぶせき限りではござりませぬか。——師直よしや寄するとも、宮闕を冒すという大不敬は、まさか働きも仕

るまいに——准後のこけおどしにかゝつて到頭、この体たらく！ あゝ味気なし、味気なし！」

そう、歎じわびると、

「右大将——准後は、たくみに女院の御心をとらえ参らせた。国母の院があのように御意あつては、ひつきよう諦めるより途はなかつた」

「准後の師直恐怖病は、あれはきつい悪熱で、あまつさえ悪性の感染力もござりましたか、ついには諸卿の大半、朝臣郎吏の大部分が、由来公家と申すものは武臣の戦争の埒外に、たかく超越すべき筈をわすれて、今にも我々のすべてが虜われてうち首か、かるくも遠島の憂き目みるかのようにおびえたのでござりまする」

「教忠の卿」

と、ふたゝび実世左大将は呼びかけて、やゝおくれた馬を近寄せながら、

「しかしこうした吉野落ちは、遠島とさまで違いはいたしませぬぞ。穴生へたどりつきまして、黒木の御所をしつらうとも、いわゆる茅茨きらず、采椽けずらずでござりましようし、畏きあたりすらさようあらば、我等などは、木の下岩の、岩かげに、松葉、杉葉を葺きかけて、苔のむしろを片敷かねばなりませんまい」

と云った。

右大将が、うなずいた。

「軒端も雨は、ふせぐに由なく、大天井の高根おろしが吹きすさびましても、霜の手枕にこごえるばかりでござりましよう。あゝ、おもえばいつそ賊軍に捕らわれて、ひと覚悟に首をはねらるゝ方が、増しかとさえ考えられますのう！」

大宮びとらしい感傷に、気をめいらせると、左大将は、馬の背に跨ることを避けた公家乗りの鞍つぼで、坂路を危ぶみつつも、

「いかに、そうした愚痴もこぼれまするの。恨めしいは准后よ。独断。専横おもいたかぶつた、ほしいまゝなこたびの態度は、言語道

断——」

親房准后のために満廷の公卿が圧伏された口惜しさが、いまさらの
ように激しく感じられたのである。

「楠の——虎夜叉のさしがねとやら、承わりましたぞよ」

「いや。虎夜叉ごときが、なにを申そうと、しがなき地下人の妄言

——。やはり准后の、正しからぬお心柄より結果せることござります。

——無法なる弾圧——兵を擁しての強制は、沙汰のかぎりじや！」

「しかし——そのお怒りはことわりながら、囚をたゞせば楠が、無謀

の戦さ闘つたがためではござりませぬか。正行の四条畷の敗亡なくば、

准后の卿とて——」

「それはもちろん、楠の責はもちろんでござ……」

と、言いかけて——いきなり、語尾が、

「あつ！」

と、叫び声にかわつた。話相手の右大将も、はつと思ひいとまもなく、
左大将実世卿は、仰反けざまに鞍つぽから落馬した。そして、坂路の
地べたを下へ三間あまり、ころころと転げおちた。

どうしたはずみか乗馬が、前肢をもたげて、背をひどく傾けたがた
めの落馬だった。驚いて青侍が四五人、かけ登ってきた。教忠卿も馬
の背から危くすべり落ちようとしたが、これは鞍べりにしがみつくと
とが出来たので、左右両大将の双落馬だけはまぬかれた。

三

和泉の榎尾山から北畠准后が、楠、虎夜叉正儀とともに、吉野に馳
せつけたのは、四条畷合戦の翌日の夜であった。

その時はもう、正行正時の戦死と、麾下二千の精兵全滅の報告は、
大和の竜田口からとどいて、行在を震撼させ、群卿の顔から生きてあ
る色をうばっていたのであるが、准后の口から吉野はあやういと聞く
と、たちまちそこに公家特有な心理がうごきだした。それは奈良平安

のいにしえから連続とつちかわれ、牢固として習性となり、抜くこと
の出来ぬ惰性となつてしまつた大官人の物の考えかただった。

「吉野落ちなどは、もつての外だ！」

「穴生のごときは、行在所たるべき地にあらず！」

「京都へ還御とあらば、この吉野を捨つるもよろしかろうが、先帝の

さだめ給える行宮を空しくして、嶮岨不便の山峡深くへ御動座を仰ご

うとは何ごぞ！」

群卿は、ひしめきつゝ反駁した。

そこで、准后は大納言隆資卿へ、急使をたてた。四条畷合戦の当日、

暗峠でやぶれた隆資大納言は、竜田口までしりぞいていた。師直は、

正行兄弟の首をえたことに満足して、京都へ凱旋する模様だから、吉

野まで来襲するような憂えは、およそあるまいというのが、大納言の

報告だった。したがつて大納言は、吉野落ちにたいして不賛同の意を

表したので、二条、冷泉の左右大臣、花山院の内府以下の諸卿はいつ

そういきおいづいて、准后の提案を否決しようとした。けれども切迫

の形勢は、とてもそうした体面論や樂觀説を、なま優しく聞いている

ことを許さないと考えた准后は、だんぜん強硬な態度をとつた。

そうなると、兵力を有する北畠は、吉野宮廷においての絶対勢力で

あつた。

准后は、令嗣の大納言顕能卿の兵をもつて、戒嚴をしいた。この戒
嚴布告のかけに、虎夜叉正儀が力づくよく働いていたことは、いうまで
もなかつた。むろん、武力をないものとしてみても、北畠父子の権威

は決して軽かるうわけがなかつた。——父は、一品の准后だし、子は

二品の大納言だ。そして父は、かしこくも皇弟興良親王のおん外戚だ

つたし、子は、ちかごろ入内の噂さがもつばらな若き美姫を、妹にも

つていた。

で、親房准后は、戒嚴によつて群卿の胆をひしいでにおいて会議を、
ふたゝび開いた。すると顛面に、御遷幸の議案はたちまち可決された。

そして奏請——勅許——。

穴生への御動座が決定されたので、准后は榎尾山へ、虎夜又は東条へと戻ることができた。それは、八日——ちようど梶丸が塚、唐土屋の艦太郎となつて、伽羅作と共に京都堀川の直冬邸へ行ったのと同じ日だった。准后の嗣子、顕能大納言は、和泉の防禦の容易ならぬことがわかつたため、吉野にあつた自分の麾下の兵を、ことごとく率いて、榎尾城の興良親王の軍営におもむいた。それは、翌々、十日のことだった。「御支度は、すべて調いましたゆえ、御動座はおゝかた明日あたり——」

と、顕能大納言が、父准后へ告げた。

だが吉野の公卿朝臣たちは、それから一日々々とまごまごして、十数日をついやした。

このあいだに、戦雲はしきりに河内と、和泉に動いていた。師直軍は、八尾河原を攻略して南河内へ、潮のように殺到した。東条の正面をつこうというのだ。先鋒は、すでに石川河原に、堅固な対壘を築いた。十四日にはその先陣の一隊が、東条の前哨兵とほこをまじえた。和泉の方面では師泰軍が、これもまた山を押し野をうずめる勢いで、榎尾城へせまつた。この城を陥落させなければ、南朝武力の側背を攻めるわけにはゆかないから、師泰の三万の兵は、南面利、善正、松尾、父鬼をつらねる線に一大包圍陣をつくつて、山上の城へ、北、西、南の三方から撃ち登ろうとした。

もし師直の再出馬がもつと後れたなら——したがつて大和へ侵入して平田荘に陣どることがなとおそかつたなら、吉野落ちの荏苒は、依然と続いていてもあるうが、もはや敵が、しかも総帥の師直の本軍が、遠からぬ葛下郡に押し寄せたと聞いては、いかに蹶んぎりのわるい殿上人たちも、思いきるより途がなかつた。

そこで今日——二十四日、ついに吉野を捨て去ることになつたのであつた。

四

吉野を目ざして大和へ侵入した師直の軍勢は、その兵力二万と聞えた。四条大納言隆資卿は、吉野にあるかぎりの兵をひきつれて、上市から下市へかけての川岸に防禦の陣をかまえていた。竜田口からしりぞいてきた味方の兵——初瀬、筒井、湯川、芋瀬などの莊司らを頭目とした南大和、北紀伊の郷士、山伏、野伏せりの雑軍もまた、この防禦の陣に合していた。だから今日の御動座の供奉には、はなはだ恐れおゝいことながら御警衛の兵が皆無だった。

武士らしい武士は一人も、附添い参らせることが出来なかつたのだ。たゞ諸寮の郎吏と、公家の青侍とが、警護にあたるのみであつた。

ふかい溪谷をつたうのだから、高貴な女性の方々も、かつて一度もおぼえのない岩根を、かよわい、やわらかな足で踏まねばならなかつた。立春の後、もうやゝ一カ月ちかくなるとはいえ、深山は寒中とあまり変わらぬ姿だった。つめたい霧が、濃く、淡く去来して、脚もとに削りたつ断崖の、すそを洗う丹生川の瀬音が、ざあーざあーと、こだましつゝ空谷にひびいた。

婦女の歩みでは、ましてや金枝玉葉の御足では、どうしても遅れるばかりであつた。女院——新待賢門院は、「しばし、憩いたい」と、仰せられた。

谿を見おろすにも、峯をおおぐにも眺望のすぐれた場所だった。扁平な巖石に、女院は疲れた御足を休ませられた。

「まあ、美しい水のいろ——」

「濃い藍ぞめのように淀むやら——白絹でも振るように流れ落つるやらいたしまする」

と、答えたのは宮仕えの、伊賀局だった。

「深山ならでは逢われぬ景色じゃのう」

女院は、このたびの北畠准後の言葉にいちはお耳をかされ、御動座のやむなき次第を、公卿の決議に先だつて、主上へ申上げられたほどに聡明であらせられた。だから、今日もいたずらに歎きかなしまれるようなことはなかった。

「あの白雲をしのぐ高峯は、なんとという峯であろう？」
と、問わせられた。

「おゝかた、あの峯こそ大天井方嶽かとおもわれまする」

伊賀局は、他の局たちや、女孀、女房、雑仕のやからとは離れて、おそば近々と枯れ草の上にすわっていた。年齢は二十を二つ越えたばかりであつたが、並みよりはるか大柄な女だったので三つ四つはふけて見えた。肉体がひじょうに豊満で、四肢がみごとく発達していたから、風にも雨にも堪えぬというようになややかな風情とは、およそ由縁のとおい型ではあつたけれど、ととのつた顔たちには、健やかな、深刺とした一種独特な美しさがみなぎっていたし、才智も非凡だつたし、男まさりに気丈でもあり、おまけに生まれつき不思議な怪力を恵まれていたという、まことに稀有な女性だつた。事実、屈強の男十人が力を合わせても及ばないほどの力量があつた。武芸にも達していた。だから女院の御信寵の厚かつたのも道理だつた。

「のう伊賀」

女院は、雲を腰にまとう高峯からお目を移された。

「准後の卿へは、妬みそねみが——かゝつておる、とは思わぬか？」

「と——御意あそばすのは？」

お顔を、局があおいだ。

五

女院が、

「聞き苦しうあげつらう人、のゝしる人が、ありはせぬかや？」
と、仰せられた。伊賀局は、

「ございまする。——北畠は清華の家門にすぎぬのに、摂家をもこえて准后宣下あつたは、依怙の御沙汰と思わるゝを、天恩になれて際限ものう心おごり、楠の虎夜又ずれの若輩を、さも傑そうに吹聴して、その発案とやらで、穴生々々と、無理おしに、こたびの大事を強いぎめに決めた不逞ぶてしさよ、などと今朝ほども、お話しあそばすお方々があつたようでございまする」
と、答えた。

「准後の卿の乙姫が、入内なされたら、やがては後の宮ともおなりであらうという、ねたみ心のいわせる声じや。二条の女御も、花山院の女御も、さすれば中宮に立つのぞみが失せるゆえ——北畠こそ嫉ましや——羨まし、憎らしいの情が、あられもなく騒めく。——浅間しいことわいのう」

女院は、お腰をあげられた。そして、

「准后も、お大抵ではない！」

やおら歩み出されたので、局はじめ、扈從の者が前後に立つた。

後続の、女御とその供奉が、やつと岨道へ姿をあらわした。二条女御と花山院女御のあとには、興良親王の御生母、北畠三位局、そのあとから多数の宮嬪、上臈、女官がつゞぎ、しんがりには蔵王堂の吉水法印、如意輪寺の僧都などであつたが、三位局以後はまだ、谿をおおうて茂る檜葉、柊松、高野槿の密林のかけから出て来なかつた。

女院のお唇が、蓮歩のひまにほぐれた。

「のう。先だつての四条畷の討死は、まこと本意ないことではあつたけれど、楠の——あとに残りし虎夜又正儀は、年こそ若けれ、いみじう勝れた武士で、あの男一人あれば、十万二十万の味方あるにも増して心づよい、と准后から承わつたぞや。虎夜又あらんかぎり、宸襟は安かろうとのことじや」

「まあ、なんと勝れたお方なのでございましょう！」
と、伊賀局が云つた。

「それほど勝れた、若き英雄——その面かけはまだ見知らぬわらはよう逢うてみたい、のう伊賀」

「ほんとうに凛々しうて猛からず、お立派な方でございます」

「あれ、そなたは知つていやるのか？」

「はい」

と、答えたが、局は顔をぼうつと赭くした。

咄道は、急な下りにかゝつた。女院は御足をとめて、

「どうして、そなたは存じておる？」

「あの——このあいだ、北畠館の御門前で、ふとお見かけいたしましたので——」

「おゝそれは宜いことをしやつた。——伊賀は仕合わせであつたのう！」

ほゝえみが、やんごとないお顔にうかんだ。いつになく局が、いよいよ赭らんで、耳たぶまでも染めたからであつた。

局は、新田義貞の客将として驍勇の名をとどろかした篠塚伊賀守のむすめで、父伊賀守は、秩父の土豪、畠山重忠の八代の孫にあつたから、きつすいな武家の血をうけていたし、生得の怪力といふ、武術のたしなみもあり、禁中に宮仕えする身ながら、公家の公達の優雅風流にはその青春の情は、ほとんど動こうとさえしなかつたが、准后屋形の門前で、がっちりと落着いた風采のどこかに、颯爽の気をつゝんだやうな、年若い武家を見て、それが楠虎夜叉だと聞かされたとき、たちまち胸の鼓動が、あやしくたかまつた。二十二歳で、かなり遅蒔きではあるけれど、局の心に初恋が蒔かれ、そしてすぐ芽ぐんだのであつた。

六

「あれ。まあ怖ろしげな橋ではあるのう！」

女院は、御足を、おぼえず後ろへ退かれた。

「理りとは思ひながら、局は事もなげに、

「でも、主上も、神鏡も、渡御あそばしましたものを、女院さまにも、みこゝろ安うあらせられませ」

と、云つた。

谿には、粗末な、見ただけでも危そうな釣橋が、かかつていた。きこりや獵師しか渡らぬ橋だったが、渡らずには谿向うへ行けない。丹生川上神社は谿のかなただ。その社のそばを通らなければ穴生へは行き着けない。

「橋ぐいが無うては、さぞ揺れるであろう。わらわは目くるめこうぞ！」
釣橋の下、ふかい谷そこを、丹生川が白い飛沫をあげつゝ激しく流れていた。

「お目をお瞑りあそばせ。わたくしが、おん手をおひき参らせて、そろそろと渡ります」

橋体は、ふとい藤づるで、断崖の大木にゆわかれて、吊されていた。中途で落ちはせぬかしら？ あれ橋げたは、雨風に曝れくちておるではないか？

「あゝれ、お案じすごしでございます」

「そなたは怖いもの知らずゆえ、わらうでもあろうが、わらわはおそろしいぞえ」

御懸念をなごめるために、局は、青侍を呼んだ。

「そちたち——橋げたの上で、力足を踏んでみい」

三人の青侍が、畏まって、橋を中ほどまで渡つて、そこで足踏みをはじめた。吊られた橋体は、ぐらりぐらりと揺らいた。

「曝れて、歪んではおりまするけれど！」

おゝ声で、そう云いながら一人が、どんと力足を桁板に落した。

「これでも、まだまだ」

「大丈夫、この通り」

どん、どん、と他の二人も、力をいれて桁を踏み鳴らした。青侍

は、足踏み、橋のむこう袂まで試みて引つ返した。そしてこちら袂にちかい箇所、三人そろって、同時にどーんと力足をおろした、その刹那——

めりめりめりつ、と朽ちた桁板の碎けて折れる音響ともろともに、あつと叫びを合わせつゝ一人が一人にまた一人と折重なつて、桁の破片と一緒にましたの溪流へ、逆さまに墜落したのだった。

「あれいつ！」

女孀、女房たちの声々が、かん高くわめいた。青侍の朋輩がひしめき立った。だが、倅いにも墜落者は三人とも、そう浅くも深くもない水中へはまった。まじかには巖角が稜々と水の上にあらわれて、川波を噛みくだいていた。それにぶち当たたら最後、即死か、ないしは重傷かであった。じつさい、適当な水の深さがすくいだつた。板の折れぐちで皮膚を裂いたくらいに微傷で、ただ胆を消しとばしただけで済んだ。

谷底を覗いていた伊賀局は、ほつとした。墜ちた青侍が、岸ちかい浅瀬で、絶壁を下から仰いで、

「別段の怪我はござりませぬぞ！」

「命びろいを致しましたっ！」

「神仏の御加護でござりましたあ！」

と、局へむかつて叫んだ。

（ほんに冥々の冥護か！）

心のなかで、局はそう眩かすにはいられなかつた。

墜ちた侍の命も命だが、めりめりめりつという響きを聞いた瞬間、橋が落ちること……そのことが、血色のいゝ局の顔を土のように変わらせた。もし女院の、御懸念のお言葉なかりせば——？ と思うと、まったく恐懼にたえなかつたのだ。

（侍の墜ちたのも、いわば天佑。おちて、無事だったのも、天のたすけ）
そう感じながら、局は、谷底の溪流へ、

「綱をおろして遣わそうぞえ。——一人ずつ、それに縋つて、のぼるがよい。大勢の力で引きあげてやるほどに——よいか」

と、喚わつた。谷底の一人が、

「もし、お局っ！」

と、叫んで、

「手前どもより、橋でござります。お困りなのは、橋の墜ちたことでござりましようが、いかゞなされますか？」

「橋は橋、そなたらはそなたらじゃ」

「いゝえ手前どもは、後廻しで結構でござります。あれあれ橋は、あのとおりの、桁の板が二間ほど落ちておりますぞ」

「橋げたは、わらわが架け直す。——そなたたちとて役目のために墜ちたのじゃ。谿川の水は、氷のように冷たかろうが、綱のおりるまで辛抱してたもれ」

女御の供奉に綱の用意があつた筈だというので、局は青侍の一人を、あとへ馳せ戻らせた。だが人々は、みな不安なおもゝちで、瞳を伊賀局へあつめた。

橋げたは、自分が架け直すと、たしかそう云つたようだが、断たれた橋を、さてどうして局は継ぎなおす？

「これ伊賀局——」

と、女院が、お心もとなげに呼ばせられた。

「は。しばしの御猶予を——」

そう答えて、局は唐衣をぬいだ。

人々が（おや？）と、いぶかる目の前で、局は袿の大袖に襷をかけて、裾と袴を、おもいきり高くからげた。むっちりとはちきれそうに弾力を籠めつゝ脹らんだ、白い腕と脛とが、あらわになつたかと思つうちに局はもう、岨道ばたの林のなかへ入つていた。そしてその真つ白い、豊満に緊張した腕が、もろに一本の高野槇の幹をつかんだ。

「えゝつ——ヤツ！」

裂帛の気合、たゞ二声で、まわり二尺もあるう高野楨が、根こぎにされてしまった。人々は愕然と、舌をまいて、感歎のさけびを胸へ吸いこむほかなかった。

と、局の気合が、ふたゝび響いた。こんどは榎松が引っこ抜かれた。つぎは檜木、また檜木、つぎいて檜の樹、それから樺——という具合に、見るまに十本ばかりの、充分ふとい樹木が、根こそぎ地面から抜き倒されたので、人々はやつと我れに返つたように、どつと喚きこえを發した。女房たちは、まだ顔色をなくしたまゝで、

「人間わざでございましょうか？」

「幻ろしを見たとき思われませぬ！」

「ほんに、あのお力は、どこから出たのであろう？ わたしはもう氣味がわるい！」

などと、囁きあうのだったが、伊賀局は、汗を拭いつゝも、青侍たちへ、「さあ橋げた代りが調うた。いそいで枝を折つてから、運んでほしい」と、言いつけた。

局の勇力は、かねて聞いていた。知つてもいた。しかし誰れが、これほどと思つたであらう？

断橋は、やがて常緑樹と落葉木をとりまぜた樹皮つきの丸太で、応急修理ができた。谷底の三人は、そのつぎ足しが終わる前に、綱で吊り上げられた。

局は、女院へ、

「丸木の上は、お徒歩いにくうおわしましょう。わたくしが背で負いまいらせませする」

と、申上げた。

女院は、局の背中中、

「このまあ負さり心地のよいことは！ むかしの巴も、板額も、いまの伊賀には遠くおよばぬであらうぞや」と、仰せられた。

かしこくも、今上の御生母、新待賢門院を背におい参らせて、橋を谿の彼岸へ渡りきつたとき伊賀局は、

(あゝ！ どうやら)

責任をはたし得た者の吐息をもらした。

吉野炎上

一

南河内の石川河原から、竹ノ内峠をこえて、大和葛下郡(旧名、今の北葛城)に入った師直の軍勢二万は、平田荘に充満していた。

本陣が当麻寺についたのは、二十四日の午後だった。

それはちやうど伊賀局が、国母の女院をおぶいまいらせて、丹生川の谿を渡つたのと同じくらいの時刻であったが、吉野宮廷が穴生へ御座あらうなどは、師直は夢にもおもわなかつたのである。

石川河原で、師冬へ、

「どれ、遊山戦争に行つて参るぞ」

と、云つた時、

「師直どの。遊山どころか、天下一統をさだめる大切な戦争じや。

——吉野を陥すことだけならば、見物がてらにも出来ましょうが……」

そう、師冬が答えたので、師直はからからと笑つた。

「吉野だけを目あてに、誰れがゆく？ 心配するな」

十二分に成算があるという態度で、悠然と出かけてきたのだった。四条畷の激戦で、二千の楠兵を全滅させた代りに、自分の兵一万余を死傷させた師直ではあつたが、正行の首をたぎさえて一旦京都へ凱旋したとき、在京の予備隊を動員して兵力の喪失をおぎなつたため、

こんど大和へ侵入することになつても、従弟師冬は依然三万の大兵を擁して東条を攻めつづけることが出来た。

師直の本陣があまりに緩々しているので、すでに幾日か平田荘で滞在しておつた先発の諸隊は、すつかり退屈していた。

「まだ陽も高うござるに。もつとお進みなされては如何なものかな？」

と、佐々木道誉が云つた。

佐々木隊は先鋒だったから、殊に、しびれをきらしていた。

「日暮れには間があるからこそ、泊まるのだ」と、いうのが師直の返辞だった。

「はて？ 訝しなことを——？」

「なにが訝しい。見物が出来るからじゃ」

「なに、見物とは？」

「読んで字のとおり、物を見ることだ」

「——物を？」

「は、解らん入道じゃ。つまり、寺だの、墓だのという、名所旧跡だ」

「ばかな！ おん身が、わは、名所旧跡などと柄にもない、ひ、ひ、ひ！」

「笑うなよ道誉。これで大真面目なのだ。わしは、ついこの頃から、遊山かたがた学問をし始めた」

「え、学問を——担ぐのは、よい加減に願いたい」

「これさ、担ぐものか。学問というても聴き学だがの——い、お師匠がみつかつたでな、やり始めてみると面白い」

「へえ、妙なこともあるものじゃ。して、おん身のお師匠というのは、いずれの何方でござる？」

「その師匠というのは——待たれよ、他ならぬ入道のことゆえ、紹きあわすといたそう。たゞし、断つておくが、構えて眼を廻さぬように御用心がいるぞよ」

「なんと？ 眼を廻さぬように——身どもが？」

「そう。お許が」

「ふ、む、異なことを——」

佐々木佐渡判官入道道誉は、どうにも、呑みこめぬという唸り方をした。

「この佐渡を、変に、はぐらかし召さるのではないか？」

「佐、渡うも、そう気を廻されては、道誉もならんな」

と、わるく洒落のめして、師直は笑つた。

二

そこは、当麻寺の参道だった。

道誉は、目を、白黒させて、

「こう高、そりや高の諸肌ぬぎの洒落と申すものじゃ」

「は、苦しいの」

師直はそう云いつ、侍童を手まねきした。

中部大和と南河内の国境をしきる葛城山脈の北の鼻ともいえる

二上山——その二上山の下に、瘤のような麻呂古山がある。当麻寺は、

この麻呂古山の麓に、じつに白鳳の古えから七堂伽藍、整美の壮麗を

しめして建つていた。

師直が、馬からおりて、道誉と話しているので、行列は参道で、と

まったま、だった。

侍童は、言いつかつたとおりに、肩輿の簾をあげて、はなやかな

打掛けに紋様も絢爛な唐衣をまとうた美女を、つれ出した。

「敷妙」

と、師直が呼んだ。

近寄ると、

「道誉入道、これが俺の学問の師匠じゃ」

「や！」

大きく剥きだされた白眼のなかで、瞳が、くるくると廻った。
とんでもない師匠だという驚きよりも、聞きしにまさる妖婉さに、ぎゆうつと度胆を押しつぶしがれたのであった。

「そうれ、道誉々々！」

と、師直は、脂肪のぶつぶつわくような赭褐色の顔を、気味よさそうにゆがめて、

「だから、言わないことではない、御用心とのう。——敷妙。こちらが佐々木どの。武道色道兼達の猛者じゃ。下手まごつかば、この師直とて、因果はめぐる小車で、そなたをこんどは攫われぬとも限らんぞよ、あはゝゝゝ！」

と、高笑いした。

「まあ、いやらしい」

つんとして、横を向いた敷妙は、道誉へ会釈さえしなかった。

かなり面やつれがしたようだが、それがかえって凄艶に見えた。

「道誉？」

「参った！」

「この美しさで、おまけに学者で、物識りと来ておるから嬉しいではないか」

「ほう！ 然らば、紫式部か、清少納言の、うまれ変りのようなもので——」

「やすでに踏んで貰うまい。清少納言や紫式部が、どれほど美しかったという話を、ついぞ聞いたことがないぞ」

「なアるほどの。——ふうむ！」

道誉は、また唸った。

（あてこともない女が、商人の家にうまれたものだ！ 学問の方は話十分一としても、眉目かたちはまさしく天下の逸品じゃ。その道にかけたらどんな真似もする執事が、強奪、強淫——それにはさらさら無理もないが、強奪された直冬どのこそいゝ面の皮だ。いや、これでは、

なかなか思い切れるわけがない。こりや相当の悶着くらいでは済むまいぞよ。——だが、ともかくも素敵だなあ！）

「う道誉。おぬしもちと弟子入りをせぬか？ 学問の方なら、裾分けも苦しからずだ。めきめき物識りになれるぞ」

そう師直がいったので、入道は微笑して、

「ではお裾分けを願いますかな」

と、答えた。

「入道、さしあたりこの寺のことを、教わろうではないか。名高い寺だが、わしらは何にも知らんからのう。お許もわしの同類にちがいないが、小児のときから書物というものに親しまずに来た。狩と、馬と、戦のまねと、ほんとうの戦いと、酒と、女と、それで全部だ。わしらは、てんでの先祖のことさえろくろく知ってはいない。わしは、河内であちこち見物しながら、彼女からいろいろ教えられる、物事を知るということはいいことだと、初めて気がついたのだ」

「へえゝ！」

なんと不思議なことになったものだ、と道誉は、がくりと頭をかしげた。

三

敷妙は、師直と道誉のあいだに挟まれて、参道を、楼門のほうへ歩いていった。

「あの後ろの山は？」

「二上山と申しまする」

「いゝ格好の山だな。なにか曰くがありそうなの？」

「大津皇子の御墳墓がございます」

「薄命な御最期をとげられた皇子だったな、たしかか？」

「はい、『つぬさはふ磐余の池に鳴く鴨を、今日のみ見てや雲隠りなむ』という御辞世を、おのこしあそばした多情、多恨の皇子さまでござい

ました。伊勢の齋宮からおのぼりなされた大伯皇女が、『うつそみの人なる吾れやあすよりは、二上山を吾が兄と吾が見む』と涙をお流しになつたのが、あの山でございませう」

「なるほど。由緒のある山だの」

楼門を入ると、左右に寺坊が建ちつらなっていて、正面に牀のたかい本堂、その両わきに金堂と講堂とが見えた。そして金堂のまえには、三重塔が二つ、東西に対峙して、白鳳期芸術の精髓をほこっていた。「いい寺だのう、塔が二つもある」

師直は、慕僚の将士や、側近の扈從らを、寺坊のわきにのこして、「まず一廻りして見よう」

と、歩きだした。敷妙と入道が、それに並んで本堂へ近づいた。

「いったい誰れが建てたのだ、この寺は？」

「当麻の国見というお方でございませう」

「あゝそれで当麻寺か。だが、その国見とかいう人は、何者かの？」

「聖徳太子の弟宮に麻呂子皇子とおっしゃるお方がございまして、そのお方のお孫さまが当麻の国見なのでございませう」

「ずいぶん古い寺だな」

本堂のうしろには、曼茶羅堂があつた。訊かれないうちに敷妙の方から、

「中将姫が、曼茶羅を織つたという、お堂でございませう」

「あゝ中将姫の寺だつたのか、これが！」

この堂は、桁行七間、梁間六間の、大きな建築だつた。

「だが、中将姫というのは、誰れの子かのおう？」

「藤原氏の長者、豊成公の姫君でございませう」

「継母に、ひどくいじめられたとかいうが、本当の話かな？」

「あれは、作り話だと申します」

「すると、曼茶羅も偽かしら？」

「蓮糸の曼茶羅織りのことは、古今著聞集にも載っておりますゆえ、

信じてよいと思ひます」

敷妙が、そう答えると、わかから、

「その曼茶羅織りの話を、きゝとうござるのう」

と、道誉が云つた。むさぼるような眼が、なめらかな横顔へ吸いつけられた。だが返辞はなくて、敷妙はふたゝび、つんと表情をかたくした。

「お部屋どの。——もし、御側室どの！」

重ねて呼んでも、やはり受けこたえが聞かれぬ道誉入道だつた。

四

師直が、

「敷妙、なぜ佐々木どのに、返辞をせぬか？」

十分に猫なでごえで訊ねたが、

「わたくし、——高さまのお部屋でも、側室でもございませぬものを」

そう、答えながらも、敷妙は、つい今しがた頭にふと閃めいたある

一事を、思ひわすらつた。

（吉野の御動静は——？）

危険をおもんばかつて、万全な穴生への御遷幸を奏請しなければならぬ、というので虎夜叉が吉野へ行つたことだけは、梶丸から小倉山で聞かされた彼女だつた。しかし、その後の消息は、杳として知ることが出来なかつた。むろん彼女にとっては、それを知りうる機会や手段のあるはずもなかつた。梶丸は、虎夜叉の伝言だといって、ほかのこと一切、心配するに及ばぬから、たゞ彼女へふりあてられた役目をさえ専心に果たしてくれたら結構だ——それは実際、極度に、なんらの誇張もなしにこの上もなく重大な役割で、今後のあらゆる謀計の根柢になるのだから、と告げたのであつた。まったくそれは、ほかのことに気をうつす余裕などの、とてもあり得ない仕事だつた。けれども彼女は今、吉野の模様——どうなつたのであろうという懸念を、

もたずにはいられなくなつた。やゝ吉野に近づいたこと以外に、別段これといえるような理もなかつたのだが――。

(一日でも、半日でも――暇どる方が――)

吉野のおん為めに、よいに違いないと、そう敷妙が思つたのは、師直の猫なで声に返辞をしてから、わずか二十秒か三十秒かの後であつた。そのわずかの間に、師直は、

「そなたは、まだそれを言う!」

と、二度、三度とくりかえした。

道誉入道が、ちよつと妙な手つきで、自分の顎をなでまわしながら、
「身どもが、御機嫌を斜めにいたしたかな。――お部屋どのでお氣にめさずば、敷妙どのと呼び申そうか。それとも――」

と、師直の顔をながめた。

いくらか照れくさく、にたりとして師直は、

「これさ敷妙。こうした軍の旅のせわせわしい仮寝の枕でも、かわせば、枕は、やつぱり枕じゃ。そなたは現実、この師直の伽の女ではないか?」

伽をすれば、側室だ。権妻なら、お部屋と呼ばれて何をこたわるぞ」

そう云つたが、敷妙は聞く耳を持たぬような格好で、じいっと立っていた。

「さあ機嫌直してくれ」

引き寄せようとするのを、なかば拒むように軀をくねらせると、たちまちそこに甘美、芳烈な曲線が乱舞した。

強すぎる蠱惑に、おぼえず顔をしかめたのは道誉入道だつた。

「高どの。ちとお手柔らかに!」

と、哀願するような声で、道誉が云つたとき、敷妙が、師直の腕のあいだで、

「いゝえ。あなたの女ではございませぬ」

と、身を揉みながら、羽がい締めの方にこたえた。

「はゝゝゝ面白い女じゃ!」

師直が抱擁をとくと、

「わたくし、あなたのお伽をいたした覚えはございませぬ」

みだれた衣紋をつくろう容姿は、たとえようもなく嬌めかしかつた。

「ほ! なにを申すぞ?」

「いゝえ。強いられたまでとございます。わたくしは、どこまでも、直冬さまの側女でございます」

「ひゝゝゝ、いよいよこれは面白いわい!」

師直は、総身がうずきたつような、刺戟を感じて、呼吸をやめた。

五

翌日、

「橘寺へ」

と、進軍命令が出た。

師直の本陣は、夕刻、その寺へうつた。

「聖徳太子の御誕生の地だと申します。――用命の帝の、離宮のあつた場所なそうでございます。――万葉集に『たち花の寺のなかやにわがいねし、うなぬばかりは髪あげつらむ』と、詠まれております、その橘寺でございます」

そんなふうには、説明する方が、はるかに効果が顕著なのを、敷妙はますますはつきりと知ることが出来たのだつた。

虎夜叉からおわされた役割は、直冬と師直とを、全力的に抗争させることにあつた。足利幕府の首脳部における二大勢力の内訌に、爆発の口火をつけるためには、自分の肉体を悲しいおとりにして、右と左とから、直冬と、師直とを、おなじような強烈さで引きつけなければならぬ。どちらをも、盲目的に溺愛させなくてはならないのだ。

だから敷妙は、師直に対しては、特殊な工作に苦心しなければならなかつた。たゞ眼をつぶつて、肉体をさらけ出しておれば、それでよいというような訳にはゆかない、美女、麗人には、食傷しないのが

不思議なくらいの師直には、よしんばどんなに美しくとも、たゞそれだけで、刺戟の永つゞきは望めない。その道にかけての巨人師直を、ぐんにやりとなるまで悩殺し、彼女のためなら、いかなる無理も敢ていとわんというほどに、うち込ませようとするには、特別に妖艶な感じを与えるようになってくたがいの。

「聖徳太子御建立の、七つのお寺の、その一つなのでございませう」

「ほう、七つの。——七つというのは？」

「法隆寺、四天王寺、中宮寺、蜂丘寺、池後寺、葛城寺——それにこの、橘寺でございます」

この寺の境内には、聖徳太子にかゝわったいろんな伝説の旧跡が多かった。太子が勝鬘経を講讀された際に、その宝冠に日月星の三光があらわれて、それが照り映えたという三光石があった。そのとき蓬華が虚空から降った、といわれている蓮華塚があった。

きのうのように、敷妙はまたも説明のわずらわしさを辛抱しつつ、師直と一緒に境内を、くまなく歩きまわった。

「よく知っておるのう！」

師直は、自分でいうほどに無学、無識の野人では決してなかったが、その知識と、興味の対象は、これまで極度に現実的なものに限られているだけに、過去の芸術や歴史、伝説などについての敷妙の、まったく意外な物知りぶりにぶつかった驚きは、また格段におゝきかった。

いろいろな種類の女をあさりつくした師直ではあったけれど、こうした敷妙に接したことは、たしかに新鮮な経験だった。

新らしもの好き、変り種ごのみ——それは漁色家の常で、もちろん師直ほどの大家なら、その尤なるものでなければならぬ、明敏な敷妙は、そのところを掴んだのだ。

「そなたは、この辺を誰と一緒にめぐった？　まるで自分の生まれ故郷のようではないか」

「堺の兄につられて、河内から大和めぐりをしたことがございませう」

た

「ふうむ、兄と——」

師直は、その兄という男も、町人ながらよほど傑れた人物にちがいないと思つた。

（京をたつ日に、逢つておけばよかった。——だが、早晚、手なづけることしよう。商人なら、いかに型破りでも、利にはさといである。財宝の山を積みさえすれば、よもや靡かぬことはなかるう。そう、兄に対しては、あくまで俺の財力——そうして、この稀有な美女に対しては、あくまで俺の体力でゆこう。これほどの才媛ではあり、直冬にはぞつこん参つていて、容易に思いきる様子はないけれど、仕合わせなことには、ふゝゝゝ色にはたしかに脆い質だ。そこを附け目に、ねばるなら、うふゝゝゝ！）

境内からは、飛ぶ鳥の明日香のさとと歌われた、古き都のあとが、なだらかな勾配の裾に見晴らされた。畝傍山、香久山、耳成山の三山にかこまれた、睡むるがように静穏な盆地に、早春のなごやかな夕暮れが夢ましく近づいていた。——このあたり一帯は、敷妙にとつては、どこよりも深い追憶につながる場所であった。いま師直へは、堺の兄とともに遊んだことがあったのだ、と答えた。しかしながら、事実は大ちがい——曾遊の伴侶は、虎夜又正儀であった。それはなんと形容もできぬほど楽しい、嬉しい旅であった。虎夜又は、敷妙をたずさえて、こゝ飛鳥の古都——本朝文化の発祥の地の風光、遺跡を、こゝろゆくばかり探りあるいたのであった。それは一昨年の春たけなわの三月初旬のことだった。虎夜又は十九歳だった。敷妙は十七歳だった。

（あゝあの時の幸福さ……）

追想が、にわかに涙をさそつた。

そして、一たび眼ぶたの堰が破れると、もはや止めどもなしに泣けて来るのだった。

師直は、夕映えの微光のなかで、泣きぬるゝ妖冶な美貌をのぞきこ

んだ。

「これさ、なにを歎くぞ！」

だが、泣くその風情ふうせいが師直にはたまらなかつた。

六

師直もろなおの橘寺滞在は、三日にわたつた。

二十八日の朝、敷妙は、

「わたくしは、血腥いくさまさい戰場へは、参りとうはございませぬ」と、云つた。

「血の流れるような戦さかよ。相手は長袖ながそでと、坊主と、山伏だ、相変らずの遊山あそびごころで、のんびりといつてくるがい。」

師直はつれてゆく気であつたが、敷妙は動かなかつた。

「いやでございませぬものを、御無理な！」と、嬌なまめかしく睨にらんでみせた。

「ほう。それほどいやなら、待っていやれ。おそくも明日の夕景までには、こゝへ戻つて来る。わずか一日半ほどの辛抱ゆえ、わしも観念するとしようか、はゝはゝ！」

今夜は、吉野の鳳輦ほうれんをわが陣中へ迎えとり参らせるのだから、自分も心せわしくもあれば、軀みにも暇があるまい。と、師直は思つた。

「たゞし、留守が心配じゃ。直冬の未練心みれんこころが、隠密を入れておいて、今宵こそというので、そなたを奪い返そうとするのは、極めてありうることだからの。警戒は厳重にしておくぞよ。敵はむしろ後ろにありじゃ。」

敷妙を、橘寺の陣営にのこして、そこに五千の兵を残留ざんりゅうさせた師直は、いよ／＼馬を吉野へと進めた。

南山をいまや冒そうとする師直の軍勢は、すべて、懼おそるゝことを知らないような驕兵あうべいだつた。左翼は芋ガ峠から上市へ、中軍は壺坂つぼさかから六田へ、右翼は国見山のふもとを迂回うかいして下市へと進んだ一万五千

の将兵は、みちみち、民家という民家に手あたりしだいに火をつけた。黒煙くろえんりがもうもうと空になびき、焦げる臭いが山野にみちた。

あわれ無辜むこの民衆は、泣きさけびつゝ逃げまどうた。それは理由のない放火だつた。軍需品ぐんじゆひんはたんまりあてがわれていた兵は、掠奪りやくたつの必要などはすこしもなかつたのだ。だが強いて理由をさがすなら、示威せいゐということであつたらう。

その意味では、たしかに効きめがあらわれた。というのは、峠越しに天に冲する黒煙りをながめた吉野の守備軍は、俄然いつぜん士気を萎縮いしゆくさせてしまつたからである。

この士気阻喪そさうは、しかし、無理もないことだつた。すでに行在あんざいの宮廷は、四日前に、穴生へ御動座あつて、蔵王堂や如意輪寺にょいりんじまでも、まつたく藻ぬけの殻だつた。だから死を賭して吉野川の峡谷線をまもつたところで、どれほどの忠義にもならなかつた。で、一たん戦意を失つたとなると、もはや総帥そうすい四條大納言の統制などは行われない。もともと山の衆徒と、郷土や野伏せりの雑軍にすぎないのだから、いわば鳥合うらひあひの勢で、頭かずだけは数千をそろえていたが、こうなつては頼りないことおびたゞしく、たちまち我れ先きにと逃げ散らばつてゆくのみ津川の奥へ、あるいは五条、紀ノ川すじへと逃げ散らばつてゆくのみだつた。

最小の損失をもつて最大の収獲をあげよう、というのが今度の師直の腹であつた。当麻寺や橘寺で、悠々みこしをすえていたのは、あながち敷妙のせいばかりでもなかつた。窮鼠きゆうそかえつて猫を食むようなことになつてはばかばかしいという、心構えもあつたのだ。

思いどおり師直の軍兵は、一刃ひとにも血ぬらずして吉野へ迫ることができた。

たしかに、そこまでは宜かつた。

「わあーっ！」

関が、万雷のとどろくように、三たびあがつた。吉野川の峡谷を越

えた驕兵どもは、まるで大津波のごとき勢いで、山上へ押寄せたには押寄せたが、

「あら、ら、ら、あつ！」

と、衆口ひとしく叫ばずにはいられなかった。

行宮も、伽藍も、邸宅も、たゞ寂寞として人声を絶っていた。

「吉野山には、敵は一兵もおりませぬ」

「なに、一兵もおらぬと？」

師直は、麓の川べりの幕のなかで、牀几にかけていた。

「いづれかへ、いつの間にか、消えて失くなつております」

先鋒、佐々木道誓の部将、鉢上景之が、そう答えると、

「どこへ失せようと、木々葉武士や雑兵めらに用はない。——鉢上」

「はあ」

「ひつきようするに、鳳輦と、高貴なかがたの輦車とを、わが軍陣に迎えたてまつればよいのじゃ。わかつたか？」

「高の殿！ 高の殿！」

「あん？」

師直は、佐々木の部将へ、眼をみはつた。

七

「見えさせられませぬ」

「えゝ？」

師直のひとみが、だいぶ拡がった。

「一大事でござりますぞっ！」

「なにが？」

「意外、面妖、あまりにも——」

「前置きはいらん！」

「あまりにも案に相違つかまつりまして——」

「はよう、これとく申せっ！」

「は。あるじの入道はじめ、二陣三陣以下の諸将方、いづれも呆然と、いへべき言葉も存せぬ有様にござりまする」

「ばかめ！ 前後顛倒では訳がわからん」

「いえいえ、顛倒は致しませぬ」

「ちえ、なぜ呆然となつたのだ？」

「見えさせ給わぬゆえ——」

「白痴っ！ た、誰れが、どなたがじゃ？」

師直は突つ立つた。事よういならずと感じて、瞳孔はますます開けた。

「高の殿！ どなた、あなたではござりませぬぞよっ！」

「えゝ脳味噌の足りぬ奴、なにがどうあつたというのだっ？」

どなられたが、佐々木の部将はむしろふてぶてしく落着いていた。

「脳味噌の足りなかつたは、憚りながら我が軍の、首脳部だったので

はござりますまいか？ 吉野の一山、げきとして声なく、火の気もなければ烟りもたゞず、行在所の内外、まったく無人の境と相成つておる始末でござりますぞ」

「なんと？ なんと？」

「なんと？ なんと？」

傲岸不屈な師直だが、声をうつろにして叫んだ。だが鉢上景之のことばつきは、冷然と乱れなかつた。鉢上は、軍の首将が美女を擁して、戦さの陣営にあるまじき姪樂をむさぼるばかりか、きようは当麻寺、明日は橘寺と、何日をも空費して、ついに大目的を逸してしまつたことに対して、憤怒を感じていたのだ。

「行宮のみならず、公家の屋形も、堂も、寺も、がらんどうの空伽藍、空屋敷ばかり」

「鉢上っ！ 主上は——主上は、おわしまさぬのかっ？」

「もちろんでござる。考えても御覽ぜよ、無人の境に、やんごとなき

辺りが在しまさう筈はござりませぬ」

「うゝむ！」

「うゝむ！」

師直は、唸つた。そしていくたびか、喉を異様にうめかせた。

(不覚！ 不覚！)

わが拳で、どんと胸をたつきつけて、

「おん行衛は——いづくだ？ どこだつ？」

と、喚いた。

「尾上の松か、落葉の桜に、訊ぬるほかに術はなし」

と、鉢上がうそぶいた。

「だまれ！」

はげしく叱咤して、

「八方手分けて、探れと申せ、佐々木に申せつ！」

「伝えまする」

佐々木の部将が去っても、師直の唸り声はなかなかやまなかつた。

(え、しまった！)

幕張りのなかを、あたかも檻をめぐる猛獣とでもいうべき恰好で、ぐるぐる廻っていたが、やがて麾下の幕僚にむかつて、

「焼いてしまえつ！」

と、どなつた。

愕ろいて幕僚たちが、

「は、なにを焼くと仰しやりまするか？」

そう伺いをたてると、

「その空屋敷、空伽藍、いらぬからこそ捨てゝ行つたのだ。片っ端から、焼いて焼いて、焼きつくせ！ 吉野の山を焼きつくせ！」

まるで焼けぼっくりを揮りまわすような声で、師直は叫びたてた。

その夜——。

吉野山は、紅蓮の舌に、まがまがしく嘗められた。

不逞の驕兵が放った火は、まず蔵王堂に、炎をあげた。

折しも西南の風が吹きつづいてた。それが燄熱に遭うと、たちまち、魔の風が変わって物すごく旋回した。烟と、火とは、その旋風に狂いつつ、宿坊を蔽いつくした。

みるまに、二丈二基の笠鳥居と、二丈五尺の金鳥居とが、火の柱と化した。金剛力士の二階門の楼上へと、焰の舌先がはいあがつた。

「おゝみごと、みごと！」

師直の音声には、異常の狂燥があつた。

月明りのない二十八日の闇空は、炎々とこげて、中天は真昼をあざむき、金峯山の峯はあかあかと光を反射して、暗黒の枠から浮き出して見えた。

「この師直をたぶらかした吉野山よ、燃えろ、燃えろ！」

七十二間の廻廊へも、燄がまわつた。

三十八所の神樂堂が、一時に火を吹いた。

「壮快つ！」

示現の宮——北野天神の別宮の棟が、どつと火柱を立て、焼くづれた。

宝蔵が、火焰に包まれた。竈殿が焼け落ちた。いまや本堂の大夏は、すさまじい音響を、ぐるりの山谷にこだませつゝ、猛然と燃え立つた。

(あゝ、いゝ気味じゃ！)

まさしく病的な鼓舞に、師直は躍りあがつた。

三尊、光をやらわらげて、衆人がその御前に、首をたれた金剛蔵王の社壇もついに、劫火にあぶられて、役の優婆塞このかた修験道にいやちこの霊場は、後醍醐のみかどを扶翼し奉ったいさおしをいだいたまゝ、空しくも灰燼に帰すべく地に倒れた。

「高どの、もう、もう消しとめては、いかゞでござらう？」

と、道誉入道が云つた。

だが、師直は、げたげたと笑つた。

「焼くのだ、みんな焼くのだ！」

火の海は、如意輪寺にうつつた。

魔の風の雄たけびが、一段とたけつた。

吉水神社の拝殿を焼きつくした炎が、如意輪寺の講堂をなめた火と

合して、行在の宮闕のいらかへ流れた。

北畠准后邸の宸殿から、この時、ひとときわたかい火ぶきが見えた。

「態をみる！」と、師直が、燄に酔いしれたかのように叫ぶのだった。

擬勢擬装

梅花の馥郁とかおる縁ばたで、夕飯はすませたが、なお虎夜又は、幾波と折鶴に、酒の酌をさせていた。

「のう梶丸。もう使いが見えそうな——」

ばん酌の相伴は、いつもどおり尾鷲梶丸であった。

「待ちほけそうでござりまするな」

「でも、おそくも今晚じゆうにはの」

「参るでござりましょうか？」

「来る。あるいは明朝になるかも知れぬが、来るにはきつと来る」

春めかしい和やかな夕闇が、玄々寮の内庭に、やがて近寄る時刻だったが、灯はまだついていなかった。暮れなずむたそがれに、二人の美しい侍女の白い顔が、やゝ朧ろに匂っていた。梶丸は、杯をほして、「かえって、手足まといかとも存せられまするが、やはり——あの衆徒たちの力が、なんぞお役にたつのでござりまするか？」

と、たずねた。そして曲器に、自分の杯をふせた。

「もう納うか？」

「お結構」

「梶丸」

「は」

「わしは、なにも長谷寺の衆徒の武力を、たのみはせぬぞ。だが、なにか役に立つか、と訊くのか。そなたまでが？」

「はあ」

「春さきは、とかく頭脳がにぶる」

「恐れ入ります」

「わからぬか？」

「お羞かしきことながら」

「日ごろのそなたにも肖合わぬの」

「たゞ軍容をさかんにすること以外には、大和の、他の寺々への牽制くらいしか、考え得られませぬが——なにか特別の思召しても？」

「人数ほしくば、穴生にをる四条卿の雑軍でも間に合うではないか？」

また大和の神社の向背とて、すでに分野は定まっている。長谷寺一

カ寺がどうあるうと、形勢は変わるまい。法隆寺の別当覚懐までが、

師直の陣へ馳せ参じた」

「殿。ようやく！」

「む、わかつたか」

「擬装のため——おそらくは」

「さすが。——そのとおり」

「では——真木野定観どのは、北軍の味方と号して音無川原へ

——？」

「そのとおり」

と、ふたゝび虎夜又がうなずいた。

——りん、りんりん、りん。

こゝ衆妙房の壁にかゝった鈴が、鳴った。

折鶴が、起つて、入側から廊へ出て行った。

「来たらしいぞよ」

と、虎夜又は、梶丸の顔をみて、

「出兵の支度は、とゞのつておるな？」

と、云った。

「は。今日こそはと、手ぐすね引いておられます」

「夜襲の方の用意も、よいか？」

「恩智どのが、充分に心得ておるようござります」

幾波が、燈台に灯をいれた。

もどつてきた折鶴が、膝まずいて、

「真木野どのお使者でござりまするが——」

と、告げた。

「む。出て会おう」

虎夜叉は、鎧びつのおいてある室へ、入って行つた。

その後から、

「あの——お鎧でござりまするか？」

と、幾波が、そして折鶴も走って行つた。

やがて、室のなかから、

「梶丸。そちも早う、武装しろ」

と、いう虎夜叉の声が聞えた。

二

東条の城内は、室々にこそあかあかと燈火が、かざやいていたが、屋外には篝火などは一つも焚かれていなかったし、馬には枚を銜ませたし、人には高声高音を禁じてあったから、外部から窺つたぶんには、ふだんよりも却って静かなくらいだった。城内では、

「ありがたいことに、曇ってきたぞ」

と、兵のひとりが云つた。別の兵も、空をながめて、

「月も七日だから、曇らないことには、月かげが邪魔になる」

「館が、鎧かぶとを召してござりまするぞ」

と、また別な兵が云つた。

「む。ずいぶん、久方ぶりだのう」

「籠城このかた、はじめてはないか？」

「さよう。まる一カ月ぶりだ」

「まさか」

と、さらに別の兵が、小声で笑うと、

「でも、ちかごろ見たおぼえが無いもの。甲冑のお姿は、たしかに、

四条畷の合戦の日以来のことだ」

「いかにもな。横尾山から、吉野へおまわりになつた時さえ、小具足

だった」

「鎧が、よっぽどお嫌いに見えるて」

「お亡くなりのお兄み達は、よく召しておられたがのう」

「お種もお腹もおんなじい御兄弟で——こゝも異うものかしら！」

「おれの兄弟なんぞは、食べものに意地きたないところから、軒の音

いろまで区別がつかぬそうだがのう」

「馬鹿いえ。軒の音いろは、たいがい似ているわさ」

「とにかく今夜は、たいそうなお意気ごみらしいぞ。ひよつとしたら、

御自身、御出馬かも知れん」

「なにしろ今夜という今夜は、はじめてあの抜け穴が、役に立つのだ

から愉快じゃよ」

「大骨を折つたからのう、とてつもないあの穴掘りには」

「去年の秋から、毎日々々、千人がかりで掘つた隧道だ。出来あが

つたのがこの二月の一日じゃもの、延人数にして見ろ、十日で二万人、

ちようど百日かゝつたから——なんと十万人だぞ。十万人の力で掘つ

た隧道なんていうものは、唐天竺なら知らないけれど、俺たちは聞いた

ためしにも覚えもありはせぬ。掘りも掘つたが、よくまあ思いきつて

お掘らせなすつたものよ。館の殿でなくば、お出来にならぬ芸だ」

「そうともよ。だが俺たちは小半年、地べたにもぐつて、人が爪生野

で勝とうと、四条畷で討死しよう、一向に、かゝわりなしのもぐら

鼠では、なんぼなんでも情けなかつたが、やつとこさ今夜は溜飲がさ

がろうというものだ。ぞんぶんに打った斬ろうぜ！」

「斬るとも斬るとも、大根なますだ！」

「刀が折れたら、源秀どのだ、喰らいつく！」

「もぐら鼠から狼へ、早がわりか！」

「虎だ、虎だ！ 虎夜又さまの郎党だ！」

「しっ！ 静かに！」

兵は、首将の虎夜又正儀が、およそ一月ぶりで虎がしらの兜をかぶったのを見て、いさみ立っていた。

玄々寮と城外の岩壁とをつなぐ秘密の地下道とは全然別に、一大坑道がうがたれたのは、今夜のような出撃のための設備だった。その坑道をくぐりぬけて城を出るなら、包囲の敵陣へひそかに迫ることが出来るのだ。

地下の大坑道が掘りあがるまでは——と、城兵はみな待った。だが、その工事がすっかり落成しても、虎夜又は、相変わらず玄々寮で、書物を読んだり、酒を飲んだりして、敵が攻めかゝって来れば、ほんの普通に防がせるだけであつて。兵は、奇襲の出撃命令の下るのを、今か今かと首をながくして期待したから、隧道工事の竣工した日から今日までの七日間は、じつに待ち遠しかった。

兵のみでなく、一ぱしの将領株でも、やはり想いは同じだった。

それが——

いまぞ出撃！

三

「驚いたのう」

「和殿も、一言半句つけなかつたの」

「む、拙者、はじめて頭がさがつた」

「只今から、乙どの呼ばわりは断ぜん、止そうではござらぬか？」

「いかにも。館じや館じや！」

「やはり血統は争われぬて、正成の殿の御三男だ」

「われわれの館、楠氏の当主と仰ぐにたる御智謀じやのう」

「まさしく、奇想天外の妙計だ」

「必勝うたがいなしの御作戦だ」

貴志右衛門や、矢尾新太郎や、宇佐美成時、安間余一などの諸将が、こんな具合に語りあつた。

召集された枝城、出城、哨壘、防砦の守将たちは、今晚から明晩へかけての作戦の一般方略を虎夜又から告示されたのであつた。

会所の広間へ、恩智正一が、ここにこ顔で出てきて、

「方々、どうじゃ？ 吞舟の魚は支流に游がず！」

と、言つた

「いや恐れ入つた」

「わしも、城の前の敵軍を襲うものとはばかり思つていた。ところが、なんと驚ろいたことには、今夜の夜討ちは、敵の注意をみだすために過ぎぬとはのう」

「まことにな。目ざすは大和の師直軍とは、思いもつかぬこととござつたぞよ」

と、云つたのは、安間余一だった。

虎夜又はこよい、隧道から奇襲の兵を放つて敵の陣営を惑乱させ、その狼狽を利用して、城内の兵の大部分を大和へ移動させようとしていたのであつた。

恩智が云つた。

「三万の大敵に囲まれたこの城を、空にして、大和方面の敵軍を襲うなどということは、先々館の御智謀をもってしても容易に考え得らるゝものではなからう。——貴志、宇佐美」

「お、和殿はいよいよ——出撃か？」

と、右衛門と成時が、恩智をみはつた。

「む。——お身たちは、各自の持ち場を衛つてじいつとしておれば宜

いのだ。矢尾、おぬしにも頼むぞ、大切なのは明日だ。枝城から兵をこゝへ移す必要はないのだから、こゝはいかに無人でも、おぬしらは平気な体でいてくれたら、それでよい。——安間、お許は大和へお供で、さるゆえ仕合せじや、はなばなしい奮闘をいのるぞ」

「働きまする」

と、余一が答えた。

安間余一は、恩智の叔母の子であった。

「興武は、飯盛山でみごと籠城をつづけているし、わしは今夜の夜襲の将を承わつたし、そこでお許から功名して貰えば、亡き祖父さまもどんなにか、泉下で喜ばれることであろうぞ」

「正一どの！」

「余一！」

その昔、故正成のいまだ若かつた頃から、楠氏の老臣として重きをなした恩智左近満一は、正一と興武にとつては祖父、余一からいえば外祖父だったのである。

「さらば」

恩智正一は、兜を持たせておいた兵を、手招きした。

出撃の奇襲部隊の兵数は、五百であった。——夜はもう戌——九時を過ぎていた。

四

じつとりと曇つた夜の水分には、遅れ咲きの梅林が、いまを盛り暗香をたゞよわせていた。

与茂平が、腹巻をつけて、馬の轡をとつた。度々平は、馬の尻尾に肩をふれさせた。

東の城門を出た虎夜叉正儀は、一軍の先頭に立つて馬を進めて、いま水分の本邸の前まで来たのであった。

梶丸だけがたゞ一騎、虎夜叉に先行した。

三千の精兵のうち百あまりが、馬尾についてきたので、その他はみんなまだ城門をでなかつた。奇襲部隊が前面の敵陣をおびやかすのを合図に、出発しようというのだった。

「殿、お立ち寄りなされますか？」

と、梶丸が馬上で、後ろを振りむいた。

「む。お会いしてゆこう」

虎夜叉が、梶丸とならんで、水分館の表門へ近づくと、そこには屋敷の郎従や若党下部どもが群れて、出迎えていた。門内の楠木の老木の根がたには、篝火が焚かれて、そのそばに、後室久子の方が腰元たちをつれて立っていた。下赤坂からも桐山からも、虎夜叉の出陣をさつき報らせて来たのだった。

「母者びと」

馬からおりた虎夜叉へ、

「お弔い戦さに、出馬さるゝと聞いて、母は嬉しう思いまするぞや」

篝のあかい火影で、母堂の顔をしずかに眺めて、

「お弔い戦さではござらぬ」

と、虎夜叉が云つた。

「でも——師直へは、惜しくも討ち洩らしたという先館の、恨みが遺つておるではないか？」

「いや、亡き兄上の遺恨をはらすべく戦う正儀ではござりませぬ」

「しかし師直をうち破らば、それの上越す回向はありますまい」

「いえいえ、四条畷の靈魂へ、手向け草をさゝげたいというような、あまい気持ちは、露ござりませぬぞ」

「まあ、それを甘い気持ちなどと——？」

「母上、師直はいま、新行在所の穴生を、側背から衝こうとしております。吉野を焼いてなお飽きたらず、一たん橘寺へ還した軍ぜいを、ふたゝび進めて、穴生と相へだたること遠からぬ音無川原まで迫っている」

「お、それは私とて、なんで心安かろう。もつたいたなくも吉野の宮殿にまで火をかけたほどの逆賊どもが、穴生に迫らば、たとい天陰あればとて、阿氏川入道の城は小城だし、兵はせいぜい五六百——隆資卿や吉水法印の軍勢では、なんの頼みにもなりませんし——」

「それ御覧じろ、危機じや」

虎がしらの兜の、目庇の下で、双眸がらんらんと光った。

「打破しなければならぬ危機でござる。——ある程度までは天陰にたのめる。二万の兵を擁しながら師直が、音無川原で滞陣すでに幾日かにおよぶのも、しよせんは行軍の困難があるからでござりまする。だが、黒滝川、丹生川の峡谷に、敵を進入させては、事態が非常にむづかしくなる。師直の荏苒に乗じて明日は、手痛くたゞきつけます。危機とは申せ、その到来はそれがしが、かねて期したることゆえ、たゞいまから逆寄せに寄せてまいって、一挙に敵を、宇智郡の外へ、追いちらしましょう。——まことに危急の場合ながら、母者人、ふかくはお心をお痛めあるな」

「お、虎夜叉！」

後室は、さも頼もしげに云ったが、すぐにまた案じ顔にかえって、

「おん身に、成算が——おありか？」

そう訊ねると、

「成算なしに動く正儀と思召すか？」

「でも、三千で——二万の敵に——？」

「は、ま、まともな合戦などは仕らぬ」

「そりやもうおん身のことゆえ——」

「母上。では明瞭と——御安堵あれと申そう」

後室は、うなずいてから、

「そんなら大和の方へは、気をかけますまい。おん身を信じて吉報を、まつことにいたそうが、あとの東条に心配はなかるうか？ 本城が空では、こゝろ細いのう！」

と云った。

虎夜叉が、

「御無用」

と、手を振った。

「その御心配もいりませぬ。留守の安全を期すための、こよいの夜討ちでござる」

そう答えたとき、梶丸が叫んだ。

「お、火の手、火の手っ！」

与茂平も叫んだ。

「あれあれ首尾よく、火の手が、火の手が！」

ちやうど東条の真北から、真西へかけての暗い空が、ぼうーと赤く染まった。と、見るまに灼熱の焰のさきが、めらめらと揺らぐのが、一カ所、二カ所——何か所かにながめられた。東条の城外、石川の広い河原に陣どった敵營が、恩智正一のひきいる奇襲部隊によって放火されたのだ。

警鉦の乱打が、ひびいて来た。

「おいしいことには、風がない！」

と、度々平がわめいた。

門の外にいた兵が、どつと快哉を叫んだ。

西の方は、東条、佐備、滝谷とつらなる丘の陰になって、こゝからは燄が見えなかったけれど、北の方は焼けるのが、よく見えて、ごく微かではあったが敵兵の、うろたえ騒ぐわめき声さえが聞えてくるのだった。

「母者。——師冬が、河原に築いた対壘にも、おそらく火はついたでござろう。こうして胆をうばっておけば、こゝのところ二日や三日は、たしかに安全でござりませうぞ」

と、虎夜叉が云った。

後室は、にっこりと頷いた。

（夜討ちとは、こうした夜討ちであつたのか！）

これならば、三千の兵が城を空にして出てきても、敵にけどられる心配はない、と久子の方は思った。

攻囲軍の陣地の東のはずれ——すなわち最左翼は、東条川が石川へ流れこむ、その出合いの近くだった。そして最右翼の西のはずれは、嶽山たけやまのふもとの、滝谷、彼方おちかたまでのびていた。

だが、それでははなはだ不完全の攻囲陣地といわなければならなかつた。なぜかなら、包圍線は、半円をえがいているだけで、東条の南、東の方面からは、まったく囲むことが出来なかつた。だから、包圍線の張られていない部分から、いつ何時、城兵が夜討ちをかけるか知れぬという恐怖心——それが、左右両翼のはずれを、極度に警戒させた。で、どんな晩でも、哨兵しやうべいたちが、どの陣地よりも嚴重に、寝ずの見張りをつづけていたのであつたが、秘密の隧道ずいどうは、そうした警戒からずんと離れた場所に、出口をもつていた。そこは岩壁のふかい壁ひだのかげで、師冬のきずいた対壘へは、むしろ近かつた。放火が第一目的の奇襲隊は、だから、白河夜舟と寝込んでいる敵陣の奥へ、まんまと近づけたにちがひなかつたのである。

「館」

と、梶丸が呼んだ。

虎夜又は、顧みて、

「安西の隊が、もうやがて見えるだろう」と、云つた。

「先陣させまするか？」

「む。そして二陣は、安間がよからう」

「第三陣は？」

「橋本兄弟を、三番四番に——」

「は。第五陣には？」

「生方」

「次ぎは？」

「わしの本陣」

「香月かうすきどのが、殿陣しんがりでござりまするか？」

「そうだ」

虎夜又は視線を、東条の西の空へやつた。赤い火の反照てりはえが、ますます濃くみえた。

後室が、

「のう館——長谷の真木野どには、二心ふたこころや、返り忠などの怖れは、きつとないであらうか？」

と、云つた。

虎夜又と三千の兵は、真夜中に青崩あうぐえの谷をのぼつて、水越峠をこえ、大和の室花むろばなの宿と名柄ながらの邑むらのあいだの森で、夜明け前に、真木野定観じやうかん父子のひきいる長谷寺の兵と相合うことになつていた。

「疑りぶかいようだけれど——？」

「お案じなされますな」

虎夜又は、焦げた空をながめつづけながら、答えた。

音無川畔の逆襲

—

吉野川が、下市から西へ一里あまり流れると、川瀬が急に左へまがつて阿太あたの懸崖あたの裾をあらう。そして阿太から下流しもを、音無川とよばれる。

音無川は、五条邑むらの南で、穴生の奥からながれてくる黒滝川の水を合わせると、名が紀ノ川と変わる。——師直は、山越をして穴生の背

後に出ることも、考えたには考えたけれど、やはり山になれない兵には、黒滝川について登る方がいゝと思つた。

そこで、まず音無川原に全軍を集結して、兵站をととのえた。本陣は、河原を見おろす栄山寺に構えられていた。

「は、真木野定観どの御著到でござりまする」

報告をきいた師直は、

「む。こゝへ通せ」

と、命じた。

寺の客殿で、諸将をあつめて、酒もり最中だったのである。

師直の膝のわきには、敷妙がすわっていた。吹きあげてくる夜の川風が、燭の灯をゆらめかした。春とはいえ、川風はまだ肌ざむかった。だが諸將の顔は、日暮れ前からの酒で赤々とほてっていた。

副帥格の細川頼春が、

「なにを愚図ついていたのだろう、室花からこゝまで三里ともない道のりを——？」

と、云うと、京極秀宗も、

「よほど悠長に出来ておる。役に立ちそうもないのう」

と、そばの佐々木道誉をかえりみたとき、客殿へ、真木野定観が三輪西阿と一緒に入ってきた。

「初めておめにかゝる三輪西阿を、同道仕まつた」

定観は、かつて京都で師直に会っていた。

「真木野。固くるしい会釈はいらぬ。さあ杯を進ぜよう」

そう云つて、師直は酒をつがせた。

「その杯を、三輪へ」

「頂戴つかまつる」

西阿が、飲んで返杯した。

「両所の参陣は、近ごろ殊勝の至りじゃ。たゞし——」

と師直は、鼻の脂肪を、片手でぬぐつて、

「二里半の道を、まる一日がかりの行軍とは、これまた近ごろ、稀有な暢気さじゃ、わはゝゝゝ！」

たかだかと笑うと、諸将もおかしがつて笑い声を重ねた。道誉が、

「脚をいためた牛よりも遅い」

と、云つた。

「較べるなら、亀の鈍さかの」

と、京極秀宗が附けたした。

「真つ平らな下街道でその態なら、このさきが案じられる。明日からはいよいよ、黒滝川の遡上りじゃ」

細川頼春がそういうと、定観は微笑して、

「亀か牛かは存ぜぬが、二里半の道は、ちようど一晌ほどで歩きましたぞ。おそらく貴方がたの御酒宴が、始まりましてから我々は、室花の宿を発つたことゝ思われまする」

と、答えた。

「ほう。では日没後に——？」

定観はうなずいて、あらためて師直へ、

「さんぬる正月、佐良々四条駈合戦のみぎりは、手前どもの衆徒中、吉野へ加担いたせし者もこれあり、拙者としてはまことに不本意に存じておりましたところ、このたびは高の殿御自身で大和へ御出馬——はやくも吉野を攻めおとされて、穴生をさしての御進撃とうけたまわり、この機においてお味方に参らずば、またいつの日か長谷寺の、幕府に対する恭順ぶりを、表明いたすべきや、と考えまして、真木野が力におよぶ限りの兵数を狩り集めたのでござる。それがため、きようは午後にはいたるもなお続々と、士卒が馳せまいり、ことに三輪の手勢、一千を待ち合す都合もござりましたゆえ、かたがた室花登が、日暮れ後と相成つた次第でござる」

と、述べた。

「ほう。それは神妙なお話じゃ」

師直は、上機嫌で、

「三輪の手勢のみでも——千と云われたの。して、着到の総勢は？」

「四千五百」

「なに、四千五百！」

機嫌はますます斜ならず、

「よくも集めたぞ、大部隊じゃ！」

と、讚めた。

真木野定観は、その賞め言葉に、頭をさげて会釈したが、ふたゝび杯を貰つてからは、ちらりちらりと敷妙の方をながめた。

それに気づくと師直は、

（ふ、この入道めも、好色だな）

と、思った。

二

敷妙は、睡られなかった。

（睡りたい！）

と、あせればあせるほど、目がさえて、後頭部が、錐の尖でちくちく衝かれるかのように痛んだのである。

（覚めていたとて、なんになろう？）

睡眠こそ、せめてもの救いだつた。

（ふかい睡りは、苦しい意識を消してくれるし、あさい眠りは夢を誘うて、虎夜叉さまのおそばへも自分をつれてゆく）

夢だけが、望ましい現実で、覚めている間が、おそろしくとも夢魔の魔されであつたなら、どんなに嬉しいことだろう？

（あゝ、こうした情けない、むごい夜昼が、いつまで——？）

続くか？ 続くか？

十七の秋までの自分は、幸福すぎた。両親を早くなくした不仕合せひとつを別にすれば、まことに申分がなさすぎた。堺港の大商人の

家の富は、なまなかの武家大名を凌いでいたし、兄伽羅羅は、慈愛の厚い兄だつたし、つぎの兄の舞髓は、すきな文学の親切な導者だつた。そして十五の春、懇望されて東条の侍女にあがつて——

（虎夜叉さまのお愛しみにひたつた）

それも、たゞお情けがかつたというだけでは足りない。自分の恋が、うれしくも、叶つたのであつた。——果報負けが、きたのだ。

でもまた、この正月までは、悲しいながらもどうやら辛抱できていたのに、なんとという悪辣な運命であろう——狝々とあだなされる獣人のふところに、われから身を投じて、しかもその醜怪な情慾の炎を、あらゆる手段で煽らなければならぬというのは！

そう思うと、敷妙はたまらなかつた。

（おゝ、けがらわしい！）

師直の躰が、すさまじく響いていた。

あくどい体臭と、酒臭いいきとが、室内の空気を、すつかり濁らせただからでもあろう、敷妙は胸ぐるしい嘔きけを感じた。

で、師直を自覚めさせぬように、そつと臥褥をすべり出て、足音をしのばせつゝ、入側から、戸をあけて濡れ縁へ、不快な鈍痛と、気だるさをおぼえる自分の体を、はこびだして、ほつと太息をついた。

そして、冷えびえとした外気を、吸つたり出したりしているうちに、すこしは体が浄まつたように思われてきた。

八日の月がかたむいて、暗い空に星が光っていた。深夜の陣営は、寂寞と川原にひろがつて、二万五千の将兵をしずかに睡らせていたし、音無川はもはや阿太の峡で、瀬音をつかい果したかのように、その名のとおり音も無く流れているのだった。

（真木野の長谷寺衆まで着到したゆえ、明日は進むのだという）

いく日かの後には、穴生も、吉野とおなじく、兇暴の火に焼かれるのではなからうか？ 新らしい行在所もまた、獐悪な朝敵のために冒されることから、まぬかれ難いではなからうか？

そう思うと、敷妙は、背すじに悪寒をおぼえずにはいられなかった。

三

(あゝ恐れ多い！)

敷妙はぶるぶる、身を慄わせつゝ、師直が穴生へ迫つたなら宮廷はいずこへ、お遷りあるだろうかを想像した。

穴生ならば、安らかに守護し奉るすべもあるのだと、梶丸から聞かされてはいたけれども、いかに嶮岨といつても、天然の要害だけでは防げるものでない。穴生という場所に、東条のような城と、兵とがあるなら、この大軍をも、あるいは支えとめ得るかもしれないが――。

(でも、東条の殿に――なにかしらお手だてがおありなのだろうか？) ちようど、その時だった。敷妙は、異様な物音を耳にした。

(おや？ なんの音かしら？)

眼のしたに、闇のなかに、漠々とつらなっている河原の陣所の方から、不思議なひびきが伝わってくるのだ。

風の音ではなかった。

むろん、水の音ではなかった。

(人の声？)

と、おもう間もなく、それは、わあーっという、擬いもない喚き声として聞えてきた。

(おゝ、あの声――おびたゞしいあの声は――?)

河原では――楠の精兵三千が、時刻を見はからつて突如、猛烈な襲撃を開始したのであった。真木野定観と三輪西阿にひきいられた四千五百の混成隊は、その実、三千の楠兵をふくんでいた。楠兵は、おびらに師直軍のまっただ中へ入つて、陣どることができたのだ。

河原では――京極、佐々木、細川の三つの陣に挟まれたような場所に、今夜の宿営を張つた真木野陣から、一千ずつ三隊にわかれた楠兵が、獰猛な喊声もろともに、迅雷、耳をおゝういとまさえ与えぬという勢

いで、一隊は、細川陣へ、一隊は、佐々木陣へ、さらに一隊は京極陣へ、まったく同時に突入したのであった。

音無川原は、忽然として、たとえようにも言葉のない混乱を現じだした。

なにがなにか解らないだけ、狼狽と、惑乱とがはげしく、おどろきと怖れとが激しければ激しいほど、死傷はますます算を乱した。

明日は悪路、難行の深山入りだから、せめて今夜一夜は、らくらくと寝よう、寝てやれという気で、武装は名残りなく、みずから解除してしまつた兵が、剣と槍と長巻と馬蹄との、いわばつなみに襲われたのだ。刎ねとばされた首が、半分もがれた頭にぶつかり、血みどろな自分の腕を、地べたで探しまわつてみたり、脚のもげたことを忘れて走ろうとしたり、喚こうと思うやさきに呼吸が絶えたり、主人が斬つたのは家来だったり、郎従の突いたのが将であつたり――。

暗さは暗し――敵は通り魔のような迅速さ。

「敵か？ 夜討か?」

と、酒の酔いも一瞬にさめて、京極秀宗は、おっとり刀で叫んだ。

四

「敷妙つ――敷妙つ！」

と、師直は、鎧半ぶん着ただけで、大刀のさげ紐を腰にむすびつゝ、客殿の入側や廊を、走りながら喚び廻つた。

かすかに、敷妙の音が、

「はいい！」

答えた。(たしかに答えた) と、そう思つて、師直は、

「庭だつ！」

と、叫んだ。そして外へ駆け出ようとしたので、側近の士の一人が、抱きとめて、

「殿、早うお馬に馬に、馬に――」

郎従の一人が、

「お部屋さまは、それがしがお伴れ申す！」
他の郎従が、

「私どもがお供つかまつる！」

そう云いざまに、庭へ走り出たとき、室内へは、部将の何某が、蒼白な顔で跳び込んで、

「館——館つ、総崩れ——総崩れつ！」

声を上ずらせつゝ、

「佐々木どのは——肩さゝき、あ、肩さゝきではない肩さきに……」
と、喘ぐのを、

「む、道誉が、道誉がなんと？」

「重傷を負われ——京極どのは討死——討死され……細川どのが行方
知れず……」

「おゝ、彼等が揃って敗れては、退くほかないな」

「館、かくなる上は瞬時も早く——」

「殿、殿つ！」

と、側近が声々にさげんだ。

「やあ敵、敵！ あの物音は敵でござるぞつ！」

と、縁端でどなる者があつた。

庫裡の方から狼狽えさわぐ声が聞えてきた。

「馬を引けつ」

そう云つたかと思うまに、師直は、庭へ走りおりた。

「敷妙つ！ 敷妙はいづくじや？」

師直も一生懸命だが、家来も安危のわかれみちだ。

「館つ！」

「敷妙つ！」

よばわる声と声とが交錯した。

「探せつ！」

と、師直が、たけるように命じた。

五

庭は暗かつた。

敷妙は、息をこらして、樹蔭にかくれていた。最初ひと声、師直に答えたきりで——答えるとすぐ、居場所をずんと別な方角にうつして、身を潜めていたのであつた。

自分をさがすための郎従どもが、なんべんか、そばを通りぬけた。おびえたつた彼等の断れぎれの会話を、つぎあわせて考えてみると、どうしても楠兵の夜襲にちがいないと、そう思わずにはいらなかった。どうしても楠兵の夜襲にちがいないと、そう思わずにはいらなかった。（天から降つたか、地から湧いたか——と、いま話して通つたが、そんな夜討ちが、ほかの人に出来るものでない。虎夜叉さまに相違ない。穴生を禦ぎまいらせる手だてが——あると仰しやつた東条の殿にちがいない）

敷妙は、異様な河原の物音を、夜襲だと感じたその刹那から、おゝ嬉しや今夜は東条の殿に逢えるのではないかと、思つたのだ。彼女は決して、自分の重い任務をわすれたわけではないけれども、逢えるかも知れぬと思うと、師直のそばへ行く気持ちには、とてもなれなかつた。

（どんなに叱られてもいゝ！）

敷妙は、樹かげにひそみつゝ、待つた。

（おゝ、松明！ 蹄の音！）

敵陣から奪つた照明を、今やふりかざして闇をてらしつゝ、驀進して来た一隊——その中央の馬上の将が、大音声に、

「楠虎夜叉ここにあり。やあやあ師直、出会い候え」

と、喚わつた。

（おなつかしや、あのお声！）

敷妙は、庭から、本堂の前の広場へ、走って行つた。

寺は、もうさつきから、庫裡の横へ進入した安西九八郎隊によつて襲われていたので、師直の側近の兵はおゝかた、裏門から遁れでて、残った者はみんな斬られていた。

安西が、

「殿——」

と、馬を寄せてきた。虎夜又が、

「九八郎。——師直は、無事に、逃がして遣つたであらうな？」

そう訊ねると、

「仰せの通り」

と、安西が答えたとき、梶丸がさげんだ。

「あれつ敷妙、敷妙どのが——」

松明の灯が、凄艶な美女のすがたを——顔を照らした。

敷妙は、他のすべてをわすれたように——取り乱した態で、馬側へ走りよつて鞍のはしにすがつた。

眸が、馬上の眸とあつた。

「おゝ——」

と、云つた虎夜又の面には、抑制をおしのけた感情が、ありありと映つた。けれども昂ぶつたその感動も、ほんのしばしで、つよい意志で置きかえられた。

「なぜ残つた？ なぜ師直のそばから離れたのだ？」

わあつと泣き入る声で、それに答えた敷妙だつた。——彼女の手は、馬腹の、虎夜又の膝に、脛当にすがつたのである。

およそ何人に接しても、慧敏な、明徹な理性のひらめきの曇るような彼女ではなかつたが、ひとり虎夜又のかたわらにある時だけは、はるかに愚かしくなるのだつた。

「くどくは云わぬ——そなたの重き使命は、やつと半ばが果たされたのみだ。働くべき基礎が、築けたにすぎぬぞよ敷妙。それ弁えぬそなたでもなかるうに——夜討ちと知つた歓びに浮かされて、ついふらふ

らと心まどわしたのであらう」

「殿——わが殿……」

泣きじやくりながら、

「かしこきあたりへの御奉公——殿への忠義と、心はきめても……堪えかねまする辛さ、悲しさ！ 師直という人非人に、弄あそばされても泣けぬ苦しさを、どうぞお察しくださいませ！」

「気の毒だ。不憫じゃ、だが、それを憐んでは、幕府に勝てぬのだ。朝敵を、ほんとうに破るためには、そなたを師直に預けておかねばならぬ。情ないようだが、あの狒々のそばへ戻つてくれ！」

虎夜又は、そう諭してから、

「九八郎。此女の輿を探させよ」

「は」

「すてゝ逃げたに相違ないぞ」

「は」

「師直め遠くは行くまい。此女を、送り届けるための宰領——梶丸そちに申しつけた」

「は」

「——のう敷妙」

と、虎夜又は、じいっと女の顔を見おろして、

「この正儀は、そなたの恩を、心の奥に牢記して忘れぬぞよ。わしのもつとも深い感謝は、つねに、たえずそなたにそゝがれている」

いわれて、敷妙は一入つよく、馬側の脛に腕をからめて、

「虎夜又さま！」

と、名を呼んだ。だが、その足を、正儀はかるくゆすつた。

「半年後か、一年後かはわからねど、東条へ還りうる日はきつとくるであらうぞ。さあ、それまでは頼むぞ！ 行つてくれ！」

「はい！」

残り惜しげに、脛当から手を離して、

「そのお言葉をふところに抱きしめて、わたくしは参りまする！」

河原からは、潰乱の敵兵を追いちらす呐喊の音が、なお聞えていた。

「輿が——見当りましたぞ」

と、安西九八郎が、庫裡の玄関に現われて叫んだ。

それをかくべき郎従は、すでに梶丸がきめていた。

六

河原から宇野への街道は、敗兵で埋まったし、街道ばたの原にもいく筋となく、退却兵の河ができていた。

街道では、走ろうと思っても、先がつかえて走れなかったから、逃げることを急ぐ者は、原へはみ出てやみくもに急ぐほかなかった。

師直は、精いっぱいの声で、

「止まれい！ 返せいっ！」

と、呶号したが、駄目だった。

師直の声も、馬の力も、堤をきった洪水のような潰走のいきおいを、さへ得られるはずがなかった。

まるでお祭りの群集にもまれる山車のごとく、師直はいまや街道で、進退をさえ失ったが、でもなお、声をふりしぼった。

「殿つ、大切なお生命じゃ、一刻もはやく平田まで——」

と、老臣の益子弾正が、叫んだ。

「生命も惜しいが、女も惜しいぞっ！」

師直は、叫びかえした。

「楠の全力をあげた逆襲は、そらすが上策でござるぞっ！」

弾正も、やはり山車の一つであった。

「闘うのではない。敷妙をさがしに返せ、戻せ！ ええ戻せというに！」

師直の馬は、四五人の兵を蹴ちらして、路から畑へ跳び出した。

「館あ、天下のためには、女人のごときを——」

「馬鹿あ、天下は天下、女は女だっ！」

真つ暗な畑のなかを、声を目あてに郎従どもが、師直の後を追って走った。走った。

さみだれ雲

一

「内侍さま。おもえば夢のようでございまするのう」

後室久子の方は、あまりにも面やつれのした弁内侍を、またあらためてじいとながめた。その眼が、涙にうるんだ。

久子の方の泪は、自分がいま語った四条畷の戦いや、清涼寺に埋まったわが子の首からも誘われたが、それよりも内侍がなお恋々の情を断ち得ずにいるらしいさまを、哀れと感じたのであった。

だが、内侍の言葉は意外だった。

「お歎きなさいますな、返らぬことを」

（おや？）と、後室が思ったとき、内侍は、

「もはや返らぬことでございまするものを」

と、附け加えた。

「でも——？」

「でも——その後はよいことばかり——二月このかた、芽出度いこと続きでございます。正儀の殿の、さながら軍神のようなお謀計で、音無川原の大勝利——二万とやらの大敵が、ちりぢりばらばら、師直もほうほうのていで京都へ、逃げて還ったため、穴生の宮居は、泰山の安らかさでございます。また三月から卯月にかけては、東条のお城でも度たびのお勝ち戦さで、城攻めの敵方はもう、逃げ腰の遠巻きじゃと承りましたし——なにもかも、みんな正儀の殿の、お力では

「ごさいませぬか？」

「内侍さま——」

「お母堂さまのお歓びは、まあどのようであらうぞと——」

「もし。その歓びは大きゅうございませぬ。つい昨晚も、寄手の副将、高師茂の首を討ちとりましたので——」

「お、復ぞろお手柄あそばしたか！」

「うれしさは、お言葉どおりでございませぬが、でも内侍さまのお心憂さを、おもいますと、わたくしは……」

後室は、そう云いさして内侍の顔を見りながら、

「いぶかしい！」

と、感じた。自分の推測に、かなりの誤りがあったのではないかと、とも思われた。

（諦めが、おつきなされたのか知らず。もはや返らぬことだと仰しやつた——）

雨の音が、またも、聞えてきた。

そとは、やみそうもない五月雨に、樹も、石も、土も、ぬれに濡れて、水分館の庭の池は、あふれるくらい水嵩が増していた。

内侍が庭へ目をやったので、後室も戸外をながめるともなく眺めたが、（この雨つゞきでは、天ノ川、黒滝川の谷々は、さだめし出水で、穴生からの路は、どんなにか悪かつたであらうに——）

路のわるさをも厭わずに、内侍が訪ねて来たのは、なんのためだろうと、後室は考えてみた。

だが、見当がつかなかった。

よほど訊いてみようかとも思ったが、止めて口をつぐんだ。黙っていても、内侍の方から云いだすにちがいないと考えたのである。

しかし内侍は、たゞ虎夜叉の噂ばなしばかりするのだった。

「穴生での、正儀の殿のお人氣は、それはもう大層なものでございませぬぞや」

とも、云った。

新待賢門院が、とりわけ御鬘あそばす模様なども、物語ってから、

「二十一というお若さで、あゝした勲功を、おたてゝございませぬもの、後宮の女子たちが、お噂に浮身をやつすのも理りでございませぬぞえ」

とも、云った。

（おや、おや？）

後室は、いよいよ不審をふかめた。

二

久子の方は、弁内侍の言葉をきながら、考えた——

——内侍は、もはや悲恋を泣いていない。正行のことを、すっぱりと、諦めきつている。亡き人を、討死した人を、諦めるのは当然ではあるけれど、しかし正行の死後も、正行への思慕は依然たてない内侍かも知れぬと、そう思ったのは、自分の思いがちだった。自分が想像したほど内侍はいっこくな女ではなかった。もともと情けの言葉ひとことかけたわけではなく、初めから内侍の恋を拒みとおして死んで行った者に、なおも未練をつなぐとすれば、およそ聡明とはほど遠い女としか云えなかつたであらうが、なぜ拒んだかという正行の心持ちを理解して、いさぎよく思いきつて、宮仕えにいそしんでいたのなら、あの美しさとあの教養——日野という家柄からいっても——まことにふさわしい我が家の嫁——。

と、後室は、そこまで考えたとき、忽ち、さつきからの不審が解けたような気がした。

（虎夜叉へ、内侍は——？）

いまの話だけでも、憎からず思っていることは明らかだが——

（あるいは恋——新しい恋を——？）

そうなら、なんとという俵いだらう！

と、後室は思った。久子の方にとっては、現在では掛け替えのない

独り子となった虎夜叉の、女色に関する品行が、苦勞でならなかったのだ。今日びは、それがたった一つの苦勞であるときえ云えた。

後室は、虎夜叉から、聞にかゝわったことは、一言半句も聞かされていなかった。だが、東条の城の密房に、相変らず女を侍らせていることは、明らかだった。幾波と呼び、折鶴と呼ぶ侍女が、その玄々寮の伽の女だということは、告げられていない後室だったけれど、しかし、東条と水分のことだから、たとい虎夜叉の口からは聞かなくとも、大概はわかっていたので、後室は一日も早く、虎夜叉に妻を迎えさせねばならぬと考えた。

（敷妙とやという美貌の側女が、どうしたわけか今は高師直の寵妾になつて、戦場にまでも随いて来たのを、音無川で生捕ったが、それをわざわざ敵方へ、おくり返してやったとか、遣らぬとか）

聞くのが、つらかった。

（あゝこの麗人を、我が子の嫁に出来るなら——）

久子の方は、そう思うと、もう逡巡つてはいられなかった。

「あの——内侍さまは、お自らは、虎夜叉のことを——正儀をどう思召しますか？」

訊ねられて、弁内侍は、

「と、仰しやるのは？」

なにかしら異常な熱意が、後室の胸にこもるのを、感じたのだった。

「と、申すのは——わが子正儀がもし、内侍さまあなたを、妻にほしと申し出ましたなら、なんと御返辞いたさげましようか？」

後室は、単刀直入にきりだした。

「まあ！」

さも意外らしく、ほとんど叫ぶように内侍が云うと、

「ぶしつけは御容赦ねがいます。年老つては気がもめてなりません。どうぞ——あなたのお心をお洩らし下さいませ」

と、久子の方はいよいよ迫った。

三

「おもいも寄らぬことでございます。今日はお暇乞いにまいった、わらわでございまするものを」

「え？」

と、こんどは後室のほうが愕ろいた。

「宮中から、永のお暇をすでに頂きまして、これよりすぐに京都へのぼり、洛外の小倉山、清涼寺の堯算上人を導師とたのみまいらせて、落飾いたすつもりなのでございます」

「おゝなんと？ 御落飾——この世をお捨てなさいますのか？」

「はい。墨染めの法衣にさま変えまして……」

「おう！」

「正行の殿の——お首塚のほとりで、朝な夕な、沙弥尼ながらも怠らず、回向さゝげて世を終わる心でございます」

そう聞いては後室も、返す言葉が見つからなかった。

声の出るかわりに、泪が湧いてこぼれた。

軒端をおちる雨だれが、濡れ縁さきの敷石をたゞいた。

「後室さま。髪を剃つて浮世から、離れようと思ひさだめましたのは、去年の初夏、ほとゝぎすの鳴きそめたころ、わらわがこの館へ吉野から、正行の殿のお後を、追うてまいったあの日のことでございました。亡き殿が、はじめて咯血あそばしたあの夜のことでございます」

内侍の声音は、泣くよりも遙かに悲しそうにひびいた。

（あゝやはり、やはりそうであつたのか！）

久子の方は、顔を手でおゝった。

「後室さま。四条畷で御戦死と知れたとき、今こそと、思いつゝも宮居の御動座やら、穴生での御所づくりやら——いろいろと事しげく、今日が日まで、つい延びのびに相成つたような訳でございます。——吉野を焼いた朝敵も、正儀の殿のお働きで、退散いたしましたゆえ、

ちようどよいしお、こゝろ安う清涼寺へおもむかれまする」

そう告げ終わって内侍は、別れの会釈をしようとした。

「もし内侍さま」

「俗名にてのお目もじは、これが最後でございまする」

「もはや止めだては致しませぬが、もうやがて日暮れじゃ。せめてこ

よい一夜は、こゝにお宿りくださいませ。正儀とても、東条から参つて、

お名残りを惜しみましょうし——」

と、云つたとき、

「申上げまする」

使番が、入側に現われたのだ。

「館の殿が見えさせられました。北畠准后さまと御一緒にござります

る」

思いがけもない、親房卿の到来というのは、なんとよい折に——と、

その後室は思つたので、憂れわしい顔にも、仄笑みがうかんだのであつた。

四

その夜、弁内侍は、水分に泊つて、ゆくりなく准后にまでも、別れを告げることができた。

親房卿は、高師泰の攻囲軍が、榎尾城をせめあぐんで、五月雨月に入つてからは、まるで戦う意志を萎えさせてしまったため、心にも躰にもひまが生じた。そこで、わずかの衛兵だけをつれて東条の正儀をおとずれたのだ。

東条の城は、准后には初めてだった。水分の館も、これが初訪問であつた。楠累代の本邸も一覽したいとはむろん思つたが、それよりも東条の城につよく心をひかれた。というのは、去年の暮、榎尾山で虎夜叉から、吉野の行宮を穴生へうつすべき必要と、さらに南北の御両朝をおん合一へ——という遠大な抱負を告げられたとき、東条の城が、

穴生さえも危い万一の場合、かしこきあたりへふたゝび御動座を仰いでも差支えないように、構築にも、造作にも、念をいれてあることをも、ついでに聞かされたからであつた。

准后と虎夜叉とは、正行の首塚にかしづくために尼となる弁内侍とわかれて、水分から東条へもどつた。

そして、翌くる朝——

「穴生へ参ろうではないか？」

と、親房卿が云つた。

「天機奉伺でござりますか？」

「それが第一」

「第二には？」

「穴生の名を、名生るゝを賀す、と書くことに改めたく思う」

「ほう、賀名生。しごく結構」

と、虎夜叉はほゝえんで、

「ほかに」

「臨時の除目を奏請して、和殿の官位を進めたい」

「いや、それは御無用。左馬頭で、過分に存じまする」

「いやいや、御動座についての発案者でもあり、音無川の偉大なる戦

功もあるに、左馬頭とは低きにすぎる。——ともかくも、共に参ろう」

「お供は、仕る」

虎夜叉は、御遷幸の提唱者としての責任からも、新行在所の模様を早く見ておかなければならぬと、だいぶ前から考えていたのだつた。

梅雨は、きょうも降りであつた。

供は、北畠の諸大夫信重その他と、楠の安西九八郎、尾鷲梶丸ら、合わせても五十名ほどの軽装——

東条から穴生へのもっとも近い道は、金剛山の西尾根の鞍部になつている千早峠の、けん岨をこえて、五条邑の北の有家へ下り、音無川を渡つて黒滝の谿へ入ることだつた。

峠みちは、ひどくすべった。

「命がけじゃの」

と、准后が云った。

「下馬あそばせ」

正儀は、そう声かけて、自分から先に馬をおりた。

長雨の時節でなくてもこの峠は、ひどいような難路だった。老いた親房卿には、徒歩となると、息ぎれがして、こたえた。だが、幾十奴か知れぬ谷底へ、墜落の危険は、もちろん歩く方が少かった。

朝からの細雨は、やまと降りやんだけれど、霧は、濛々と、ふかい谿から立ち昇って、そばだつ岩石を、けわしい岨路を、たどり進む人と馬をかすめたり、つつんだりした。

「水越峠を、廻ればよかつたのう」

だが、そういう准后が、この路を通つてみたいと云い張つたのであった。

五

千早峠のてっぺんは、尾根の鞍部だが、海拔二千六百尺。

南斜面の急勾配の直下をよぎる音無川・紀ノ川の河畔は、晴天の日ならどんなにか、翠らんの美をみせたことだつたらう。

「惜しいの」

と、親房卿が云った。

たゞ模糊と雨霧にぼやけた峡谷を、見おろしながら、一行は簡素な中食をとつた。

「握り飯など——一位の卿は、お初めであらましよう？」

虎夜叉が、微笑すると、

「初めてはなけれど、珍らしい」

そう答えた准后は、

「昨日は、お饗応の美酒、佳肴に満喫いたしたせいやら、この素材さ

——ことさら妙じゃ」

と、笑つた。そしてすぐ云いついだ。

「しかし和殿の飲食物巧者は、噂にはきいておつたが、こたび初めて知つて感じ入つたぞ。あの梅酒のえならぬ風味といふ、羚羊の肉の漬物といふ、とくに鶴の塩醃の味加減のごとき、日ごろの御丹精がうかがわれた」

「それは意外なお賞め言葉——。みんな人まかせでござります」

「いやいや人まかせでは、あゝは参らぬ。東条へ行けば、飲食物の美味いことゝ、侍女の綺麗なことには、誰れもが驚ろくと、榎尾で、和田の助氏から、たび重ねてきかされたが、まさしくそのとおりじゃのう」

「助氏が、そのようなことを——」

「要するに、美醜の差別にたいする感覚が、すぐれて鋭いからでもあろうが、飲食物の方はとにかく、和殿生涯の伴侶たるべき妻定めともならば、とても容易なことではござらぬの？」

親房卿は、なにやら意味ありそうに莞爾と、顔の皺をうごかした。

(きよの、准后は、どうかなされたぞ)

似合わない口ぶりを、変だとは思つたが、そう深くも気にとめず、

「なにを仰せらるゝぞ。たゞ美味いものは、不味いものより好ましく、醜は美に如かずという、誰れもが抱く感情しか、もちあわせぬ私でござりまする」

「なかなか。然うではないらしいぞよ。——親房が忖度にあやまりなくば、いざ婚姻という場合、配偶の選択には、ずいぶんと標準が高かろう。かなりに妖艶な才媛でも、お身の頭は、おそらく諾とは動くまい」

「はゝゝどう仕りまして」

と、虎夜叉は、苦が笑いして、

「それがしごときは、婚姻に、やゝこしい選り好みいたす柄ではござりませぬ。氣質の尋常な、身体すこやかな女でさえあれば、容貌の美醜などは問いませぬ」

「ほう、身体が強健でさえあればの」

なぜか、准後の眼が、にわか希望をたぐえたかのように、輝くのだった。

「正儀、わどのは然し、わどの自身が愛しとおもふ女ならでは、娶らぬでござろうがな？」

「いえ、かならずしも恋愛を要しませぬ」

「どうかのう」

信ぜられないという語気であった。

虎夜又は、ふたゝび苦笑して、

「恋い恋われて結びつく婚姻——を、いやとは申しませぬが、恋なき結婚を拒もうとも思いません。時と場合によっては、敵方の女を妻とすることをさえ、あえて辞せぬ私でござりまする」

と、答えた。

「ふうむ！」

准後は、目をみはって、

「敵の女と——策略結婚をも！」

さすがに驚いたに違ひなかった。

「ふうむ、どこまでも超凡じゃのう。——すると和どののは、結婚ということを——つまり婚姻そのものを、重く観ておらぬことになる。亡き兄者とは、その一点でも、極端な相違じゃ。正行はあまりにも婚姻を重大に考えすぎて、かたじけない勅諭をすら辞みたまつた。和どのならばあの場合、よしんば内侍への恋いごころなくとも——いや、相手がたとい見知らぬ女にもせよ、勅諭とあればありがたく御受けいたしましたことござろうな」

「仰せまでもなし。それがしなりせば、謹んで頂戴つかまつた」

その、はつきりした答えを聞くと准後は、満足げにうなずいた。

六

降りの急勾配を、おりきると、親房卿も虎夜又も、乗馬の鞍上にもどった。そして二人のあいだの話もまた、峠のいたゞきでの中食の際の話題にもどつていた。

「いわゆる純真な心というものは、えて単純すぎる偏屈になりがちじゃ。——弁内侍の恋を斥けた態度などは、まさしくそれであつたのう」

「尼となつて、ひたすら菩提をとむろうにも、これが自分の夫の首塚であつたなら——と、思わずにはおられますまい。たとい浮世を捨てたものにも矢張り、なにかの慰めがのうては……」

「そうじゃ、慰めらるゝ追憶がほしかろうに」

「そうした想い出のないことが、傷わしく思われまする」

「——小倉山までの道中、無事であつてほしいが……」

親房卿が、そういうと、

「その点、懸念なきように、今朝ほど手配を充分にいたし置きました」と、虎夜又が答えた。

やがて、越替、有家の里、五条の邑をとおりすぎて、音無川の橋をわたると、そこはもう黒瀧・丹生峽の入口だった。

大天井ガ嶽の水源からあふれだす出水は、うずまく濁流となつて、岸に激していた。谿にひびいていた。水は、ところどころ岸を越えて、丹原から生子にいたる間の民家の床下をひたしていた。江出では、崖が大きく崩れていた。巖石が、樹を倒していた。土砂が、路をふさいでいた。

「よほど降つたと見えるのう」

と、准后が虎夜又をかえりみた。

七

阿氏川入道の城は、柚野山にあつた。

そこは、丹生川と黒滝川の出会いの、城戸と呼ばれる場所から、たちそばだつ要害で、この二つの谿谷を天然の大塹壕としてめぐらしていた。のみならず、背後には、天狗倉嶽が樵夫のかよう径さえもない峨々たる峻峯を、聳えさせていた。

この阿氏川城こそ、穴生の行在の堅固な前衛だった。

吉野から遷った宮居は、この城と丹生川上神社とのおよそ中ほどの地を卜して、まことに恐れおそいことながら、俄かごしらえの、粗末な普請で建てられた黒木御所であった。檜木の良材はいくらでもあったが、建築に念を入れるだけの時間と人の力に、余裕がなかったのである。御所でさえ、そうした恐懼すべき状態だったから、ましてや公卿以下の棲家となれば、それこそ本當の仮普請で、たゞ雨露をさえぎるだけのものだった。けれども、行在とともに群臣が移ってきて、そのうえ隆資卿の率いる混成軍の兵も駐屯していたから、人烟まれな山かげが、忽然としてさまを変えたのであった。

「腐ってしまふのう。また降ってきた」

「どうやら薄日ぐらい射しそうな空模様には、なったかと思うたら、糠よろこびじゃ」

「こう湿けては、躰にまで黴が生える」

「黴も、茸も、生えよう生えよう。まるで野宿と変わらん住まいじゃ」

「早う梅雨が、あけてくれぬことには、ほんまに身うちが腐ろうぞ」

どの仮屋でも、人がはみ出していた。

立ち樹が、そのまゝ、柱になつていた。崖が、壁に代えられてもいた。「梅雨が明けたら、もう少し、人間の住まいらしく建て変えて貰うことだ」

青侍たちが、話合っているところへ、仮屋のそとから朋輩が一人はいつてきた。

「どこをうろついていたのだ」

「たいそうな見物をして参ったぞよ」

「この雨降りに、なにを申す！」

「五月雨だとして、観物はあるものよ」

「なんぞ、退屈さしましても出来たのか？」

「観ようと思えば、去年吉野でも観ておけたのだが、あの頃はその気がなかったゆえ、こんどの今日が初見参じゃ」

「これさ、なにを見て来たというのだ？」

「さすがに堂々たるものじゃ。颯爽たるものじゃ」

「これこれ、鬱陶しい陽気に負けて、気が変になつたのではないか？」

「馬鹿を申せ、音無川の勇将をみて参つたのだ」

「音無川の——？」

「楠の殿よ」

「お、この穴生へ——来られたのか？」

「准後の卿と御一緒じゃ」

雨は晴れずとも、穴生の人の心は、たちまち燦々とかざやきわたつた。

八

つぎの日の午後のことだった。

正儀は、参内した。

天顔に咫尺し奉つて、御礼を言上したのであった。正儀は昨日の朝、東条で親房卿へ、左馬頭でも過分に存する旨をこたえておいたけれど、今朝の除目によつて左衛門督に任叙された。亡兄正行と同じ官位だった。聖恩の鴻大を感じこそすれ、しいてこれを拝辞すべき理由はなかったから、かたじけなく御受けした。そのお礼に禁裡へ伺つたというわけだった。すでに左衛門督となれば、衛門府の長官だから、殿上人の列に入ったのである。家門の荣誉、身の面目にちがいがなかった。で、謹しんでお礼を申しのべて、退下しようとした時、

「待たれよ、楠左衛門督」

と、呼びとめたのは花山院内府だった。

(何事だろう?)

と、思っていると、内府は歩みよって、

「勅諭じゃ」

「はあ」

虎夜又は、居ずまいを改めて、肅然と平伏した。

「女院御所にはんべる伊賀局を、妻に賜わったぞ」

内府の語調は、すぐに変わって、

「おん身の妻に賜わったぞよ、有難くお請けせられよ」と、言い添えた。
(しまった!)

虎夜又は心ひそかに叫んだ。

(ちえゝ准後の卿に、まんまと、してやられた! 一期の不覚!)

——伊賀局といえは、稀有な勇婦——吉野から御動座のみぎり、国母の女院のおんために、梅や檜木を根こぎにして、丹生川に橋を架け直したという、剛力無双の女子だ。とんでもない驍勇な、体格抜群に偉大だという噂の女子ではないか。婦女の怪腕、あらくれ業——と、思うと虎夜又はおぼえず身ぶるいが出た。

「楠どの、局をお見知りかの?」

「一向に存じませぬ」

「吉野で一度出逢われたはずじゃが——」

「とんと覚えませぬ」

「しかし、局の身元については、聞いておられような?」

「四尺八寸の大刀やら、二十八貫の鉄棒やらを、むやみと振りまわしたという、篠塚伊賀の女とだけは、承わってをりまする」

そう返辞をして、虎夜又は眉をしかめた。

(油断は、大敵だった)

花山院内府が、

「おん身は、妻定めにわが恋などはいらぬ、女子の身体強健でさえあれば、容貌の美醜のごときあえて問はずとの趣き、かしこくも叡聞

に達し、さすがは正儀ぞ、いみじき心構えかなと、御感いともふかくさてこそ只今のとおりの御諭と相成り申した」

と、いった。

(口が、禍いのもとか。准後も、罪な方だ!)

心で呟いたとき、

「さあ、いかゞでござる?」

「……………」

「お請けの言葉が聞きたい」
と、内府が促した。

虎夜又は、(女院の思召しがまず動き、そして准后が、お頼まれになったのに違いない)と思った。(おそらく、女院のお使が密々に、横尾山の准后のもとへ参ったのだろう。そこで准后がお膳立てをなされた。たくまれたお料理の箸を、自分はいつかうかかと採ったのだ。——だが、女院の思召しは、特に尊重しなければならぬ自分の立場ではなからうか? 女院のおん肝煎りなかりせば、行在御動座の朝議は、もつと遙かにもつれて、どんな不祥事が起きたかも知れなかった。その点で、厚い御恩を蒙っている自分だ、とすれば?)

そこまで考えたとき、とつさに覚悟がきまつた。

「左衛門督」

と、ふたゝび促す内大臣の声をうけて、

「忝なく頂戴つかまつる」

虎夜又はそう、勅答しまいらせたのであった。

九

北畠准后が、女院御所へ参入したのは、暗鬱と梅雨空が暮色をたゝえた時刻だったが、一步屋内に入るとさながら別の世界でもあるように、燈火という燈火が、早々とまたゝいていたし、人という人の面持は、それらの燈火よりもなお明々とかがやいていた。

「ひとえに、お蔭さまにて——」

新待賢門院は、丁寧ていねいに会釈えいせきされた。

そしてこまごまと、謝意れいいを述べられた。

「女院」

と、准后は笏しやくを揺すつて、

「決して、この親房が力ではござりませぬ。ひつきようこれは正儀の、賢明が、成就じゆうじゆの実を結ばせたに他なりませぬぞ。彼れ正儀は、去ぬる正月、宮居を吉野より移すについての御助力をば、胆に銘じて感佩いたしております。正儀という男は、親房に言質をとられたからと申して、なかなかそのみの理由でおのれを枉まげるような人物ではござりませぬ。されば、遡さかのぼのぼりますれば、女院おんみずからの御聡明に、源みなもとを發はしましたる流れが、抱擁ほうようひろやかな楠が池に、うけ容ゆるれられたものと存ぞんずる」

「でも、貴卿あなたのおとり計はかりらいなくば、正儀いかに賢うても——」

「いえいえ、私は単に、きつかけを拵しらえたのみでござりまする」

准后は、そう答えた。

「これ、局」

女院のお声に、伊賀局は准后のまえに進みでて、羞はづかしそうに頭をさげた。

「結びの神じゃ。お礼申せ」

だが、局は、その驍勇きやうゆうにも、その年齢にもはなはだ不釣合ふてあいに、そしてまた持ち前の才気と、ふだんの能弁とを、どこにか置きわすれでもしたかのように、ただ羞恥しゆうちに顔を赭あからめつゝ、慇懃いんぎんにお辞儀をくりかえしたばかりだった。

「懸けた想おもいがかなって、さぞかし嬌悦きやうえつであろうの」

准后から、そう云われても、応答おうたが口から出なかつた。

肉体は、ずばぬけて豊満でも、情事にかけては、ひどく初心しんごであった。その初々しいようすを、親房卿は笑ましげに眺めながら、

「正儀どのは、南山一の殿御じゃ」

そう云うと、女院も、

「勅詔しゆくじゆまでたまわつて——ほんに局つぼねは果報者よ。正儀ほどの夫はなかりうぞや」

と、云い添そえられた。

血が頭へのぼつて、唇がかわく局だった。はずむ鼓動は、昂たかまるばかりで、嬉しいのか苦しいのかさえわからなかつた。

親房卿へ、女院が、

「お請まけして退ひつた楠は、貴卿あなたへは何と申しましたか？」

と、問とわせられた。

「たゞ、忝かたじけない御詔賜みことのたまひわりしゆえ、女院御所の伊賀局を、妻に頂くことにした、とのみ——」

「と、のみ？」

「たゞ一言！」

「まあ！」

「そこが正儀の正儀たるところでござりまする」

「でも——憤いらりを貴卿に、含こんでおるのではないか知ら？」

「いえ、そのようなことは、断ことじてござりませぬ。——その証拠には、おのが婚姻こんいんに関してこそたった一語ひとことでも、こゝ新行在所の造営ぞうえいについては、非常な熱心さをもちまして、縷々るゝ数百言を述べたほどでござりまする」

「行在所の造営と申しますると——？」

「これでは恐懼おそにたえぬ。河内和泉かわちいずみの敵軍退散せば、さつそく東条の兵を土木の役夫として、皇居をはじめ、女院女御の御所、撰せん関公卿の屋形以下を、おゝいに改築しなければならぬ、ということにござりました」

「おゝなんと奇特な心であろう！」

「まことに殊勝しゆせつな心がけでござりまする」

「自らの婚儀はわたくし事——行在の造営修理は、公けのおつとめごと、意味からであろうぞえのう」

と、女院は感じふかげに云われた。

宸殿の燭の光は、まだみずみずと蔭たくおわす顔容を照らした。いとも足らわれたようなそのお顔は、やがて、ふくらかな胸を抑えつゝ、夢ましく灯かげを見つめている伊賀局の方へむけられた。

「そなたは、幸福者じゃのう！」

聞き合わんとする姿勢

一

空は青く澄みきつて、日ざかりの太陽が、じりじり照りつけていた。京都の市民は、梅雨あけ以来一つぶの雨にも逢わぬという酷熱に、汗を流していたが、五万坪の境内——桓武の帝の延暦このかた年古びた松や、杉が、蔭うつと茂る東寺は、それでもやゝ涼しかった。

直冬は、大師堂の檜皮葺きの庇の下から、蒼翠のむこうに屹ぜんと建つ全国無比の高塔を、ながめていた。

高さ二百四十尺——さながら天を摩するような五重の塔は、東寺——すなわち弘法大師の大伽藍、教王護国寺の、荘厳な表識だった。

兵はたいがい日蔭で昼寝をしていたが、なかには児童のように蟬とりなどをやっているものもあった。

蓬池の端では、士が集まって話していた。

「退屈だのう。無駄話の仲間に入れて貰おうか」

ぶらぶら歩いていた士たちも、池の汀へ来て尻をついた。

「朝起きると、具足をつけて、飯を三度食うと、具足を脱いで、一夜

寝て起きると、また具足に飯だ」

「全くな。食うことゝ、睡ることゝ、鎧を着ることの外、なに一つすることが無いのだから、うんざりする」

「一体われわれは何のために、こんなだゝつ広い寺の境内なんぞに陣どつておるのだろう？」

「それが解れば、退屈はせんわい」

「解つたとて、退屈だ」

「せめて、夜あそびぐらいはの」

「女買いなら、白昼でも苦しゅうない」

「はゝゝ地金が出たな」

「境内から出さんという法はないのう」

「きようは何日だと思う」

「水無月の十七日だ」

「三日や五日なら、とにかく、梅雨もまだひぬ先月の二十八日からじゃ」

「梅雨がひかないぞとは申さん」

「二十日の禁足では、辛抱の棒が、へし折れるぞ」

桃井、吉良、石堂、荒木、河越の士が、しきりにこぼし合っている

のだった。だが、

「おん大の直冬の殿のお身になって見い、正月こつち半年の、つらい御辛抱じゃ。二十日や一月の我慢がなんだ」

と、云うものがあつた。

「そうともよ。今出川の高館に、敷妙どのが、虜になつてござるのだ」

と、また一人が云つた。

「だから、解らんと申すのだ」

「同感じゃ。二万の兵を集めたら、さっさと今出川を囲むがいゝ」

「そうは参らん。法成寺に一万は屯ろしている」

「こなたは倍だ」

「優勢でも、都のまん中では合戦が出来ん」

「出来ることがあるか」

「直冬の殿は、都を焼きたくは思召さんのだ」

「そうか。そんなら兵を解くがいゝわき。こうしているのは、無駄の骨頂じゃ」

「止せ止せ。我々になにがわかる」

「あゝ女が欲しいつ」

「やあ、上杉の殿が見えられたぞ」

上杉伊豆守重能が、白い馬にまたがって、大師堂の方へゆくのが見えた。

鎧直垂に、胴だけをつけていた。だが、扨従は、ものものしい武装兵だった。

二

土御門東洞院の、將軍御所では、尊氏の居間から渡殿づたいに、北の対屋へもどって来た御台登子の方へ、

「どうつ？」

と、さげんだのは副將軍、直義であった。

「まあお坐わりなさいませ」

御台は、そう云って、突っ立っている直義のまえに坐ったので、直義もしぶしぶ座にかえって、だが苛っぽい声で、

「きょうはまさか、会わんでもよい、とはござるまいが？」

と問いかけた。

「ところが矢張り……」

「なに？」

「相も変わらぬ仰せで、わらわに、伺い置けとのみでございました」

登子の方は、白麻の下着に生絹の単衣、うちかけも生絹という軽やかな服装だった。

「嫂上では、埒あかぬことだ」

直義の語気は、はげしかった。

「でも……」

「えゝ、お解りにならん」

「あれ、解る解らぬは、伺ってみませぬことには——」

「無駄じゃ。わしは押し通りますぞ！」

ふたゝび立ったのを、

「なりませぬ！」

と、御台がさゝえた。

「ちえ、退かせられい！」

「えゝあなたこそ、お控えあそばせ！」

副將軍と御台とが、睨みあった。

「御台つ、天下の重大事だ。詰問と勧告をひっさげて、この左兵衛督

直義が、將軍尊氏に逢わなければならぬのだ！」

「わが夫は、あなたを避けておられます。逢うのが厭わしいと仰せられた」

御台は、たやすく屈しなかった。

「なに、厭わしい？ そ、それが兄上のお身勝手だ。我まゝと申すものだ。だが際限なしの身勝手は、もう赦せぬ。断じて許せん！」

直義は、大勝に一步ふみだして、

「退かれよっ！」

そう哮ばれても、登子の方は健気にこぼんだ。

「退きませぬ」

「えゝ飽くまで？」

「はい、飽くまでも！」

と、応じてから、

「左兵衛の殿。——將軍とて、未来永劫あわぬとは仰せられませぬ。

たゞ、当分は厭わしと仰しやる。それゆえ今日は、御不承でもあられましようが、わらわに御用件をお洩らし下さいませ。もとよりわらわ

などに裁量は叶いますまいけれど、承わつてわが夫へ申伝えます」と、云つた。

「よろしい。然らばお目にはかゝるまい」

直義は、座に臀をおろした。

「どうぞお申聞けを——」

と、御台も坐つた。

「餘の儀でもなし」

じいつと見すえた眼には、あきらかな憎しみが光つた。

「弟の、足利直義として、また天下の副將軍として詰問の、まず第一は、なにがゆえに——御自身、政事をみられぬのだ？ 兵馬の統率を放擲された所以はなにか？」

「もし」

と、御台は言葉をはさんだ。

「わらわにお答えの出来まするかぎりは——」

聞きも終らずに、

「む、出来るものなら」

「そんなら代つて——」

「御返辞あれ」

三

「わが夫は、後醍醐の帝への御懺悔ひたすらにて、餘事へは、み心むきませぬ故でございます」

「御懺悔は久しいことだ。知れきつてゐることは答へにならぬ」

「そう仰しやるなら、あなたの御詰問とて、問いにはなりますまいに」
「違ふ。大政を執事にまかせて顧みざるは何故か？ わしの問いはそれにつながる」

「なら、答へも違ひまするぞえ」

「なんと？」

「師直どのの執事、執事は將軍の代理ゆえ」

「副將軍はなんのためか？ 執事に代理を独占する理由はいかに？」

「副將軍は、將軍世嗣義詮の後見のためでございます」

「ふ、得手勝手な理窟もあるものだ！ その調子では、おそらく、一切の余事には関わらぬからという、遁辞を聞くでもござろうが、第二第三の詰問、申すだけは申そう。なにが故に、焼かでもの吉野を焼いて、行宮はじめ役行者以来の名刹伽藍の、殿宇堂塔を灰燼に帰せしめたか？ 宮居のことは申すまでもなし。悪愛を六十余州にしめして、彼を是し、これを非とする賞罰を、三千世界に顕する靈験は、無二亦無三といわれている蔵王権現だ。その蔵王堂の社壇仏閣を、一時に焼きはらうくらいなら、事のついでに天竜寺もなぜ焼かぬか？」

「もし、そりや乱暴な仰しやりようじゃ。後醍醐のみかどの御菩提のため、尊氏が、精根をからして建立せし天竜寺を、焼けよがしに。あんまりじゃ。天竜寺は、尊氏の魂いでございますぞ」

登子の方の亢奮は、直義をかえつて冷静にした。

「嵯峨野に建てゝも、吉野で焼けば、有無相殺でござる。いや、天の忿りは、悪行の方を残らせよう。奈良を焼いた重衡は、たちどころに亡びた。師直の罪を問わぬ兄者尊氏は、懼るゝことを忘却されたのか？」

兄者が恃む師直は神仏を流すのみならず、人倫の道義ふみ荒らしとて、直冬から側室敷妙をうばつた。沙汰のかぎりだ。直冬は、兄者にとつては、長男だ。御台、あなたにとつては、義理ある子じゃ。——またかくいう直義は、ひと頃、親がわりにもなつた間柄でござる。さあ、師直が所業を——なんと覺す？」

「わが夫が、ことさら人を避けさせらるゝは、それがためかと思われまする」

「えゝ卑怯だ。兄者は卑怯だ。——腫れ物に触るがいやじゃ、見るがいやじゃと、手をつかね、眼つぶつておられては、怖るべき悪腫は、足利をも、幕府をも、天下をも、たゞれ腐らせる。なぜ断乎として、

執事をやめさせ、法成寺の兵に解散を命令されぬか？ なぜ南征軍の大將に、直冬を奏薦なさらぬか？ ——嫂上。ならべ立つれば、きりがたない。齎もたらした勸告を申述べて、おいとま致そう」

「承わりましょう」

と、御台は、反感に顔をこちこちにした。

「すなわち諫言じゃ。兄上には、將軍の任を辞して、名実ともに隠遁あれ」

直義は、座を立った。

（いふべきことは云った。会わぬなら、会わぬでいゝ。おれは、自身で仙洞御所せんどうごしよへ参ろう。そうして院宣いんせんを乞い奉ろう）

と、考えたのであった。

四

仙洞御所の権臣、高階雅仲朝臣たかしなまなかみあつとんは、高の家とは、祖先を同じくする親族だった。

だから、直冬に院宣が下って誰れよりも先に青くなったのは、この雅仲であつた。

雅仲は、院宣の下らない前から青くなつていた。というのは、いわば直義から不意討ちを喰らつた形だったからである。直義の奏薦そうせんを、むろん極力、妨げようとはしたが、今出川の高館から何等の情報も入つていなかったため、まったく予防運動をほどこそ暇がなかった。で、仙洞の形勢が刻々に、直義へ有利になるにつれて、雅仲の顔は土気色に変わつて行つたのであった。

いよいよ絶望と決まると、雅仲は、馬を今出川へとばした。供の青侍たちは続けなかった。

決してひどく文弱な公家でもなかつたのだが、事をよほど重大に、緊急に感じた故ゆゑであるう、高館に乗りつけて、中門垣から東の対屋たいゑの階段きざしまでたどりつく間に、二度も転んだし、階段からも足をすべらして、

「あつ！」

と、いうまに向う脛すねと、鼻柱を、したゝかに摩すりむいた。

「あ痛っ！」

声もろともに、血が流れた。いや迸ひざびしたたのである。しかし、それは鼻血で、すりむけた傷からは大した出血のあろう筈はずもなかつたが、本人はかなりの大怪我と勘違かんちがひいして、

「あつ！」

斬られでもしたように、烈しくわめきながら両手で顔をおさえた。

入側から駆け寄つた敷妙は、

「おほゝゝ、まあおそゝかしいこと！ もし、雅仲さま、お鼻血でございまするものを、お案あんじなされますな」

と、そう云つて、おゝ勢の侍女に命じて、血を拭ぬぐわせたたり、汚れた手を洗あらわせたたりした。

師直は、黄麻きむぎの肌じゅばん一枚で、それも胸をはだけて、毛もくしやの肌もあらわに、高坏たかづきの膳で酒を飲んでいた。

「わはゝゝゝ！ 高階たかしなも人さわがせをするぞよ。鼻はなつ柱はしらのすり剥むぎくらしい、なんだ！ ちようど時刻だ、まず飲むとされい。——これ、雅仲どのへお膳ぜんをもて」

「あゝもう酒どころか、大事じゃ、大異変おほいへんじゃ！」

思おもわぬ負傷ふけうに、報うらせを急いそぐ気持きもちちは緊張きんじやうを、すくなくならず気殺けそくがれたものゝ、雅仲は、鼻はなのあたまを紙しでおさえつゝ、片手かたてをしきりに振ふつた。

その格好かっこうの変へてこさに、

「おほゝゝゝ！」

と、敷妙が、また笑うと、

「えゝ笑いごとではござらんぞつ！」

と、雅仲がどなつた。

「これ高階、わはゝゝゝ何が大事じゃ？」

「院宣が、院宣が直冬どのに下った」

「なに、院宣が直冬に？」

さすがに師直も、顔色を変えてきつとした。

たゞごとではない。たしかに異変だ。まったく予期しなかったことだ。

そう思ったとき、

「右兵衛佐直冬を、南征軍の大將に任ずるといふ、院宣でござるぞ」

「なんのこつだ、わはゝゝゝ！」

と、師直は、たちまち顔を変え直して、高笑いをした。

「な、な、なにを笑わるゝ？」

雅仲が、呆れると、

「院宣には、この師直を討伐せよ、とあつたかと思つたのだ」

「しかし、東寺の兵は堂々と、活動する自由を得ますぞよ」

「いざこへなり、勝手に動くがいゝ」

「そりや悪い。暢気すぎます。今後は勢望おのずから、右兵衛佐どのに集まる。きよの院宣降下は、身どもの考えを申すなら、高一族にとつては、ほとんど致命的な打撃の濫觴ともなりはせぬか？」

「あはゝゝ、たんと馬鹿を云われよ」

師直はかえりみて、

「敷妙。——直冬は、大そう傑えらくなつたぞ。どうじゃ、そなたは嬉しかろう？」

「あれ——わたくしは存じませぬ」

「副將軍からの奏薦であるが、仙洞御所という大きな後だて櫓がついたのだ。きよからは、何万という軍の司令者だ。嬉しくない筈はなからうかの？」

「存じませぬ」

「逃げて行つてはどうかな？ 直冬は、急に強くなつたぞ。もうもう俺をも、怖れないかも知れぬぞ」

「あれもう存じませぬと申すのに！」

敷妙が、みせた媚態——さわらずとも色香は、こぼれそうであつた。

そのながしめが、師直の溶ろけるような笑顔を誘い出した。

「うふゝゝゝ！」

「高どの！」

と、雅仲は鼻の傷を紙の上から、痛そうに摘みながら叫んだ。

だが、師直は見向きもせず、

「この敷妙、もとのそなたなら、はい、嬉しゅうございます、と云うたであろうに、ひゝゝゝ可愛いとい女子じゃ！」

そう云つたとき、侍女たちが、客膳を運びいれた。雅仲朝臣は、自分なんのために怪我までしたのか、解らなくなつた。

五

東寺の、翳おかげとした樹々の翠は、篝火の光をうけて、異様な美しさで暗中から浮き出ていた。

月はまだ東山から昇らなかつた。

けれども、蓮花門れんげもんも不開門あかすのもんも、慶賀門も八足門やくももんも、みなはつきりと見えていた。それほどに、焚く火の光りはあざやかであつた。四つ塚街道に面した正面の南大門から、上杉の大部隊が入つてきた。瓢箪池ひょうたんいけのまわりには、もう畠山隊が着到していた。滞陣すでに二十日に及んだ二万の兵は、そうした新部隊を、歓呼して迎えた。むろん、増加部隊の新入がなくても、しびれのきれた気持や退屈は、

「院宣が降つたぞっ！」

という、一声で、どこへか吹つ飛ばされてしまつたのであつた。

この正月、敷妙をうばわれてからは直冬が、反師直党の中心人物となつたのは、しごく当然なことだつた。で、音無川原で惨敗して大和から退陣しながらも師直が、軍を法成寺に集結したまゝで、いつまでも傲然と示威を続けていることに業を煮え立たせた反対党は、ついにこの東寺に兵を集め合つて、そして直冬を、頭目にいたゞいた。尊

氏の子で、麒麟児きりんじだったし、もはや右兵衛佐にも昇っていたし、材も身分も申分なかった。たゞ憾むらくは、公然首将として仰ぐについての名分が欠けていた。それが、院宣降下！

天晴れ名分が立ったのである。

大師堂では丁度いま、首脳部が額をあつめていた。いろいろと、打倒師直の作戦を凝らすのであったが、所詮は実力に訴えるほか打倒の道はなかった。

「とすれば——いっそのこと、今夜のうちに今出川を襲うては、どうかな？」

上杉重能がそう云うと、畠山直宗なむらねも、

「宜しいかも知れぬ。兵は神速を尚ぶ」

と、賛意を表した。

「しかし、法成寺は？」

と、いったのは、渋川貞範——副將軍北の方の弟だった。

「むろん攻める」

「大戦になる」

「もちろん」

最上席の副將軍が、

「院宣のてまえ——？」

と、次席の直冬を顧みた。

「もつての外」

直冬が答えた。副將軍は、上杉を呼びかけて、

「名分から云つて、今すぐに攻めるわけには参るまいぞ。和殿はすこし、あせり過ぎていかぬ。こないだも大高と口論して、刃傷に及ぼうとされたとか。昇殿をも許されておる幕府引付一番の頭人でござる御身じや。ちと慎重に願いたいので」と、云つた。

「下御所のお言葉ながら——」

と、上杉重能は、むき直つて、

「堪忍袋の緒がいかに強くとも、十年間も締めつづけては、もう切れる。右兵衛佐どの、憤怒は新らしい。愛妾を強奪されてからとも謂えるゆえ、恨み深いには相違なけれど、時の上からは浅うござる。高に對する上杉の鬱憤は、実に長いのだ」

なかば叫ぶように答えた。

六

直義の北の方は、二条京極の吉良邸で、弟の渋川貞範の帰りを待っていた。

（夜が更けたのに、おそくまで——？）

なんの評議があるのだろうと、いろんな風に考えてみたが、頭にかぶ事柄は、どれもこれも不安の暈くまのかゝつたものばかりだった。

北の方は、去年六月、自分の実家であるこの邸で、四十歳を過ぎての初産をして以来、まだ三条坊門の夫の館へは還らずにいるのであった。生まれた男児も、天下の副將軍の初若君として、諸大名こぞつての慶賀をうけたのみでなく、伏見院からは御劍を授けられて寿ことぶかれた。多幸なるべきこの子は、しかし世にも怖ろしい呪われの運命を、母の胎内に宿る前から担しよわされていたことが、六本杉の怪異によって告げられた。子の父である直義は、ほとんど精神が錯乱するほどに懼れおびえた。わが子の顔を見るどころか、そばへ近寄ることをさえ避けた。それからちょうど一年、今月の八日は誕生日であったが、依然母子ともに、父のかたわらへ戻る事が出来なかった。北の方の父渋川貞頼は、吉良貞家の弟で、すでに没したが、貞頼の子の貞範は、やはり渋川姓を称して亡父同様、この吉良邸に住んでいた。で、きょう東寺の陣へ、貞範は、従兄いとこの吉良満義と一しょに出かけて行ったのであるが、その帰邸のおそいことを、北の方が苦にやんでいるのだった。

（院宣が、たとい、あゝしたふうに降つても、戦いの敵手は、楠では

なくて高一党に違いない。わるくすると、もう今夜あたり、いくさが始まりはせぬか？ もしそうだったら？」

北の方は、戦慄した。

（敗北！ 非業の死！ 遺族の破滅！）

この一年間というものは、物事を、なんによらず、怖ろしく、怖ろしくとばかり考える心の癖がついたのであった。いかなることにも、明るい希望らしいものは、とても認め得なくなっていたのである。だから争うことは、負けることゝしか、そして闘うことは、殺されることゝしか考えられなかった。

灯を見つめていても、その目の先が真つ暗になり、臉をふさげば、血みどろの顔が見えてきて、それが夫直義の顔であつたり、弟の貞範の顔であつたりした。

北の方は、声をあげて恐ろしさを、叫びたくなつた。

だが、そうした強迫観念ふうな脅えは、貞範が平常とあまり違わない顔で、東寺から帰つたので、どうやらおさまつた。

「姉上。お顔色が真つ青だ」

「戦さは、いつ——？」

「今夜こそ——」

「えゝっ！」

「いえいえ、今夜こそという者もござつたが、たゞちに都で戦うは、仙洞御所への恐懼もあり——」

「おゝ！ そんなら敵は——目ざす敵はやつぱり一条今出川か？」

「はゝゝ知れたことを」

「えゝなぜ今まで匿していやつた？ 然うならそうと、なぜわらわには告げてくれぬ？」

「なにも、匿した訳ではござらん。申さずとも、東寺にわれわれが陣どつたことで自から、明らかではござりませぬか」

「して、都でなくば、戦さは——戦さはどこで？」

「姉上。そのお顔は——」

「えゝもう顔の話ではない！」

「ともかくも、まず直冬の殿から、紀州方面へ出馬して頂く。将兵一万五千がこれに従う。ということに相成つた」

「まあ紀州へ？」

「紀州で、師冬、師泰の両軍の行動を眺めます。東寺には、一万の軍勢が居残つて、法成寺の師直軍を見はります。采配は上杉どの。下御所には——」

「おゝわが夫の殿は？」

「形勢切迫せば、三条坊門館から東寺へ、ならせらるる手はずでござる」
貞範が、そう答えたとたんに、

「あゝ！」

ふたゝび、しかも烈しく、強迫観念が北の方を脅やかしたのである。

「や、どうなされたぞ、姉上々々！」

「おゝ怖い！」

北の方は、両手の指をかぎめて、身慄いた。眼には狂おしいような光りがあつた。

「わらわはもうこうしてはいられぬ。屋形へ帰つて夫の殿を——わが夫の殿を……」

「もし、何とあそばす？」

「お諫めする、お諫め申す！」

まるで憑りうつられた人のように、ふらふらと立ち上がる北の方であつた。

「姉上っ！」

と、貞範がうちかけの袖をつかんで、支えるのを、

「放せっ！」

振り払うはずみに、燈台が倒れて灯りが消えた。東の空に昇つていた十七日の月の、さやかな光が濡れ縁ごしに流れ込んだ。

北の方は、廊下へ走りでようとしたが、入側から引き戻された。

「止むるな貞範……大塔宮の御怨霊……犯せる咎の、大逆の、報い
を着ておる夫と妻……生れた和子は、峯の僧正の生れがわりじや、呪
われてある、呪われてある直義の殿じや……戦に勝たるゝ筈がない
……」

「これさ、姉上っ！」

「え、放せ、放せっ！」

「放さぬ！」

「放せ！」

鎧の金具と、蒼白な顔とが、月明りを浴びつゝもつれた。

山峡の秋に馬肥やしつゝ

一

「なにかお差支えが出来たのでは——ごさいますまいか？」

腰元は、さつきから何べんも同じ言葉を繰返したけれど、お奈穂は
黙っていた。

すこし離れて、だがやはり落葉の上に蹲くまっていた若党が、

「お文にあつた時刻を、お読み違いでもなされませぬか？」

と、云うと、お奈穂は首を「なんの」というように振って、そのまゝ
池のおもてを、眺めつゞけた。

栗方池の水は、黄紫紅褐に彩どられた丘陵の姿を、さかさまに映し
ていた。丘は、水面から三百尺も高くそぼだつて、ちょうど屏風を立
てつらねたように、右左へ長い裾をのばしていた。この丘のてっぺん
に建っているのは、貴志右衛門の邸だった。燃えるような樺紅葉の梢に、

棟を見せている邸の屋根もまた、秋らしく明るく澄んだ夕空と一緒に、
その映像を池の水面へおとしていた。

お奈穂は、この邸のあるじ右衛門の、かけがえのない独り娘なので
あつた。

若党は起つて、しばらく人待ち顔を、富田林の町の方角へむけたり、
石川の岸の方へむけたりして眺めていたが、突如、

「や、娘さまっ！」

と、叫んだ。

「お、お見えか？」

「は、あすこに！ あれあれあすこに！」

「あゝ庄五郎さまに違いない！」

「お、違いございませぬとも！ 嬉しや嬉しや、あゝ嬉し！」

待ち人は故楠正季の遺児、庄五郎正氏だったのである。

褐色の馬に乗つて、供もつれず、たった一人、この栗方池の池畔へ
むけて、石川の岸辺の路を近づきつゝあるのだった。

川の堤からは、七八町の距離があつた。だから、人も馬も、ほんの
小さく見えるきりであつたけれども、待ちこがれたお奈穂の眸にだけ
はもう、その微笑む目もと、口もとまでも、はつきりと見えた。

池と川の間は、田であつた。田はもう、のこらず刈取られていたが、
稲はまだ畦に乾してあつた。そして野良働きの農民たちが、黄いろく
干いた稲の束を、せつせと背中で搬んだり、手車に積んで牽いたり押
したりもしていた。田圃は、肥沃な石川平野の一部であつた。幅は広
くないが蛇々と狭長く川の両岸につらなる豊穰な耕地は、今や収穫を
すませて、晩秋のなごやかな日のひかりの下で、意外にも早く復帰し
た和平の雰囲気をよるこぶかの態をみせていた。高師冬が、東条への
対壘を放棄して、八尾へ退いたので、南河内にはもはや敵は一兵も止
まっていなかつたのであつた。

「だいぶ後れて、済まなかつた」

田圃みちから、街道を横ぎって、池の汀の紅葉林へ入ると、馬から下りてそう云った庄五郎だった。

狩衣が濃い紫のせい、一入いろが白く、眉が黒々と見えた。十六歳の秋もすでにたけなわ——身長も五尺六寸を越え、恰幅もや、それになつて来た。

「庄五郎さま——」
と、お奈穂が走りよつた。

二

腰元と若党とは、想い想わるゝ仲のふたりの会話をさまたげないように、心して、話声のきこえない距離に遠ざかつていた。

汀を歩いたり、街道へ出て歩いたり——
「滅茶くちやに樹を伐りやあがつたなあ。紅葉の名所の粟ガ池も、これでは、形なしというものだ。むこうの畑から池の水が丸見えではないか。——何万という敵の奴らが、半年の余も寝たり起きたりしおつたのだから、仕方もないが——のう」

「お屋敷の荒らされぶりを考えて見なされ、まんぞくな場所は、お屋根まわり、ぐらいなものじゃ。櫛や楓の紅葉をかれこれいどころではないぞえ」

「まあそう云えば、そんなものだが——」

「もともと名前が粟ガ池じゃもの、粟や稗の畠から、見透しじやとて辛抱がならぬでもないけれど——」

「こう、無風流なことを云うでない。これが以前の紅葉なら、あゝしておいでのお兩人が、もっともとお美しい風情つてやつに見えるわな」

「そんなことよりか、お前はどのお思いかえ？」

「え？ なにをさ？」

「遂げられそうもないではないか？」

と、腰元は、池の岸辺の枯れ黄ばんだ草の上に坐っているお奈穂とその恋人の方を、顎でしやくると、若党がうなずいた。

「む。とてもとても。——当座のお慰みというなら別だが、御祝言の盃かわして末永くとは参るまい。はたが許すまい」

「なんにせい、お兩方とも独り子——お嫁にも行けない、お婿にも入れぬというお身の上じゃもの——。ひよんな恋じゃのう」

「一体どうなさろうというお積りかなあ？」

召使たちの言葉どおり、たしかにひよんな恋であった。

貴志右衛門は、上赤坂の城の守将だったから、去年干戈が動くと同時に、自分の居邸から手勢を率いて赤坂へ入城した。そして四条畷の勝に乗じた敵軍が東条へおしよせた時は、右衛門の居邸は、その位置からいつて無ろ、師冬軍の、大きな陣地の拡がりのなかへ包みこまれた。右衛門の一人娘のお奈穂が、あらかじめ難をさけたのは云うまでもなからう。お奈穂は、貴志方岡の上の自分の邸を空にして、召使たちをつれて水分へ避難した。七カ月たつて、師冬の軍が大和川以北へ退いたので、彼女は父とともに貴志方岡へ帰つたが、わが家に帰つたのはいわば身体ばかりで、心は、半年の仮寓の方へ、ぴつたりと吸いつけられていた。なぜかという、水分生活が、彼女に恋を知らせたからであった。だが、それはふさわしい恋ではなかつた。もし男が、どこかの次男三男であつたなら、貴志は楠氏の譜代屈指の重臣だし、彼女は充分に美しかったし——だから、相惚れであるかぎり、なにも難かしいことは起らない道理だつたであろうが、困つたことには相手が、故帯刀正季の一子、庄五郎であつた。

お互いに自分の境遇を考えれば、てんからすまじき恋だつたのである。しかし誰れもが云うように、恋こそは思案の外だ。

添われぬ恋とわかつていただけに、諦めかねながらも兩人は、慎しみ深かつた。人目を忍んで逢いはした。逢つて語ることはしたが、それ以上の関係にはまだ進んでいなかつたから、いわゆるあいびきとは、

かなり性質のちがった密会だった。

「でも庄五郎さま——」

「いやいや、それは無分別だ。とうてい、望めることではない」

と、表情をすっかり憂鬱ゆううつにして、お奈穂の情熱のうずきに堪えかねたような眼ざしまなしを、見つめながら、

「貴志どの、近ごろ、また反感のよりを、もどしておられるからう。敵が、八尾へ、退陣した時、なぜ追わなかったかと、ひどく憤いていられる。音無川の勝利以来、館の殿へ牙を剥かれなくなつたので、これは倅はなせいだとおもっていたのが、あれで一ぺんに解消してしまつた。館への反噬はんせいが烈しければ、わしなどへは恐らく唾をふっかけるのさえないやであらう」

「あれ、もつたいない、お主へむかつて臣下の父右衛門が、いかにかたくな、因業いんごうでも——」

「奈穂どの、徒勞むだじや。そなたが後とり娘でなくば、十に一つの望みもあるうけれど——」

「……それは徒勞むだかも知れませぬ。でも、わたくしと致しましては、一応は父の許しを乞うてみるのが、本当かと思われまする」

「乞うてみるのはいゝ。だが、駄目なことは火をみるよりも明らかだ」

「と、申して、わたくしはもう我慢がなりませんものを——」

「断じてならぬ、馬鹿もの奴めつと、叱られたら、そなたは何とおしじや？」

「父も家も、棄てまする」

「そうは参るまい。奈穂どのには棄てる気でも」

「すがって、願って、それで許して貰もらえぬなら——」

「お待ち！ 貴志の後継あとを絶やしても庄五郎に添うということは、この河内ではとても出来ない相談じや。のう奈穂どの、そなたが家を棄てるだけでは、わたしたちの恋はまだ叶かうまいぞ」

「と仰おしやるのは？」

「この庄五郎もまた家を棄てなければならぬ。兩人して手をたずさえて、どこか他国へ駆け落ちいたすほか、添いとげる道はないのだ」

「庄五郎さまは、それがおいやでございまするか？」

お奈穂は、にわかに涙ぐんで、怨むがように情人を仰いだ。

添うことさえ出来れば、ほかに何がいろう、というのがお奈穂のいまの気持だった。もはや恋が全部であつた。いつかしら、盲目的な、たゞひたすらな恋慕と変わっていたのであつた。三つ歳上——女は十九のすでに熟した肉体から、ほとぼしるように湧く情熱に、ほとんど恠たえがたそうに見えた。これまでの慎しみぶかさは、どこへ行つたか？ 澎湃ほうはいと押し流す欲望の流れは、あらゆる堰を破ろうとしているのであつた。

三

「いやではない」

と、庄五郎が答えた。

「お、嬉しい！」

お奈穂はいきなり、男の胸にすがろうとするのを、

「いやではないけれど……」

と、身を退いて、

「そうは出来ぬ。朝廷への御奉公を忘れては、亡き父のお位牌にすまぬ。楠の家門の歴史をけがす。正成正行おん二代の輝かしい御芳名を、きざづつけるばかりか、今の館に対して、なんともお申訳がないのだ。わしが兎もかくも人並みになれたのは、ひとえに虎夜叉の殿のお蔭じやからのう。ことに今日ぐらゐ大切な時期はないといえる。虎夜叉の殿の、回天かいてんの御事業が、まさにこれからという秋じや。わしにとつては、恋のみがすべてではあり得ないのだ、奈穂どの」

庄五郎は、そう云つたとき、背後うしろの方で誰れか自分の名を呼ぶので、驚ろいて振りかえつた。声のぬしは、尾鷲おわせ梶丸かじまるだった。

(しまった!)と心で叫んだのは、梶丸に見つかったことは、きょうの逢引が、館正儀の眼にふれたも同じだったからである。

(たゞ一騎、なにしに來たのだろう?)

疑問が、庄五郎の頭をかすめた。

梶丸は、黒い馬の歩みを街道でとめて、

「お邪魔いたしたかな?」

と、云った。街道と池の汀とは、ちよいと距離があつたので、かなり大きな声だった。

庄五郎は、お奈穂へ、

「見つかつては仕方がない」

そう囁いてから、

「構わん。——さあ、こなたへ」

と、招いた。

梶丸は、林のなかに庄五郎が繫いでおいた馬のわきへ、自分の馬を捨て、微笑しながら、近づいた。

「これはこれは、貴志のお奈穂どのでござったか。その後はしばらく」

「ほんに暫らくでございました」

と、お奈穂は丁寧^{ていねい}に会釈した。

「紅葉狩というわけでござるかな」

梶丸は、女へ、そう云つてにつこりとした。

「偶然にも奈穂どのに行き逢つての」

と、庄五郎が、代つて答えた。

四

虎夜叉正儀は、伊賀の方に、腰と脚とを揉みさすらせていた。

こゝは、新夫人の居間であつた。

東条城内の本曲輪のなかの館にあつて、陰曲輪の密房玄々寮からは、ずいぶん離れていた。新夫人が、水分の本邸から城内のこの館に引き

移つたのは、二十日ほど前でしかなかった。婚礼は六月の初めだったが、以来、伊賀の方は姑のそばにいて、ときどき城から來る夫を、焦がれ待たねばならなかった。で、やつと城に住めるようになって、こんどこそ毎日そばに居ることが出来るとおもうと、齒の根が合わぬくらい喜ばしさを感じたのであつたが、不思議なことには、夫正儀とともにすごせる時間は、水分館に起き臥していた頃よりも、かえつて遙かに短くなつた。夫は、今いたかと思つと、たちまち姿を消した。水分では、來ればかならず一泊して帰つてくれたのに、こんどは、真夜中でも風のように消えて行つた。で、きょうなどは、ちようど四日ぶり——会うことが出來たのだつた。

しかし、猜疑と嫉妬とは、断じて慎しめと、女院が仰せられた。北畠准后からも、夫の秘密に触れずにはおれないというような気持では、とても正儀の妻たる資格がない、と云われた。伊賀の方は、どんなことがあつても、

(お両方のお戒めをまもう!)

と、覚悟をかたく決めていた。

釣瓶おとしの晩秋の日はもう黄昏れて、城の紅葉は、黒紫にくろろずんで、梢にまじる黄葉のみがかすかに残光をとどめていた。そして前栽の枯れ芝へは、夕靄が、いわば湖の面のように立ちこめていたが、樹々のかなたに、腰から上を見せている金剛山の峰は、まだ赤々と、あざやかに夕映えていた。

「あゝよく透る」

「あの——こゝでございますか?」

「そこ、そこ」

「この辺はいかゞでございましょうか?」

「むゝ、それ、それ」

「たいそう凝つておりますこと!」

「う、うゝむ!」

と、正儀は顔を、枕の上でしかめて、

「さすがに、そなたは怪力じや。怖ろしい指先の力だのう」

「あゝれ、痛うございましたかしら？」

「息が止まりそうであった」

「あらまあ！ 強く強くと仰しやるので、つい指先に、うつかりと

……」

「はゝゝゝ！」

「どうぞ御容赦くださいませ」

「そなたの方から詫びられては、張り合いがないの」

「あれ！ なぜでございますか？」

「どこでこんなに、脚腰を凝らして来たのか、と持ち前の剛力で、ひと捻りに、ぎゅうつと偶には痛めつけてくれてはどうかの？」

「あら滅相もないことを！」

「でも宝の持ち腐れは、気の毒だ」

「もう、わらわは、持たでもの力が差かしゆうてなりませぬものを！」

「はゝゝそう下手々と組まれては、技の施しようがないの。武芸

十八番、角力の極意まで心得ている」

「まあいやな、なんでわらわが角力技などを！」

「存じておらねば、あゝは参らぬ」

「あゝれ存じませぬものを！」

宮仕えに馴れた伊賀の方には、端たなさがなかった。おゝどかな艶めかしさはあつても、卑猥な媚は露ほども見せなかつた。

やがて、侍女たちが、灯をつけたり、食膳を運んだりした。

（妻女は結句、この方が宜さそうだ）

正儀が、そう感じながら、茵に横たえた躰を起したとき、本郭附の近侍が一人、はいって来た。そして、和泉の蕃原から、和田正武の見えたことを告げた。

「こゝへ呼べ」

「敵めしい武装でござりまするが——？」

「鎧兜か。——構わん」

「は」

五

正武は、身長六尺、四条畷で自分の首を斬られつゝも本宮太郎左衛門を、喰い殺したという猛者、源秀にも、あまり劣らぬほどの偉丈夫であった。

戦死した源秀兄弟とは、従兄弟だった。だから榎尾城の和田助氏からいえば、やはり甥であった。歳は、二十三歳。色はくろぐると、眼に慥悍な光をたゝえていたが、

「食べとうござらん！」

と、どなつて、兜を、牀板に叩きつけるように置いて、その眼の光を一段ときらめかした。

「おかしいの。腹加減でもこわしたか？」

「飲み食いよりも、命令が欲しい！」

「紀州へ出陣のことかな？」

「申すまでもなし」

「わざわざ来るにも及ばなかつたのに」

「いゝや参らずば、なんで埒があこうか？」

「参つたとて、そんな埒があかさりようか」

「え、なんと？ 有田郡、日高郡と深入りした直冬めは、今や袋の鼠

でござるぞ」

あぐらの膝が、ざくりと小札草摺をゆすり鳴らした。だが、正儀は答えなかつた。

「館っ」

「……………」

伊賀の方は、正武の尋常でない顔つきと、夫のなんでもなさそうな

面持ちとを、見くらべた。

「粉河街道、根来街道、紀州街道——この三路を扼して敵の退き口をたとうとはなぜなされぬか？ 犬鳴山と風吹峠に、砦を設けて、雄山越えの隘路に伏兵をたむろさせ、しかる後に小沢の城の恩智が兵に、出撃を御命令これあらば、味方の大勝、疑いなくはござりませぬか？ もちろん、これしきの軍略、御存じのない館でもおわすまいに、晏如たるそのお態は、ひつきょう心の手綱ゆるんだと見たは僻目か、さあ、御返辞をうけたまわりたい」

「槇尾山に立ち寄って参ったのか？」

と、返辞のかわりに、正儀が訊いた。

「え、御返答がききたい」

「まず、わしに答えてくれ」

「優柔不断な叔父助氏に、裁量乞うなどは、およそ愚の骨頂でござる」
「おぬしの叔父はとにかく、和泉の軍は、北畠准后の御司令の下にあるはずだ」

「雲の上人に軍機はつかめない」

「わしの作戦の方針は、槇尾の城へ行けばわかる。廻り路というでもなし、帰りに御機嫌伺いを兼ねて立ち寄るがい」

「誰れが！」

「お許も融通のきかぬ男じゃ。ちと、叔父にあやかってはどうか？」

「殿っ」

と、正武は牀を拳でたゝいた。

「神宮寺の真似をする」

と、正儀が微笑んだとき、正武は、ぬっと起って、縁側から畳へあがった。そして伊賀の方のわきまで行って、どしりつと胡坐の尻をおとして、鎧の肩を怒らせた。

「和田。——うちの奥と、力較べでもいたすのか？」

「ば、ばかな！」

「でも、そういった呼吸だぞよ」

「これを御覧じろ」

さげ袋から、紙片のたゝんだのを出した和田が、
「蕃原の城の壁に貼られた、落書の一首でござる」
そう云って、伊賀の方に渡した。

披いて、それを眺めた新夫人の顔が、いきなり曇った。

「読め」

と、正儀が云った。

さも困ったらしい顔つきで、夫人がためらった。だが、ふたゝび、読めと云われて、仕方なげにその落首を、

『——楠の正時までは正しくて、いま正儀が正なりけり』

と、読んだ。

「は、正なりけりは宜い。面白い歌だ」

正儀の笑顔を、きつと睨んで正武は、

「館っ、御家門に恥じられよ！」

と、叫んだ。

ちようどそこへ、さっきの近侍がまた現われた。

「は。梶丸どのが只今、戻られたそうでござりまする」

正儀がうなずくと、近侍はさがった。

「わしに急用が出来た」

そう、夫人に云って座を起った。

「和田。おぬしに構っている時間がない。ともかくも紀州への出兵は無用だぞ。直冬は、たぶん今夜あたり、雄山越えをするだろう」

「え、直冬か？」

正武の赭らんでいた顔が、さっと蒼く変わった。

「紀州に残留する部隊もあるが、直冬がいてさえ、格別われわれの妨げにはならなかった。邪魔どころか、たいそう為めになったのだ。わしらはむしろ、彼等の労をねぎらって、酒樽ぐらい贈ってやってもいゝ」

ところだ」

「な、なにを仰しやる？」

「死に絶えて、わが一族に人の乏しい昨今じゃ。もうすこし、思慮を練るようになってくれぬと困るぞ。楠と和田——呼び名は違っても、一家同様の間柄じゃ。その和田の正武ともあろう者が、なぜに師冬が八尾へ、そして師泰が天王寺へ、それぞれ東条と榎尾の包囲陣をといて退却したかという、疑問をおこさぬようでは心細いぞ」

そう云ったかと思うと、さつきと渡り廊下へ去ってしまった正儀であった。

六

「うむ」

うなずきつゝ聞き終わった正儀は、

「御苦労」

と、云つて衆妙房へ入ろうとして、振り返つた。

「梶丸。そなたも来てくれ」

房内の、あるじ正儀の居間につゞいた一室に、並んですわっているのは、庄五郎とお奈穂であった。二人とも正儀の姿を見るなり、ぼうつと紅くなつてうつ向いてしまった。そばには、幾波がいた。折鶴は、居間の方の隅っこに坐っていたが、正儀の顔を見ると、つつましやかな微笑みを送つた。

茵につくと、

「庄五郎」

と、正儀が呼んだ。庄五郎は、耳たぶをほてらせながら、顔をあげた。

「万事に巧者なお身だけれど、初恋だけに羞かしいと見えるのう」

「羞かしゅうごさる」

「羞恥の本能は、人倫に欠くべからざる常軌の一条だ。しかし、お身としては、一刻も早く、そうした羞かみを通り越さなくてはなるまいぞ。

心が、そのまゝ顔に映るようでは、事にのぞんで本当の働きは出来ない」

「まことに」

「進まれい。そこでは話が遠い。——お奈穂。さあ、それへ」

兩人は、明るい燭の光がまぶしそうな様子で、居間のしきいを越えた。「奥よりお奈穂へ頼みがあると、梶丸に云わせたは、あれは腰元と若党を貴志方岡へ帰らす方便だった。が、お身たち兩人への、わしからの依頼は、事すこぶる重大じゃ。そして、非常なる機密にかゝつたことだ。庄五郎、おみならば、やれると堅く信ずるからこそ、今宵、こうして頼むのだ。よいか？」

「は。何事かは存ぜねど、身に適いまする限りは——」

「頼まれてくれるか？」

「はい。何なりと」

「まず最初には——」

「は。最初に——？」

「この玄々寮で一夜あかして、お身たち相思の恋をとげてくれ」

「おゝ！」

「そして明日は河内から、出奔してくれ」

「えゝつ？」

だが、驚ろく暇もあたえずに、

「駈落ちの、落ちつく先は、堺浦じゃ。唐土屋じゃ。よいか？」

「は。は」

「それからが肝腎だぞ。——唐土屋は、ほんの足だまりで、ほんとうに落ちつくべき先は、右兵衛佐の傍だ」

「え？ 右兵衛佐足利直冬のかたわらに？」

「そうだ。直冬の帷幕のなかにはいることだ」

「えゝ？ 帷幕のなかに——？」

庄五郎は、自分の胸中でおどろきが不審さに変わって行くのを、感じた。

七

「はいつてくれ、と頼むのだ」

「——館っ。果してそれがしが、入り込み得るでござろうか。敷妙には、美貌があつた。境遇上の便宜がござりました」

「いや。——敷妙の場合とは、手段がことなる」

「しかし、それがしには——」

「聞け。——庄五郎正氏が、足利へ——北朝へ降参するのだ」

「え、降参？ この庄五郎に、朝敵方へ、たとい謀りごととはいえ降参せよと？」

「申すのだ」

「館っ、そ、それは、酷でござる！」

と、庄五郎も、叫ばずにはいられなかつた。けれども正儀は、若き従弟を静かに見すえて、

「むろん酷じや。——よしや敵を計るためにもせよ、朝敵の軍門に降らば、一生涯、人の指弾きを受けるであろう。いや悪名は、一代で消えない。——五百年、六百年の後までも譏られるだろう」

「あゝ堪えがたいことだ！」

「いかにも辛いことだ！」

と、正儀が、にわかになを慄わせた。そうした哀切な語気は、かりそめには絶対に虎夜叉正儀の喉から洩れるものではなかつた。

「しかしながら、その辛さに堪える人柱こそ——庄五郎、その人柱こそもつとも必要なのだ」

声が、ますます、痛切にひびいた。

「館！」

「頼む！」

庄五郎のみでなく、お奈穂も——また幾波も、折鶴も、さらに梶丸までが、正儀のあきらかに悲痛な顔に、眸をあつめた。

「虎夜叉とて、最もおゝきな必要に招かれた場合、あるいは降参もしなければならぬかと思う。——もし、大君の御ために、正儀の北嚮が、ぬきさしならぬ絶対の必須とあらば、甘んじて後世に、汚名をのこすことも敢て厭わぬであろうぞ」

「おゝ、正成の殿の御子におわすあなたが！」

「うむ。わしが！」

「……それがしは、正季の子でござる！」

「正季の子なるが故に、降参は出来ぬと申すか？」

「は、はい！」

「庄五郎っ！ 今わしは、もつとも大きな必要と云つた。最大の必要に迫らるゝ場合とはなにか？ すなわち、一天万乗の帝のおんに、北朝をして降参せしむる場合をさすのだ。三種の神宝の偽器を擁して天位を潜称した京都朝廷を、わが大君へ、屈服せしむるためには、楠正儀が北朝へ降参する以外絶対に途なしという時が、もし来らば、この正儀は、あらゆる嘲り、あらゆる罵りを忍んで北へ赴く。人々はもちろん、あの不忠者よと、世から世へ語りつぐだろう。歴史は、逆臣伝反臣伝のうちにわしの名を記録するでもあろう。だが、まゝよ、構わん。正儀が唯一の目的は、北朝を、降参させることにある。かつては草莽の臣たりし楠が、深き朝恩に浴して三代目、正儀にいたつて忠を忘れ、義を誤てりと非難さるゝとも、天つ日嗣の皇ら帝が、都の宮闕へめでたく還らせ給うなら、なんの幸いかこれに過ぎよう！」

正儀は、庄五郎の双眸を、きつと見つめて、しばし語をとめてから、

「いうまでもなく、自ら北へ走ることを要せず北朝を、降参させたいは山々だ。それがためにこそ、虎夜叉の心血をしぼり、全霊、全力をこうして傾けているのだ。——庄五郎っ。わしの苦衷を察してくれ。……もし虎夜叉の眼に見損じがなかつたとせば、お身は理解できると思うぞ。——どうじゃ、人柱になつてくれぬか？ 皇室のおんために——そしてこの正儀のために！」

「館っ！」

「む、解ってくれたか？」

「はい！」

八

庄五郎は、決ぜんと、解つたと答えた。切々と迫る虎夜叉のこえが、心根に徹し、烈々ときらめく正儀の気魄が、魂を照したのであった。（北朝を、南朝の正統へ降参させるためには、臣楠が北嚮したとていゝはずだ。そして自分は今、「もつとも大きな必要」に招かれたのだ。そうだ、まず自分が人柱になろう！）

庄五郎は、そう考えて、「はい」と答えたのだったが、答えた自分の声に、亢奮をあげしく煽られて、泪がわき、躰がふるえた。

（人柱！）

と、叫びたいような衝動が込みあげたとき、正儀が、

「わしは、嬉しいぞ」

と、云つた。

「わたくしも！」

と、庄五郎が応じた。

（湊川や四条畷の戦死よりも、まるで別な意味で、はるかに意義が深いのだ！）

「のう。大きな犠牲だ。——歴史に悪名は遺るし、——だがしかし、千載の後には知己も現われよう。痛ましい、辛苦な仕事だが、庄五郎、やってくれ。お身を除いて他に適任がないのだ。お身が、直冬の懐へ入ってくれなければ、わしの謀略が運べない。去年来の画策が行きづまらぬまでも、遅々として捗どらないのだ。わしのごく側近の腹心だけしか知らぬことだが、敷妙の働きでさすがの直冬も、どうやら明敏な心境を曇らせて、師直と戦う気持ちになつた。そこで紀州まで出かけて来たのだが、高の軍勢が、その裏をかいいて、八尾と天王寺へ退いた。

退かずにいたら、直冬は紀州から兵を和泉へかえして、高軍の陣後へまわり、われわれとそれを挟み撃ちにする形で攻めかゝつたかも知れぬ。直冬にとつては、そうした姿勢で戦うよりほか、高に対して勝ち味がない。で今や師冬、師泰に退かれたゆえ、つぎの機会を待たなければならぬ。な、そこだ」

正儀は、そう云つて、亢奮をだいぶ落着かせた庄五郎の、問いを誘つた。「そこで？——わたくしが直冬の軍門に降れば？」

「かならず直冬は、お身を利用して、わしへ何等かの渡りをつけて来る」五角のいきおいで師直と、直義・直冬とに、鷓蚌の争いをさせなければならぬのだ。それがためには自分が、直冬の相談相手になって、望ましく形勢を醸しださなくてはならないのだ。と、そう思つたとき、庄五郎の眼には、正儀の顔が、崇く高く仰がれるように映つた。

若い魂いは、淫刺と、するどく奮いたつた。

当月当日

一

登子の方が、

「宜かつたか、それとも——悪かつたのやら？」

と、つぶやいた。

「さあ！ いずれとも……」

饗庭命鶴丸は、御台の浮線綾の唐衣をながめて、（やはり派手な方がお似合いだ）と思つた。灯にあかるく照らされる御台の顔は、たしかに去年の暮ごろから五つ六つ若返つて見えるのだった。（御台には、將軍の禁慾の御生活が、どんなにお辛かつたらう？ それは、何年つゞ

いたことか？ だが將軍の御心機が一転した。北の対へ、御台の闈へ……)

「命鶴——」

「——？」

「源氏ほど、兄弟仲のわるい家柄はないのう」

「しかし争いには、兄の方が勝っておられます。頼朝卿は源九郎義経を殺し、義朝は為朝を追われた」

「……直冬を、中国探題という名で備後の鞆へ、遠ざけることが出来て、一安堵にはちがいないけれど、そのため下御所のお恨みは、どれだけ深まったかしれぬ」

「御安堵が、御安堵にはなりません。なれど、あの場合、あれよりほかに御手段はなかつたのでござります」

「上様がお起ちあそばしたから、内乱も防げたようなものゝ、あれが日ごろのわが夫なら……」

「都も焼野が原でござりましたろう。萩原法皇の崩御が、將軍のお心持ちに、大きな響きを投げかけた矢さきゆえ、よろしかったのでござります。妙心寺を建立あそばして萩原院に、世の風塵をお避けになり、ひたすら法の道にわけ入らせられた法皇さえ、あゝした御悩の御最期！

ということが、御転向の動機だつたにちがいないござりませぬ」

「わが夫とても、お足許に火がついてはのう」

「でも、あれが、崩御以前の出来ごとなら、おそらく燃えるがまゝに、捨ててお置きになったことゝ思われます」

侍女が、襖をあげた。

「上様のお召しでござりまする」

そう云つたとき、白い霧が、室内へさつと流れこんだ。

「や、ひどい霧だ」

と、命鶴が云うと、

「もうとても、おそろしい霧でござります。葺のすきから、濛々とお

廊下へも、お入側へも——」

「お召しは、それがしをかか？」

「はい」

命鶴が、渡廊へ出ると、霧のなかに待童の姿が、ほんのぼんやりと見えた。

戸外は、まったく一寸さきも見えぬ霧の海であつた。

二

めずらしい濃霧だつた。

一方は宮殿、一方は東洞院御所すなわち尊氏館。築地と築地に挟まれた街路は、まるで河の底のようだつた。夜はまだそう更けてもいないのだが、なにぶんにもひどい霧で、一步ふみ出せば、衣服はびしょ濡れになるし、手さぐり、爪先さぐりでなくては動けないような有様なので、人の往来がほとんど止んでしまつた。

だいが、風が出て来たが、ように吹き払われる霧ではなかつた。朦朧と渦をまきつゝ、流れる後からまた流れた。

ふかいこの霧のなかを、一、二と数えるならちようど十五人の人間が、將軍御所の築地そとへ近づいたが、十五人のうち、二人だけを除いて、あとは皆、なにか瓶みたいな恰好の物をつゝみにして背負つていたし、手には、やはり油紙で包んだ、長さ三尺ばかりの棒切れの束らしいのを下げていた。

空身の一人が、

「やれっ」

と云つた。

「は」小声で答えた、もう一人の空身が、ふところから、細引きの繩束を出して、築地の内側から枝を街路へのぼしている椎の樹へむけて、投げると、みごとな手練で——たちまち繩梯子になつた。

と、見る間に、その男はするすると枝へ登つて、その梯子の一端を

持ったなり、幹づたいに、築地の上に立つ塀の内側へ降りてしまったので、外と内とをつなぐ通路が出来た。つまり繩梯子が高い塀のあたまで越しに架けられたのであった。

命令した男が、塀を乗り越えたあとで、十三人が、つぎつぎと、屋敷のなかへ忍び込むその素早さ——。

最後に、梯子までが、ずるずると邸内へ没すると、あとはただ漠々と、闇夜を霧が、そよぐだけ——。

街路には、依然、往来が絶えていた。

三

屋形の遠侍では、郎従どもが、内しよで寝酒を飲んでいた。

「大丈夫！ 騒いだとて聞えるものか、あの風の音だ」

「滅茶な霧だったが、どうやら吹つとばされたらしいぞ」

起って行って、窓部をあげると、濃霧が流れ込むかわりに、こんどは烈風が、まともに吹き入ってあつという前に燈りを消してしまった。

「ちえつ、この風に窓を開ける奴があるか。締めろ？」

「早う、燈火をつけてくれ。せつかくの酒を、懐にでも吞ましてみろ、もつたないぞ」

「おう、瓶子を倒しては大変だぞ」

「平氏が倒れりやあ源氏だ」

「早く、つけろ」

「おっと陰呑ん、もうすこしで源氏の世だった」

「ほ。世だった、世だった身の毛がよ」

燈火はついたが、焰が、しきりに揺れた。

「風の奴、どこからは入って来るのかな」

「だんだん烈しくなるの」

「ひどく唸るぞ。こんな風に火でも餘したら丸焼けど」

「なめに、霧でうんと湿っているから、そう易々とは燃えん」

「燃えが悪うて張合がないような、面をして」

「おう、きようは何日かな？」

「ぼか。日を忘れたのか。正月二十八日だ」

「二十八日か。む、ちようど一年目だ」

「なにが？」

「忘れもせん去年の今月今日だ。風はもつと烈しくて、おまけに空気が、からからに乾いていたから、燃えたの燃えないのという段ではないぞ」

「一体なんの話だ？」

「凄かったぞよ！ 夜だったから、火の手が天にくつついて、空一面が焦げるかと思つたのう。話が負けるから、見ないものには想像も出

来まいけれど——」

「夢にみる火事という奴は、とても綺麗だつて事だ」

はたから一人が、

「あゝ吉野の焼けた時の話しか。——へえ、去年の今夜か。そうそう、おぬしは今出川の人間だったの」

と、云うと、みんなが、一年前の吉野炎上を想い起した。

「噂さに聞いたきりだけれど、ずいぶん大きな火事だったというの」

「もとの主君の悪口はつきたくないが、高さまも、あれは酷すぎた。焼かずとも御所や伽藍を灰にしてしまわれた。吉野といえは、後醍醐の帝以来、日本中に鳴りひびいた場所だからのう」

葎がうごき、軒や庇がきしんだ。樹々が、枝を、葉を、騒めかせた。

何か倒れたり、落ちたりする音がした。

「この風では、火の用心がいる」

「火事のある日には、火事の話が出るというの」

四

牀の高い宸殿の、縁の下から、黒い影が出てあたりをうかざつたが、やがてまた前の牀下へもぐり込んだ。

瓶のなかは油だった。

木片は、燃料だった。

十三箇の瓶が、將軍座所と、北の対とに四箇ずつ、そして宸殿には五箇、いずれも牀下へ運ばれていた。瓶の油のなかへ、木片が浸けられた。油に火が点いた。ぱつと燃えあがった炎は、ばちばちつと音を立てた。じいっと油が鳴って、すぐ木片に火が移った。縁下をくぐって来る風のおおりが、ぼう、ぼうつと、火勢をつのらせた。光りが、赤ぎいろく、人間の顔を、服装を照らした。火つけ人は、若い武士とその郎従であった。繩梯子をかけた男は、楠正儀の秘蔵の郎党、与茂平だった。

土御門東洞院の將軍御所をやくために、はるばる東条から潜入したのであろうか？

だが近ごろ、東条から京都へ入った武士は一人もなかった。では町人が百姓かに変装してか？ 否、それもなかった。

今夜の火つけ人十五名は、詭えむきの濃霧にまぎれて、村雲の反橋の直冬邸からこゝへ忍びこんだのだ。若き武士といったのは、庄五郎正氏だったのである。

尊氏の座所の牀下から、走り出した四人が、北の対に火を放った四人と前後して、宸殿のそばまで戻ったとき、庄五郎も与茂平らも焰が、牀の木材に燃えうつったことを、たしかめて、縁の下から現われた。そして十五人が揃って、暗い広庭を、風と一緒に横断して、さつき披けたまゝになっている中門をくぐり、築地ぎわの椎の樹の下まで戻った。

庄五郎が、

「大丈夫か？」

と、すでに樹に登っている与茂平へ、声をかけた。

「誰れも通りませぬ」

「火の方は？」

「それも心配なしでござります」

塀を乗り越えざまに、振りかえると、闇のなかで宸殿が、猛烈な焰を縁の下から吐いていた。

庄五郎は、につこりとして、繩梯子を降りた。

五

「火事だっ！」

と、將軍が叫んだ。

「おう、火事々々！ あれもうどう致そう！」

御台は、とび起きながら小袖の前を合わせて、細紘を腰に巻きつけたし、尊氏は、脱ぎすてゝおいた直垂の袖を通すが早いか、御台の手を引いて闇を出ようとしたが、たちまちたじろいだ。

「あゝ！」

烟が枕をはったその焦臭さで、目が覚めたほどだったから、火はすでに建物の内部へ廻っていた。入側の牀が燃えぬけて、おそろしい赤気が、真つ直ぐに、斜めに、幾本となく火柱となつて、紅蓮の舌が、大蛇の口のように襲いかゝつて来るのだった。

「駄目だっ！」

尊氏は、御台を引きずって、走り出すべき方向をかえた。一方の入側は、黒煙が一ぱいに旋回はしていたけれど、まだ牀は焼け落ちる前だった。しかし外側は葎も、濡縁も、真紅の火焰につままれていたから、戸外へ、庭へ、と脱出を試みることは、すなわち猛火に、身を焼かれることであつた。侍女たちの悲鳴にまじって、命鶴丸の声で、

「上様っ！ 御台さまっ！」

と、喚わるのが、聞えたけれど、烟と炎とでさえぎられて、姿はどこかわからなかった。

「息をこらせ！ 烟にむせぶぞ」

御台にそう云いつゝも、尊氏は、どうして遁れようかを、まるで旋風の回るような頭で考えなければならなかった。生命の危険はもう

迫っていた。火が異様な音響をたて、背後から襲って来るし、前の黒煙の渦にもちらちら焰のさきが混りだした。御台が、

「あゝ生きながらの焦熱地獄！」

と、叫んだ。いつもは気丈な夫人だが、

「もしっ！」

と、しがみつくの、尊氏も抱えて、

「吉野を焼いた当月、当日だ！世にも怖ろしい報いじや！」

「おゝ焼いた報いに、焼かるゝとは！」

御台が、おびえた声でそう戦のくとき、煙りのなから躍りでたのは、命鶴丸だった。

「お、命鶴っ！」

「御台っ、おおい申すぞっ！」

登子の方を背おった命鶴は、尊氏とともに、猛火をくぐって辛くも渡廊下へ、そして広庭へ遁れることが出来たが、火はもはや屋形のあらゆる部分を焼きつゝ、烈風に狂って高く舞いあがり、低く匍いながら歩いてきた。近く、遠く、乱打される警鐘が、音を合わせ、つらね、響きを交えて、東山に、鴨川原に、けたゝましく反響した。深夜の京の市は、たけなわの夢を破られて、さかんな火勢を愕ろきながめた。火の手はまさしく、やんごとない皇居と、將軍御所の方だったからである。公家も武家も、がぜん色をなくした。朝臣武臣が、先をあらそって蟻集した。街路は人で溢れ、消防隊が人にせかれ、人を倒し、群集が叫び、わめきあい、火に近ければ近い場所ほど混乱が沸騰した。だがさいわい、烈風は北から南へ吹いていたので、乱れとぶ火の粉も、皇居の方へは流れなかった。そして不思議にも、尊氏館の建物が、すべて劫火になめられた時、さしもの烈風がびたりと吹きやんでしまった。群集は、火の拡がる怖れから救われた安堵と同時に、一種奇異な感じにうたれた。

（どうして風がやんだのだろうか？）

天変地異の気まぐれは、むろん人間の智慧では測れない。だがそれを、その気まぐれを、何かに結びつけようとするとところに、人間の弱さがある。

尊氏邸への放火は、この弱さを巧みに利用して、精神の不安と、土気の萎靡とをねらった企てだった。

発火の場所が、宸殿と、將軍座所と、北の対屋の三カ所に選ばれたことはそのいずれかの場所に尊氏が寝ているに違いなかったからである。で、北の対で御台とともに睡っていた尊氏は、猛火に包まれて進退きまわった。命鶴が御台を救い出してくれたので、危く助かったが、火から遁れてからの恐怖の方が、はるかに、煙と焰とに生命をおびやかされている最中の恐怖よりも深刻だった。

（吉野を炎上させた当月当日！）

去年の今夜——焼いたのは師直でも、師直は自分の代理者だから、自分が吉野を焼いたことになる。今は昔、弟直義が大塔宮に対して犯した大逆よりも、かえって自分の罪が深かったのではないか？なぜなら弑逆の兇刃をふるった淵辺は、末輩の家臣にすぎなかった。決して弟の代理者ではなかった。

そう思うと、尊氏はおのゝいた。煙にまかれた登子の方が、命鶴の背からおりと昏倒しても、それを顧みようとさえしなかった。火の中にいた時は、夫人をかばった尊氏が、安全な場所に免れてからは、たゞもう恐懼と懊悩とに苛まれるのみだったのである。

六

「たゞの火ではない」と師直が云った。

「たゞの火ではない」

と、尊氏も同じ言葉を洩らした。

「放け火だと申すのだ」

そう、師直が言いなおすと、

「いや、業火じや。悪業所感の苦報だ！」

尊氏は、太息をついて、邸を焼きつくした火の餘燼をながめた。

「はゝゝゝ」

剛愎な哄笑いをひびかせて、師直は、

「わしの今出川邸は無事だ。まだ焼けない。吉野の応報ならば、わたしの屋形がまず灰燼に帰さなければならぬ。將軍。檜は堅くても、木材だ。罰が当たらずとも、火を放てば焼けます」と云った。

將軍の東洞院御所焼けつゝありと聞いて、今出川の自邸から、屈強な消防隊をひきつれて馳せつけた師直だった。

「わしの館に、火を放てば、誰れがどれだけ利益を受ける？ 劔を把るなり、毒を盛るなりして尊氏が生命を覗くとあらば、まだしも意味があるけれど。——住邸を焼いたとて何とせうぞ」

「なかなか。——直義殿の、おそいこと。まだ見えぬことを、何とおぼす？」

「師直。和殿は、直義が焼かせたと云うのか？」

「直義殿か、直冬殿か、ないしは上杉か、そこどころは存せぬが、三カ所から同時の出火は、放け火の証拠じや」

不敵な師直の考えかたは、どこまでも唯物的であつた。だが尊氏は、はなはだ憂うつに頭を振つた。

「世には理外の理というものがある」

「宸殿には誰れも、いなかったと申すぞ」

「そこに臥せった者のないことは、火の気のなかったという理由にはならぬ」

「はゝゝゝ困つた方じや！」

と、師直はまた笑つた。

「笑い声は聞きとらない！」

尊氏は、不機嫌に云つた。そして、

「たとい放け火にもせよ、それがすなわち業火だ」

「はゝゝこれは師直、手を挙げた。ともかくも焼け出されのお宿なし將軍じや。さあ、成らせられい、わしの邸へ」

師直は、そう云つて、

「弾正つ」

と、大きな声で呼んだ。

益子弾正が、走つて来た。

尊氏と師直とは、庭苑の築山の上に立っていたのであつた。

「御所を今出川のがが館へ、お供申せ」

火は風下へ延焼したが、ついに消しとめられた。地上の餘燼はなお赤々と見えたけれど、空は黒々と闇にかえり、焰に照らされた四周の物象もひしめく群集の姿も、ともに暗中に没して、たゞ松明の光りだけが、点々と、騒音のなかにまたゝいていた。

七

副將軍直義が見えたときは、尊氏と御台とはすでに、師直の屋形へ送られていた。

だが、諸大名はまだ焼け跡から去らなかつた。吉野炎上の当月当日の怪火ということが、誰れもの心を恟恟とおのゝかせたからである。

親しい者同士が、怪異を語りあい、反目する群れと群れとが、不安な心で睨みあつた。

師直も、なお引上げずに、山名時氏と話していた。

「高殿のお言葉には、充分理りがござる。しかし、放け火とすれば、その目的は？」

「目的は明らかだ。將軍のお心をおびやかして、ふたたびもとの世捨人同様な心境へ、もどらせようというのだ」

「なるほど。將軍が政務を聴かせらるゝことは、直義の殿御一党にと

つては、たしかに大きな不利益でござるからの」

時氏が、そう云った時、走って来る足音がして、闇のなかで、

「殿。——高の殿は在おさぬか？ 高の殿」

声は、富永孫四郎であった。

「ござだ」

と、師直が答えた。

「おゝ。一大事を聞き込みましたぞ」

「なに、一大事？」

「は。まさしく。——殿、おそばにござるは？」

「山名殿じゃ」

「あゝ山名殿でござりまするか。しからば申上げます。先刻、出火の直後の出来ごとでござるが、怪しき者が幾人か、上杉屋敷の塀を乗り越えて内部へ入ったということにござりまするぞ」

「なんと、上杉屋敷へ——」

「は」

「孫四郎」

と、師直は思わず踏み出して、

「それは確実な話か？」

「はい。伴野ばんの出羽守家来が、確実に認めたのでござりまする」

と、富永が答えた。

「どうじゃ、山名」

「愕ろき申した」

「睨にらんだず、ぼしだ」

「するどい御眼力、恐れいった」

伴野出羽守長房の家来どもが認めた曲者というのは、ほかでもない庄五郎正氏と与茂平以下の郎従だった。尊氏館に火を放けた庄五郎主従は、だが、なんのために上杉邸へ忍び込んだのであろう？

彼等は、村雲の反橋さかむら際の直冬邸からひそかに出かけたのだから、放

火という仕事をしとげた後、ふたゝび直冬の留守邸の塀を越えて彼等の寢床へ還ろうとしたところを、見つかったというのなら、至極筋道だが、上杉屋敷へ潜入したことは、いかにも不思議だ。なんのために上杉邸へ入ったのか？

事実をいうと、庄五郎主従は、伴野出羽守の家来たちにわざと発見されるために、上杉邸へ潜入してみせたのであった。つまり上杉邸へ入るところを人に見つかりたかったのだ。

だから、その目的をはたすと彼等は、すぐまた街路へ逆戻りした。そして直冬屋形へ帰った。將軍の邸ていだい第を焼いて人心を恐怖させ、懼れを知る者の胆を寒からしめると同時に、たとえば師直のような懼れを知らぬ者へは、火つけ人は上杉邸の人間だと思わせることによつて、内証ないじょうを促進させるという二重の効果をねらった計略だったのである。

すなわち、思いどおりに、みごと計略は図にあたった。

師直が、

「上杉め。いよいよ滅びる時が来たぞ」

と、呟いた。

「自ら墓穴を掘ったのだ」

そう云った山名へ、師直は、

「むしろ結構な火事だったのう、はゝゝゝ」

と、こゝろよさそうに笑った。

田楽異変

一

「身に覚えなきこと——」

と、上杉重能は陳弁につとめた。
將軍も、

「重能は、断じてそんな男ではない」

と、あくまで庇った。

「重能が知らずば、知っている者があるはずだ。屋敷の取締りに當っておる責任者を出せ」

と、執事師直は突っ張った。

だが、尊氏は極力、師直を慰撫し、なだめ、すかした。

で、結局、幕府の引付一番の頭人という上杉の職をはいで、出仕をとめ、閉門して百日謹慎させるほか、中国方面に散在する所領は、すべて没収して、重能の封土采邑をおよそ半減させることで、やっと一まづけりがついた。

副將軍をはじめ、畠山、吉良、石堂、桃井、長井、荒川、二階堂などの諸侯は、齒がみをして口惜しがったが、直冬は中国に離れているし、高に對して一戦をまじえるには、とても兵が足りなかった。

（いつぞや、直冬が云ったとおり、南朝と手を握って、楠の武力を利用するほかないかも知れぬ）

直義は、そう思った。

だが、そうは思っても、それは一朝一夕にできる事柄ではなかった。

不可能ではないまでも、数えきれぬほどの困難が横たわっていることを、直義は感じたのであった。

備後の鞆の津の直冬屋形と、三条坊門の直義邸との間を、使者が頻々と往つたり来たりした。いつかしら庄五郎正氏の姿が、ひそかに副將軍館に入入りするようになった。

中国から上京した直冬の使者の口上には、

「恋のために、また一つには正儀への不平もあって、河内を逐電した庄五郎どではござりまするが、間諜の報告によりますると、女の父の貴志右衛門は、一粒種の後つぎ娘を奪われた腹立たしさから、たと

い主家の人にもせよ、見つけ次第、生かしては置けぬと云っているそうにござりますが、正儀どのは案外怒っておられませぬ。一族肉身が死に絶えた今日、自分にとつては大切な従弟だ。よしんば貴志を犠牲にするとも、楠家としては、庄五郎のありかを探し出して、河内に呼び迎えなければならぬと、そう考えておられるらしいとござります。それゆえ、庄五郎どのは、われわれが南朝方と提携する場合、充ぶん楔となり得ると信じたので、京の留守邸に残しておいたという殿のお言葉でござりました。年齢はわずか十六歳ながら、きわめて俊敏、有為な材ゆえ、大いに用いるべきだ、とござりました」

と、あった。

もつとも信頼する直冬の推薦だから、副將軍直義は、よろこんで庄五郎と会うことになったのであった。

さて、一方では師直みずから工事を督して、尊氏の新館の造営にあつた。土御門東洞院の焼跡に再建することは、將軍がこれを忌みきらったので、新しい屋形の敷地には高倉が選ばれた。建築は、どんだんはかどった。師直の権勢は、さながら將軍御所の炎上が一つの時期を劃したかのように、その前と後ではたいそうな相違を見せた。

「將軍も、副將軍も、あつたものでないのう」

「まつたく飾りものじゃ」

「名ばかり將軍かの」

「足利幕府またの名すなわち高幕府だ」

「征夷大將軍、源氏の長者、高師直つてなことになるはせぬかな？」

「なりそうじゃ。上杉といえは將軍家の御外戚で、重能の殿は昇殿もお許されの方ではないか。それを、猫の子の頸でも捻ねるようにな

——

「曲者の姿を見たものがある。いや、知らぬ、存ぜぬ。水かけ論で証拠にはならぬものを、無理無体に罪に陥したのだ」

「む、どうも無実の罪らしいが、そうするとあの火事は、やはり天罰

かのう？」

「天罰とも。天網恢々、疎にして失わずということがある。怖ろしい話だ」

「吉野を焼いた一年目の当り日に焼けるようでは、將軍家の御運も末じやよ」

「だが、高の殿の有卦入りは、解せぬではないか？」

「それも恢々、洩れるものか。おつつけどえらい罰を喰う」

「もう一昨年、六本杉の怪異がちゃんと予言しているからな」
「気味の悪いことじやのう！」

二

世俗は、怪異を好む。

と、云つてはやゝ語弊はあろう。だが、怪異を怖れすぎる人心は、ほんとうは怪異でもなんでもないものをも、まことの怪異としてでっち上げてしまう。

怨霊思想が瀰漫していた中世の末期だから、それは当然だった。

社会の上層の一部知識階級にこそ、新しい学問である宋学が、すでに輸入されて、程朱の新釈が学ばれていた。進歩した頭脳の所有者たちは、訓詁の学をすてゝ、意義と道理の学問についていた。因襲と典故の呪縛から脱して、窮理博物の独立心を養いつゝあつた。また宗教の方面でも、超仏越祖を手段として、個人の独知独覚を重んずる禅が、大きな勢力を得ていた。後醍醐の帝のごときは、禅の哲理に通曉あらせられ、宋学によって独闢乾坤の御英氣をつちかわれた。そして

「今の例は、昔の新儀なり。朕の新儀は後の世の例たるべし」
と、宣うた。

で、院政をも武將政治をも、断然廃して、建武維新の、天皇御親政をお布きになったのは、恐れおゝいことながら畢竟は、帝の御教養の深くおわしましたことに基づいた、といえるし、准后親房卿が「神皇

正統記」を書いたのも、古来の仏教の影響からまったく離れて、新しい学問の光りで、はじめて明確に大日本の国家、国体というものを認識したからであつた。また楠正成、正行は宋学のいわゆる「道」を、帝への忠に結晶させて、これを湊川と四条畷で実践してみせた。

しかし、こうした新学と新精神の真髓にふれるということは、ごく狭い範囲にかぎられていて、世の一般はまだまだ、とても近世的な黎明を眺めるどころではなかつた。

だから、怨霊や怪異が、きわめて大きな影響を投げかけていたのだつた。で、陰陽寮は、

「將軍の邸の炎上せしころより、犯星と客星、隙なく現じたり。王位の愁、天下の変、かならず兵乱と疫癘あるべし」

と、密奏したものだ。

ところが二月二十六日の夜半だつた。

「おゝ、あの音は？ あの音は？」

洛中の貴賤、老若が、なま温い春の夜の夢を破られて、魂いを冷した。

「あゝ、將軍塚だ、將軍塚が鳴る！」

「物すごい鳴動じや！」

東山長樂寺から、つゞらおりの坂路をのぼりつくすと、そこには將軍塚があつた。桓武の帝がこの平安京を奠め給うたとき、王城鎮護のため、身の長け八尺の武將像が造られ、それに甲冑を着せ、弓箭、刀仗を帯びさせて、西向きに埋めた。それ以来、天下に何か変乱が起るうとする時は、きつと、この塚が鳴動して、前じらせをする。と、そう言い伝えられていたのであつた。

「おゝ、あれは地鳴りだけではないぞよ」

「虚空に兵馬が、馳せ通る音じや！」

「えゝ？ 兵馬が空を、走るのか？」

「走るとも。それ、な、陣鉦の音だ！」

「あ、馬の蹄の音がする！」

「怖ろしいことだ。まるで六本杉の怪異の予言どおりになるのだ」

三

あくる二十七日の真昼、正午というのに、清水坂の東宿の、ある僧房から、にわか火が燃え出して、風も吹かないのに、大きな炎が不思議な火喰りをたてゝ飛んだ。

「これはたゞ事ではないぞ！ 火事が起きれば焼けるのは定だが、あれあれ、あの火喰りはどうしたことじゃ。まるで火焰に翼が生えて飛ぶようだ。あゝ本堂へ飛んで行つた。おゝ、阿弥陀堂へも飛びうつつた。——世の中に大変がある前には、靈験のいやちこなお寺やお社がまず焼けるそうじゃ。やれやれ清水寺も丸焼けか！」

風のない日でも、火災の折は、往々、局部々に旋風が起きる。焰は、その旋風にあおられて、猛烈な飛び火をして、大伽藍の本堂、阿弥陀堂、楼門、舞台、鎮守まで、一字も残さず焼きつくしたのであつたが、民衆は決してそうは思わなかつた。あやしい羽根が焰に生えたのだ。清水寺の丸焼けは、天下大乱の前兆だ。と、考えた。

この考え方は、桜さく真盛りの三月三日に、なおさら深められた。

と、いうのは、男山八幡の社殿が鳴動して、神の鎬矢が音もたかく京をさして飛んでいった、と、まことしやかに流言を放つ者が現われたからであつた。

すると、宮廷の天文博士が、

「つらつら天体を按ずるに、月日を経ずして大乱が出来して、大臣は災をうけるし、子は父を殺すし、家臣は主を弑し、疫癘と兵革が続くであろうし、餓莩は巷に満つるであろう」と、もつたいらしく断言したのである。のみならず、若葉がかおる四月七日のことであつたが、ちょうど成の刻、すなわち午後八時ごろ、巽（東南）と乾（西北）の方角から、電光ががゞやきだして、双方の光が寄りあつて、さながら戦うごとくして砕け、砕け散つてはまた寄りあい、風が猛火を吹きとめるように、

余光が天地にみちて見えたとき、名状もできぬ異形のものが見られたかと思ううち、乾の光が退いて、巽の光の方が進んでいったが、やがて忽然と互いの光が消えて失せた。

と、これもまた天文博士によつて発表された。で、註していうには、「この妖怪——天下の不穩を示す」

四

だが、人間の心理というものは妙なもので、無気味な想いにしばしばおびやかされると、いきおい何等かの方法で気分を転換を求めずにはいられなくなるから、天下が乱れるぞ、不穩の兆があるぞ、と、あまりしげしげいわれると、却つて太平楽な遊び事をやってみる。

今年の春以来、田楽がばかばかしく流行したことなどは、たしかに、そうした心理の表われだつた。

鬱屈した不安を、酒でまぎらし、田楽をみて恐怖を忘れようというのだ。將軍尊氏は、鎌倉育ちで、田楽は北条高時がひじょうに好んだため鎌倉が本場だつたから、若い時にはかなりこれに耽つたけれど、延元このかた去年までは、まるで捨てゝ見向きもしなかつた。

ところが、心機一転後はふたゝびこれを翫ぶことになつた。そして火災後は、今出川の高屋形に起臥したので、なよりの憂さばらしとして田楽をたのしんだ。

かげでは、

「あゝ宜くないことだ。関東が滅びる前に、高時禪門が田楽に溺れた。上の好むところ下これに倣う。万人が手足を空にして、朝夕を、これに姪し、これに費したので、北条氏がたちまち断絶した。それを今また將軍が——」

と、心配するものも無いではなかつたが、そうかといつて尊氏に、世捨人にならなくては、大乱を速めることにもなりそうだから、うかつに諫めも出来なかつた。

今年はいわば、鳴動ばかりだとみえて、持明院の御苑の池が、鳴り動いた。そして旋風が起つて、中門そとの雑舎が一棟、空中へまきあげられた。

ところが、その翌日は、また火事で、壬生の地藏堂が灰になってしまった。

梅雨があけて、盛夏がおとずれた。

天変地異も、あまり度かさなると、だんだん凄味がうせる。鳴動や火事はもう、そう人の噂にのぼらなくなって、京の市の話題は、この六月十一日に興行される勸進田楽に、ほとんど限られたかの有様だった。行恵という僧は、祇園の執行であつたが、この僧が、四条大橋をかかけかえるための勸進として河原で本座の田楽と新座の田楽とを合わせて、能競べをさせることにした。で当日は、河原に広大な棧敷を設けて、かしこくも持明院の御連枝、梶井門跡の台臨をあおぎ、公家からは太政大臣洞院公賢公や二条蘭白、武家からは尊氏将軍が、観覧されるから、この田楽競演こそ希代なみものだろうというので、洛中も洛外も到るところで、寄ればきつとその前評判ばかりであつた。

「さて、いよいよ明日だな」

「この夕映えでは、明日は間違いなしの日本晴れだ」

「どうじゃ、あの棧敷の結構なことは」

「豪勢なもんだのう。三重にも四重にも組上げてあるではないか。どうせ此方とらに見物の出来る田楽ではないから、せめて空棧敷でも観ておこうかよ」

「囲いの周りを一廻りしたら、二百間もあろうかの。おれたちの住家の柱よりも太い材木が使つてあるぞよ」

「あたり前よ。何千人という人間の重みがかゝるのだもの、細かつたら保てはせぬ——。五寸角、六寸角——八寸角の大物だ。三塔の貫主の御門跡さまや、弓矢の長者の將軍さまの御見物さい中にこんな四重屋体が崩れでもして見ろ、どうなると思う」

夕涼みがてら、棧敷をながめに来る市民の数も、すくなくはなかつたし、磧の石に尻をおろして明日の盛況を想像しつゝ話しあう群も、あちこちに、十日の月影を青白く浴びていたが、やがて夜が更け、月が傾くころは、広い河原中に人氣がたえて、尨大な棧敷が黒くわだかまった。そして河添いの人家のともし火が、一つ消え、二つ消え——ついに灯影はどこにも見えぬ真夜中が来ると、ふかい寂寞をみだすのは、かすかな水のせゝらぎだけになつてしまひ、棧敷が組み上げられる時の騒めきを思えば、まったく別世界のよう。

だが、そうした静寂は、長く続かなかつた。意外なる闖入者が現われたのだ。

五

闖入者は、ぼつぼつと、棧敷の床下へ入つて行つた。その人数は、合せると十四五人もあつたろう。黙々として誰れ一人、口をきかなかつた。彼等は、十二分に予定された仕事を実行するまでだ——思われるような態度で、袋に入れてきた鋸を出して、八寸角、六寸角の、棧敷全体を支えるにはぜひ必要な親柱ともいふべき、大物を挽き切るのであつた。

もし何人かゞ彼等のそばに近よつて、よくその容貌を点検するならば、夕涼みに来て、空棧敷でも観ておこうと云つたり、こんな四重屋体が崩れでもして見ろ、どうなると思うなどとも云つたりした町人が、そこに発見されたかも知れない。そしてその点検者が、楠の郎従と茂平の顔を見知っていたなら、くだんの町人がすなわち与茂平の変装だつたことを知るだろう。

それはとにかく、鋸で親柱を挽いて、どうする積りなのであろう？ せつかく組まれた棧敷を夜の間に倒して、明日の催しを妨害するの
か？

いや。どうもそうではないらしい。

なぜかという、彼等は、柱の大物を、挽き切りはするが、鋸の歯が間二尺ほどおいて、二カ所で木材を横断しさえすれば、それで目的を果せたかのように、その柱はそのまゝに打つ棄つておいて、つぎの柱へ鋸を入れる。では、挽くだけ挽いて、あとでどうかするのかと思うと、最後まで挽きつ放しで、一人が四五本ずつ、合計六七十本に鋸の歯を通してしまった時が、作業の終りだった。

彼等は、袋へ鋸をおさめて、静かに棧敷の床下から積へ出た。そして、依然黙々として一人々々立ち去るのであった。

夜が明けて、晴朗な空に朝陽が、いかにも夏らしく燦々とかざやいた。棧敷は、前夜の秘事をけろりと忘れたような景色で、木の香を匂わせた。幕張りや、その他の飾りつけは、手廻しよく昨日のこらず済まされていたので、今はただ時刻の来るのと、観客のあつまるのを待つだけだった。

やがて諸大名の肥えた馬が見えた。月卿雲客のかぐわしい乗物がならんだ。大きな寺の僧侶が円い頭を揃えた。名のある社の神官が、冠をつらねた。

公家の上臈と、武家の女性とが、装いを競わせた。そのうちに、將軍が入場した。間もなく梶井門跡が台臨された。

そこで、興行者の側は、どんな具合かという、本座と新座が、東と西に、幄をたて、両方に橋懸りをこしらえていた。そして楽屋の幕には、額縁の錦を張っていたし、天蓋の幕は金襴だった。舞台には、紅と緑の毛氈を敷きのべた。そこにはきらびやかな曲景や、牀几がならんでいたし、その上には豹や虎の皮がかけられているという豪華さだった。

「まあ、なんと綺麗な舞台なのでございませう！」

と、云ったのは敷妙だった。

「む、みごとに出来たのう」

師直は、眼を細くしていた。

田楽の舞台の構造が気に入ったことよりも、諸人の眼が、自分の愛妾の美しさを羨んでいると感じて、すっかり悦に入っていたのであった。

「あの楽屋から聞えまする音取りの笛の、音色の澄んでおりますこと！」

「笛の音も悪くはないが、もつとよい音が聞えるぞよ」

「もつとよい音と申しますと——はて、なんでございませう？」

「それ、その声じゃ。そなたの声音のことじゃ」

「あら、なに仰しやるかと思えば、お戯れ言、このような場所で、わたくしはいやでございませう」

「お、その眼、その眼！ その眼は国の十国にも換えがたいわい」

「あれもう人に聞えまするものを！」

「そのやさ睨みが、師直の宝じゃ。のう敷妙、きょうのそなたは、また格別に美しゅう見える。化粧の加減といふ、着物の色どりといふ、なんとも申しようがないわ。もう一年半も精一ぱい愛しがったあげくのきょう、わしはまたぞろ惚れ直したぞ。考えてみると、そなたという女は、一日増しに嬌艶になつて来たようじゃ。中国における直冬が、久しぶりにそなたを見たなら、美しかったその上にもなお美しゅうなつたことを、さぞ驚ろくであろうし、未練の煮湯のたぎりようも、また一倍はげしかろう、わは、わは、今日下御所以下、反対徒党の顔が一つも見えのうて、それだけは張合いがないけれど——あのおとおり、わしの息のかゝった輩までが、初めてそなたを見でもするように舞台はそちらのけで、こなたばかり眺めておるぞ。あれ見い、公家方の棧敷から殿上人や、上臈が、そなたの方へ眼をみはっている」

師直がそう云っている間に、鼓が鳴り出した。

東西の楽屋のうちで、音取りの笛に合わせて打つ序口の鼓だ。

唐くれないの、額縁の幕が、へんぼんと風に動くどと律雅の調べが亮々とひびく。

「あれ、始まりませうぞえ」

と、敷妙が云った。

まぶしいような金欄の水干を着て、紅とおしろいの厚化粧をこらした美童が八人、東の楽屋から練って出た。と、西の楽屋からも、清らかな法師八人が、薄化粧で、おはぐろをつけ、花鳥を金で染め狂わした水干に、銀の乱紋をちらした裾濃の袴を、下くゞりにして現われた。そして各自に拍子を打った。あや、い、笠を傾けた。一の筋は、本座の阿古であった。乱拍子は、新座の彦夜又であった。刀玉は、道一であった。いずれも名高い田楽の名人で、神変自在な芸の持主だったのである。観衆がおぼえず感歎の声を洩らしたとき、敷妙が座を起った。侍女が一人、つゞいて起った。師直が、

「手水か？」

そう、訊くと、

「はい」

敷妙と侍女は、しきりを出て、棧敷の通路を降りて行つた。

六

師直は、敷妙の後ろ姿を見おろした。愛妾のたおやかな姿が、群衆の陰に没しても、なお見送るように眺めていると、

「館」

と、呼んだのは老臣の、益子弾正であった。

「なんじゃ？」

「なんじゃではござりますまい。折角の舞台——御覧じませ」

弾正に云われて、師直も、いくらかは気がさしたらしい面持で、にやりとすると、

「さまでに——それほどもお可愛いものでござりますかのう！」

と、首をかしげた。

「ふゝゝ舐つても、そりや嘯つても、飽き足りぬぞ」

「ふうーむ！」

と、仰山に、弾正がうなつて、

「こりや恐れ入り益子の弾正じや。はゝゝゝ」

舞台では、日吉山王の示現で、利生あらたかなりという猿楽が、演じられていた。

「おゝ猿の面が出た」

師直は、舞台へ眼をうつして、そう云った。

「あれが評判の童でござりますな」

と、弾正もみまもつた。

棧敷の床下に幔幕がかこつて、手水場があった。敷妙と侍女とは、その幔幕の下をくゞって罅の外に出ていた。そこは、棧敷の一番高い部分の直下にあたる床下だった。

「敷妙、さあ早う！」

「そんなら庄五郎さま！」

二挺の肩輦がおかれていた。両方とも四人昇きである。輦昇は、みな下郎と見せた屈強な郎従だったが、もう輦に肩を入れていた。

とゞろく胸をおさえつゝ、敷妙が、輦の座席へくゞりこむと、

「そもじも早う」

と、庄五郎は、侍女を促してから、敷妙へ、

「正儀の殿へ、よろしゅうな」

と、云った。

「はい！」

声がふるえた。軀もふるえた。あまりの嬉しさに言葉が見つからなかった。直冬のそばに一年半、そして師直のわきに一年半、まる三年ぶりでなつかしい、東条の城へ、玄々寮へ、夢にのみ見つづけた正儀のかたわらへ還れるのだと思うと、心臓も破れそうに鼓動が昂進するのだった。きょう、こうして脱出する手はずは、庄五郎との間に、五日ほど前から、極密のうちに決めてはおつたが、しかしつい今しがたまで師直に秋波を送らなければならぬ敷妙だったのである。だから、

いよいよ轎かどに乗ってみると、心底しんぞこから止めどもなしに歓かどばしさが、湧わきあがる。

与茂平が、

「邪魔の入りませぬうちに——」

と、云った。

「行け！」

と、庄五郎が声をかけた。

轎かど昇のぼきは、腰こしをあげた。

「洛中らくちゆうは、急いそぐに及およばぬぞ」

と、与茂平が注意した。

七

敷妙しきまうと侍女じよじゆを乗せた二挺の轎かどが、棧敷せきしきの床下とこから空地くうちをよぎつて、往還わうわんへ出たとき、棧敷せきしきの下したに居残いざのこった庄五郎しやごろうと、与茂平よもへいたちは、どうしたか？

彼等かれらは、昨晚こゝろの真夜中まよなちゆうに、こゝでひそかに作業さぎやした際ときとおなじ頭数かぶぞうであった。

丈夫ぢゆうぶそうな麻あしのひき繩ひきづなが、親柱おやしらのある箇所かたに絡かかりつけられた。ある箇所かたというのは、ほかでもない。前夜まへよ、上下じやうげを挽ひき切きつておいたおよそ二尺にせきの部分ぶぶんだ。

揃そろつて、ひき繩ひきづなをつかんだ彼等かれらは、

「えいっ！」

力を合あわせてひくと、切断きつてんしてある部分ぶぶんが、たちまち引離ひきちがされて地面ぢめんに落ちた。

結むすんだわけではなく、たゞ絡かかげたのみだから、索繩なわは、すぐ、地べたに落ちた切れ端きりはしから脱ぬくことが出来た。

「それっ！」

索繩なわは、第二だいにの柱しらにからげられた。

「えいっ！」

同じ動作おなじどうさくが、見る見るうちに二十回にじゅうかいほど、繰くりり返かへされた。

「もう大概たいたい、よさそうでござりますぞ」

と、与茂平よもへいが云った。

「む、よかろう。これで、一揺ひとゆれしたら——きっと崩くずれれる」

庄五郎しやごろうが、微笑ほくそえむと、

「では、もう一本いっぴんで——」

「よし。——こんどは危あやいぞ。むろんこちらへ倒たふれるからな」

少しでも傾かたむけば、柱しらはなお五十本いそほんちかく切断きつてんしてあるのだから、棧敷せきしきぜんたいはひと堪たりもなく倒壊たふさするにちがひなかった。

こうした恐おそるべき倒壊たふさ作業さぎやが、床下とこで行いわれていようとは知らぬが

仏ぶつの、数千せんぜんの觀衆くわんしゆうは、棧敷せきしきの上うへで舞台ぶたいの妙技めうぎに熱狂ねつかうしていた。

「人間にんげんわざではござらぬて！」

「あの芸当げんたうは、神託かみたくじゃ。神かみがかりじゃ」

「日吉ひよし神かみが、奇瑞きせうをお見みせになるのだ」

猿面さるめんの童わらわは、赤地あかぢ錦にしんに金欄かんだんを縫ぬいつつたうち、ちかけに、虎この皮かわのつ

らぬきを穿はいていた。御幣みひを高くさしあげて、紅色こうじきと緑ろくの毛氈けしんをし

いた反橋そりはしを、なゝめに横よこに踏ふみかわし、高い欄干らんかんのうえに跳はびあがって、

左ひだりへ廻まわるかと思おもえば、右みぎに旋回せんかいし、後ろうしろに反かへるかと思おもえば、はね返かへつ

たし、前まへにかぐむと忽たちち宙返ちゆうかへった。

「わーあ！」

「無双むそう々々！」

「天下第一てんかだい一品いっぴんっ！」

感興かんきやうと感声かんせいとが、席せきにあまつて、觀衆くわんしゆうはほとんど総立そうたつちに突つつ立った。

と、突つつ立った觀衆くわんしゆうが、さながら海の波なみのように揺ゆらいだ、その刹せき

那な——

めりめり、めりっ！

ひびきと共に、八十三間はちじゅうさんげんの大棧敷だいたせきが、はげしい勢いきほいでかたむいた。

田楽の妙なる芸を讚めた声々が、一瞬にして恐怖の叫びにかわつた。だが叫んだとて、喚いたとて、なんの甲斐があるう、二百四十九区劃という四重棧敷が、まるで将棋倒しをするように一度に、ど、ど、どと倒壊した。

崖が崩れて、石が落ちるように、人間が落ち重なつた。その上へ、崩れた横木が、倒れた縦木が、ぎし、ぎしと積み重なる、阿鼻叫喚が下から聞え、たとえようもない喧騒が、上積み投げ出された人々の間に起つた。

門跡も、将軍も、撰閔も、執事も、みなこの上積み倒れ落ちた仲間だつた。あつといつた時が境い目で、それから後は、貴賤上下のけじめはたえた。

棧敷が、めりめりと崩れはじめたとき、師直の心臓への第一衝戟は、手水をつかいに行つていた愛妾のことだつた。

「敷妙つ！ 敷妙つ！」

師直は、どうしたはずみか、自分の座席とはずいぶん隔つていた梶井門跡のかたわら近くへ転げ落ちた。そして額に、したゝか突き傷をこしらえた。だが流れる血などは物ともせず、たゞ敷妙の名だけを呼びつづけた。

八

即死は、百余人であつたが、怪我は無数で——重傷軽傷。手の折れた者、脚のくじけた者、刀を鞘走らせて血まみれになつたのもあれば、湧かした茶の湯で火傷をしたのもあれば、腰を抜かして泣く娘、木にはさまれて喚く女房——ひとの主人の奥方を背負つて逃げるあわて者を、追いかけて刃を引き抜く疎忽者もある、という騒ぎようも、決して無理はなかつた。なぜかという、棧敷の倒れたことが祟りであり、悪業の報いであつて、將軍館の火事この方の、天変地異の連続だとすれば、こうしているうちにも復たどんな怖ろしいことが起るかも知れ

ぬと、そう思われたからだつた。

あくる日の朝、この四条河原に、一首の狂歌がかけられた。

田楽の将棋倒しの棧敷には王ばかりこそ登らざりけり

梶井門跡、洞院の相国、二条閔白、将軍、執事と、公武を網羅して墜落した棧敷には、北朝の宮室のおん方は在しませなかつたことを、懼れげもなく諷刺した落首だつたのである。

ある日の正儀

一

貴志右衛門は、まなじりに朱をそぐいで、思わず刀の柄へ手をかけた。そして、

「う、うーむつ！」

と、唸つた。

あわや三尺の秋水、一閃するかと見えたし、殺気はまさしく右衛門の心頭からほとばしつた。

だが、正儀の面には、薄笑いが消えずに残つていた。

「おかしな真似はせぬことだ」

「な、なにを！」

「おぬしに斬られる虎夜叉と思うのか？」

「え、主君にもせよ堪忍な、ならんつ！」

「なら、念のため抜いて見やれ」

伊賀の方が、

「あ、もし……」

と、ろくろく相手の眼をながめもせず物にいつているわが夫に、

不安を感じて、そう呼びかけたのであった。

「抜けまい」

正儀は、餘裕綽々と、

「抜けなかつたら帰るがいゝ。たゞし、娘が産んだ子に、貴志の後を嗣がせてはどうかと申しただけで、わしが逃がしたとも、駆落ちさせたと云わなかつたぞ。むろん、今どこにおるか、正儀の知ったことではない。子がない場合はというかも知れぬが、駆落ちせずとも、無い子はなからう」

「えゝ白々しい！ 御存じないという筈がないっ！」

右衛門は、どなりはしたが、もはや殺気が自分から失せていることを意識した。

正儀が、

「はずは筋。筋は訳だが、その訳は陰微じや」

と、右衛門にはさっぱり解らぬことを云った。

「もう訊かん！」

足音あらく、貴志は出て行った。

「小児が一。ぺんに歳を老つたような男だ」

「でも、あれほど申されましたのに、膠もものう」

「今の場合、膠があつてはならぬのだ」

「親心——無理からぬところもございまするものを」

伊賀の方はそう云ったが、にわかには顔を暗くした。

正儀が、それを見て、

「どうしやった？」

「……あの——貴志どのゝ怨みは、強うございまする。いまほどは——本当に殺気が見えましたぞえ」

「武芸に秀でたお身には、見えたかも知れぬけれど——わしには一向にな」

「あれ、そのようなお廻りは、お酷うございまする！」

と、伊賀の方が、かこち顔で云った。

「それはお身の咎じや」

「えゝ？」

「お身が空言でいうから、わしも空言で答えた」

「まあ！ わらわがなんで空言を？」

「右衛門に殺気が生じた刹那には、はつと思つたにちがひなければ、今は、それを案じて顔曇らせたのではあるまい」

「おゝ！」

心の裏の機微をも見透す、夫の明察に驚ろいたのである。

二

正儀は、言葉をつづけた。

「お身が輿入れしてこのかた、わしは一度も自分の武の力量を見せていない。しかし伊賀ほどの素養があれば、この虎夜叉、断じて他に負けないと、信じるのが出来たろうと思う。右衛門ごときが、よしや刃を研げばとて、なにが怖かろう。——のう。なぜ、お身らしくすなおに、早く敷妙という女に引会わせて欲しいとは云わぬか」

「もし、わが夫え。申しかねたのでございまする。はしたない嫉妬ごころからと、そう思召しはせぬか知らと……」

「奥。嫉妬は決して端たなくはないぞ。すくなくとも、おのが夫の仇し女への嫉妬ごころは、妻として、むしろ無ければならぬ。有りたいたものが有ることを、恥ずるにも、匿すにも及ばぬぞよ」

「そう仰しやうて下さいますると、なおさらのこと、わらわは……なにやら気が退けまするものを」

「伊賀。庄五郎と奈穂がこと、お身にうち明けたのは、なにもお身が正儀の妻なるがためではない。妻であつても、わしが深く信じないかぎりは、明かすべき秘密ではないのだ。愛したとて、信じないことには、あくまで匿し続けなくてはならぬ事柄であつたのだ。——わしの氣持、

解るであろうな？」

「はい」

「敷妙のことも、根柢はまた同じだ。しかし、根本は同じことでも、この方には、もつとやゝこしい枝葉がついている。——わしに敷妙という女のあること、その女が三年ぶりで還つたこと、それだけは話したけれど、真相はまだ何も告げてないのは、その枝葉があつたからじゃ。だが、この方の真相も、打明けてさしつかえないと、わしは信ずるようになった。あの女が還つてから二カ月、わしには、お身を顧みぬ日がどれほど多かつたか？ それにも拘わらず、この正儀に対してお身は、前よりも一層よく尽くしてくれた。畢竟これは、一箇の夫としての立場よりも、皇みくに大日本の純臣としての立場、すなわち南朝武臣の棟梁たる立場を、はるかに重しと理解したことゝの現われだ。——水分の母人にさえ、敷妙にかゝる機密は一さい秘しているのだが、今日こそお身にすべてを明かそうぞ」

「おゝ！ そんならお明かし下さいませか。わらわは嬉しゅうございませす」

その歎こびの表情をみて、正儀はほゝえみつゝ、

「ついでに城内の秘密境へも、案内しよう。わしの謀略の策源地、玄々寮は、朝敵討伐の作戦本部じゃ」

そう云つて、入側へたつて、魚板を鳴らした。

魚板の音が、赤とんぼ静かにとぶ秋晴れの庭に、さわやかに響くと、それに答える声がかこえて、やがて、奥方づきの侍女頭が現われた。

「錠の口に、梶丸を呼んで、わしが、奥とともに寮へ参ることを、申し伝えよ」

「はあ」

侍女頭が去ると、伊賀の方は、納戸へ行こうとした。化粧を直して、衣裳をかえて、とそう思つたのである。

「着がえは、無用じゃ」

と、正儀が声をかけた。

「でも——唐衣なりと……」

「目下ではないか、構わぬ」

夫は構わぬであろうが、敷妙という女はどんなにか美しい容姿だろうに、あまりにも見劣りしては……

と、思わずにいられたかつたのは、やはり女心であつた。

納戸で、いろいろ顔を粧りなおして、うちかけや唐衣も、どれにしようとして迷つたりしていると、几帳のそばに夫の近づいたのが、ぼんやり鏡に映つた。

「まだか？」

「はい。もうすぐ——」

「なにを纏うたとして、お身のその肉体は、縮まらぬよ、はゝゝゝ」

「あら！」

白い豊満な顔が、ぼうつと羞恥に染まつたのである。——夫の神経は、細かくもあれば、また太くもある……

そう思いながら、銀朱と青緑で孔雀を織りつくした唐衣を、はおつた。それが一番似合わしいと女院が仰せられた秘蔵の衣だった。

「だが、それは似合うの」

と、正儀が云つた。

偶然にも、夫の直垂もやっぱり青緑に銀朱の乱紋だったので、伊賀の方は、きゆうにたのしい気持ちになれて、

「まあ、あなたのお召物とまるで対のような色合いでございますこと！」

そう云うと、正儀も見くらべて、

「なるほど、対の着物だ」

と、ほゝえんだ。

三

居間にもどると、奥方は、茶を入れた。

「こゝで茶を飲めば、寮では、すぐと酒がいくの。お身もいける口だし、彼女は、京都で飲む方の修業も積んで来たらしく、今では相当なものじゃ」

と、正儀が云った。

「さぞかし、敷妙どのは……美しいでございましょうなあ」

酒の話には、のらずに、伊賀の方がそういうと、

「うむ、美しいとも。これは相当以上だ。かなりに予期しても、予期の方が負けるだろう」

「まあ、そんなにも！」

「その代わり、すこし重い物でも持たせたら、たよたよじゃ。あんな非力な女も珍らしいぞよ」

力のことを云われたので、面はゆげに目を伏せて、伊賀の方は、自分の恵まれた怪力を、呪わしいようにも感じるのだった。

「女には、あらでもの力量でございますものを……重い物持つて、なよなよいたしたら、かえって楊柳ようりゅうの風をいたむ風情とやらがございましょうに！」

「風情はあつても、負け戦さの落城とならば、厄介だ。が、とにかく無類の器量よしとはいえるだろう。ごく正直にいうと、わしも最初は、美貌ゆえに彼女を愛したのだ」

「あれ、最初は——などと、仰しゃって、そんなら只今では——？」

さすがに嫉ましそうに、見上げると、

「今は、美しいからというよりも、義理があるという理由の方が強いのだ。虎夜叉は、彼女に恩を被っているのだ。それに報いるためには、是非とも愛してやらなければならぬのだ」

正儀は、そう答えてから、

「いかなる恩を被っているか？ 寮へ、まいってから語ろう」と、起って、

「行こう」

奥方は、坐っていれば、夫よりよほど大きく見えるが、起てば身長は、夫の方がやゝ高かった。と、云つても、正儀は普通よりは丈のかなり高い男なのだから、奥方の肉体はたしかに最大級に抜群だった。

伊賀の方にとっては、「寮」の錠口からむこうは、完全に未知の境であった。

廊下が扉につきあたると、その扉の奥に、もう一つ扉があった。扉と扉の間が、錠口と呼ばれている小間だった。

鈴の綱が、さがっていた。

それを、正儀が引こうとした時、扉が左右にひらいて、真つ暗な洞窟みたいな通路が、口をあいた。そこには、梶丸と折鶴とが立っていた。折鶴のそばには、手燭を持った腰元がいたし、梶丸のうしろにも、侍童が灯をかゝげていた。

送ってきた奥方づきの侍女たちを、錠口に残して、がんじょうな扉が閉鎖した。

岩磐をうがった地下の通路でもあろうか？

そう思いながら伊賀の方は、夫のあとについて歩いた。

前に立った梶丸が、正儀へ、

「ちようど只今、萩二郎が到着いたしました」

と、云った。

「なにか、齎もたらしたか？」

「はい。重大情報でござります」

「さようか」

三步四歩してから、立ちどまって、

「申せ」

「は」

梶丸は無ろん、足をとめていたし、皆も歩くのをやめた。奥方は、手燭の光で夫の顔をながめて、（おゝ、ついぞ——）と、思った。そんな深刻な表情のうかんだのを、今初めて見たからであった。

「京都からか？ 中国からのか？」

「は。中国からの情報でござります」

「まさか——」

と、正儀は俄かに心許なそうに、

「事をあせつて、直冬が備後から東上するというのではなかるうの？」

「いえ、まさしくそれで。直冬どのは、中国の兵を狩り催して、京都を目ざし押し上げられますぞ」

「む！」

正儀は、眼をつぶつた。

（しまった！時機尚早！ 直義とこなたの交渉が、ほんの緒口にすぎないのに！）

梶丸が、

「師直の命令を受けた杉原又四郎の軍勢が、不意に、鞆の津の直冬屋形を襲いました。それが動機で、にわか東上となったのでござりまする」

そう告げると、正儀は目をみひらいて、

「あまり思いのまゝに運びすぎた。これからはいろいろ、齟齬も生じよう。意外なさし碍りにも出会うだろう。——梶丸。馬だ。堺だ。供は、そなたと度々平ほか三名」

「は」

正儀は、歩きだした。

「だが、出発は一晌後だ。それまでは酒宴——奥と敷妙の初対面、顔つなぎの杯ごただ」

「は」

ぱつと明るくなった。そこは渡り廊下で、午後の秋陽が、一ぱいに

射していた。

あでやかな敷妙の顔が見えた。そばに幾波が立っていた。

正儀は、心のなかで呟いた。

（敷妙を、師直のふところから奪ったことが、すこし早すぎはしなかつたか？ そうだ！ 師直はもちろん、直冬に奪い返されたと思いついでいる。杉原又四郎に不意を襲わせたのは、直冬を、京都へおびき寄せるためだった。師直は、直冬に奪りかえされたと思うし、直冬の方では、たとい敷妙の行衛不明という噂をきいても、なにを、真つ赤な偽！ 師直めが、たくらんだ嘘偽だとばかり思う。それで至極よいのだが、たゞ時期が早すぎた。あのどさくさまぎれに奪うくらい容易い奪い方はないと、そう考えたのが俺の誤りだった。彼女には気の毒でも、もうすこし師直のそばに置けばよかったのに！）

正儀が佇ずんでいるので、敷妙の方で進み寄つて、奥方へ丁寧に一礼してから、

「もし。どうぞ遊ばして？」

と、訊ねてみた。

正儀は、

「いや、格別——」

と、首をふりながら歩き出した。

その後について、伊賀の方は、

（おゝ、なんと美しい器量！ なんと艶めかしい、しなやかな姿であろう！ あの、あでやかに粘りつくような眼はまあ、なんとという眼であろう！ あの——どうぞ遊ばして？ と、わが夫にぴったり寄り添うた嬌態の好き！ もう憎らしいほどの嬌態の好き！）

ぼうつと逆上せた頭で、そんな風を感じつゝ、玄々寮の畳廊下へ入つて行つた。

尊氏の新邸囲まるゝこと

—

「戦か？」

「兵が走る。戦かも知れん！」

「危い、逃げる！」

「やあ、街いっぱい押し来てぞ！」

逃げまどう市民を、はねとばし、押したおし、踏みつけ踏み越えて、京じゆうの街という街を、卒と、兵と、士と將と馬が、走っていた。十三日の、冴やかな月光も、埃と土煙りのために、霧のなかの月影としか見えなかった。しかし、これが夜露のおりない夏の街路の出来ごとなら、土煙りはどのくらい濛々と、空を蔽い、家々を埋めたか解らなかつた。が、仲秋、八月のおかげで、空気も地面も、しっとり湿っていたから、将兵は苦なしに走れた。よくもこれだけ現われたと思われるような、おびたぐしい兵だ。兵だ。兵だ。どの町も、兵の河だった。この兵の河の流れには二つの方向があつた。

一つの方向は、一条今出川へ。もう一つの方向は、三条坊門へ。——だが、今出川の方向へは、十倍も多く流れた。兵は、集結を急いでいるのだつた。すでに、今出川の高師直の館を中心に、一条大路、転法輪、柳ガ辻、出雲路河原には、兵がぎっしりつまっていた。集結すれば、埃は立たない。月は冴やけさを回復して、旗差し物と兜を照らし、薙刀と、槍や長巻の穂先に光つた。

辻や、大路への曲り角では、方向のちがつた流れと流れとが、ぶつかつて交錯した。その度に、まだ戦さは始めなかつたけれど、小競合いは免かれなかつた。今ふんでは集結が第一の目的ではあつたが、しかし武装した兵と兵とが競りあえば、血を見るのは当然だつた。戦さ

とはいえなくても、闘いには違いなかつた。

「斬つたぞつ！」

「それつ！」

血煙りをあげて倒れた兵の味方が、五六本、薙刀を閃めかして、血煙りを揚げ返した。

「止まれつ！」

士が、叫んだけれども、

「おのれつ！」

歯を剥き出して、跳びかゝつたのが、腹に灼熱を感じてのけ反りつゝ、止せばよかつたと思つたが遅かつた。槍のさきは背中へ出ているらしく、柄まで腹へ突き込まれていた。敵は、叫んだ。

「朋輩の仇つ、斃ばれ！」

(なにを、高屋形へ楯つきおつて、あとで吠え面——)

と、思つた瞬間、自分の死を意識して、

「ぎやあつ！」

と、娑婆への執着をわめいた。

—

月の光りが、篝火に遠い苑をも、明るくしていた。がらんとした苑にも、物ものしい雰囲気がたゞよつた。

高倉の、真新しい館の宸殿で、尊氏は欄干に手をかけて立っていた。廊に、御台の登子の方がすわっていた。命鶴丸が、苑を走ってきた。尊氏が、上から声をかけると、

「たゞいま、禰津小次郎が参つて、申上げまする」

と、命鶴が答えた。

中門垣の外から、人々のひしめく声が聞えた。門口の篝をめぐつて、近侍が群れていた。

禰津小次郎が、門から駆け込んで来て、欄へむかつて叫んだ。

「御報告っ！」

廻廊の侍童、侍女たちが、不安げに耳をそばだてた。

「洛中は、かなえの湧くような混乱に、陥りましたぞ。内裏は、こよいのうちに御動座あるべしとて、主上ならびに一院には持明院殿へ、上皇には河原殿へ、鳳輦ほうねんを移させらるゝ趣きにござります。禁裡の階下、庭上は、雲上人や上臈、上達部のあわてふためく姿、目もあてられませぬ。市人らは、戦いは必定、火事おそろしとあつて、家財道具をはこび出し、長講堂や三宝院の広場へ持込んでおります。遠く東寺や、知恩院などへも、群集は避難いたしおる模様でござりまする」

「む、それは困ったのう」

尊氏は、とききを吐いて、

「群集心理は怖るべきものだ。はたが騒ぎすぎると、つい釣り込まれて、示威の行動のつもりが、往々実力を使役することになる。勢いが、ほんとうに悪化しなければよいが……」

そう呟きつゝ、廊から入側へ入ってすわると、対の屋の渡殿から、細川頼氏とよゆきが、狼狽ろうたい顔であらわれて、

「御所っ」

と、うづくまつた。

「陰悪か？」

尊氏は、灯影で、頼氏の眸を見た。

「それがし、上意を伝えて、言葉はつくしましたれど、今夜の高殿は、従来の高殿ではござりませぬ」

「聴かぬか？」

「は、こたびこそは、断然干戈に訴えて、内訌の根本を除かなければならんと、じつに牢乎たる決意——もはや動かし難うござりますぞ」

「院の思召しを、申述べたであらうな？」

「もとより」

「窮したの」

尊氏は暗然と云った。

「さて——」

と、細川頼氏は、額をひそめつゝ、

「いかゞなされますか？」

黙つて、腕をくんで、しばらく考えた後、尊氏が、鬱々と、

「ほかに、手段はない」

と、云うと、頼氏が、

「唯一の御手段とは——？」

訊ねたとき、尊氏は走つて、ふたゝび廊へ出た。

「命鶴——そちは、三条坊門へ走れ」

「は」

「小次郎。そちは、上杉と畠山の屋敷へ使いしてくれ」

「は」

「いそげ。この屋敷に呼び入れて、尊氏が、自身で庇うよりほかに、

彼等を救う途はないのだ」

「両殿ともちろん、三条坊門館と存じまするが——？」

と、小次郎が、欄を仰いだ。

「家族の者を、のこらず伴れて参れ。この屋敷に、入るだけ入れるのだ。

——收容できるかぎり、士も兵も、みんな收容して遣わすのだ。命鶴

よいか。高が目ざすは、直義と、上杉、畠山に相違なけれど、その他

の者として、囲まれては命がおぼつかない。一刻も早く、これへ避難せ

しめよ」

と、尊氏が命令した。

瀬津小次郎は、畏まって駆けだした。しかし命鶴丸は、動かなかつた。

「なぜ急がぬ？」

「上。——副將軍の御安危、上杉、畠山、両宿老家の存亡の瀬戸ざわ

とは申しながら、当お屋敷を避難所たらしめて、もし高殿の大軍が、こゝ

高倉まで押し寄せなば、それこそゆゝしき一大事——さあ、その暁には、

なんと遊ばしまするか？」

「命鶴。その懸念は無用じや。むろん師直は、内乱を醸し出すべき元兇を、引渡せと、迫るではあろう。しかしながら、予は將軍じや。わが館を、いかに師直とて、まさか兵を放つて囲ませはしまいぞ」

「おそれながら、將軍の權威をさえ、權威とは思わぬ高殿ではなからうかと、命鶴めは危ぶみまする」

「いや。副將軍なるものゝ存在をこそ認めぬ高ではあれど、執事が軍を進めて將軍を攻めるといふ下剋上はようせまい。この尊氏にのみはいつも恭順であつた師直じや」

「上。それがしは信じられませぬぞ」

「時が移る。師直を信じ難くとも、わしを信じて、使いをはたせ」

「命鶴は、あくまでもお諫め仕る」

「おのれ、わしをも信ぜぬと申すか？」

「たゞいまの御指図に關しまする限りは」

「えゝ時が移るといふに——そちでなくば出来ぬ使いか。これ、修理進。——修理進はおらぬか？」

飯尾修理進の答えた声がした時、

「上つ」

と、命鶴丸が叫んだ。

「そちには頼まん、退れつ」

「余人が参るほどならば、命鶴が走りまする」

尊氏の、わかき股肱は、止むを得ないと感じたので、そういうが早いか、駆け出した。そして篝火の方へ、

「馬曳けつ！」

と、どなりながら走って行った。

御台が、尊氏を呼びかけて、

「あの——別な意味合いから、わらわは、命鶴同様、お諫め申さずにはおられませぬ」

「別な意味とは？」

登子の方をかえりみた將軍の半顔は、青白く月光をあびた。やつれて、ひどく弛んだ頬の肉が、びくびく痙攣して、胸中の懊惱がどの程度であるかを語っているように見えた。

「上——わが夫」

御台はしばし、言葉を保留した。

「申せ」

「直義の殿のお心には、うたがひもなく、上への御逆心がぎざしております。かのうなら、師直どのゝ一族を亡ぼして後、自ら上に代わつて將軍と、氏の長者を兼ねたいと、そう望んでおられまする」

「お身は直義を、見殺しにせよというのか」

「自らは將軍たらずとも、二代將軍にはかならず直冬どのを、と——」

「えゝ、聞くに及ばぬ！」

尊氏は、そう云いすて、廻廊から、宸殿の上段の間へ入って行った。

三

御台は、夫の將軍のあとを追つて、上段へあがつた。下段では、細川頭氏が、いま入ってきたばかりの島津時久たちと話していた。入側にも、渡殿にも人々が私語をかわしていた。副將軍以下が避難して来るということが、空気を一そう重苦しくしているのであつた。

「聞くに及ばぬと仰しやっても、わらわは申さずには措かれませぬ。いつぞやも直義の殿は、あからさまに、兄尊氏はすみやかに將軍職を辞して隠遁すべきだと云われましたぞや。直冬どのとて中国へ去つてからは、いよいよ露骨にわが夫と、鎌倉の和子義詮とに、異心をいだく反抗の旗じるしを樹てゝおるではございませぬか」

登子の方はそう云つたが、尊氏からは返辞がなかった。

「高殿の女あさり、修まらぬ素行についての悪声は、執事の宮廻りに、手向けを受けぬ神もなしなどと——もう久しいことございまする。」

あれほど世間一般から悪しざまに噂されながらも、あゝして在せるのは、政事や軍事の上ではよこしまがないからこそ——。わが夫や和子の天下に、とって代わろうという野心は、露ほども高どのにはございませぬ」

尊氏はなおしばし、黙りつゞけたが、やつと、

「それは当然じゃ。高の祖先は、足利の弟とはいえ、もはや遠い昔の肉親じゃ、だが、直義は現在の弟だし、直冬は、生みの母こそ賤しくとも、我が血を領けた長男ではないか」

「なら、お兩人が將軍職を望むのは、非望ではないと仰せられますか？」

「お身は然らば、ちようどよい機会だ——師直をして、直義、直冬を殺さしめよ、というのか？」

「殺す殺さぬは、運命の神の支配——高殿みずからとてお解りにはなれませぬ。いゝえ、それどころか、どちらが勝つか、負けるかさえ、結果を見るまでは判つたものではございませぬ。兵の数のまさつた方が勝つと定つておるならば、世の中から戦が消えてもまいりましょうが、そうは行かぬところに直義の殿も、今晚の御運をお賭けなされたのではございませぬか知ら」

「たんと皮肉なことを云え」

そう云つたかと思うと、いきなり尊氏は走つた。そして落着きを失つたらしく、室内を、行つたり戻つたりした。

すると御台も、起ちあがつて、夫の後、後と、くつついて歩いた。

皮肉を云えと突つ放したものの、御台の言葉は、尊氏の心の奥にもぐり込んで放れなかつた。はたして自分の処置が是で、登子の考えかたが非であろうか？ 高一族を滅ぼすという、彼等の目的が、もし成就した場合、どうなるか？

（自分と、自分の嗣子義詮に対して、弟の直義と、妾腹にせよ長男である直冬とが、どんな態度をとるか？ ……自分は、隠遁も落飾も厭わぬどころか、むしろそれは長い間の希望だつたではないか？ しか

しながら、義詮は屈することを肯じないだろう。義詮としては、叔父や妾腹の兄に屈する理由がないのだ。してみれば、叔父か、庶兄か、いづれかど、將軍職を奪おうとする場合には、あくまでも争い戦うだろう。と——大乱だ。それを防ぐには——どうすればよいか？ そうした乱が起らないように、未前に防ぐには、さてどうする？）

尊氏は、出来るだけ気を落ちつけて考えようとした。

そして、去年の夏から秋へかけての事件と、それに絡んで起つた自分の心境の変化とを、振り返つてみた。

（自分が、あらゆる俗務を放擲して、一意専念、後醍醐の帝の、証真常、おん冥福を祈りまいらせ、懼れおおくも帝に対して犯し奉つた罪の深さを、たゞひたすらに悔いていた間の月日は、今から思えば、苦しいながらも常に一脈の光明を仰ぎ得る生活だつた。ところが、不幸にも——畢竟それも、大逆の罰、悪業の果てにちがいないけれど、——あゝなんとという不幸だつたらう。自分の心に、忽然として悪魔が、ふたゝび宿つたのだ。法皇の崩御——あれほど深く仏門に帰依されて、妙心寺を建立あそばしたばかりか、おん自ら寺内の方丈のほとり、玉鳳院で、行いすまし給うた法皇すら、あのお痛わしき御悩のために崩御あつたということが、たちまちこの尊氏の信念に、おそろしい懷疑心を植えつけたのであつた。自分の宗教心は俄然、大地震にあつたように倒れくずれてしまつた。後醍醐帝への恐懼は、そうなるど強まりこそすれ、決して薄らぎはしなかつたけれど、悲しいことに、前のように、懺悔々々ひたすらの懺悔によつて救われる、と信じることが、どうしても出来なくなつたのだ。しかも、時も時、直冬は一万五千の兵をひきいて、師泰、師冬の軍勢と睨みあつたし、東寺には上杉と畠山が陣をしいて、都の中で師直と、あわや開戦という勢いを示した。もはや自分が浮世にもどつて、直冬を近畿地方から、どこか遠くへ去らせるよりほかには、内乱を防ぎとめて京都を、戦争の惨禍から免れさせる途が見つからなかつた。——えゝ、自分が救われな

いなら、せめて京都を救え、幕府を救え！ ついに懺悔の生活を棄て、政事を見た。そして直冬を中国探題という名で、備後の鞆へ追つぱらった)

尊氏は、そうして乱を防いだ去年を追憶したが、心はすぐ現在へ舞いもどった。

(今、一つ鎮めても、後に一つ起れば、結局、乱を防いだことにはならぬ。内乱がどうしても一つは起るものとすれば、小さくてすむ乱の方がまだしもである)

そう考えると、尊氏は一そう沈鬱になつてきた。

(あゝついに内乱は免れないのか！)

「上」

と、背後で、御台が呼んだ。

「話しかけんでくれ」

「でも——高殿に、こよい攻めらるゝのは、直義の殿の自業自得ではございませぬか？ 敷妙がことも——初めに奪いし方に咎は深くとも、奪い返せば六分四分——師直どのに云わたしたなら、自分にあれほど懐いていたものを、攫われてみれば、五分と五分、残るのはかなたの逆心だけじゃと申されましように——」

「これ、うるさいというに！」

尊氏の眉も、口も、いらいらしていた。

(とにかく都を、戦さの余焰で焼くようなことがあつてはならぬ)

そのためにはまず、安全地帯に、直義と、上杉と、畠山を、引き取らなければならぬと、そう思うほかなかつたので、一度は取消そうかとも考えた自分の、先刻の命令を、やはり是認して、

(後は、後のことだ)

と胸でつぶやいた。

けれども、憂鬱はすこしも去らなかつた。

(だが、浅間しい——なんと醜い争いだらう！)

柱にもたれつゝ、尻を纏細縁の畳に落すと、燭の灯が、なにかしら異様な炎に見えたので、おや——と、見直したが、無ろん眼のせい、気のせいに違いないけれども、炎の色は黄色っぽい常の燈し灯の色ではなくて、紅蓮の舌の色だつた。

(おゝ、あの時の火焰の色だ！)

一月二十八日の夜の火事の火いろだと、そう思いながら、苑の篝へ目をやると、火は見るまに大きな火柱となつて、燃えあがり、燃え狂い、燃えひろがりつゝ、宸殿をめぐりて追つて来るかのように感じられた。

(予感ではなからうか？)

尊氏は、頸窩から背中へはしる寒さを覚えた。——東洞院の邸に火を放たかかも知れない上杉重能を、ここへ呼び寄せて、そして呼びよせたがために、この新築の工事なつたばかりの屋形が、またも焼けるのではあるまいか？ と、そう思われたのであつた。

(業だ！ 報いだ！)

四

白んだ暁の空へ、わあつと、響いて、黒い東山と鴨川と、灰色の霧とに、ふたゝびわあつとこだまに返つたのは、鬨の声であつた。

將軍尊氏の高倉の新邸は、幾重にも包圍されていた。林のように立つた旗と差物が、払暁の風にうごき、目白押しにならんだ士兵の兜と、鎧と、半頭と、腹巻とが、つらなつた武器とともに、黎明の露にぬれた。鬨の声はその包圍陣から揚げられたのであつた。

高倉から、法成寺河原までの、道路は、兵で溢れていた。兵は、みな、高倉の方へ移動しつゝあつた。師直の本陣は、法成寺にあつて、倚せかゝりの輪違いの大旗が、天下第一の実権者の威容を誇りがおになびいた。さく夜、副將軍直義は、三条坊門の自分の屋敷に馳せあつまつた將兵を解散させ、上杉重能、畠山直宗、ほか宗徒の大名と、ごく側近の人々をつれたのみで、尊氏の館へのがれた。そこで師直は、直義の邸を攻

める予定を変更して、今朝、夜明け前に、今出川の自邸を出て法成寺に陣どったのであった。

一方、まさか囲みはしまいと思つた尊氏の予想は、すっかり裏切られて、將軍新邸の人々は、たゞ一斉に色をなくして、途方にまよつた。

ことし十歳の光王丸が、睡り不足の眼を赤くして、御台のそばへ走つて来た。

「母上つ、師直は憎い奴でございますのう」

「おゝ光王。――師直などと呼び捨てにしてはなりません。父きみでさえが、和どの和どのと仰しやるではないか」

「でも、いつもなら光王も、高どの高どのと申します。けれど、敵となれば師直めじゃ」

「これさ、高どののは、敵ではないぞえ」

「でも、攻めて来たら、敵じゃ」

光王丸は、尊氏の三人の子のうちの末子で、千寿王丸義詮とおなじく御台登子の腹だった。

「いゝえ違いますぞや光王」

「いゝえ違いますぞ母上」

「光王どのは小児じゃ。なにがわかる」

「小児でも、聞けば、叔父上の方がお悪いぐらひは解ります。でも、父上は將軍じゃ。將軍に刃向う大名は、逆臣じゃ。不忠者、憎い悪人じゃ」

「いえ違います。高どののは決して、刃向いに参つた訳ではありませんぬ」

そう云つたとき、渡殿から、対屋の廊へ、

「御台」

と、呼びかけて命鶴丸が現われた。

「おゝ、何んぞ……？」

「包围陣の大手の大将が、交渉の全権をおびましてな、当館内へ乗り込んでまいりますぞ」

「大手の大将とは、たれじゃ？」

「師冬どのでござります」

渡殿を走る人々の足音が、繁くなつた。

「命鶴。お身の察見どおりになつて来たのう」

御台は、この俊敏でかしい若人を、さも頼もしそうに見まもりつゝ、

「では……さまで心は痛めずともよかろうか？」

「先刻申し上げたように相成る以外、とどのつまりの持つて行き場所が、なかるうではござりませぬか」

「わが夫のお心ひとつだけけれど、どうぞそうなつてほしいが……」

光王丸が、わきから、

「戦さには、ならんのか？」

と、命鶴にたずねた。

「なりますものか」

微笑と共に、命鶴が答えた。

「すこし張合いがいいな。光王は、戦さが見たいのだけれど」

「戦にも、戦がある。愚かしいこと申すでない」

と、愛子を叱つてから、

「もしわが夫が、高どのゝ要求を、おしりぞけ遊ばしたら……」

「要求が通らざれば、高どのはこの御所に火をかけて、焼き攻めにもいたしましよぞ」

「おゝ、高殿自身で建てたも同様な、この新御所に、火をかけても

……」

御台が、不安げに顔を暗くしたとき、にわか陣鐘と、金鼓の音が、響きだした。

「あ、寄せ鐘！」

「なに、大事ござりませぬ！」

寄せ鐘は、邸の東北の大路からも、西南の小路からも、すさまじい音で聞えてくるのだつた。

光王丸は、十歳の少年らしく、

「鐘、鐘つ、鐘だつ！」

と、叫びつゝ、もう明るくなつた渡殿へ走つて行つちた。入側で待つていた小姓たちがあわてゝそのあとを追つた。ちようどその時、宸殿の方から、

「命鶴どの、命鶴どのつ」

と、よばわる声でした。

五

十重二十重の包圍陣で打ち鳴らす寄せ鐘太鼓は、まったく示威だつた。寄せ手の代表者、師冬が、滔々と直義およびその一党の罪状を弁じ立てゝいる間にも、鳴りひびいた。

「騒々しいな」

と、尊氏が、舌打ちをして呟いた。眉の間に、ふかく皺が喰い込み、眼窩の縁には暗色の暈どりが出来ていた。

会見の場所は、宸殿の南の苑であつた。

尊氏と師冬とは、むかいあつて牀几にかけていた。師冬は緋おどしの大鎧をきていた。兜はぬいで、持たせていたが、随従してきた将兵たちは、いづれもがうちり兜の緒をしめて、鎧の袖を怒らせていた。だが、館方は、尊氏はじめ皆が常装の狩衣や直垂だつた。

「將軍つ」

と、師冬が、自慢の大音声を張りあげて、

「今この御所を囲みおる大名らを、誰れ誰れと思召すか。われら高の一族十二家は申すまでもなし。山名伊豆守時氏、細川相模守清氏、おなじく刑部大輔頼春、仁木頼章、同く義長、頼勝。佐々木の人々には道誉入道、秀綱、氏綱、氏頼、秀定。甲斐源氏、常陸源氏の人々には、武田信武、佐竹師義——」

「やめい」

と、尊氏が叫んだ。

「逸見信茂、小笠原政長——」

「えゝゝ何の爲め並べるのだ？」

「はゝゝゝ！ 似気なきお言葉を聞くものかな。そうした宗徒の大名らが、あれあの通り陣鐘を打ち鳴らし、旗差物を朝日に照らして堂々と、はゞかる色なく將軍御所を囲むとは、そも何を意味する？ 高師直が主張にもし誤りあらば、なんぞこの大軍が、手足のごとく動きましようや？」

師冬の音吐が、鐘や太鼓のひゞきを圧してひびいた。

「それ訊くのではない。なぜ速やかに、高の要求を、述べないのか？」

「従兄師直が要求は、きわめて簡単でござる。即ち、下御所直義殿の、左兵衛督を罷め、所領を没し、剃髮、蟄居あらしむること。第二に、直冬殿の官職を剥ぎ、采邑を収めて追放すること。第三に、上杉重能、畠山直宗を流罪に処すること。並びに徒党の大名をすべて譴責、謹慎せしむること。以上三カ条！」

師冬は、きつと瞳を、將軍へ凝らした。

「予が、それを容れずば？」

「包圍の陣が、物を申す！」

断乎とした答えであつた。

しかし尊氏の面色は動揺を見せなかつた。陰沈と暗くはあつたが、それは昨日以来の暗さだつた。むしろ要求を聞く前よりも、いくぶん暗澹たる曇りが薄らいだかにも見えた。じつさい、死刑、斬罪の要求をさえ、予想していた尊氏だったのである。

（どのみち、起らなければならぬ内乱——最小の限度と、犠牲とで食い止めよう）

そう思った時、師冬が、緊々と張りつめた音声で、

「いざ、御返答は如何に？」

と、云つた。

「三カ条の要求、しかと聞きとゞけたぞ」

「えゝつ？」

おぼえず叫んだのは、あまりにも呆気なかつたからであつた。

じつに非常な意気込みで乗り込んで来た師冬だつた。到底、なめらかに運べはしまい。要求三カ条の貫徹のためには、声も囁さなくてはなるまいし、何等かの程度で力も発動させなければなるまいと、そう覚悟をして、まず瀬ぶみのつもりで返答を促したのであつた。ところが、ほんの一瞬にして鼻がついた。

(たしかに、聞き違いではないようだが……)

そう思つて、

「お聞き届け、下さるか？」

「いかにも」

「おゝ、然らば、直義殿ならびに、上杉、畠山の身柄を、即刻——只今お引渡し下さるか？」

「いかにも」

と、尊氏が、ふたゝび頷いた。

そうとは知らぬ、屋敷のぐるりの包圍軍は、この時、わあつと鬨を合わせた。

直義入道、南朝へ降る

一

鼻をつままれてもわからぬような暗い夜であつた。

寒風が、ひょうひょうと葉の落ちた梢をも騒めかせていたが、濃く低くたれて中空の月を隠した黒雲は、なかなか動く気配がなかった。

遠侍の納屋の雨戸が一枚、戸締りがしてあつたにもかゝらず、戸

外から、ほとんど音もなく、はずされた。屋内の灯影が、かすかに外

へ洩れ外の風が屋内へ入つた。だが、灯はゆれたけれども消えなかつた。納屋には、誰れもいなかった。その無人の板の間へ、風よりも遙かに静かに忍び込んだのは、一人の修験者だつた。

物盗か？ それとも刺客？

とにかく修験者姿は変装にちがいないが、忍術のよほどの名人らしく、板の間の酒樽のなかへ、なにかの薬剤であるうが、薄黄色の粉末をしこたま入れて、樽の中の酒と混合させ、鏡口を挿し直して前の位置に据えてから、戸外へ出て雨戸を嵌め込むまで、全く物音らしい物音を立てなかつた。

修験者は、闇のなかを、建物から離れて、中門垣を越えた。垣を越えると、そこは庭の植込みだつた。そして木陰には、やはり修験者が、しかも八人づれで待っていたのだつた。

で、いま納屋への忍び込みを果して戻つた一人を加えると、九人だ。

——この九人の修験者はそも何者であるう？

こゝは、京都の錦小路——細川陸奥守頼氏の屋敷の一部である別館の、書院をめぐる庭園だったのであるが、怪しい修験者が九人も入り込んでいようとは、夢にも知らない遠侍の人々は、毎晩きまつて飲めることになつている時刻——楽しいその時刻が来たので、今夜の当番二人が、納屋へ入つて、瓶子に酒樽から酒を移したり、戸棚から出した肴と杯とを曲物にのせて運んだりして、やがて熱燗にしたのを、ぐいぐい飲りはじめた。

「のう、うらやむ奴等が多いわけだ。こうして達筆に飲めるのももの」
「交代制にして貰わないことには、あんまり不公平だと云つて、重役へねじ込んだ連中があるそうじゃ」

「へえゝ、それは初耳だが、気になるの」

「全くな」

十幾人が、みんな同感だという顔を合わせた。

「まさか、交代制なんぞにはなるまいの？」

「たぶん大丈夫だとは思う。重役衆は、酒樽の空きようが少々早過ぎることも認めるが、この寒空に、寝ずの番をして、なに一つ間違いを起さずにいる俺たちの、功績も充分に認めている」

「二晌ずつ三かわりで、戸外まわりまで警戒するのだから、陽気のいゝ時なら兎にかくさ——」

「骨が折れるよ」

「だが一体——話は違うが我々の殿、すなわち細川頭氏さまよ——どちらのお味方なんじゃ？」

「どちらとは？」

「高師直さまのお味方か、それともこの御殿に在わす直義入道慧源さまのお味方か、どうも明瞭せんではないか」

「む、なるほどの。——明瞭せんことは慥かだ」

「一昨年あたりは——そうだ六本杉の怪異のあつた時分は、高さまへ、三条坊門屋形のお企らみを密告あそばしたとかという噂さもあつたが、その後だんだん今出川とは疎遠しくお成りのようで、八月の騒動の時も、將軍御所へはお詰めになったが、いわば中立の、どっちつかずさ」

「だけど、こうして慧源さまを、体のいゝ座敷牢へお入れ申しているからには、やつぱり高さまのお味方のお一人だろう」

「ふん、よけいな頭痛を病まずと飲め」

「今夜は、ばかに廻りがいゝぞ。もう眼先が、ちらつくようだ」

「樽の木香が乗って来ると、酔いかたが靨面じゃよ」

「木香のせいかな。昨夜はそんなにも思わなかったが、どうも今夜は、あてこともなく酔って来た。あゝいゝ気持ちすぎて、なんだか急に睡つたくなつたぞよ」

「本当に気が、うっとりとして来た」

「こう、横になって寝入る気か？ よせやい、お前たちは初番の組ではないか」

「中番に廻してくれ。慾も得もなく睡いのだ！」

「俺にも、睡気が伝染ってきた。頼む、中番々々！」

たちまちのうちに、寝ずの番の初番の組が、一人残らず中番希望者になって、ごろごろ酔いつぶれてしまった。

「しよがないな。誰れか代ってくれ。俺は後番だから、ぐっすり眠ることにするが、中番の輩、頼むぞ」

「おいおい此方が頼みたいのだ。後番の輩に、そっくり最初へ廻つて貰おうじゃあないか。俺あもう、引つ込まれるように睡いのだ。初番は真つ平、勘弁してくれ！」

「あ、寝てしまった。困つたなあ、実は俺も、眼がかすんでいるのだ」

「あゝ睡い！ 瞼がくつついてしまう」

「変手挺だのう、こう揃いも揃つて、酔い潰れるなどということはないぞ今まであつた例がない！」

「例があるうとなかろうと、俺あ御免こうむる組だ」

「こう、起きろ起きろ、起きてくれ！」

「酔わない奴が、初番々々……」

麻酔剤のきゝめは十二分だった。

最後まで睡魔と闘かつた二人三人も、ついに倒れてしまった。そしてこの別館のなかで目覚めているのは、直義入道慧源と、一人の小姓と、二人の郎従だけになった。

二

この小姓と郎従は、副將軍直義が高師直との抗争にやぶれて、囚虜の身となり、官職を剥がれ、剃髪を強いられて、こゝ錦小路の細川邸内におし籠められたとき、特に許されて、ほんの身のまわりの雑用を弁じさせるために召使うことの出来た、わずか三人の側近だったのである。

「すつかり静まつたようぢやないの？」

「どれ、見て参ろう」

郎従の一人が、部屋を出て、遠侍へ行ったが、やがて戻つて来る足音が、しんとひそまった屋内にひびいた。

「総倒れじや」

「ふーむ、えらい効き目じやのう。調合の加減もあるうが、とにかく酒の味には変りがなかつたと見えるから、怖ろしい菓だ」

片方の郎従が、舌をまくように驚くのへ、微笑して、
「猪熊。奥へ参ろう」

と、平茂と呼ばれている郎従が云つた。

昼間は、細川家の若侍や侍童が、おゝぜい、この別館へ詰めていて、食事やその他を賄うのであつたが、夕餉が終わるとみんな本邸へ引き揚げてしまふ。だから、寝ずの番どもが総潰れとなつてはまことに寂寞としたものだった。

直義の北の方と、三歳の可愛盛りになつた一子、松若とは、相変わらず吉良邸にいたが、あまたの家の子郎党は、すべて分散の憂目を見なければならなかつた。そして三条坊門の大夏高墻は、鎌倉から上落した千寿王丸義詮の住む館となつてしまつた。時しも丁度秋が暮れて、時雨がちな冬が蕭しようと闌けた。幽閉された直義入道慧源は、全く世の中から隔離した形で、与党であつた大名たちとも交通を絶つた。いや絶つたというより、それは絶たされたのであつた。その悲惨な孤独を、慰めたいと思う人々も、多いにはちがひなかつたけれど、近づくともしないのは、師直を憚つたからだつた。大休寺の妙喆は、騒動の際に逸はやく、高の兇手から遁れるために、姿をくらましたし、独清軒玄恵法印も老病の臥褥にいたので、直義入道は心の友さえ失つたかのように、傍からは考えられていた。

だが――

平茂と呼ばれる郎従は、実をいうと、楠の臣、与茂平であつたし、一人の小姓――四郎丸こそ庄五郎正氏だつた。そして――

たゞ猪熊だけが、偽りなしの自分の郎従だつたのである。

「片附きましたぞ」

と、平茂が去つた。

「む」

四郎丸は、頷いて起ちあがつた。

襖をあげると、そこは慧源禅門の居間だつた。

慧源は、附書院を背にして、茵に坐つていた。四十二歳で落飾したその剃跡は、まだかなり青く見えた。躰には、黒の単色の禪衣をまとうていた。

「妻戸を開けまするぞ」

四郎丸がそう云うと、

「庄五郎」

と、直義入道は、本名で呼んだ。

「は」

「懸念ないか？」

「ござりませぬ」

四郎丸は、妻戸の掛鉄をはずした。

戸が濡れ縁へ開くと、四郎丸は、次ぎの間から持ってきた切燈台をたずさえて、縁へ出た。と、風が灯を吹き消した。だが、すでに近づいていたものと見えて、待つ間もなく闇から、修験者が、妻戸口に現われた。

たゞし、それは一人だつた。

九人のうちの一人――それは、先刻しのび込んで、納屋の酒樽に麻酔剤を投げ入れた人物であろうか。

修験者は、草鞋をぬいで、甲掛や脚絆の塵をはらつた。

直義入道は、茵に坐したまゝで、

「庄五郎。敷物をそれへ」

と、火鉢の傍らを指さした。

座が設けられたとき、修験者は、入側から室内に入つて、兜巾をぬいだ。篠懸姿の訪問者は、そして、茵に上つた。

「慧源禅門」

「お、楠殿か」

主客は、じいっと、視線を合わせた。

三

(なんと奥深い眼であろう！)

直義入道は、初めてこんな眼にぶつかったと感じた。会釈がすむと、

「慧源どの」

と、楠正儀は、ふたゝびそう呼びかけて、

「唐土には、泰伯が、有徳の甥、文王に譲つたという古事あれど、千寿丸義詮どのに何ほどの徳がござろうぞ。むしろ御器量は、はるか直冬どのが優れりと聞いております」

と、云つた。

直義入道が、

「されば俺も、泰伯の仁は学ばない」

と、答えた。

「もう一つ例をひくならば、周公は無道の兄、管叔を討伐いたした」

「俺に、周公の義を肖れ、と云わるゝか？」

そう、反問する入道へ、

「無道は、師直にはあるが、尊氏になしと申さるゝか」

と、正儀は微笑しつゝ、反問を返した。

「將軍は、執事の無道暴戾にひきずられておられるのじゃ」

「暴戾を、おさえる力のないことゝ、おさえる意志のないことゝは、見かけは似ておつても、内容には雲泥の相違がござろうぞ」

「いや。わしの兄は、たゞ力を持たぬのだ。兄の人格への、和殿の評

価は低すぎる」

「決して。かく——申す正儀が観るところでは、將軍に高をおさえる意志は、あるかに見えても、その実はなく、これに反しておさえる力は、外観はなきかに見えて、実は大いにありと考へまする」

「それは僻見でござろう。師直が實力は、天下無敵じゃ」

「禅門。これを用うれば鼠、虎となり、用いざれば則ち、虎も鼠となる。

——東方朔の虎鼠の論は、ちよつど高の場合に当てはまる。幕府の實権を握らせたからこそ、諸大名が、われもわれもと附鳳の勢いを貪つて、師直の頭使に甘んずる、が然し、實権を彼から剥がば、攀竜の望みを期する輩は、また我れがちに踵で彼を蹴るでござろうに——」

「待たれよ。その實権を剥奪する力が、今の將軍にありと思はるゝのか？」

「そこじゃ。力はあれど、意志なしと申すのだ」

「はて、解せぬことを——」

と、直義入道は眼をみはつた。

「師直から、執事の職権を剥ぐ」

「不可能じゃ」

「いや、可能でござる。まず高一族を、中国へなり、河内へなり出陣させて、しかる後に、いざといわばすぐにも挟み撃てるだけの準備をととのえて、そこで執事をやめさせる。同時に師直討伐の院宣を請う。

——將軍には、その意志がなかつた。そのために上杉、畠山は、越前の配所で斬られた。そのために禅門は今や、生命を累卵の危きに曝らしておられる。慧源どの、おん身の血潮を犠牲に供えても將軍は、高師直による安定勢力の、より強まることを願つておられる」

「おゝ！」

直義入道は、叫んだ。

だが、正儀はなおも辛辣に、

「將軍尊氏は偽善の仮面に匿れておられますぞ。尊氏は、骨肉兄弟相

聞ぐ源氏の呪われた宿命を怖るゝの余りに、高一族が第二の北条氏となることを、忘れてゐる。直冬どのが備後から失踪して、やれ嬉しやと思つたのは束の間の安堵であつた。たちまち九州で鬱然たる一大勢力をきざつた直冬どのへの不安は、たちどころに禅門に對する將軍の心理に反映する。直義入道をして生き長らえさせれば——」

「おゝ！」

「必らずや、幾歳かの将来、義詮の天下を覗く直冬を、扶けずには措かぬだらう。今、禍いの根を艾らずんば、大きな悔が遺るであらうと——」

「もうよい、楠殿！」

「殺意は、師直を俟たでも尊氏將軍の胸に、もはや動いてゐるかも知れませぬぞ。暗殺の白刃は明日を待たで——今日今晚、ふるわるゝ怖れなしとは誰れが断言出来ましようぞ」

正儀はそう云つて相手の表情をすかに見つめた。

四

直義入道慧源は、しばらく思案を凝らしてゐたが、考えれば考えるほど、自分の生命の危険が強く感じられた。一旦生命だけは保証された上杉、畠山は、高弁房のために殺されたではないか。

「身の安全をはかるためには……」

なかば独語のように云う入道へ、

「商朝へ降参なさるほか途なしと存ずる」

「な、なに降参？」

「降参でござい」

正儀は、叫んだ相手を、きつと見すえた。

「降参は出来ぬ。和睦、合体、提携——と、名はいろいろとあらうに！」

「大義名分に副う名は、たった一つ、降参あるのみでござい」

と、正儀がきびしく云つた。

だが、そのきびしい語気よりも、直義入道が氣圧されたのは、熾んな眼の光であつた。

第一印象で、底知れぬ深さを感じたその眼は、今や不屈の鋭さをも加えて、らんらんと輝くのであつた。

おぼえず視線をそらしたとき、

「直義どのは、朝敵の汚名を、いまだ拭つてはおられぬ。北朝は、足利尊氏が恣まゝに擁立しまいらせた僭王でござい。天津日嗣ぎ、正統の皇室たる南朝へ帰順する、これ降参でなくて抑も何であり得よう？」

正儀の聲が、肺肝を披くように響いた。

直義入道は、

（南朝を頼るほかに、術がないとすれば、降参もまた止むを得ないだらう）

と、考えると、やゝ気軽さをおぼえた。

「楠殿のお言葉、納得まいった」

「おゝ、では降参なされますか？」

「いかにも降参、仕ろう？」

「そのお言葉、正儀においても本懐でございぞ」

「兩人は、会釈を交わした。

「さて——」

と、正儀は、話頭をあらためて、

「御決心が定まれば、もはや一刻も、こゝに在わすべきではない。正儀たゞちに御案内申そう」

「おゝ然らば今宵？」

「もちろん。またなき機会でござい。一夜明かさば、お身のお首を受取りに参る者が、あるやも知れず」

「正儀どの」

と、慧源は苦笑しつゝ、自分の頸をなでて、

「おかげで、どうやら繋がった。——して落ち行く先は？」

「ひとまず、大和の越智の城へ——」

「越智盛容が城へ——」

「越智は、すでにお待ち致しておる」

正儀は、そう云いつゝ起つて、入側の、庄五郎のそばへ行つた。

「おゝ館！」

と、打ち仰いだ庄五郎正氏の両眼には、無量の感慨が涙となつて光つていた。

けれども、正儀はその涙を、叱るように一瞥して、

「直義禅門は、此邸を脱出なされる。お供の支度を急げ」

「は」

庄五郎は、辛苦の難業をなし遂げた者の歎びに心を昂まらせつゝ、廊へ出て、その歎びを与茂平へも頷けるために走つた。

五

直義入道の失踪！

あくる日の京都は、巷の噂が縦横に乱れとび、幕府の当局者の間でも、いろんな憶測と判断とが幾ようにも対立した。

だが、最も多くの人を領かせた説は、九州博多の直冬が奪わせたという見方と、もう一つは、洛外の在家に潜伏していた家の子たちが奪い出して、鎌倉へ奔つたのではないか、という考え方であった。

八月の事変後、尊氏の末子光王丸が、高師冬を執事として鎌倉へ下つて来た。もし直義が関東へ遁れたとすれば、この鎌倉の幼主光王丸にとつては、はなはだ憂慮すべき事からにちがいがなかった。

「虫の知らせか、光王が下ります折に……」

と、御台が云つた。

「いかゞ致した？」

尊氏は、蒼い顔をしていた。

「いやな胸さわぎ致しました」

と、御台が答えた。

たゞそれだけの事かとは、どうしても尊氏には云えなかった。

「わが夫の、お思いやりが過ぎたのでございませぬ。高どのに、三条坊門の館が囲まれかゝつた時、お救いあそばしたことが、君子は人を厄に苦しめず、とあつて、楚を撃たずに、却つて楚のために敗られたとやらしい、宋襄の轍に嵌まらねばよいがと、わらわは案じられてなりませぬ」

そう云われても、尊氏は、返す言葉がなかった。

師直は、

「草を分けても探せ」

と、早馬飛脚で、中国街道や、東海道、北国街道のそれぞれへ触れた。処々の港々へも告示した。恩賞もかけた。

だが、杳として行方は知れなかった。

直義入道が錦小路の細川邸を脱けだしてから、六日ほどたった十二月十四日の午過ぎのことだった。河内、楠の城の宸殿で、北畠准后房卿が、正儀と語つていた。

准后は、衣冠束帯であった。正儀も直衣の正装であった。准后の面持には、近ごろになく暗いわだかまりがあった。しかし正儀の顔つきには、別段の変化は見えなかった。

「直義入道への——」

こゝろに染まぬげな声音で、親房卿が、

「かたじけなき勅免の宣旨じゃ」

と、云つた。

うやうやしく正儀は、宣旨の文字をながめた。

「論言あらせらる。故きを温ねて、新しきを知るは、明哲の好むところなり。乱を撥め、正しきを復するは、良将の先んずるところなり。元弘の旧功を忘れずして、皇天の景命に帰し奉りしは、歡感の至り、

尤も褒賞するに足れり。早く義兵を揚げ、天下静謐の策を運らすべし。綸旨かくの如し。仍て執達件の如し。

正平四年十二月十三日

左京権大夫正雄奉

謹上 足利左兵衛督入道殿

正儀は、

「有難き次第にござりまする」

と、宣旨を准後の手許へもどして、

「さぞかし、慧源入道も感佩仕りましょう」

そう云った時、准後は、

「いやいや」

と、はなはだ快くないという表情で、首をふつて、

「あの不逞、不遜の直義が、なんで感佩仕るものぞ！ まずまず一時

の方便、これでよしと、北叟笑むくらいが関の山であろう。どうじゃ？」

「……………」

黙っているので、親房卿は続けて、

「このような宣旨を賜わるまでには、難かしい経緯があつたぞよ正儀どの。実世卿などは、最も強硬な論者で、建武中興の御大業の破れしは、かの直義の悪逆によるのだ、いま倅いに降参を乞うのは、天の与うるところであろうゆえ、早速これを誅すべしと主張した。また二条左大臣の説もこたひは領けた。——都におつては師直のために殺される。身の置きどころがないままに、来り投じて天威を借り、おのが望みを遂げようというのだ。おそれおゝくも天聴を掠めた後、ある時期きたらば、かならず再び叛くだろう。この機に乗じて誅伐せずんば、後日の禍い、臍を噛むとも追つつくまい。と、いわれたのだ。——のう左衛門督。吉野からの御動座のみぎりとは異つて、諸卿の言葉に理りが含まれていた。もし、女院のおんとりなしがなかりせば、この親房とて、公卿こぞつての誅伐論に賛同したであろうが、女院の仰せには、いま

こゝで勅免の御沙汰なくば、数年苦心の正儀が謀略も、あわれ水の泡となるうに、とござつた。——和どのの謀略の、目的と、ほんの輪廓だけは、親房も、たびたび聴いた。内容は知らぬけれど、和どのを信じた。いや、信じた。信じたればこそこのとおり、勅免の宣旨を頂戴してまいつた。さあ、これを頂いたからには楠——お身の重い責任が、さらに重さを加えましたぞ」

と、云つた。

だが、なぜか、正儀は答えなかつた。

六

自分に対するいつもの正儀のようでもなく、口を噤んでいるので、(変だ!)と、思うと同時に、准後は不快の気色を、いろ濃くして、

「楠、和どののは、内方伊賀どのに感謝しなくてはなるまいぞ。伊賀どの、泪ぐましき奔走がなかつたなら、国母女院におかせられても、あゝは御鼻屑くださらなかつたらう」

そう云つたけれども、なおも正儀は返辞を口から出さなかつた。

「これ、いつまで親房のみに物言わす？ お身の自慢の謀略とは、一人の兵士をも持ち得なくなつた直義入道を、降参さすことにあつたのか？」

語をとがらせて、問いつめたとき、

「違いござりませぬ」

と、正儀が答えた。

「なに、違いないと？」

「は。さよう——」

「む、さようか。——失脚して押し籠められ、寄るべ失くしておのが命も危ぶまるゝ慧源入道を、つれて来たとして何となる？」

「何となるかは、来年、来々年のこと、今申しては鬼に笑われます」

「えゝ親房をも、愚弄いたすか？ ——いまの直義をつれてくるくら

い、和殿ならずとも、誰れにも出来ることじゃ」

「しかし、直義を、いまの直義にいたしたことは、それがしが謀略の力でござります。全く一朝一夕でつかみ獲た僥倖ではなくして、家兄正行の討死に先だつこと一年有半の以前から、めぐらしておりました策謀が、やつと第一回の実りを、見せてくれたのでござりまする」

「第一回の收穫？ 直義と共動して師直を討ち果せば、第二回の收穫か？」

「仰せの通り」

「しからば、第三回は——？」

「直義入道をして、ふたゝび叛逆せしむること——」

「え？ ——なんと？」

親房卿の英邁、練達をもつてしても、愕ろきの眸をひるげずにはいられなかつた。

「楠。——直義の将来の叛逆が、お身の予定の筋書のうちにあるのか？」
「筋書きの、もつとも重要な項目の一つが、すなわち、それでござりまする」

そう、正儀が答えたので、親房卿も、すぐには言葉が継げなかつた。
（勅免の宣旨の下賜に対する異論は、すべて、直義の降参が一時の方便で、やがては叛逆の憂えがあるから、というにあつた。ところが正儀は、反旗をひるがえさせるそのことが最も大切だ、という）

准后は、いつのまにか、不快の気持ちちが自分の胸から、消えていることを感じた。そして、いとわしい不満と入り換わつたのは、この若き英雄に対する信頼の念であつた。

七

いまの、親房准後の衣冠束帯の正装が、まことに相応わしい宸殿だつた。総檜木の白木づくり——蔀の陰や、妻戸の裏にまで、おろそかない普請だつた。下段の間や入側の牀板は、影の映るほど磨かれて

いたし、廻廊の欄干は、なめらかに光り、飾りの青銅は、好ましい錆びを見せていた。

殺風景なるべき、防戦のための城のなかに、あろうとも思えない結構な宸殿だつた。

（いつぞや、正儀が云つた——恐れ多い申条だが、万ガ一にも、やんごとなき辺へ、御動座を仰ぐがごときこと、出来る場合を、おもんぱかつて建築したのだと）

親房卿は、廻廊に出て、冬の最中ながら穩かに晴れやわらいだ日和の、庭をながめた。

（正儀は、この宸殿を、わしの訪ずれて来た時以外には使わぬらしい。

——その心構えは、よくわかる。——そうした心構えで、これを建てたのが、十七か、八の歳だというから、実に驚かれる。今年が暮れても漸くまだ二十三歳で、あの老成ぶりも宜なるかなだ！ 不世出の天才だ。彼の思想は、あまりにも現実を重んじ、地上に即しすぎる嫌いはあるけれども、しかし奇策縦横、神算無碍だ。四条畷の戦前一年半ごろからの策謀——その正体はわからぬが……）

「親房の卿。——茶を召しませぬか」

と、正儀が下段の間から、声をかけた。

伊賀の方が、茶碗を准後の茵の前においた。准后は手をふつて、

「あゝ、わしも下段で頂く」

と、正儀の傍を指さした。そして上段の、もとの座へは戻らずに、板の間に坐ろうとしたので、伊賀の方はいそいで茵を移した。

「のう楠、わしも万一を慮んぱかって、今後は、上段は遠慮いたすことにしようか」

そう、親房卿がいうと、正儀は微笑で応えた。伊賀の方は、一番気に入りの唐衣——銀朱と青緑で孔雀を織りだしたのを、豊満な牀に纏うていた。いま、夫から囁かれて、勅免直義入道の宣旨の下りたことを知つたために、朗らかな容貌が一そう明るく見えた。

「あの——いからでございませうか？」

「まことに結構」

親房卿は、茶を賞めてから、正儀へ、

「わしも、年老つて気短かになつたせいやら、とかく先ばかり急がれての、和殿の厳とした歩みかたと足並みが揃わないで困る。直義の、今もなお持つてあるう実力を、見損ねたり、彼の向後の詐偽と、背叛とを、案ずることだけに泥んだりした。その詐謀の裏かいて背叛に乗じようという、深い謀略のあるのを、思わなかつた親房じゃ。——実をいうと、逆賊直義をなぜ刺さなかつたか？ そう和殿に詰問したかつた鷹であつた」

と、自分を責めるように云つた。

正儀は、茶を飲みほした。そして、

「それがして、一刀のもとに彼が首、討ちたいという衝動は覚えませんでした」

「む——？」

「錦小路の彼が寓居へ、忍び入つた夜——。彼と初めて顔見合わせた刹那——」

その声には、むしろ正儀らしくない感情がこもつていた。

准后が、

「おゝ、理りじゃ！」

と、ひき入れられた。

「おのれ直義、君父の仇！」

「理りじゃ」

「よくも鎌倉二階堂ガ谷の御所で、大逆を犯せしぞ。かしこくも聖上が、吉野の山へ彷徨わせ給いしも、汝ゆえだ。湊川の一戦に、わが父正成は、汝が首を獲んがため、いかに闘つたか？ 叔父正季がいかに汝を追つたか？」

「うむ！」

「それがしも、正成の子でござりまする。忿りは心裡に燃え上がり、おもわず躰ふるえ、全身の血液あわや脳天へ集中するか、と感じられました。亡き兄正行ならば、あるいは滾りたつ衝動にかられて、直義を真つ二つにいたしたかも知れませぬ。しかし、正儀はたゞ懸命に感情を殺し、その衝動をひたすら抑えて、にこやかに降参を奨めたのでござりまする、大君のおんため——足利に、北朝に勝たんがために」

めずらしくも正儀の言葉が、脈々と、感傷をつづつたのである。

満足の太息を、ほつと親房卿は洩らして、

「帝のおん為に！ そして湊川七百、四条畷千五百の精霊のために！」

と、云つた。

しばらく、黙つていた正儀が、

「死せる父兄、ならびに一族郎党のためよりも、生きて在わして、聖上陛下の文武の御補導あそばさるゝ親房の卿、貴卿のおんために」

と、答えた。

そこには、正成の子としての面影、正行の弟としての風格は、ほとんど微塵もなかつた。そこには、たゞ独自の正儀が、鮮明に光つた。

「おゝ！」

と、親房准后は、その鮮かな光りを眺めたのであつた。

（おん若き陛下の、聖運は、かならず開け、栄えるであろう！）

と、思いつゝ。

師直の心理

一

「奈良の坊主は、まだか？」

と、師直はどなった。

おゝきな袴しほに横たわって、脚に一人、腰に一人、肩に一人——三人とも綺麗な側女そばめだが、凝った筋と、だるい肉を、ほぐしたり、もんだり、なでたりしていたのである。

「まだ相見えませぬ」

と、鹿目平次左衛門が答えた。高家の重臣の一人である。四糸騷しかりで師直の身がわりに討死した上山修理亮こうやましむりのすけほどではないが、かなり主君似の容貌をもっていた。

「ばか。何をしているのだ？」

「たゞいま、改元仰せ下されました」

「なに？」

「上卿は太政大臣公賢公、扱進は菅原の高嗣卿」

「なんだ、改元のことか」

「観応と改まりました」

「はゝゝ花時だから、観桜と相通じる」

「はゝゝお痴言を！ 罰が当たりますぞ」

「撥が当れば、太鼓が鳴るし、琵琶も鳴る。花見は賑やかな方がいゝ」

「ほ」

「鹿目つ。その擧め面は何だ？」

鹿目平次が擧め面のまゝで退ると、師直は、側妾へ、

「もう一人呼べ。頭をさすらせるのだ」

と、云った。

梶原大六兵衛——やはり重臣の一人が、参入した時には、美しい按摩あんまが四人にふえていた。

大六兵衛は喫驚びつくりしたらしく、

「館っ！ どうぞなされましたか？」

「二日酔いじゃ」

「ほう、殿が！」

「師直じゃとて、過ごせば酔いが残る。久しく女旱魃おんなひでりで、とかく酒ばかり攻めがちだが、躰からだが負ける。どうも女よりは酒の方が毒じゃな。敷妙しまえのおった頃は、まことに躰の調子がよかったが……こんな女輩てめえでは、煮てみても焼いてみても堪能たんのう出来んによって、結局酒の力で睡ることになる。毒じゃのう」

「ふうむ、それは不可いけませぬなあ。そうおっしゃれば、敷妙どののござった時分は、滅多にはお冠めつたりが曲らなかつた」

「だが、梶原、なにか用か？」

「双なつらひ方岡の、兼好法師が死なれました」

「兼好が。——首でもくゝつたのか？」

「なかなか。いとも閑寂おんじやくな往生おうじようだったと申します。殿には、おん思

出ふかかるべき法師でござりまする」

「たゞ塩谷えんやの顔世へ、文を書かせたまでだ」

「なお武家では、赤松田心殿が、播磨はりまで逝くなられましたぞ」

「ほお円心えんしんがの」

師直は、側女たちに擦さすらせながらぐるりと寝返りをうって、大六兵衛に背中をむけて、

「播磨の大蝙蝠おごろうちり、穴へ入り時だろう」

「なお出家では——」

「まだ誰れか死んだのか？」

「は。独清軒どくせいけん、玄慧げんえ法印さまが、とうとう御危篤ごきとくなそうにござりまする」

「——玄慧法印の寂滅じやくめつ為楽か、これも結構」

師直が、そう云うと、大六兵衛は、なんと思つたのかいきなり、口誦くちんだ。

「——『君が一日の恩に感じて
我が百年の魂を招く
病いを扶けて床下に坐し
書を披いて涙痕を拭う』——」

「何じや、それは？」

と、師直も驚いたとみえて、寝返りを打ちなおして、

「花時の陽気は、頭脳にさわる。ちと、とり逆上させたのではないか大六？」

そう云ったが、大六兵衛は眼をつぶって、

『——ながらへて問へとぞ思ふ君ならで、今はともなふ人もなき世に

——』

と、こんどは和歌を吟誦した。

「梶原っ」

「この歌は慧源直義入道が、玄慧法印へ送られたお歌——」

と、大六は主君の、枕の上の眼を眺めつゝ、

「それにお答えなされた玄慧法印の五言絶句は、今お耳に入れたとおり。慧源禅門は、その返しの五言絶句に、紙を継ぎたして、六諭盤若の真文を写されたと申しますぞ！」

「えゝ何を云うかと聞いておれば——白痴めが……」

「おごる平家は久しからず、西海の藻くずと消えました。清盛の春にも似たる……あれ、あの桜花も……」

と、宏壮な対の屋の苑に、今を盛りと咲き匂う花を指さした、大六兵衛へ、

「おのれ、師直が滅亡近しと、ほざくか？」

「南都の好専僧都は、善智識でござるゆえ、お手荒なことないように……」

「ちえゝそれを申しに参ったのか！ 退れ、無用じや」

「館っ。直義の禅門は、独清軒の法印と……」

「だまれっ、その直義の在りかかを、奈良の坊主に訊すのだ。拷問にかけても実を吐かすのだっ！」

師直は、四人の妾をはねとばすように起きて、

「坊主はまだかっ？」

と、次ぎの間へどなった。

答える声と、走って来る足音がして、彦部七郎次郎があらわれた。

「参ったな？」

「逐電いたしました」

「な、なにっ？」

「は」

「好専坊主を逃がしたのかっ？」

「いえ逃げたのは桃井直常殿、父子郎党、下郎まで——」

「や、桃井が——？」

「邸は、空巢でござります。察するところ夜にまぎれて、直義禅門の許へ奔ったものと、思われます。」

「えゝその直義の在所は、坊主、坊主、坊主だっ！」

と、師直が叫んだ。

「御意にござります」

と、彦部がお辞儀をした。

「阿呆っ、頭をさげると云うのではない。直義の居場所がわからぬかぎり、どうもこうも手の下しようがないではないか？ だから、早く坊主をつれて参れ」

「もう参るはずでござります」

彦部がそう云ったとき、廊下から益子弾正の声が、きこえた。

「七郎次——。桃井一家の逐電さきがたゞ今、知れ申したぞ」
弾正が入側に現われると、師直は、

「どこか？」

「は。湖水の西を北へ向ったと申しまする」

「なら越前だ。だが越前ではない」

「え？」

「越前のはずがない」

「はて、越前が越前でないと？」

「馬鹿っ！」

出頭家老の益子弾正も、形なしに一喝をくらった。

「直義のことだ。——守護代の八木に、百日さがさせても、越前・加賀・越中にはいないのだ」

二

会所の庭には、拷問場が設けられていた。

もし好専僧都が、師直を満足させるような答を吐かないとすれば、その場に坐らせられるのであった。

鋭い稜のある石の上に、膝と膝をくっつけて坐ると、前の高い方の稜が、向う脛に、後の低い方の稜が、足の甲に当る。だから、坐った僧都の大腿は、水平になるだろう。その大腿の上に重い石が、圧迫のための錘として載せられる。つまり石を抱かされるのである。だが、抱くといっても、両腕両手は括りあげられ、両足の自由もまた奪われていることは勿論だろう。錘の石の重量は、二人の人間の力でやっと持ちあげるくらいだから、三四十貫はある。僧都の向う脛と足の甲とへは、下敷の石の稜が食い込み、皮膚を破り、筋肉を割いて、じかに骨へ軋るだろう。

この石責めは、最も苛酷な拷問であった。なぜなら、生きている人間の、とてどもこらえ忍び得ない苦痛を与えたからである。

拷問場には、郎従どもが、手ぐすねひいて控えていた。会所の板間には、高家の重立った家臣が、居流れていた。そのなかに、梶原大六兵衛は、蒼くなってふるえていた。だが、益子弾正、山口入道、その子の新左衛門、鹿目平次左衛門、彦部七郎次郎などは、すこしもおびえた様子をもみせない僧都の態度に、胆をやいて、(拷問よ、速かに始まってくれ！)

と、願っていた。

師直は、牀几にかけていた。

脂肪照りのする顔が、陽春の温気と、腹の虫の熱ぼったい疼きのために、内外から火照らされて、まっ赭になっていた。それほど好専僧都の返辞は、気に染まなかつたのであった。

「やい、坊主つ。いよいよ石の座に坐りたいのだな。あれ、あれを見い」と、師直は庭へ指を向けた。

「坊主と僧都は、たった仮名の音ひとつ異いでござります。僧都と呼んで欲しゅうござります。坊主は聞き苦しゅうござります」

「え、見よと申すに！」

「先刻とつくり見届けておいた、つもりでござります」

言葉尻だけが、いやに丁寧だった。

「おのれふてぶてしい坊主め——」

「あゝその坊主が気に入らませぬ」

「七郎次つ、袈裟を剥げ！ 衣をむけ！」

と、師直が叫んだ。

彦部七郎次郎が起つた。梶原大六が、

「あゝ待たれいっ！」

と、わめいた。丁度そこへ現われた武蔵五郎丸師夏が、

「父上っ」

と、師直の前へ走りよつた。

「なんじゃ？」

師直は、愛子の端麗な顔をながめた。

「母者人が、たいそう案じておられます。御詮議は、道理ながら、僧都は仏門の高徳——お手荒らきお取りはからいこれなきように、私よりお諫め申せとのことござりますぞ」

師夏の母は、第二夫人だが、雲上の撰家、二条関白の妹であるから、師直も、正室以上に待遇していたのだった。師直の閨門に女は多かつたが、なにか諫めるというような女性はこの二条御前ひとりであった。もつとも、その諫言は、ついぞ一度も師直に聞き入れられた例はなか

った。師直がすなおに女のいうことを聞いたのは、ただ敷妙の言葉だけだった。しかし、これは当然であった。なぜなら、気に入るようなことばかり敷妙は云ったのだから、むろん諫言ではなくて煽動だった。「はゝゝゝ、坊主は仏門——香煎は黄な粉じゃ。わかりきったことを申すな」

と、師直は赫ら顔一ぱいに笑った。

「父上つ。好專僧都は聞こえた高僧でござる。下賤な洒落は、おつしやらぬがいゝ」

早熟な師直は、もう好箇の若人だった。

「五郎丸。そなたは十四になって少し馬鹿になったぞ。直義は、天下の賊じゃ。討伐の院宣が降って、わしは錦の御旗を頂戴している。和平を乱す叛臣直義をかくまえば、どんな善智識でも香煎坊主だ。いま石を抱かすから、そこで見ておれ」

師直がそう云ったとき、僧都が、

「高殿——」

と、呼びかけて、

「承りたいのは、石を抱かすのと、直義禅門の在わす場所を知ることゝ、いずれが目的かということとござる」

と、云った。

「なに？ 拷問が手段なら、どうだと申す？」

「拷問が手段なら、もつと効き目の早い手段を、お教え申そうか？」

「坊主、なんと？」

「それ、その坊主を、僧都とさえ云われたら、身どもも痛い思いはあまり好きでもござりませぬによって、早速、慧源禅門のお足跡をお知らせいたそうと存する」

「——足跡を？」

と、師直がやゝ疑わしげに訊き返すと、好專僧都は、壮んな面魂いで、
「空とぶ鳥や天狗でも、止まれば足跡がつく」

と、微笑した。

「む。今の在り所を、白状いたすか？」

「しかと」

三

「どこだ？」

「石川河原——」

「え、河内のか？」

と、師直が叫んだ。

「さよう、東条の楠城の北」

と、好專僧都が答えた。

「あ、楠、楠っ！」

おもわず師直は、牀几から突つ起った。

「去年鎌倉へ下られた師冬殿が、東条攻めのみぎり、お築きなされた向い城——石川河原のその向い城に、直義禅門は在わすのでござる。楠殿の庇護をうけて、いとも安泰にお暮らしてござります」

豪胆をほこる師直が、赭ら顔を蒼然とさせていた。楠のそばとは、あまりにも意外だったのである。

越智盛容の城にいたこと、そして好專僧都と往き来していたことがわかったので、兵を差し向けたが、越智の城は空っぽも同様であった。盛容は家来の大部分をつれて、行衛をくらましていた。だが、直義入道は、大和のうちの何処かにひそんでいる、とばかり考えられた。それが——（あり得ることだろうか？）

楠の庇護の下にいようと！

（南朝にとつては、直義は弑逆の賊魁ではないか！）

師直は、一歩ふみ出して、

「僧都、それは真実か？ 楠の許に、直義が、安泰におれようか？ 大塔宮に対して大罪を犯した直義が、どうして南朝の恩恵を蒙り得た

のだ？」

と、言葉せわしく訊ねた。

「なぜかは存じませぬ。南朝のおん意向はわかりませぬ。存じておるのは、たゞ楠正儀どのが御自身、錦小路の細川邸へ忍び入って、直義禅門をつれ出されたことのみでござる」

「なに、正儀自身が？」

師直は、がぁんと、二度目の衝撃を喰らったのである。

「さよう。——正儀どのは、忍術の達人であられます。手を用いずして戸が開くと申します。たとい天井でも壁でも、軀を横ざまに、あるいは逆さまに宙に浮かせて、自由に伝い歩けると申します。楠どの、忍びの股肱に、八忍衆と呼ばれる——八忍の忍は、忍術の忍でござりますぞ——板持、早風、富田林、村雲、生駒、小鷹、新庄、早飛という、変幻出没きわまりない名人が、八人おるとか申します。寝首でもねらわれたら、まさしく事でござりますぞ」

好專僧都はそう云って、ほのかに笑ったのであるが、師直は、聞いているうちに、気味が悪くなった。

「いやな技を心得ていたものだ……」

「な、御安心なされませ」

「忍術というものは、そんなにも離れ技の出来る域まで、達するものかのう」

「まこと奥義に通じ、妙諦に徹しますると、三日五日はおろか、十日以上にもわたって、食わず飲まず、洩らさずに屋根の裏にひそみ、たとい斬られても、刃が肉を割かず、血管をやぶらず、縊られても呼吸のかよいが塞まらず、あまつさえ鳩の毒を、生のまゝ液に薄めず、物に混えずに胃の腑へおくつても、その中毒死からまぬかれることが出来るとか、申しまする」

「だ、だまれっ！」

まっ蒼になったまゝでいた師直の顔へ、いきなり椿茶いろが、さつ

と戻った。僧都が、

(すこし、言い過ぎたかな?)

そう思った時、

「おのれ、よくも師直を愚弄したぞ。いゝ度胸だ。引出物を取らそう」手が、伸びた。小姓のひとりだが、はつとなつた。自分の捧げていた長刀の柄が握られたと思う間さえなかつた。刃わたり三尺四五寸もあるう利刀が、たま散るように光つたのである。驚きの叫び声をたてたのは、五郎丸師夏と大六兵衛だけではなかつた。

四

だが鉦は、好專僧都の鼻の先、三寸か四寸かのところで、ぴたりと止まつた。

「とらずぞ、坊主！」

「またも坊主か——」

僧都は、顔色を変えながらも、おどかしの抜刀にちがいないと思つたので、とつさに気を取りなおして、そう口抗えをした。人々も鉦が血を流さなかつたのを見て、息をついたり、胸をなでたりした。けれども師直の眼のなかの異常な光りは、消えないばかりかむしろ閃めきを添えた。

「斬られても、肉が裂けず、血の管が破れないと、ほざきおつたな。

さあ証拠を見せてくれ！」

「あつ！」

鉦が、頬の皮膚を、一寸ほど裂いたのだ。僧都は手を傷口へあてた。掌からあふれた血が、たらたらと腕をつたって牀へこぼれた。

「高殿っ！ 血管が破れないと申したのは、忍術の名人のことでござるぞ！」

「好專坊主は名人ではなかつたのか？」

「僧侶に忍術は無用じゃ」

「はゝゝゝ無用なものか。これでも無用かつ？」

師直の刀は、たちまち鉞を進めて、横に二尺ほど空を薙いだ、と思いきや血がぱつと斜めにしぶいて、僧都のはげしい叫びと共に、指が四本、無残にも斬り離された。頬の微傷をおさえていた手先が薙かれたのである。指を切り落した刃は、その餘勢で鼻柱を断ち割ったので、鮮血はそこからほとぼしった。僧都は斬られてから初めて危険を意識したが、すでに遅かった。本能的に躰が起つて、遁れるために脚が動こうとした刹那、

「おのれっ！」

と、師直が白刃を逆に返して、強襲の一撃を加えた。僧都は膝の骨に、痛さよりは熱さを感じて、どつと倒れた。重臣たちの声々の間に五郎丸師夏の声もまじって、そして五郎丸は大六兵衛と一緒に、師直の狩衣を後からつかんで引つ張つたが、強力な師直は動かなかった。倒れた僧都は、ふたゝび起とうとしたが、起てなかった。片脚の膝から下が、無慈悲にも切断されて、ほんの皮膚のわずかな部分で繋がっているだけだった。しかし僧都は、

（殺される！）

と、思うと、倒れてはおれなかった。隻脚で、もう一度立ちそこねた次ぎの瞬間には、躰を匍わせて、傷つかない方の手と足で、そして指のもげた悲惨な片手をも使つて、生命の壊滅から免かれようともがいた。益子弾正が、声をしぼって、

「館っ、御堪忍を、御堪忍をなされませ！ も、も、充、充分の御成敗じや、お刀を納めさせられい！」

と、さえぎり止めようとしたし、大六兵衛はしかと抱きついて、師直の刃がこれ以上に血を流さぬように、僧都との距離を出来るだけ大きくすることに骨を折つた。だが師直は、兇暴な哄笑いを、弾正のうるたえ顔へあびせてから、血刀を兩三度、宙にふつて、

「大六、怪我をするぞ」

と、云つた。が、大六は懸命に腰へ、しがみついていた。

「えゝ放せ！」

師直は、腰をひねつた。

「館っ、先刻あれまでお諫め申したに……なんとというお情けないお心じゃ！ 直義禅門の在所をあらさまに白状なされた僧都へ、あの重傷を負わずとは、そら怖ろしいむごたらしさ……仏罰をお考えなされませぬか、これ殿、殿……」

「うるさい、黙れっ！」

「だ、だ、黙れませぬぞっ！」

と、哮ぶ大六を、腰にまつわらせたまゝ、ずるずると引きずつて師直は、血みどろの僧都へ、容赦なく近づいた。そして、遁れようとする方に立ちはだかつて、兇刃を僧都の眼のさきへ突き出した。

「往生ぎわのわるい坊主だ」

師直がそう云うと、半顔を鮮血で染めた物すごい相形で、

「師直っ！」と、僧都は喚いた。

「言い遣すことはないか？ あらば申せ」

「えゝどうしても殺す気かつ！」

「はゝゝゝまだ覚悟出来んとは、よくよくのやくざ坊主め。刀の錆に仕甲斐もないようだが、この師直が權威を世の中の、認識不足のやからに知らすよすがの一つと、そう思えばどうやら腹も立たぬ。どれ、引導をわたしてやろう」

だが、師直の剣は、ひと思いに渡す引導ではなくて、むごい鬪り殺しの邪剣であった。

鉞が、没義道に血をむさぼつた。

五

「殺さば殺せ！ 魂ばくこの世にとゞまつて……おのれ呪わずに措かうか！ 師直っ、思い知らすぞ！」

苦痛の悲鳴が、断続して、呪いの言葉とからみあい、血が血をひろげて牀を朱にぬった。

狂暴が、師直のこゝろのなかで、雄たけびを立てた。惨虐をよるこぶ神経が、師直の全身の末梢でおどり狂った。

「呪え、呪え。師直は大手を開いて、まともに呪咀を受けてやる。怨め、怨め、こうして命を、小刻みに刻みとつて遣わすのだ。わしも初めは殺す気などは毛頭なかったのだが、おことの思いがつた心ざまが、わしに殺意を起させた。この師直を怖れぬ気持——忍術に事寄せて翻弄したその気持が、おこと自身の寿命をわれから縮めたのだ。わしは天下の為政者だ。武断をもって、叛くものを斬り、抗らうものを殺し、乱すものを亡ぼすのだ。——好専つ、かく苛みつゝおことが一命を断つのは、わしに反抗する者ども、わしを軽んずる者どもすべてへの見せしめだ。それ、そのように断末魔の苦しみを、たつぷりと長く苦しむことは、詮じつむれば人助けじゃ。はゝゝゝやっぱり善智識らしい往生じゃ」

師直は、ことさらに急所をはずして、浅く浅くと、すでに十数カ所を斬り断つた。師直には、病的な情緒と、偏執の論理とがあつた。鋼のように頑強な神経と、めくら滅法なうぬぼれと、際限のない自恣自大とがあつた。だから、たとえようもなく懐愴な僧都の形相に睨まれても、たゞ心地よげに微笑するだけだつた。

だが人々は、とても見るに堪えなかつた。眼を閉じて身ぶるいする者もあれば、面をそらして痛ましい苦悶の声に耳を蔽う者もあり、居たゝまらずに会所から逃げ出した者さえあつた。

「父上っ！」

そう叫んだ五郎丸の顔には、まるで血の気がなかつた。唇をぶるぶるふるわせながら、

「臨終の一念は、あとを引くと申す。早う止めを、お刺しなされませ！」と、云つた。ちよほどその時だつた。多量の出血のために、もはや

瀕死の境に入っている僧都が、一度ふさがつた両眼をくわつと見開いた。藍のように蒼ざめきつた顔は、すでに筋肉が硬ばつて——それは死人の顔と変らなかつたが、たゞ眼だけがまだ視力を失わぬ瞳を、魚の目のように変色した白眼のなかでひろげたのだつた。と、同時に、細まつていた呻吟の声が、ややげしい唸りとなつたかと思つと、たちまち指のもげない方の手が、もがいたために皮膚がちぎれて大腿から離れてしまつた片足を、牀の上でさぐつた。その無気味さに、五郎丸が覚えず、

「あつ！ 足を、足を！」

と、わめいた。

人々は愕ぜんとして視線を、犠牲へ投げた。師直の腰へ必死にしがみついたなりほとんど失神したかのようになつていた大六兵衛までが、鬼気嗽々と漂う情景を、はつきりと認めた。

人々はたちまち叫び合つた。世にも恐ろしい動作が眼のあたりに起つたからである。——痙攣する片手が、血の牀に横たわつていた肉塊——切断された片足を、やがて探りあてた。そしてつかんだ。と、見るまに、今まで辛くも這匍に蠢めいていただけの躰が、いきなり、むくむくと起きあがつた。もはや臨終への一途を辿るのみと思われていた瀕死の僧都が、がぜん一本足で、ぬつくと起立したのだ——しかも挿んだ片足を、真つ向にふりかざしたのである。

それは、まさしくこの世の凶ではなかつた。大六兵衛が、絶叫した。「きやあつ！」

声もろともに、彼は師直の腰から、後ろの牀へ仰反り倒れた。人々は弾かれたように跳び立ったり、胆をひしがれ、膝の力をぬかれて、へなへなつと尻餅をついたり、わつと突つ臥して眼を掩つたりした。生得、気の強い、そして武術にもすぐれた五郎丸師夏も、まだ歳が歳だけに、

(生きながらの幽霊!)と、戦慄した。

それともはや息絶れて、一旦幽冥へ入った靈魂が、速かに舞い戻つて遺骸を、生けるがように起させたのか？

人々は、疑い、惑い、そして怖れた。

だが師直はたじろがずに、

「えゝっ！」

と、片手なぐりに大刀を、初めて全力で浴せおろした。

ぱつとしぶいた血煙りのなかから、首がとんだ。僧都の首が牀へ落ちたとき、隻脚の骸もまたにぶい音をたて、血液の溜りへ倒れた。

生首は、瞋恚の炎に灼かれつゝあるかのように双限を、見ひらいたまゝであつた。その妄執の眼を、師直は臆する色もなく見すえながら、

出鱈目にうかんだ経文を、

「稽首生木如意輪、能満有情福寿願、亦満往生極樂願、百千俱服悉所念」

と、口誦んで、

「わはゝゝん」

剛悍な笑い声が、人々の恐怖をつんざいて、凄惨な空気をゆらめかした。

殺意暗剣

「かなり大きく焼けているな」

と、正儀が云った。

はるか北の空が——黒い夜の空が、地平の際を、ぼうつと薔薇色にそめて、比叡山の峯が、月明りで眺めるよりはずっと瞭然と照らした

されていた。敷妙が、

「京都でございましようなあ？」

と、云った。正儀と敷妙は、洞ヶ峠の、落葉樹林を脚の下にした巖角に立っていた。

「むろん京都だ」

「京は、どの辺でございましようか？」

「師直の屋敷が焼けていることだけは慥かだ。仁木や佐々木も、焼かれているかもしれん。だがあとは解らん。直線距離にして、こゝから四里はあるうからの」

「桃井と越後の上杉勢が、いよいよ坂本から寄せたのでございましようかしら？」

「上野や駿河の兵も、寄せたかも解らん」

「こんな風のない晩に——あのように火の手がひろがりましたのは、ずいぶんはげしい戦さらしゅう思われますけれど——」

「義詮が、戦わずして都落ちをしたのかも知れぬ」

「ではあの——都落ちをした不在屋敷を、寄せ手が焼いているのだらうと、おっしゃいますか？」

「丹波から、播磨へ落ちて、書写山の尊氏・師直の主力軍と合する。いま、義詮としては、そのほかに術はあるまい。が、戦つたとすれば、あきれた馬鹿だ。寄せ手と戦つて、それですむことなら、充分戦つてもいいだろうが——、こゝ八幡の大軍と、九州の直冬の威力を考えたら、

一人の兵、一人の卒をも傷つけてはならぬところだからな」

「八幡の——直義入道のお旗本へは、たいそうお味方が集まったとやら——？」

「うむ、豪勢なものだぞ。直義の鼻息が、おつそろしく荒くなつてちよいと寄りつきにくいよ」

「まあ——それは良し悪し……いけない方が多いのでございませぬか？」

敷妙は、にわかには不安を感じて、美しい額をちよいと擡めた。——
とりとめのない、漠ぜんとした不安ではあったが——。

「いや、すこしも」

と、正儀は微笑んで、

「いけなくはない。わしの予定の変化じや」

そう云つて、岩肌へ尻をおろした。

敷妙が、寄り添うて腰かけた。早春の満月が照らした。月光は、落葉林の傾斜の下の、達磨堂の甍に光った。正儀は、この達磨堂に本陣を構えているのであった。達磨堂を中心に、洞ガ峠の西麓から幣原へかけて、精鋭三千の桶軍が、昨年の晩秋以来、冬越しをして滞陣すに百余日に及んでいた。で、敷妙は東条の玄々寮から、しばらくぶりで、正儀の傍に來たのだった。正儀は、薔薇色の京の空が、地平に近づくほど赤く火に焦げているのを、だまつて眺めていたが、やがて目を右手にひろがる山城平野へ移した。京都の方が焼けていると聞いて、庫裡から、敷妙ひとりをつれて峠の頂きまで、こうして登つてみたのであるが、火事はおよそ義詮都落ちの徴しと判断が出來た。

(書写山を攻めさせる時が近づいたぞ)

そう思いながら、目は、巨掠湖の銀いろに輝く水面をながめた。

二

洞ガ峠は、山城と河内の国境の要衝だった。こゝは金剛山から、葛城山、二上山、信貴山、暗峠、生駒山と峯をつらねて、河内・大和の国境を縦走する山脈の、北の末端であった。山脈はこゝから男山に隆起して、淀川の岸でつきてしまう。その男山が、すなわち直義入道慧源の、去年このかたの本営だった。八幡に陣どるといえば、つまり男山からこゝ洞ガ峠を扼することなのである。

「おゝきれい！ 水が光つて見えますること——」
と、敷妙が云つた。

巨掠の湖が輝くばかりか、月明は、木津川を照らした。淀の大河を照らした。桂川を細い銀糸のように照らした。

正儀が、ふと思ひ出したように、

「九州の話、聞いたか？」

と、訊ねた。

敷妙は、首をしなやかにかしげて、

「いゝえ」

と、答えた。さつき相伴した酒の酔色が、ほんのりと眼のふちを、ぼかし染めているのが、月あかりのために一入ほのぼのと見えた。正儀が、

「太宰府の直冬がことよ」

そう云い足したけれど、やはり、

「いゝえ」

「おどろくな。とても大変な事件だぞよ。よっぽど用心して聞いてもらわぬことにはな」

持ち前の薄ら笑いを、敷妙は不審げに、しかし嬌めきを添えつゝ、横目で見あげて、

「まあ——用心などと厭らしい……」

と、軀をくの字に撓めた。

「あつと叫ばないようにしてくれ」

「あゝら、なんでございませうか？」

「直冬がの」

「直冬どのが？」

敷妙は、じれったそうに身をもんだ。

「太宰府で——」

「あれもう、太宰府は解つておりまするものを！」

「実にな、意外な事に相成つたのだ」

「あれ、わたくしはもう存じませぬ！」

あまえて、すねて、流眊ながしめに睨むのへ、
「太宰少貳頼尚だざいしょうじょうの息女を、妻に迎えた」

「あ！」

「それ。おどろいたではないか？」

「それは、あの——真実のお話でございましょうか？　ほんとに少貳どの、聳殿に——？」

「ふゝゝゝ、そう眼の色まで変えずともじゃ、のう敷妙、すくなくとも其方からは信じられてもよい筈だがの。なぜかなら、この虎夜叉、つとめて人を欺騙たはぶるけれど、いまだかつて其方へは、偽をついた覚えがないぞよ」

「おゝ、それが真実なら、なにより大きな苦勞が消えうせましたぞえ、あゝ嬉し！」

敷妙は、胸を白い指でさすりおろした。

「伽羅作が、九州から戻つての報せだ」

「お、いつ兄は、太宰府から？」

「五日ほど前じゃ。そなたが此処へ参ることを知つたゆえ、東条へは報せなかつたのさう。——だが直冬は、決してそなたを思い切つてはいないぞ。明けたからもう一昨年おとしの——田楽異変でんがくいへんでさらわれたとはどうしても信じない。依然と師直の側におると思つていそうじゃ。少貳の姫を娶つたのは、策略結婚よ。おかげで、直冬の勢力は、忽ちすばらしいものになつた。九州から中国を風靡ふうびして、その先鋒はいまや、山陽山陰の両道から、師泰の軍を追つて播磨へ迫つてきたのだ。——そなたをとりもどしたい一念が凝つて——その直冬の一念が、兵の鋒ほこ先に反映さかしているのだ。人間の情痴じやうちというものは、なんと怖ろしいものではないか？」

「でも、去るものは疎うとしとやら——」

敷妙が、そう云うと、

「ちがう」

と、正儀は、含み笑いをしながら、

「そなたの去つたことが、最も強い動機どうきを直冬に与えたのだ。内乱の不利を知らぬような直冬ではなかつたが、そなたというもののゝために、師直に対して、喰うか、喰わるゝかの、野獸の闘いを、戦わずにはいられなくなつた。

と、云つた。

「そんなら安堵あんどには、まだ早うございましょうか？」

「早い、早い。もう十年」

「えゝ？」

敷妙は、その明眸めいぼうを見はつた。

三

「十年経つても、果して安堵出来るかどうか。——だが、十年経つても、そなたはやつと三十二歳だ」

と、正儀が云つた。

敷妙も、すぐ微笑ほゝまれた。

（殿が二十四、わたしが二十二）

若さを思うと、氣に張りが増した。

前途は、荆棘いばらの路でもあろう。いやいや針の野原かも知れぬ。劍つるぎの

山かも知れぬ。けれども、

（わが殿となら——この殿のお為めなら！）

越えて行こう。超えて行ける。凌しのいで行かねばならぬ。敷妙はそう感じた。

岩肌から、正儀が腰をあげた。

「師直と高一族を滅ぼすことは、一カ月以内に可能だ。しかし、われわれの行手は……はゝゝ」

低く、沈痛しんどうに笑つて、

「峠は寒い。そろそろ戻ろうか」

「御酒がさめましたのでございませう。今宵は、ふしぎなくらい、温かでございますぞえ」

敷妙は、あとについて、巖角から落葉樹林へ下りた。京の火事を眺めに登った将兵の影は、もう一つも見えなかった。みな陣所へ帰ってしまったのだ。

「もし——。播磨への、師直攻めの御陣は——いつお進めなさいまするか？」

「いや」

と、正儀は歩きながら、

「この洞ガ峠からは動かぬぞ」

「あら、なぜでございますようか？」

「滞陣じゃ、こゝで陣を張り続けるのだ」

「ではあの、お大切な師直攻めのお戦を、人委せにあそばして——？」

「む。あるいはこゝを陣払いして、東条の城へ引上げるかも解らぬ」

「えゝ？ どうした訳で——ございまするか？」

足利幕府の実権者は師直だ。だから朝敵の首魁は師直だ。敷妙が、直冬に身をまかせたのは、師直を滅ぼすためだった。さらに師直にさえ肉体をもてあそばせたのも、無論その師直を討たんがための、苦肉の悲願からであった。謀略がやつと実をむすんで、剃髪を強いられて押籠められた直義入道は、南朝へ降参して、勢いを盛り返したし、九州に追われた直冬も、菊池を主力とする南朝方の西国大名と手を握って、太宰府で、中国の反師直派の諸侯へ号令した。師直は、好専僧都を殺した後、直義入道を討つために、すぐに河内へ大軍を侵入させることを考えているうちに、中国の方が一層危険に感じられたので、まず師泰をその方へ出陣させた。ところが、その師泰軍が大敗した。そして安芸と石見の戦線から、総崩れになって播磨まで退却した。師直は、尊氏とともに、中国へ出馬した、京都は將軍世嗣の義詮にまもらせて、尊氏と師直は、播磨の書写山を本営としたのであったが——す

ると、直義入道の方では、好機、のがすものかというので、石川河原から陣を八幡へすゝめて、男山八幡宮の社頭で、師直誅伐の兵を集めた。師直は、直義入道と直冬に、挟みうたれる形勢になった。

（こうなるまでの苦労は、どれほどだったろう？）

と、敷妙は考えた。たしかに、もう一息で——結ばせた実を、収穫れることが出来ようという時に——

（なぜ、わが殿は、にわかにお引込み思案におなりなのであろう？）

「師直が、……」と、敷妙は、すこし後れたのを、小走りに追いついて、

「あの——將軍を抱き込んでおりますことは、師直の強味なのでございますまいか？」

そう訊くと、正儀は、

「將軍を自分の陣に、擁していないよりはな」

と、答えた。敷妙が、かさねて、

「此方が戦ぎに勝てゝも、ほんとうに滅ぼすことは、とても難かしいかのように、わたくしには思われてなりません」

と、云った。そしてびったり躰を寄せた。

正儀は、ほそい小径を、窮屈そうに——だが優しく、女のやわらかな手を握ってやりながら歩いた。

四

「敷妙、そなたは云うだろう。——敗軍ときまれば師直が、直義へ降参する。尊氏が極力とりなす。直義も、兄のいうことゆえ、無下には出来ない。それに自分も、兄のおかげで、師直に攻め殺されようとした時たすかったのだから、その恩返しの意味で、師直の命は助けるにちがいないと、そなたは、そう案じている、な？」

「はい」

「師直を殺さずにおけば、憂いが残ると？」

「はい」

「だから、この虎夜叉に直義入道と一緒に軍を進めて、是非とも師直を殺してしまうように、とりはからえ、と云いたいのだろうか？ そうしなければ、これまでの苦心惨澹が、水の泡になるかもしれぬと、気をもむ」

「はい。案じられてなりませんぬ」

「しかし、直義と一緒に、とても進めないのだ」

「なぜでございましょう？」

「危いからだ」

「あれ？」

「殺される」

「えゝつ？」

「殺されるという危険が、非常にあるからだ」

「まあ！」

敷妙は、殺される、という言葉が聞かされた途端に、両足が地べたに、釘づけられたのであった。だが、正儀は微笑して、

「な。それで疑問がはれたらう？」

「……？」

「直義は、師直の首もほしいが、この正儀の首もほしいのだ」

「おゝ、あの入道どのが……？」

「そうだ。あの入道は、兄の尊氏よりも、どのくらい悪^{あく}に出来ているか解らぬのじゃ。南朝へ降参してまず師直を滅ぼして、それから正儀を殺して、北朝へ舞い戻ろうというのが、彼の腹よ。——むろん尊氏を引きずりおろして、自分が將軍になる気だ」

正儀は、歩きだした。——女の手を引いて。

「だから、わしはこの、洞ガ峠^{ほら}から動けないのだ。ここは、後ろが河内^{かわち}だ。いつ何時でも、とっさに東条へ還れる」

「殿——」

「解ったか？」

「はい」

「困難が、峨々^がとして横たわっている」

「あゝもう、なんと申してよいやら……」

「はゝゝ、ひどく惰氣^{しよげ}たの」

「ほんに気が痛みますものを」

正儀が急に語気をあらためて、

「気が痛もうと、心が裂けようと、あらゆる困難にうち克^かって行かねばならぬのだ」と云った。

「おゝわが殿！」

敷妙は、がぜん緊張した正儀の言葉に、崇高な精神を感じた。と、たちまち感激が、熱い涙となって溢れた。

正儀が握った手に力を籠めて、

「たとい、いかなる障礙^{しょうがい}が前途を遮^{さへぎ}ろうとも、帝^{みかど}のおん為め、国家のために、最善なりと信じて自ら選んだ道を、進んでゆかねばならぬ虎夜叉だ。正儀だ。正儀のために、そなたもまた、どんな困難のなかへもひるまず、屈せず、とび込んで、それを忍んで、凌いでくれ！」

と、握りしめた。

敷妙は、精一ぱいな力で、握り返した。

「はい。忍びまする！ きつと凌いで御覽に入れまする！」

「うむ、よく云ってくれた。それでこそ、わたしの敷妙じゃ！ わしがこの世で、最も愛するそなたじゃ」

「おゝ」

敷妙は、思わず正儀の胸にすがりついた。

「そなたは、わしの宝^{たから}だ！」

力強い腕が、ぐいっと抱え締めた。

「あゝ！ わたくしは——嬉しゅうございますっ！」

「堪^たえがたい苦しみをさせた。だが、またさせるかも知れぬ。正儀は永遠に、そなたの恩を忘れぬぞよ。そなたというものを恵まれたことは、

わしの最大の仕合わせだと思うぞ！」

「お、わが殿！」

敷妙は、恍惚となつて叫んだ。

嬉しさのために、ひきつった美貌を、月明りが照らした。

疎らな林のなかの小径には、去年の落葉が冬の間に、露に曝れ、霜に朽ちて、なかば土に化していた。踏まれても音を立てなかつた。冬枯れのまんまの雑木は、青白い月光の下で、ふけた夜を眠るがような姿を、影にして地面に落としていた。

正儀は、やはり女の手をひいて、歩きだした。

「もう敷妙。——直義の黒い腹は、とっくに見抜いていたのだし、師直が滅びたあとで直義の再び叛逆することは、わしの予算に入っているのだ。だから、心配はいらぬぞ」

径は崖をまわるので、さつきは目の下に見えた達磨堂の藪は、却つてだんだん遠くなつた。そして雑木林が、やがてつきた。

そこにはやゝ広い道路が、こんもりと茂つた杉の森のふちに沿うていた。

その道路は、暗かつた。

月の光りが、杉の密林で、すっかり遮断られていたからである。注意ぶかい正儀の眼が、森のなかの黒々とした闇を眺めた。

眺めつゝ、小径からその道へでたとき、

「あ！」

正儀は、口のなかで叫んだ。

五

ぎくりとした敷妙の耳へ、
「曲者だつ！」

と、囁きざまに、後ろへ——今来た方へ、正儀は、押し戻した。

「おっ！」

敷妙は、剣術の心得はなかつたが、すぐれた感覚の鋭敏さで——驚ろいて躡けながらも、即座の気転から、

つ、つ、つ——と、身を後退りさせた。

正儀は、森の闇に殺気を感じたのである。それは異常な、おそろしい鍛錬の賜物であつた。うしろへ、敷妙を遠ざけた瞬間に——ほとんど間髪をいれぬ襲撃——

森の闇のなかから、無言の白刃が閃めき出たのだ。しかも白刃は、一本や二本ではなかつた。刺客の数は七人だつた。彼等の服装は、百姓いでたちであつた。

しかし彼等は、勿論すぐられた闘士にちがひなかつた。猛ぜん襲いかつた第一の刃は、正儀の脳天へ、

「とうツ！」

と、撃ちおろされた。

「ぎやあツ！」

悲鳴は、まさに横から正儀へ、第二の刃を揮いかけた闘士の喉から、ほとばしつたのだ。正儀の腕の名剣、伯耆安綱が、電光のように薄明をつんざいて、耳の骨から片目の眼球を、横なぐりに深く、ざっくり割つたのである。

「えゝっ！」

正儀の声は、ふたゝびはげしく響いた時、

「あゝあツ！」

二度目の悲鳴は、第一の闘士が叫んだ。

初太刀をかわされて、崩れた体勢から立ち直ろうとした途端、正儀の返す刃の刃えに、みごと高腿をぶつた斬られたのだ。

血煙りは、薄闇にもしるく揚がって、切断された脚と、斬られた闘士とが、右と左に分かれて地べたに倒れた。

敷妙は、ほとんど呼吸が出来なかつた。心臓が、いまにも破れそうだった。膝が、がくがく顫えた。とある木の幹に、縋りつゝ、

(どうぞ御無事に！)

と、森かげの道路の薄闇へ——もの凄く闘いへ、目をみはった。

ぱつと、火華が散って、刃と刃が合して鏘と鳴った。鋭い声が、はげしく、短くおめき合い、叫び交わした。

敷妙には、何事も考える餘裕がなかった。一意専念——たゞ、
(お恙なく！)

と、心で叫びつづけた。

「殿っ！」

閃々と、劍光が、銀色にはの青白さを交えて、輝いた。月が、樹の間から、光りを洩らしたのである。

「あゝ！」

黒い灰かぐらのように、血しぶきが烟つて、絶叫と共に倒れたのは、曲者の一人だった。おゝよかった、と、敷妙が思ったとき、

「やあ楠正儀どの、覚悟あれっ！」

と、一人が喚わった。

「おう、名乗るかっ？」

と正儀が闘いつゝ、喚わり返した。

「宇野六郎直村だっ！」

「そんな名は知らん。解るように云え」

「故赤松田心殿の旧臣にて、今はさるお方に頼まれて和殿のお首、頂

戴に参ったのだっ」

「はゝゝ馬鹿め。この正儀を斬れるか？」

「斬れるか斬れぬか、直村が劍、ならば手練れに受けてみよっ！」

刺客の頭目、宇野直村が、平正眼に構えた。

「参れ。——だが逃げる方が利巧だぞ」

正儀は、すでに三人を倒して、宇野をのぞくあと三人にも、傷を負わせていた。しかし傷ついた三人は、必死に対つて来ていた。三本の刃が、隙をねらいつゝ、迫っていた。正儀は、宇野へは横を見せていた。

「汝ら鼠輩の相手は、迷惑千万じや。刀をひいて、去せるとあらば斬りせぬぞ！」

正儀の愛刀安綱は、鉞を垂れて、どの敵の方へも向いていなかった。「なにをっ！」

と、宇野直村が哮った。

六

(あれ、お危い！)

敷妙は、胆をひやした。

(宇野とやら、直村とやらに、横を見せて——あ、あれもう気が揉めること！ あゝ、それ、お氣強いにも程がある！)

敵の頭梁は、側面からじりじり迫るのであった。正儀は、動かなかった。やはり鉞を、地へ垂れたまゝ——敷妙が、あせりつゝ、

(あれ、装は百姓姿でも、あの劍の構えの——強そうな。あれ、およろしいのか知ら？ あゝそれ、それ、参ります！ あ、前からも！ おゝ宇野が、宇野が、あれ参ります、参りますっ！ あゝっ！)

宇野直村の大刀が、さっと閃めいた。

おぼえず敷妙は、眼をつぶった。見ていられなかったのである。

(刀が閃いても、殿はお動きなさらなかったようだ。あゝ武芸の嗜みのないこの身の腑甲斐なさ！ これが奥方なら——伊賀の方なら——

お助け太刀が出来ようものを！)

敷妙は、正儀の劍をとつての強さをも、かたく信じてはいたけれど、自分に武芸の心得がなかっただけに、白刃の闘いに対しては気が弱かった。

誰れの悲鳴か、

「ぎゃあゝっ——」

と、致命的に、凄く響いた。敷妙が、

「おゝ！」

と、致命的に、凄く響いた。敷妙が、

「おゝ！」

と、叫びながら、目を見ひらいた。だが、視力が狂ったのか、死闘の場所が、たゞ朦朧と網膜に映るだけであった。

「殿っ！」

敷妙は、もう夢中で呼んだ。

けれどもその時、

「塵殺しだぞっ！」

声の主は、正儀であった。

（おゝあのお声は、わが殿の！）

そう思うと、たちまち視野がすうつと明るくなって、正儀の颯爽とした姿が、はっきり見えた。

——敷妙の視力は、完全に回復した。

斬られたのは宇野直村だった。

刀を落として、両手で頭の傷口をおさえていたが、

「無念っ！」

と、一言さげぶと同時に、棒立ちの姿勢から、どつと地へ斃れた。

見るまに、残った三人も、ばたり、ばたりと斬り伏せられた。

「おうい！」

と、正儀が、招くように呼んだ。

「殿っ！」

敷妙は、走り寄った。

「あゝ、血がつくぞ」

そう云われたが敷妙は、嬉し泣きに泣きながら、血だらけの正儀の躰にすがりついた。

「もし——お怪我は、どこぞお怪我は？」

「三四カ所、ほんの掠ただけじゃ」

全身が朱に染まっているのは、敵の返り血のせいだった。

「まあ、なんと剣にもお強くて——」

敷妙には、正儀の偉さが、ほとんど無限の高さほどにも讃仰された。

そしてこうした英雄から愛せられる自分の幸福に酔うのであった。

月は杉森の梢にのぼった。

七つの死骸が、利剣安綱の切れ味を、悽愴な寂寞のなかで、黙々と物語りつゝ横たわった。

敷妙が、屍骸を指さして、

「どこから来たのでございませう？」

と、云った。

「男山から——」

「ではあの——直義入道の？」

「む、疑いもなく」

と、正儀が答えた。

驕威の末路、鷲林寺門前

—

空は赤黄色く焦げて、星は光りをうばわれ、月は赤銅いろの顔を、白煙りや黒煙りの煙幕から出したり、引つ込めたりしていた。

火の恐怖と、剣のおびえが、深夜の京都全市民を震いあがらせた。

桃井直常と、越後の上杉憲頭とが、七千の兵で、雲母坂を下ったのだ。

上野の上杉憲将と能憲が、師直のために殺された重能の子、頭能と共に、

尾張の足利高経や駿河の今川範国と力を合わせて、これもまた七千の

兵で宇治から京都へ攻め入ったのだ。同じ上杉でも、朝定と朝房だけ

は叛くまいと、そう義詮が頼みにおもっていた二人までが、在京二千

の手兵で裏切って侵入軍と呼応したのだ。

市民が、喚いた。

「一条今出川の高さま館が焼けているぞ！」

「二条の仁木さまお屋敷も焼けているぞ！」

「三条の高師泰館も燃えている！」

「四条の佐々木道誉さまも火だ！」

「五条の高師冬さまもかちかち山だ！」

「え、のんきな類桁動かすな！」

「俺はお屋敷の話だい！」

「俺あ、地獄であの方々が、真つ赤に焼かれることなどは、なあにちつとも厭わんが、お屋敷がこう焼けるのはまことに惜しくもあるし、迷惑じやよ」

「え、無駄口を叩かずに、さつさと荷物をはこべ、運べ」

「おうい荷物を、運んでくれい！」

群集は、荷物を運べ、運べと、声をからして呶鳴ったが、それも無駄であった。街往来は、大小雑多の荷物で身動きが出来なかつた。市民にとつては、弓箭や剣戟よりも火事が怖いので、家財道具を持ち出したのだが、街路がこう犇々とつまつては、こんどは兵の方が怖しくなつて来た。

「わあーっ！」

恐怖はたちまち実現した。

戦慄すべき狂噪と混乱とが起つた。というのは、一隊の兵が、一隊の兵に追われて、荷物と群集で立錐の余地もない街路へ、どつと雪崩れこんで来たからである。斬り合い突き合う、兵と兵の、死闘が、民衆の逃げるための、押し合い、掴み合い、踏んだり、蹴たり、叫び、泣き、わめきつゝの、死ぬか生きるかの争闘と交流し、交錯した。

どの街でも、追う兵と、逃げる兵と、闘う兵と、死骸とがあつた。子を呼ぶ母があつた。親の横死を泣く娘があつた。

街角では、斃れた馬の上で、傷ついた馬がもがき、敵か味方か解らなくなつた兵たちが、薙刀をひらめかし、長巻を斬り落とされ、他人

の腕をもちで、自分の脚を失い、血みどろに転がり、虫の息で這つていた。火に近いところでは、濃い煙が呼吸をつまらせ、煙りの絶え間に白壁が、炎に明かるく照らされて、血の手形や、血しぶきの痕跡を、夜目にも赤々と見せた。

一条今出川近辺は、師直館の焼ける火の熱で、気温がにわかには騰つたため、旋風がつよく吹きまくつて、焼けぼつくりや煙の臭いを、あたりへ撒きちらした。さしも豪壯を誇つた執事師直の邸館も、いまや猛火の咆哮につままれていた。庭苑の常盤木が、くすぶりつゝ燃える異様な音が、熱した空気の動揺する音響と混りあつた。奢りをきわめた建物のかずかずを焼く煙りは、黒く渦巻き、淡紅いろにたなびき、あるいは新らしい血をあざむくような朱にそまり、あるいは乾いた血のごとくどす黝くかげり、むくむくと膨脹した、かと思つと、たちまち細つて、大蛇のたうつかのように動いた。

（吉野を炎上させた報いが、ついに来た！ おそろしい罰じや！）

と、そう感じながら五郎丸の生母の二条御前は、からくも兄の関白の御殿へ避難することが出来たけれど、三十人にもあまる側妾たちは、多数の侍女や端女どもと一緒に逃げまどい、掠奪の兵の手を怖れたものは、煙りに捲かれるか、火に吞まれたかしたし、焼け死ぬのを嫌つたものは、狼よりも遙かに残忍になつて、血と女とをむさぼる越後と上野の上杉勢に虜われた。

「高の内室はどうした！」

と、上杉憲頭がどなつた。

「火のなかへ跳び込んで、自害されたらしゅうござります」

と、部将のひとりが答えた。

二

「師直の留守屋敷の兵だけは、塵殺にしたであらうな？」

と、宇治から攻め入つた上杉憲将が訊くと、先鋒の将が、

「五十人とは遁さなかつたと存ずる」

と、返辞をした。

「女どもは？」

「半数以上は虜に致しました。たゞ残念なのは、二条御前を取り遁がしたことでござる」

「風を喰らつて逃げたと見えるな」

「しかし、これでどうやら重能の殿の、黄泉からのお怒りもいくぶんは晴れたであろうと思われまする」

「む、若干はな。だが、師直、師泰の生首を見るまでは、気持の籠をゆるめてはならぬぞ。我々の鬱憤は深酷なのだ」

師直のために重能を惨殺された上杉一門の怒りは熾烈な復讐となつたのであつた。桃井直常もまた、師直とその一族に対しては深い恨みがあつた。足利高経も久しい陰忍を、ついに爆発させた。侵入軍の戦さは鋭かつたし、その気分は猛り荒びていた。

だが、この悍ましい軍隊も、もし義詮の麾下に、三万の大兵が去年同様に屯していたなら、こうたやすく京都を蹂躪することなどは、とても不可能だつたらうが、尊氏と師直が中国へ出馬する時に残しておいたその三万が、二万に減じ、一万に減つてしまつた今日では、兵数も劣つたし、士気がまるで圧倒された。どうしてそんなに兵の数を失つたかという、みんな京から脱走して直義入道の八幡男山の陣へ赴いたからだ。山名時氏などは五千人もつれて堂々と京から八幡へ、大移動をやつたし、師直の武蔵守護代、葉師寺公義までが、男山へ堀がえをしたのだ。

だから、義詮は今夜、戦うべきではなかつたのを、戦つて、敗れて、焼かれて、逃げた。丹波路へのがれた。

遁走の将兵は、追撃をおそれた。後ろの怖さに、前を競つた。京で闘わなかつた者ほど、この逃げ足の路では強かつた。なぜかといえ、傷ついてもいなかつたし疲れも酷くなかつたからだ。まず重傷者を、

それから軽傷者を、ぐんぐん引き離して、まめ息災な将兵が、走れるだけ走つた。真夜中すぎの丹波路を、月影をたよりに――。

義詮は、馬を駆けさせながら、

「こんなことなら、戦わずに都を棄てた方がよかつた。――夜が明けけるまでに一里でも二里でも多く走っておかなくてはならん。摂津の神崎にいる畠山国清に、横つ腹でも衝かれたら、それこそ腹搔つさばくより途があるまい」

と、鞍つぼで考えた。

あとから、佐々木道誉と、仁木頼章が、馬をならべて追いついて来た。

「将軍がお悪いのだ」

「京都をおあけになつたのが悪いのだ」

「父上よりも、悪いのは師直殿だ」

と、義詮が答えた。

「師直殿の後尻にくつ着いて、都をさまよい出られたのが悪かつた、と申すのだ」

と、仁木がふりふり云つた。

「頼章つ、さまよい出たはなからうぞ」

さも不快げな声であつた。

「尊氏將軍は、やきが廻っているのだ！」

と、仁木は、負けずに不機嫌な声を出した。ちようどその時だつた。

道誉入道がいきなり、

「や、や！」

と、叫びつゝ手綱を引いて、馬をとめた。

「入道つ、――？」

義詮が、顧みだ。道誉は、耳をそばだてゝいた。義詮も、乗馬の脚をとめた。不安の眼が、竜頭の兜の眼底の下で光つた。仁木もまた、おどろいて馬首をめぐらして、

「いかに？」

と、いぶかった。道誉入道が、

「あの物音——おびたゞしい兵馬の音だ！」

非常声で叫ぶと、

「ええ？」

「おゝ、聞える！ 近い！」

わかき將軍世嗣は、眼の前が暗黒くなるのを感じた。

三

(畠山国清は、兄直宗の復讐に燃えている。畠山の兵にちがいない)

義詮が、そう思ったとき、

「国清か？」

と、仁木が呻いた。

「石堂かも知れん。細川かも知れん」

と、道誉は自棄に大きな声を出した。

誰れかが、

「敵だっ！」

と、喚いた。「敵！」「敵！」と、声が、声を生んでいった。敗軍の先頭を走っていた將と兵が、叫びながら引つ返して来た。その將が「敵の大軍っ」と、よばわった。忽ちそれが、連呼となって、後尾の方へ伝わっていった。そして動揺がすぐに停止と沈黙にふりかわった。敗軍が、惨として進退に窮した。後に上杉、前に畠山とすれば、いずれも師直にたいしては必殺の敵である。我々は高の兵ではなくて、將軍世嗣義詮の近衛軍だと云ったところで、もはやそれは何ら防禦の言葉にはならなかった。すでに矢は弦を放れたのだ。

義詮が、仁木へ、

「残兵は——千はあるのか？」

と、云った。仁木が、

「足りません」

そう答えた時、仁木の弟、義長が、後尾の方から馬をとばして来た。

「いかゞ、なされませるか？」

「死か——降参かだ」

と、義詮が答えた。

側近の兵がひとしく声を呑んだ。馬蹄のひゞきは、刻々に近づいて来た。

道誉入道が、

「小御所！ 將軍と、御世嗣たるおん身は、中立の地位に在わすべきであつた」

そう云うと、義詮は、

「今さら、何を申すぞ」

と、苛ち声を投げた。だが自分も、

(母と共に、天竜寺へ避難すればよかつた！)

と、後悔を感じた。母、登子の方は、夢窓国師の庇護へ遁れたのであつた。

仁木義長が、闇然と叫んだ。

「畠山は、降参を容れぬかも知れませぬぞ！」

「容れなくば、討死の一途だ！」

蒼い顔で、そう義詮が云つたとき、あなたの森かげで馬がいなくなつて、月明りの視野へ、騎馬武者が数騎——。現われた前駆の一騎が、大音をあげた。

「おう、それなるは宰相中将義詮の殿の御軍勢とお見受け申す。只今これへ、將軍尊氏卿、高師直の殿とおん共々、書写の御陣より二万騎にて御来援——御来援でござるぞっ！」

敵ではなかつた。しかも最大の援軍であつた。

「わあゝっ！」

はげしく歡喜の音が、どよめいた。

四

明くれば、正月十六日——。

京の市街は、ふたゝび修羅道の禍に見まわれた。

尊氏・師直軍は、義詮の敗残軍をも糾合して、京都回復のために乱入した。昨日攻めた者が今日は守る側に立った。攻める側へは、三井寺の衆徒が、佐々木道誉との深い関係によって来援した。だが、守る側へも、男山から、陸続と援兵が繰り出してきた。戦闘は、昨夜よりもさらにはげしくなり、数倍も大きくひろがったのであった。

北朝の、主上は、内裏から仙洞へ徙御遊ばされた。桃井直常が、京を守護しまいらせる旨を奏した。しかし尊氏も仙洞へ、千秋高範を参入させて、自分が播磨から上洛したことを上奏した。

鬪いは、ほとんど京じゆうにひろがって行つた。尊氏は二条河原で、義詮は四条河原で、師直は九条の原で戦つた。だが、味方の兵力は二万五千にはよほど足りなかつたのに、敵は——直義入道が男山から鳥羽へ出馬したので、戦線に立つ兵だけでも四万を超えていた。師直は九条の原で、二倍以上の敵と戦わなければならなかつた。午後になると、味方の負け色は、あまりにも歴然となり過ぎたので、いくら歯がみしても、もう退却のほかなかつた。

(ちえゝつ！ おれの兵は、もつと強い筈だが……)

師直の驕兵も、すでに疆弩の末であつた。盛んなれば、人に克つ。かつては対うところ敵のなかつた慍悍な兵だつた。しかし今は——人は同じく常磐の原野に三春駒を駆つて武を錬つた人が、軍の主力をつくつていたのであるが、師直をおとすれた急転直下の頽勢のために、往年の驕剛もいわゆる魯縞も穿たぬという、意気沮喪の兵に変わつてしまつていた。

(おれの運も、ひどく傾がつたものだ！)

と、師直は、紫色になつた厚い唇を噛みきつた。血が、だらだらつ

と流れた。

(四条原で、正行の兵を全滅させた時が、おれの運勢の絶頂だつた。重能と直宗の首をたゞ斬つて、直義を坊主にした時——直冬を九州へ追落した時——おれの權威は一段と伸びたようだつたが、それはほんの見かけだけの感じではなかつたのだと、今となって思いあわせる。おれの運に罅がいつたのは、あの時だつた。なんの造作もなく殺せる時分に、なぜ直冬めを殺さなかつたらう？ あいつから敷妙を奪つた頃なら、赤児の喉を縊るように息の音をとめることが出来たのだ。敷妙を奪り返された時は、だが、もう遅かつた。けれども直義を錦小路へ、おし籠めるかわりに殺してしまえば、こうまで惨めを見ずにすんだらうに、生かしておいて桶に奪われた。えゝ馬鹿つ、馬鹿つ！)

師直は自分を罵つた。

(ちえつ——兵が、弱すぎる！)

「退くな、死ぬ、死ぬつ！ 退くなつ！」
と、四つ塚の羅城門の址に、馬をいなゝかせつゝ、声かぎり呶鳴りつゞけた師直だつたが、先陣の諸隊はすでに潰え、中陣の各隊もまた本陣へ、雪崩れ、くずれ込んで来た。

兵は、豪奢な今出川の館が焼きはらわれて、奥方は炎のなかに身を投げて自害し、女護の島みたいたつた美しい対の屋が、灰になつてしまったことなどを考えて、そうでなくても萎靡した士気を、ますます萎縮させていた。だから、鬪つて死ぬものよりも、傷ついて、あるいは傷つかずに、逃げるものゝ方が、はるかに多かつた。

もはや本陣も、潰乱した。

師直は、播磨の書写をさして、走らなければならなかつた。

そして、師直よりも前に、尊氏と義詮とは、都から逃げ出していた。落ち行く先は、やはり書写の山下の陣営であつた。

尊氏、義詮の惨敗も、師直の負けぶりに劣らなかつた。側近を護つて奔つた将兵の数は、わずか五百に足りなかつた。

佐々木道誉は近江へ、仁木兄弟は若狭へ、どちらも自分の城へのがれた。

五

この日から数えて、ちようど四十日目の、二月二十五日のこと――。

楠正成戦死の場所と、兵庫の鶴見松原との、なかほどにある四方四町ばかりの小城、湊川城――またの名、松岡城の中で、尊氏は、やつれた顔をまっ蒼くして、昨夜一睡もしなかつた眼をしばしばさせながら、がさつな建物とは甚だ不釣合いに立派な枝ぶりを、狭くらしい庭一ぱいにひろげた松の大木を、ながめていた。

まるで、この松の名木を守護するために、築かれた、と云つてもあまり馬鹿々々しくは聞えないくらい粗末な城だつた。

尊氏のそばには、師直が、脚を投げ出して柱に倚りかゝっていたし、師泰もその脇に、体を横たえていた。師直は、片脚と片腕に、師泰は両腕、両脚に、ぐるぐる白木綿をまきつけていた。それは、ついこないだ――七日前の激戦に、かなり重く傷ついたその疵口を、繃帯してあるのであつた。

夜明けから間がなかつた。陽はまだ昇らず、松の大木の葉は、じつとりと朝の露にぬれつゝ黒紺いろに見えた。

「眠らずに待つたが――」

と、尊氏は、師直の方へ、松から眼を移して、

「どうとう命鶴は、戻らなかつたの」

そう云つたが、師直は顔を曇らせているだけで、返辞をしなかつた。

「痛むか？」

「化膿――」

師直の傷口は、腐爛しかけていた。

すこし離れて、しょんぼり胡坐している義詮が、なにか云おうとした時、梶原大六兵衛が、細長い薄板に墨くろくろくと文字の書かれたのを、

横抱きにして入つて来た。

師泰が、寝転んだまゝで、訊いた。

「なんだ？」

「門の外に、立てかけてあつた歌でござります」

「落首か」

尊氏が、

「見せい」

と、云つた。大六は、落首の板を立てた。室内は薄暗かつたが、白っぽい板に濃く書いてあるので、はっきり読めた。みんなの眼がそれに集まつた。この部屋には、師直の長男師世もいた。五郎丸師夏もいた。師秋もいた。師兼もいた。

歌は、二首であつた。

吉野山峯のあらしのはげしさに高き木ずゑの花ぞちりゆく

かぎりあれば秋も暮れぬと武蔵野の草は皆がら霜がれにけり

前のは、吉野を焼いた罪によつて、高き梢の花、すなわち高家の人々が、亡びることを詠んだものだし、後のも、師直は武蔵守だから、武蔵野の草の枯れることに結びつけて、草は、皆がら――つまり高の門一族が残らず滅亡したと、そう諷こすつた歌であつた。

「まずい歌だ！」

と、尊氏がつぶやいた。

「いやな歌だ！」

と、師泰がどなった。

だが師直は、黙つたまゝ顔を、また曇めた。

過去十八カ年の驕威の末路！

ひしひしと迫る無量の悲哀と、墮地獄の懼れとが、高一族の人々から声を奪つた。

六

大六兵衛は、劃りの取り扱われた隣室の方へ、落首の板を向けかえた。そこには將軍の昵近、糟谷保連、おなじく伊朝、長井治部少、瀬津小次郎などがいた。高の支族、重臣たちがいた。その大半は綱帯をした負傷者だった。眼はみな、まがましい文字を読んだが、口は一樣に緘黙を解かなかつた。——高弁房、大高、小高は、すでに戦死していた。「榎村——」

大六兵衛は、落首の板を榎村儀左衛門にわたした。それを抱えて榎村は、傷の軽くない片足を引きずりながら、広敷へ出て行った。

奥の室では、尊氏が、

「命鶴は——心許ないのう」

半ぶん呟くように云うと、師直はたゞこくりと頷いた。そのとき、五郎丸師夏が、

「兄者。夢のお話をなされては？」

と、師世に云った。

師世は、大六兵衛をかえりみた。

「大六。申そうか？」

「仰しやいませ」

「父上！」

と、師直を呼んで、師世は、昨夜まどろむ間にみた怖ろしい夢を、告げた。

それは、奇怪なことには、師世のみならず梶原大六兵衛の、ほとんど同じ時刻の夢にも、まったく同じ形で現われた凶事であった。

「場所はたゞ渺々たる平野でござりました。西は父上、叔父上、われわれ一族、その郎従数万人——東には、直義禅門、直冬どの、上杉、畠山らわずか千騎ならず。戦うこと少時、敵が敗れて退くのを、追わんとする時、雲のうえから、錦の御旗一流なびかせて、現われ出で

たる一隊は、百騎内外。左右にわかれた大将を、誰れかと思れば、左は吉野の金剛蔵王権現、右はおなじ吉野の勝手の明神でござりました。蔵王権現は、頭に八つの角が生えて、八脚の馬に召され、勝手明神は、金の鎧に黒鉄の楯を引きそばめて、甲斐の黒駒に白い鞍おいて召されました。金剛蔵王が、おん目いからせ、あれを射て落せと下知されました。弓の弦音が、鼓膜を破るがように響いて、とび来た矢が、父上と、叔父上の、眉間のまん中を射抜いたのであります」

夢は、師直師泰の死の落馬によって、はっと醒めたのであった。人々は、顔を土のようにして固唾をのんだが、師直はむしろ鈍い表情で、

「夢は、五臓と脳味噌の疲労だ」

と、云ったきりだった。

尊氏が、またも呟いた。

「命鶴は——まさか殺されもしまいが……」

饗庭命鶴丸は、重大な使命をおびて、八幡男山の直義入道の本陣へおもむいたのだ。——尊氏と師直は、先月の十六日に京で大敗して、播磨の書写の坂本へ遁れた。そして師泰軍と合したが、やがて書写山をも捨てなければならなかった。前面からは直義に、背面からは直冬に、側面からは上杉・細川・畠山・石堂の聯合軍に攻められては最早、勢いが谷まりつきた。一途の血路を開いて重圍を脱しようと試みた最後の一戦も、無残にやぶれて、やっとこさ塵殺しから免れた。いまは——たゞ、命鶴丸の復命たった一つに、生か、死か、つながれているだけであった。尊氏は、男山の直義入道へ、降参と、師直、師泰の命乞いとを、申し送ったのである。が、待たるゝ命鶴丸は、まだ還つて来なかつた。

（凶か？ 吉か？ 還らないとすれば——死あるだけだ）

と、尊氏は思った。

「將軍。——身どもは、船で——」

師直は、響め顔の片眼だけ見開いて、

「兵庫から、関東へ落ちようと存ずる。常磐地方は譜代の根拠でござるし、師冬は鎌倉を放棄しても、甲斐半国はがっちり保っておるし——」

そう云うと、尊氏は、頭をふった。

「だが、船まで落ちることが、まず第一に覚束なかるう」

「鶴見松原は、頼春と、頭能のみだ」

「頭能は、上杉の嫡男だ。亡父の仇討ちという意気は猛しいぞ。——また、よしんば鶴見松原は突破できても、海には楠の水軍が、船をつらねている」

「しかし……」

師直が眼を塞いだとき、広敷から唐突に、どよめきが聞えた。

（や、なに事ぞ？）

人々が、危俱の目を見あわせた。

七

樫村儀左が、傷の痛さも忘れて、駆け込んだ。

「師冬の殿が、甲斐の逸見の城で——御自害っ！ 御自害っ！ 只今、

源八郎どのが、家城どのが、これへ——」

と、叫んだとき、山伏姿の家城源八郎師之が、樫村の後ろから現われた。錆びた赤銅のように陽光に灼け、風雨に曝れすさんだ顔に、寝不足の目が赤く、汚れた篠懸にも、こゝまで辿りつく途中の艱難が偲ばれた。

源八郎は、あわたゞしく將軍に一揖するが早いか、師直へ、

「館っ！ 無念でござりまする。わが殿は……」

と、そう云いかけたが、気の弛みと、変われば変わる師直の境涯に対する悲歎とで、あとの言葉が出づまって、涙がこんこんと湧いて、こぼれ落ちた。

「播州が自殺したとな？」

「はっ、はい！」

と、師冬の家老、源八郎師之が、男泣きを啜りあげつゝ、答えた。

高家の人々は、一人のこらず絶望を感じた。一門随一の驍将こそ、播磨守師冬であった。師冬関東にあるかぎり、一縷の望みはかけ得るのだが、それが、すでに亡し。

「上杉憲藤の、優勢な軍に囲まれ、武蔵の七党に裏切られましては、逸見城も保ちかね、宗徒の家臣六十余人、枕をならべて死出のお供つかまつった」

「あゝ！」

と、師泰が、一たん起した上臑を、ぼったり床へ倒して、

「狂瀾を既倒に廻すことは、もう駄目だっ！ 駄目だっ！」

と、叫んだ。強情無上な師直は、だが「うーむ」と、猛獸が忿るような声で唸り、呻いた。

——ちようど、この時刻に、

八幡、男山八幡宮の表て坂を、隊伍肅々と登っているのは、楠の護衛兵であった。

正儀は今、直義入道慧源の招きに応じて、洞ガ峠の達磨堂から出かけてきたのだ。直義入道は先月十五日の夜、宇野六郎直村ほか六名の劍豪をえらんで、正儀を暗殺しようとした。だが、それに失敗してからは、何喰わぬ態でしばしば礼を厚くして正儀を、自分の本営に招いた。そのたんびに正儀も、知らぬ顔をして出向いた。たゞし供は、いつも途轍もなく多数で——それは供という概念には、とても納まらないものだった。では、衛兵か？ それでもなおよくは嵌まらなかった。いうならば、一軍を提げて訪問したのである。衛兵には相違ないが、その兵の数は、無慮一千——一千の楠兵！ どれほど力強いかは、過去の戦争が証明した。

で、今朝も、例によって衛兵一千。

正儀は、虎がしらの兜を、与茂平に持たせ、伯耆安綱の名剣をおびて、二の鳥居をくぐった。先頭の衛兵は、すでに三の鳥居に近づいていた。そして衛兵の後尾はまだ、山麓の一の鳥居を越えたばかりだった。南に面いた三の鳥居が、ぱつと金色に淡朱をまぜて輝いた。朝陽が、はるか東、平野の彼方につらなる笠置山脈の主峯、鷲峰山の尾根からさし昇ったのである。

八

「館。よい日の出でござりますのう」

と、梶丸が云った。

正儀は、頷きつゝ、朝暾のひかりに赫耀ときらめく鷲峰山を、木津川を、綴喜平野を、巨掠湖をながめた。

一望の視野はこれ悉く春であった。嫩き翠と、やわらかい黄いろとを、色彩の基調にして、花の蒼がほのぼのと醸したす淡紅で、ぼかしをかけた水の奕やく銀色を点綴した、陽春の朝ぼらは、眺める人の心にやどる希みの格につれて、どんなにも耀やかしく眺められたであろう。

（南朝にも春が来る！）

と、正儀は心で云った。

庄五郎正氏が、うしろから、

「殿。——命鶴への返答についての、相談でござりましょうか？」

と、訊ねた。小桜の威し毛の華やかな、天晴れな若武者ぶりであった。

「そうだ」

と、正儀が答えた。

「師直、師泰の助命を、許す心でござりましょうか？」

「直義入道の態度は、おそらく、俺の言うなりに決るだろう」

「……？ お言葉のまゝに？」

「今の場合はな」

「この場合……？」

「庄五郎」

と、足をとめて、正儀はかえりみた。

「お許にも似合わぬ頭の悪さよ」

「はあ、不肖でござる」

庄五郎は、忸怩として首を垂れた。

梶丸が、

「とまれい」

と、号令した。号令は、前へも後ろへも迅速に、全隊の行進をとめるために喚わり継がれた。

「お訓え願われましょうか？」

と、庄五郎は顔をあげた。

「わしは、堺港と、岸和田と、淡ノ輪の三カ所から、水軍を出した。和田の助氏と、淡輪助重とが、いま、福良の渡し、淡路の瀬戸から、須磨、兵庫の浜を扼しつゝ、兵船をうかべているのは、一体なんのためか？」

そう訊いた正儀へ、

「それは尊氏、師直が、船で遁れるのを遮るため、としか心得ませぬ」

「師直、師泰が重傷を負うまでは、それは勿論そうであった。が、現在は、まるで違うぞ。——考えて見よ」

考えてみても、庄五郎には解らなかつた。

「これが、解せぬかの？」

「はい……」

「困るのう。解りそうなものだが」

「それが、羞かしながら……」

「鶴見松原は、背後の海に水軍あり、という安堵から、尊氏、師直の籠る湊川城をかこむ包圍陣のうちでは、一番兵力が手薄で。細川頼春の五百と、上杉頼能の五百きりだ。この安心しきった手薄さが、まことに有難いのだ。——どうじゃ？」

どうじゃ、と云われても、湊川城包围の戦線が、鶴見松原において手薄なことが、なぜ有難いのか？ 庄五郎には見当がつかなかった。

「なぜでござりましょうか？」

「まだ解らないのか。——わしの水軍が、上陸して、尊氏、師直を城から援いだすことが出来るではないか？」

「えゝつ？」

庄五郎は、おどろいて、

「師直を？——尊氏は兎にかく、師直を援うとは？」

「援うことも出来るし、また殺すことも出来る。だが、わしは殺すとは云わない。わしは、師直を援い出す、というのだ」

「えゝつ？」

「なにを訝がる？」

と、正儀は微笑して、

「直義入道にむかつて、そう俺が云うのだ。むろん、師直を殺すのが目的ゆえ、誰れの手で殺してもよきそうに思われるかも知れぬけれど、実はそうでない。直義入道の手で殺さないことには甚だ都合がわるいのだ。だから、もし直義が、このさい師直の助命を許す気なら、わしの水軍はたゞちに上陸して師直を援け出して、と同時に直義と手を切ると、そう云って脅かすのだ。もし命鶴が、きよう正午過ぎて一晌以内に、湊川城へ、師直を殺すという旨を伝達しないなら、わが水軍は予定の行動を起すことになっていると、そう云って直義入道を、おのゝかせるのだ」

「おゝ！」

庄五郎は、従兄の機に臨んで実に端倪しがたく応変する胆略に、おぼえず驚異のさけびごえを洩らした。だが、自分の心には、なお解りかねる点が残っていた。

「恐れ入りました。が、なお一つ、愚かなそれがしの腑に落ちませぬのは、直義入道がこの期におよんで、なぜ師直を殺すことを躊躇って

おるか、ということでもござりますが……？」

「直義は、師直を生かしておきたくはない。だが師直を今殺すためには、尊氏をも殺さねばなるまい。兄を屠って、兄殺しの名を着ることは、彼としても避けたい」

「——では、今、尊氏を死なせずに師直を殺す確実な手段が、ござりましょうか？」

「あるとも。今、その手段を行わせるために、わしがこうして直義に会いにゆくのだ」

正儀は、そう云うとともに手で、梶丸に行進を命じた。梶丸が、「進めい」

と、号令した。——庄五郎は、

（辛辣、機微のそのまた裏を穿つような計略が、あるのだろう）

そう、思いながら、お辞儀をした。

九

直義入道慧源の本営は、この男山八幡宮の神主、紀有豊の邸館だった。石清水男山八幡社は、わが国第二の宗廟ともいうべき、歴代の皇室のふかく崇めさせたまう神社で、本殿、外殿、舞殿、幣殿、楼門、鳩嶺書院、神廐、鳳輦舎、羽車舎、神厨——いずれも檜皮葺に丹青を塗って、けんらんの五彩がさんさんとかゞやいていた。神殿の四方をかこむ瑞籬には花鳥が彫られ、金銀がちりばめられて、まばゆいくらい壮麗だった。東、北、西の三面に、石畳の高さ八尺ばかりの外縁欄干づくり美ごとな廻廊があつて、神殿の前には、左右に橘樹が蒼々と生えていたし、西の廻廊そこには大きな影向桜があり、東廻廊の外には、一樹の楠樹が亭々と茂っていた。この楠樹は、建武中興の年に楠正成が寄進して、みずからこゝに植えたものであった。だから正儀にとつては、この楠樹は、仰ぐたんびにいろんな感想の因子になった。

今朝もまた、正儀は神前に額ずいてから此の楠樹の下をとおりつゝ、

(父上よ。正儀は今、一兵をも損失うことなしに凶賊の魁、尊氏、師直に対して、湊川の弔い戦を成しとげまする)

と、そう心で云って、春の朝暎に照り映える梢の常磐葉を見上げた。(奇しき運命は、尊氏と師直とを、父うえの御最後の場所——湊川において、敗衄させ、屈服させ、そしてまず師直をして滅びさせますぞ！)

正儀はさらに、亡兄、正行、正時を呼んだ。

(兄上たちよ。弟は今、四条畷の復讐を遂げます。兄者たちが、討ち洩された師直の首を、おそくも今日の陽が西に沈むまでには、かならず討つてお目にかけてよう！)

楠の衛兵一千を迎える男山の陣の物々しさは、いうまでもなかった。

直義入道の麾下に集まった諸国の兵の、およそ半分は、摂津、播磨の方面へ出陣していたが、それでもなお二万余の軍勢が、こゝ八幡宮の宮司、紀氏の館を中心に、末社、後見殿——すなわち武内社(男山八幡宮の祭神は、応神の帝であらせらるゝから、後見殿として武内宿禰を祀るのである)、若宮社、水若宮社、住吉社、稻荷社、石清水社、狩尾社、高良社などという多くの神殿をめぐるつゝ駐屯していたので、宮本坊から如法経塚、細き橋から景清塚、絹屋敷から御旅所、放生川のあたりまでも兵、兵、兵、みな兵であった。

正儀は、紀家の庭で、直義入道とむかいあつて牀几にかけた。

武装いかめしい諸将が、直義の両わきと背後に居並んでいた。それらの諸将の眼が一斉に、はつと光った。と、いうのは——

直義入道の近豎が運んだ茶を、正儀は、受けとつたが飲まずにそれを、地べたへ零し捨てゝしまったからである。

「や、楠どのー！」

と、直義入道が顔色をさつと動かしつゝ云つた。

「はゝゝ、零してしまえば、頂いたも同様、お茶碗が空になる」
正儀は、そう答えた。

「やあ、異なことを——」

「いや、ちようど、斬つて捨てれば、その死人には口がなくなるようなものでござる」

「えゝゝ」

直義入道は、こつぴどく、闇討ちの失敗を諷てこすられた。

「禅門」

と、正儀は、ぴりゝつと辛く薄ら笑んで、

「お茶のことよりも、肝腎な師直がことについて、お耳を拝借いたしたい」

そう云うなり、すつくと牀几から起つて、直義入道へ近寄つたので、(あつ！)

入道も、諸将も愕ぜんとした。

(斬られる！)

だが、正儀はむろん、腰の伯耆安綱に血ぬりなどはしなかった。

一〇

武庫川べりの若草は、しめやかに降りだした春雨にぬれていた。

朝の天気が、あまりにも晴れがましすぎたせいであろう、近畿一帯がぐんぐんとぬくもつて、午ごろから花曇りとなり、午後の時間が経つにつれて曇りが雲に変わつて、ついに驟雨を降らせたのであった。

「こう暖かだ、おまけに雨では、すぐ満開でござりましょうな」

そう云つて、長尾彦太郎が、苔みの桜の梢をおおぎ見た。

「彦太つ、暢気なこと申すなつ！」

と、上杉顕能が、まつ蒼い顔でどなった。

「は！」

暢気どころか、自分でもたまらないほど緊張しすぎた気持を、なんとか少しまぎらすために、そんなことを云つた長尾彦太郎だった。彦太郎は、大身槍の石突を地面へ、ぐいつと突いた。

「まだか、見て参れっ」

そう云いつかった長尾は、門の外へ走って行った。鷲林寺の門前をよぎる街道には、西左衛門四郎、小林掃部助、高山房次郎、佐々宇六郎左、小柴新左などの家中屈指の勇士らが、川向うの西宮の方を見つめながら、話し合っていた。

「おい、まだか？」

「まだまだ」

「長尾。いまも話していたことだが、およそ今日ぐらい、とんとん拍子に事が運ぶということはめずらしくるぞよ。な。考えても見い、一瀉千里というやつは、たしかにこのことよ」

そう、西左衛門四郎が云うと、小柴新左も、

「西の申すとおりだ。のう長尾。男山から、湊川まで、ざつと二十里を、命鶴丸はわずか五刻の短時間で馳せくだった。乗手よりも馬だが、吉良、渋川の両殿も、やはり六刻以内で我々の松原陣へお着きなされた。たばかられたとは露知らぬ高兄弟め、命鶴丸がもってきた助命の報せで、ほつと甦ったおもいで早速、広厳寺へ行って、殊勝らしく出家して師直入道道常、師泰入道道勝てなことになってよ、のこのこと、へ我々に首を渡しに参るのだ。な、まるで嘘のような事実じゃ」

と、云った。

「だが、殿はもう待ちくたびれて在すぞ」

長尾彦太郎はそう云って、かわいた唇を舐め潤してから、

「早く来てくれぬことには、拙者なども根がつきそうだ」

「彦太郎、そんなにあせっては、仕損じるぞ。殿におかせられては父君の仇、我々にとっては主君の讐だ。たゞの一人として討ち洩らしてはならぬのだ」

「いうにや及ぶつ」

と、長尾が叫んだ。佐々宇六郎左が、

「落ちつけ、落ちつけ。——わしは今、ふいっと考えたのだが、あの

広厳寺という寺は、どうも不思議な寺だのう」

と、云った。高山房次郎が、

「不思議とは、なぜ？」

と、訊くと、

「妙ではないか。延元元年の湊川合戦に、楠正成、正季が刺し違えて果てられたのはあの寺の無為庵だ。現に今、墓もある。それが今日、その無為庵で師直、師泰兄弟が格にもなく出家した。——正成、正季は、あの寺の開山の禅師、楚俊老師と生死交謝の時とやらの問答をして、それから最後の戦場にのぞまれたという話だが、きよう師直、師泰を得度させた導師は、今云った楚俊禅師のお弟子で、禅師が死くなられた後の住職になおった楚胤とかいう和尚なそうだ。な、これが昔の剃髪ならまだしも、鶴見松原からこゝへ我々が先廻りをして、こう待伏せているのだから、もうじきに首が胴から、ふつとぶのじや。な、広厳寺という寺は、まったく——」

「来たつ！」

長尾彦太郎の叫びごえで、むろん佐々の言葉は中断された。

「見えたつ！」

「それっ！」

上杉頭能家の勇士らは、ばらばらつと、逆戻りに背後の鷲林寺門内へ駆け入った。

武庫川の堤に、將軍尊氏と世嗣義詮とが、命鶴丸その他の側近を先駆として現われたのである。

尊氏は、命鶴丸の復命によつて、直義入道が、降参ならばという和睦と、高兄弟の助命とを容したことを知ったので、男山から提出された条件どおりに、師直、師泰を出家させ、一族重臣以外従者を伴わせぬことにし、なお「尊氏、義詮——高一族の間には、畠山国清の兵を差し挟むべし」という条件をも、忠実に履行して道中することに決めて、湊川城を出たのであった。行く先は、いうまでもなく男山の直

義の本陣なのである。そして今、武庫川橋を渡るのだった。

長尾彦太郎が、

「わが殿っ！ すでに將軍おん父子が、川を渡られますぞつ」と、喚わった。

「む。者ども用意っ！」

若き上杉顕能は、叫んだ。

鷲林寺内、五百の上杉兵は、武器を揃いで、唾を呑んだ。

—

湊川から武庫川まで、街道の両側には、百騎二百騎、五百の徒歩、三百の徒歩というあんばいに警戒兵が、ほとんど隙間なしに堵列していただけで、何事も起らなかった。師直は、城と自分の兵とを後ろに棄てたときの烈しい不安も、どうやら幾ぶんは薄らいだ感じ。武庫川の橋を渡った。

禅衣が、師直。念仏衣が、師泰。

裳なし衣に、提げ鞆だけ。

そぼふる春雨のなかを、蓮葉笠に顔をかくして、傷の痛みを堪えながら、馬の背に悄然と身をおいた哀れさ——。

いわゆる修羅が、帝釈に負けて、藕花の穴に身を隠したという、梵天竺の伝説も想い出されるような、そのみじめさ。——盛衰の交替は、世の中の常にはちがいないけれども、つい去年までは、天下の実際の覇者として、傲ぜんと諸大名を睥睨し、やりたいふしは、仕放題——無理が槍でも押通した暴慢、暴虐、乱倫、淫縦——不逞、不臣、不義、不敬と、ありとあらゆる悪を犯してもなお飽きたらずに、すこし気に喰わぬとなると、誰れ彼れの見さかいなく、薪を背負って焼野を通らせるような目に会わせた師直だったのである。

橋を渡って、鷲林寺の門前をとおり過ぎた時、

(あっ！)

おぼえず口のなかで叫んだのは「魂魄この世にとまっつて——」と、断末魔に呻き呪った好專僧都の声が、耳の奥にひびいたからであった。

これは畢きよう虫の知らせだったろう。師直は、血みどろな僧都が、斬り落された片足を揃いで、生きながらの幽霊のように一本足で、すうつと起ちあがった物凄しい幻影を、今、ありありと見たのである。

さすがの師直も、ぞつとなつて、鞍つぼで身をすくめた、その刹那

「呀あつ！」

と、背後の方で、絶叫が起った。

(やあ！) 血腫さい幻影に後頂を見せてふりかえると、師直の視神経の網の膜には、いまの場合、もつとも凶なる運命として、あるいは来はせぬかと心の底で疑懼されていたことが、そつくりそのまゝ現実となつて映写されたではないか！

「師泰っ！」

と、雷にでも打たれたように、師直がわめいた。

だが、喚かれた師泰新入道勝は、血煙りのなかで、大刃の槍に、胛骨の下から乳の上に突き徹されていた。師直は喚いた瞬間に、おびたゞしい槍と、薙刀と、長巻と、武者と、怒号とを、見、かつ聞いた。

寺の門内から、敵が溢れだして、街道を埋める、とそう感じたのと、師泰の落馬を眼で見たのとは、同時だった。

「やあ、ござんなれ高師直、師泰っ、汝らがため非業に死せる伊豆守重能が嫡男、上杉顕能こゝにあり。父の讐、家の仇、ふかき恨みを復すは今ぞつ！」

「上杉家の臣、三浦八郎右衛門——」

「吉江小四郎——」

「佐々宇六郎左——」

「長尾彦太郎——」

上杉の主従は大音に、名告をあげた。

「ちえゝ上杉かつ！」

師直は、とつさに自分の躰が、負傷のために思うように動かぬことゝ、心も発らぬ出家をして、裳無しごろもの禪衣を着たのみか、一尺にも足りぬ提鞞一本のほか、身に寸鉄を帯びなかつた愚さを感じた。

(遁れ得るだけ……)

と、そう思ったとき、

鬨の声！ それは、前駆の畠山兵の伍列から起つたのである。

一一一

(進退、両難！)

前の畠山には、直宗の怨恨、うしろの上杉には、重能の呪咀があつた。(もうこうなつては、よしんばこの師直、犬のように両手をついて、地べたへ額をすりつけて詫びようとも、赦すまい！ だが、死にたくない。師直の生命は、ここで消えていくほど、安価な筈がない)

しかしながら、思案の餘裕もまた、あろう筈がなかつた。

一ばん躰の不自由な、辛くも馬に跨つていた師泰をめぐけて、一番槍をつけた吉江小四郎は、たゞひと突きに突き落して、あとは郎従まかせに、自分は土佐守師秋へむかつたし、長尾彦太郎は、五郎丸師夏へ、長尾三郎左は、鹿目平次左衛門へ、西左衛門四郎は、樫村儀左へ、高山房次郎は、富永孫四郎へ、小林掃部助は、彦部七次郎へ、おなじく又次郎は、山口入道へ、小田左衛門五郎は、武蔵将監師世へ、井野弥次郎は、高備前へ、小柴新左は、師兼へ、三浦八郎右衛門は、家城源八郎師之へ——あるいは刀で、あるいは槍で、斬つてかゝり、突いてかゝつた。

(一尺の提鞞では闘えない！)

と、師直はそう思いつゝ、馬から降りおりて、

「大六つ、刀をかせ！」

と、叫んだ。

益子弾正へは距離があつた。もはや梶原大六から長剣をかりるほかなかつた。

大六兵衛は、自分が困るとおもつたけれども、仕方がないから長剣は、主君へ渡して、短い方を抜こうとしたとき、上杉の郎従の一人が突込んできた槍の穂先で、太腿を縫われた。

(応報だ！)

と、感じながらも槍の柄をたぐつて、短か刀で敵の顔を突いたが、鈍の伸びが足りなかつたか、血は見えたけれど敵はひるまず、腰刀を横に払つて肩を擲つた。鎧を着ていない悲しさに大六兵衛は、したゝかに斬られて、

「祟りだつ！」

と、叫んだ。そのとき、べつな槍先が、両側と背後の三方から閃めいて、十文字に纏まてかけて大六の躰を突徹した。

「ぎあーつ、僧都の祟り……！」

そう喚きつゝ、大六はこの世に別れを告げた。

益子弾正も、槍ぶすまに囲まれていた、気が狂つたように刀を揮りまわして、五六本の槍の柄と両三人の人の生命とを、斬り落したが、いつのまにか自分が、地面に倒れていて、死んでゆくのを夢のように意識するのだった。

師直は、大切な右手が利かなかつた。

(手さえ自由なら、木っ葉武者の三十、五十……)

と、齒がみをしたが、利かない手は利かなかつた。刀を左に持ちかえて闘つてみたけれども、敵は多勢だし、やつと一人か二人を斬るうちに、自分の方が五六カ所も突かれたり、薙がれたりした。

師直は、う、う、うつと啼りつゝ、右手で刀を持ちかえた。あたらしい傷の痛みが、ふるい傷の苦痛を忘れさせたからである。

「父上っ！」

と、そう叫んだ愛子五郎丸の声がかきこえた。

師直は、狂った手負い猪のように、白刃の重圍を突破して、五郎丸の方へ走って行った。五郎丸師夏は、今年十五歳の若冠ではあったが、もっとも勇猛に、土佐守師秋にも劣らず血の雨を、横なぐりにしぶかせつつ闘っていた。

「五郎丸つ、父は無事だぞっ！」

師直の声が耳に入った。

弱りかけた気が、しゃつきりとなつた。五郎丸はすでに長尾彦太郎を斬り伏せ、長尾の郎従四五名をも斃したが、自分も深傷に浅傷もまぜて十数創をうけていた。

土佐守師秋は、甲斐の逸見城で自尽した師冬の庶兄で、師冬亡き高一門では、一ばんの剛雄だった。もし彼が、先日の激戦に負傷していなかったら、一方の血路をひらいて、師直父子を援いつゝ、おのれも遁れ得たかもしれない。だが、この師秋もまた、一族重臣の誰れ彼れと同じように、こゝで襲われた最初から、やはり一頭の手負い猪だった。荒れ狂う力は強そうに見えても、かんじんな底力に欠けたところがあつた。

「館っ！」

叫んだが、貧血のために、鐘をたゞき破るような例の音声が、もう出なかった。

一三

高の一族重臣らは、いずれも頑強に抵抗した。けれども、彼等には全く郎従がなかった。武装がなかった。上杉方の闘士はみな、多数の郎党の掩護と助太刀のもとに闘ったのだから、襲われた方の全滅は、要するに時間の問題でしかなかった。

最初に首を掻き切られたのは、師泰入道道勝、つぎが師直の長子の師世、つぎが大六兵衛、つぎが益子弾正、それから次ぎ次ぎに斃れて、首になって、刀の銚や、槍の穂先に貫かれて、差し上げられた。そして、

五郎丸師夏もついに討たれた。生母二条御前によく肖たその端麗な美貌も斃れるまでに耳をそがれ、鼻を掠られ、唇を裂かれ、おまけに眼球をさえ割られたので、かゝれたその首が、佐々宇六郎左の颯で脛から喉へ刺しつらぬかれて、高く掲げられ、この塵殺しの闘いを見物する形の畠山兵から、どつと歓呼の声を浴びせられたときは、とても正面には見られぬくらいに、酸鼻を極めていた。

上杉の方でも、この五郎丸に、長尾彦太郎が討たれたし、三浦は師之に倒されたし、西左衛門四郎は樫村儀左の刃に斃れたし、吉江小四郎と高山房次郎は、師秋のために重傷を蒙った。多くの郎従が死傷した。しかし、もはや高の側では、首が胴体に繋がっているのは家城源八郎師之と、土佐守師秋と、それから師直——の三人きりであつた。

師直は、他とあべこべに、一番初が最も弱そうで、すぐにも斃されそうに見えたが、次第々々に強くなつた。墨染の禪衣が、どす赤く血に浸り、さんざんに切り破かれ、やがてはほとんど千裂れ落ち、下着の白衣は、まるで纈纈染めのようになっていたが、これも忽ちさかれて飛び散り、師直入道道常はさながら裸体になってしまった。その魁偉な肉体は、数十カ所の突き疵、斬り傷のために、血の池地獄に墮ちたかのように血まみれだった。

それでもなお倒れなかった。

「う、蛆虫、うじ虫めらっ！」

と、師直は叫んだ。

師秋と、師之とは、ついに斃れた。

まるで針千本みたいな格こうに、あまたの槍で突き刺された、地べたへ縫いつけられてしまったのであつた。

両人の強剛は、首級を掻き切られた。

だが、ひとり師直だけは、鋸のようになった刃を杖にして、立っていた。上杉勢は、もう傍へ寄りなかつた。というの打棄っておいても斃れるにちがいがなかつたからである。師直の立っている場所は、街道か

ら二百尺くらい離れた草原だった。そこは海に近い鳴尾なるおの原の一部で、広い原には潮風が、春の匂いをかぐわしく漂たわせていた。だが、師直の足もとには、屍骸しかい十二三も横たわり、重傷者が折り重かさって呻うめき、血がおびたゞしい血が、糠雨ぬかあめにぬれた若草を、赤く、むらさきに、或いは黝くろく染めて、血腥さい臭気が、汐の香を消すように渦巻きこめているのだった。

遠巻きにしている兵は、
(不死身ふじみなのか知ら?)

と、思った。

上杉顕能が、佐々宇六郎左に、

「斃たせ」

と、云った。

「は」

しかし、宇六郎左は躊躇ちゆうちゆうした。あまりの物凄さに、気おくれしたのであった。

さつきから、もう大丈夫と思って、兵が近づくと、近づいた者はみんな斬られた。

宇六郎左は、

(生身なまみなら、もう生きていられるわけがない。と、すると、あれは師直でなくて、師直の亡霊かもしれぬ！)

そう感じると、身ぶるいが出た。

「斃たせっ！」

と、顕能がどなった。

「は！」

宇六郎左は進みかけたが、躰からだがすくんだ。

「臆おくすなっ！」

と顕能が叱咤した。

だが、くわつと剥はだけた師直の両眼を見ると、宇六郎左の脚はたち

まち萎なえてしまった。

師直は、

「虫けら奴つ、幾百でも束たばで来いっ！」

そう叫んだつもりだったが、声が出なかった。

(俺は、斃たれんぞ！ ちえゝ斃たれるものか！)

師直は、眼球を露む出したまゝ、刀にすがって立っていた。が、もう既に、目は見えなくなっていた。耳は、まるで深い水の底に潜もぐったように、烈しくがあつと鳴った。

それでもなお彼は、執拗しつようにもどうして遁のがれようかを考えた。彼は、いかにしても死ぬ気になれなかった。おどろくべき頑固さで生しに執着しやくちやくした。じつに異常な力で、生命の潰滅さいめつに抵抗した。まったく不思議な気根きこんで、死と闘ったのだ。

(師直は死なんぞ！)

視力の失われた目に、一条今出川の壮麗な屋形がみえた。

二条御前の後ろ姿がみえた。

敷妙の顔と、白い肌が見えた。

四条畷から凱旋する行軍が見えた。

吉野山が見えた。

行宮あんぐうと蔵王堂ざおうどうが炎上する焰ほのおがみえた。

その焰が見えたとき、師直の息が絶えた。

だが、命絶こときれてからも亡骸むくろは、三瞬か四瞬の間は、血潮のみなぐる草原に、やゝ夕暮れのせまってきた武庫川むこがわべり鳴尾の原に、刀を杖にしたまゝ立っていた。

——第二卷 終——